元総社蒼海遺跡群（127）

2019・3

前橋市教育委員会

元総社蒼海遺跡群（127）

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2019. 3

前 橋 市 教 育 委 員 会

元総社蒼海遺跡群（127）

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2019. 3

前 橋 市 教 育 委 員 会

１．調査区垂直（上が北）

２．調査区近影（南から）

後方は宮鍋神社の社叢。右上に赤城山、左上に榛名山の山裾が見える。

巻頭２

１．Ｈ－11〔11 号竪穴建物跡〕完掘（南西から）

２．Ｈ－11　堆積土中央の礫・遺物集中（南西から）

３．Ｈ－11　堆積土の礫・遺物（北から）

４．Ｈ－11　人骨の検出と取上げ準備（北西から）

５．Ｈ－11　床面上出土の紡錘車

６．Ｈ－11　人骨（歯）検出状況①

７．Ｈ－11　人骨（歯）検出状況②

８．Ｈ－11　人骨（歯）取り上げ後のクリーニング

９．Ｈ－11　人骨（頭蓋骨）取り上げ後

１．Ｂ－１〔１号掘立柱建物跡〕完掘（東から）

２．KT－１〔１号基壇建物跡〕全景（南東から）

３．Ｉ－３〔３号井戸跡〕出土の礎石？（北東から）

４．KT－１　基壇断面（Ｉ－１部分・東から）

１．KT－１〔１号基壇建物跡〕全景（東から）

１．Ｗ－４・７〔４・７号溝跡〕完掘（東から）

２．Ｗ－４　溝底の状況（西から）

３．Ｗ－４　東半土層断面（西から）

４．Ｗ－４　西半土層断面（西から）
北から灰層、南から炭化物が多量に流れ込んでいる。

５．Ｗ－４　西半遺物出土状況（北東から）
土器以外に、羽口等も目立つ。

１．Ｗ－６〔６号溝跡〕と右側Ｗ－４、左側 KT －１（西から）

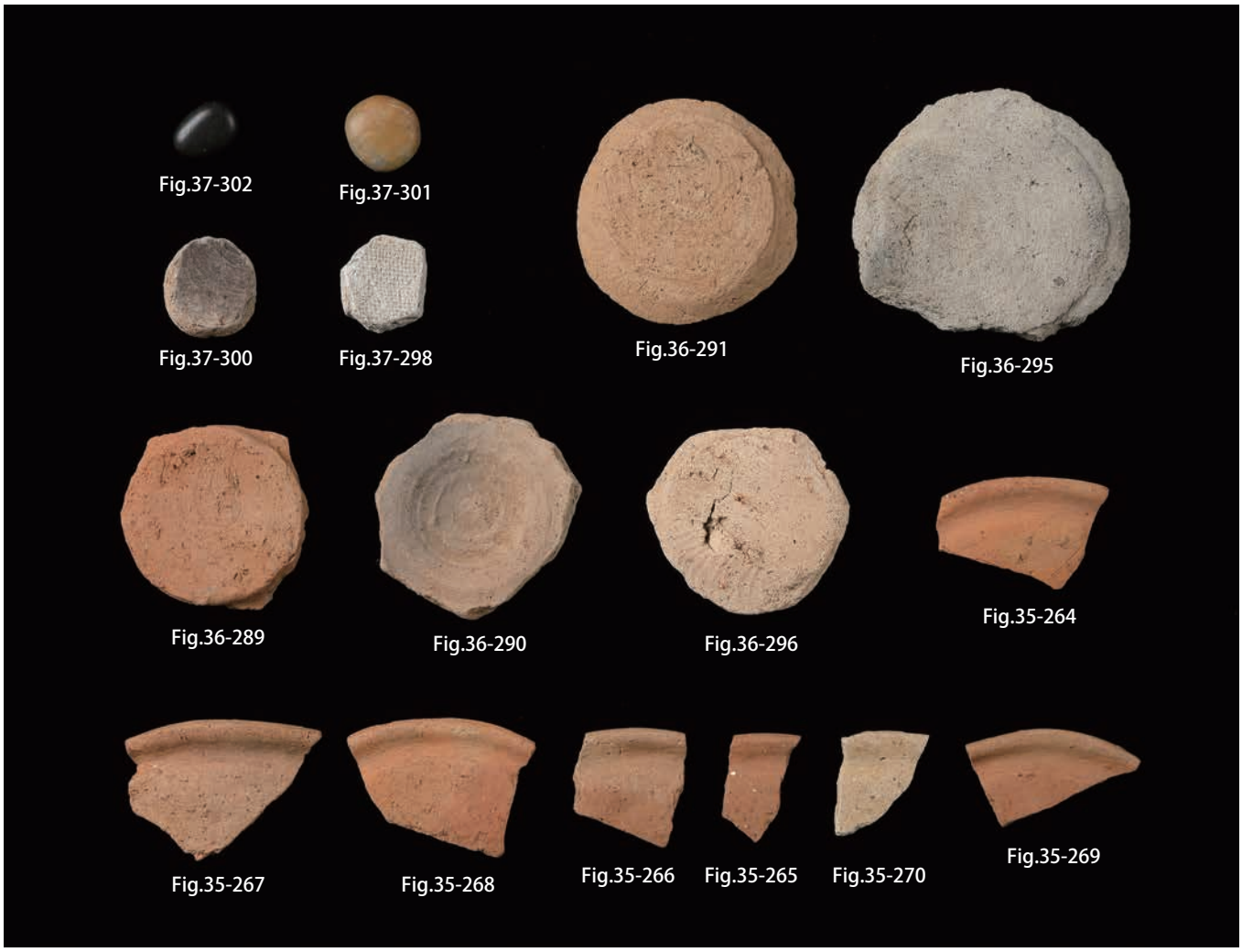
２．Ｗ－６　西半遺物出土状況（西から）

３．Ｗ－６　西半完掘（東から）

４．Ｘ－１〔１号性格不明遺構〕完掘と土層断面（南東から）

５．Ｘ－１　上半遺物出土状況（西から）
羽口、鉄滓が多く、鍛冶関係遺構と思われる。

６．Ｘ－１　下半上面（西から）
上面の As －Ｂ下の炭化物主体層を除去した状態。



１．平安時代後半の国府を特徴づける遺物…基石・土器片円盤・京都系「ての字状口縁」の小皿

２．白磁と緑釉陶器

平安時代後半の上野国府を特徴づける土器群

は　じ　め　に

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる群馬県の県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、２万年前から人々が生活を始め、市内のいたる所にその息吹を感ぜられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ､王山古墳･天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中心地として栄えました。また、続く律令時代になってからは総社・元総社地区に山王廃寺、国府、国分僧寺、国分尼寺など上野国の中枢をなす施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎬をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地となり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する元総社蒼海遺跡群(127) は古代上野国の中枢地域の調査であり、上野国府推定地域にも近接することから、調査成果に多くの注目を集めております。発掘調査の結果、上野国府が存在した時期に建てられたと考えられる、規模の大きな建物跡が確認されました。調査区内での検出は一部に止まり、この建物が上野国府に深く関係するものなのかどうかは、今後の検討に委ねるところもありますが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進められことができました。また、極暑の中、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

平成３１年３月

前橋市教育委員会

教育長　　**塩　﨑　政　江**

例　言

1．本書は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う元総社蒼海遺跡群（127）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．発掘調査は、前橋市（主管課：都市計画部区画整理課）の委託を受け、前橋市教育委員会事務局文化財保護課の指導・助言のもと、山下工業株式会社（代表取締役　山下 尚）文化財事業部が実施した。
3．発掘調査から報告書刊行までの作業は、前橋市の費用負担で実施した。
4．発掘調査の要項は次のとおりである。
遺跡所在地　群馬県前橋市元総社町 2107-6 2107-11 2107-13 2107-15 2108-2 2108-3 2108-4 2108-5
遺跡略称　30A235　遺跡番号　0142・0147　調査面積　406㎡
期間　【現地調査】平成 30 年 8 月 8 日～同年 10 月 22 日　【整理】平成 30 年 10 月 23 日～ 31 年 2 月 22 日
調査担当者　永井智教（山下工業株式会社文化財事業部）　調査員　桃薗正志
5．遺構写真は永井が撮影し、空撮は新井一、遺物写真（巻頭カラー）をたつみ写真館が撮影した。
6．遺構測量及び平面図作成は田中隆明（タナカ設計）が行った。
7．現地調査において、カマド調査については外山政子の指導を受けた。また、調査後の地中レーダー探査については谷川遼（早稲田大学大学院）の指導・協力を受けた。
8．現地調査作業員は以下のとおり。（五十音順）
一柳由美子・岩崎のぞみ・荻野響生・椛澤礼子・鏑木恭子・神山正男・久保田智子・小林律・
斉藤香・坂口郁子・髙木奈保美・髙橋実果・太幡かおり・西川制・春原正克・光安泰子・渡辺寿美子
9．整理作業は永井指示のもと髙橋を中心に、一柳・荻野・久保田・髙木・太幡・西川・光安と秋元智子・林田みどりが行った。
10．本書の執筆については、Ｉが前橋市教育委員会事務局（文化財保護課 並木史一）、火山灰分析は早田勉（株式会社火山灰考古学研究所）、炭化物樹種同定は高橋敦（株式会社古生体研究所）、人骨は橋本裕子（京都大学大学院医学研究科）、獣骨は阿部常樹（東京大学埋蔵文化財調査室）が行い、他は永井である。
11．本書の編集は永井監修のもと髙橋が行い、杉本達也・原祐子の協力を受けた。
12．発掘調査資料及び出土遺物は、一括して前橋市教育委員会が保管している。
13．調査及び報告書の作成にあたっては、下記の機関・諸氏からご助言・ご協力を賜った。（五十音順・敬称略）
李スルチョロン　池田敏宏　石塚久則　出浦 崇　梅澤重昭　大塚昌彦　大橋泰夫　岡野 茂　金子智一
木下 実　小坂延仁　坂爪久純　斉藤達也　崎川 修　佐藤 渉　関口功一　高橋清文　田中 信　田中広明
田辺芳昭　滝沢 匡　知久裕昭　土井翔平　土井道昭　中平 薫　中村岳彦　深澤敦仁　根本 佑　野村 満
林 道義　昼間孝志　福田貫之　前原 豊　丸山 修　右島和夫　山本良太　松島栄治　松田 猛　三浦京子
三好清超　横澤敦子　横澤真一
埼玉県上里町立郷土資料館　株式会社コクドリサーチ　株式会社甲セオリツ

凡　例

1．遺跡、全体図におけるＸ・Ｙ値は、平面直角座標Ⅸ系（世界測地系）の座標値、挿図中の北は座標北である。
2．挿図中で用いる遺構等の略称は以下のとおりである。
【竪穴建物跡】H　【溝跡】W　【基壇建物跡】KT　【土坑】D　【ピット】P　【性格不明遺構】X
3．遺構図は 1/2,000・1/200・1/100・1/60・1/40・1/30 を紙面に合わせて使い分け、各挿図中に明記した。
4．遺物実測図は土器 1/3・鉄製品・石製品は 1/2。遺物写真は 1/3、一部を 1/2 とした。
5．遺構図・遺物図の網掛けについては、個々の図中に凡例を明示した。
6．本書で用いる火山噴出物の略称と年代については以下のとおりである。

【浅間山Ｂ軽石】	As-B	天仁元年（1108）
【榛名山二ツ岳 - 渋川テフラ】	ＦＡ	５世紀末
【浅間山Ｃ軽石】	Ｃ軽石	３世紀末～４世紀初頭

目　次

巻頭図版　1～8
はじめに
例言・凡例・目次
Ⅰ　調査に至る経緯…… 1
Ⅱ　遺跡の位置と環境…… 1
Ⅲ　調査の方針と経過
1　調査の基本方針…… 7
2　調査経過…… 8
Ⅳ　基本層序…… 8
Ⅴ　遺構と遺物…… 11
Ⅵ　火山灰分析報告…… 60
Ⅶ　炭化材樹種同定報告…… 65
Ⅷ　人骨鑑定報告…… 73
Ⅸ　獣骨同定報告…… 77
Ⅹ　発掘調査の成果と課題…… 79

挿図目次

Fig.1　遺跡の位置 …… 1
Fig.2　周辺調査地点とグリッド設定図 …… 2
Fig.3　元総社蒼海遺跡群（127）の周辺遺跡 …… 4
Fig.4　今回調査区と隣接調査 …… 9
Fig.5　元総社蒼海遺跡群（127）全測図 …… 10
Fig.6　H-1・H-3 カマド・H-4 …… 15
Fig.7　H-2・H-3・H-6 …… 16
Fig.8　H-7 …… 17
Fig.9　H-7 カマド …… 18
Fig.10　H-8・H-12 …… 19
Fig.11　H-5・H-10・H-11 …… 20
Fig.12　H-13～H-16 …… 21
Fig.13　B-1 …… 22
Fig.14　基壇建物跡・溝跡・土坑・井戸跡・性格不明遺構 …… 23
Fig.15　調査区土層断面図① …… 24
Fig.16　調査区土層断面図② …… 25
Fig.17　出土遺物（1）…… 26
Fig.18　出土遺物（2）…… 27
Fig.19　出土遺物（3）…… 28
Fig.20　出土遺物（4）…… 29
Fig.21　出土遺物（5）…… 30
Fig.22　出土遺物（6）…… 31
Fig.23　出土遺物（7）…… 32
Fig.24　出土遺物（8）…… 33
Fig.25　出土遺物（9）…… 34
Fig.26　出土遺物（10）…… 35
Fig.27　出土遺物（11）…… 36
Fig.28　出土遺物（12）…… 37
Fig.29　出土遺物（13）…… 38
Fig.30　出土遺物（14）…… 39
Fig.31　出土遺物（15）…… 40
Fig.32　出土遺物（16）…… 41
Fig.33　出土遺物（17）…… 42
Fig.34　出土遺物（18）…… 43
Fig.35　出土遺物（19）…… 44
Fig.36　出土遺物（20）…… 45
Fig.37　出土遺物（21）…… 46
Fig.38　出土遺物（22）…… 47
Fig.39　出土遺物（23）…… 48
Fig.40　テフラ組成ダイヤグラム …… 61
Fig.41　炭化材（1）…… 69
Fig.42　炭化材（2）…… 70
Fig.43　炭化材（3）…… 71
Fig.44　炭化材（4）…… 72
Fig.45　H11　人骨出土状況 …… 76
Fig.46　遺構変遷図 …… 78
Fig.47　元総社蒼海遺跡群（127）と周辺の調査区 …… 80
Fig.48　ての字状口縁皿出土遺跡（関東地方）…… 81

表目次

Tab.1　周辺遺跡一覧 …… 5
Tab.2　遺構一覧表（竪穴建物跡）…… 13
Tab.3　掘立柱建物跡 …… 14
Tab.4　掘立柱建物跡　柱穴 …… 14
Tab.5　溝跡 …… 14
Tab.6　土坑・井戸 …… 14
Tab.7　性格不明遺構 …… 14
Tab.8　出土遺物観察表 …… 49
Tab.9　テフラ検出分析結果 …… 60
Tab.10　火山ガラス比分析結果 …… 61
Tab.11　重鉱物組成分析結果 …… 61
Tab.12　屈折率測定結果 …… 62
Tab.13　H-11・骨 1 テフラ試料の屈折率測定結果（火山ガラス）…… 63
Tab.14　H-11・骨 1 テフラ試料の屈折率測定結果（角閃石）…… 63
Tab.15　樹種同定結果 …… 66
Tab.16　出土資料一覧 …… 75
Tab.17　出土獣骨一覧 …… 77

写真図版目次

PL1

1. 調査区遠景（南から）　後方の立木は宮鍋神社の杜。
2. 調査区近景（南西から）

PL2

1. 調査状況（垂直・上が北）
2. 調査状況（南東から）

PL3

1. 調査区完掘（垂直・左が北）

PL4

1. H-1【1号竪穴建物跡】完掘(南西から)中央を東西に W-6 が切る。
2. H-1 床面（西から）
3. H-1 床面下の掘形（北西から）
4. H-1 土層断面（南から合成）

PL5

1. H-2・3【2・3号竪穴建物跡】調査状況（南西から）
2. H-2【2号竪穴建物跡】完掘
3. H-3【3号竪穴建物跡】完掘(南西から)
4. H-3 カマド（南西から）
5. H-3 遺物出土状況（南東から）

PL6

1. H-4【4号竪穴建物跡】検出状況（南西から）
2. H-5【5号竪穴建物跡】遺物出土状況（南西から）
3. H-5 完掘（南西から）
4. H-6【6号竪穴建物跡】土層断面（南から）
5. 調査状況（東から）

PL7

1. H-7【7号竪穴建物跡】完掘(北から)
2. H-7 完掘（南から）
3. H-7 カマド（南から）
4. H-7 カマド調査状況（南西から）
5. H-7 カマド調査状況（南から）

PL8

1. H-8・12【8・12号竪穴建物跡、同一遺構】完掘（北西から）　大半を H-7 に切られている。
2. H-12 貯蔵穴（北から）
3. H-12 完掘（北西から）
4. H-8 完掘（北西から）
5. H-10・11【10・11号竪穴建物跡】（南西から）　手前 H-11 床面、奥は H-10 掘形。

PL9

1. H-10・11【10・11号竪穴建物跡】遺物出土状況（南西から）　手前 H-11、奥 H-10
2. H-10・11 遺物出土状況（北から）左 H-10、右 H-11
3. H-10 床面（西から）
4. H-10 遺物取り上げ状況（東から）
5. H-10 床面下の掘形（南西から）

PL10

1. H-11【11号竪穴建物跡】遺物出土状況①（北西から）
2. H-11 遺物出土状況②（北西から）
3. H-11 遺物出土状況③ベルト下（南東から）
4. H-11 遺物出土状況④ベルト下（北西から）
5. H-11 遺物出土状況⑤土師坏とこも石（北東から）
6. H-11 床面完掘一部人骨含(南西から)

PL11

1. H-11【11号竪穴建物跡】人骨検出状況①（北西から）
2. H-11 人骨検出状況②（北東から）
3. H-11 人骨検出状況③（北から）
4. H-11 人骨検出状況④（南東から）
5. H-11 人骨検出状況⑤（南から）
6. H-11 覆土層位の火山灰（南西から）

PL12

1. H-13・14【13・14号竪穴建物跡】完掘（南西から）
2. H-13・14 完掘（北東から）
3. H-13・14 調査状況（南西から）
4. H-13 遺物出土状況（北から）
5. H-13・14 床下掘形（北東から）
6. H-13 カマド土層断面（南から）

PL13

1. H-15【15号竪穴建物跡】掘形（南西から）
2. H-16【16号竪穴建物跡】完掘（北東から）
3. H-15 掘形と切り合う遺構の土層断面（南西から）
4. H-7・13・14・15・16 の位置関係（西から）

PL14

1. ＫＴ-1【1号基壇建物跡】調査完了状況（東から）

PL15

1. ＫＴ-1【1号基壇建物跡】東端（北から）
2. ＫＴ-1 中央（北から）
3. ＫＴ-1 西端（北から）
4. ＫＴ-1 東隅、中央は白磁片（南から）
5. ＫＴ-1 断面、I-1 側壁（東から）
6. ＫＴ-1 西辺検出状況（北から）
7. ＫＴ-1 断面　わかりにくいが、横に潰れた黄色土粒子が細かく重なっている。

PL16

1. W-5【5号溝跡】土層断面（東から）中位に硬化層があり、通路とされていたらしい。
2. W-4【4号溝跡】西半調査状況（東から）
3. W-4 西半遺物出土状況①（西から）南側から炭化物と共に投棄された様相。
4. W-4 西半遺物出土状況②（東から）完形に近い個体も散見される。

PL17

1. W-4【4号溝跡】西半完掘（東から）
2. W-4 西半完掘（西から）
3. W-4・W-7【7号溝跡】完掘（東から）
4. 手前 W-7、奥 W-4（東から）
5. W-4 東半溝底（西から）

PL18

1. W-4・7 分枝付近の土層断面（7ライン・西から）　同時開口を思わせる。
2. W-4 土層断面（手前5ライン、奥6ライン・西から）　中位に地山土塊の流れ込み。
3. W-4 土層断面（C-3G 内ベルト・西から）　北から灰、南から炭化物の流入。

PL19

1. W-6【6号溝跡】遺物出土状況（西から）
2. W-6 西半完掘（東から）
3. W-6 東半土層断面（6ライン・西から合成）　幅広の溝を幅狭の溝に掘りなおした様子。
4. W-6 中央付近底面の硬化面（B-4G・東から）
5. W-7【7号溝跡】完掘（西から）

PL20

1. W-8【8号溝跡】中央部完掘(東から)
2. W-9【9号溝跡】完掘（西から）奥は D-6。
3. W-9 土層断面（6ライン・西から）D-6 部分
4. W-10【10号溝跡、旧 H-9】土層断面（6ライン・西から）
5. W-10 完掘（西から）

PL21

1. B-1【1号掘立柱建物跡】完掘(東から)H-1 を切り、KT-1 と W-6 に切られる。
2. B-1P1 土層断面（北から）
3. B-1P2 土層断面（南から）
4. B-1P3 土層断面（西から）
5. B-1P4 土層断面（西から）

PL22

1. Ｘ-1【1号性格不明遺構】上半土層断面（5ライン・西から・合成）上層にＡｓ-B の一次堆積、その下は炭化物主体。
2. Ｘ-1 下半土層断面（5ライン・西から）
3. Ｘ-1 上半遺物出土状況（南から）羽口片が目立つ。
4. Ｘ-1 下半上面（西から）
5. Ｘ-1 完掘、土層断面（南東から）
6. Ｘ-1 完掘（西から）

PL23

1. Ｘ-2【2号性格不明遺構】遺物出土状況（北から）
2. D-1・2【1・2号土坑】完掘（北から）
3. D-5【5号土坑】完掘（北から）
4. D-6【6号土坑、W-9 の一部】完掘（東から）
5. I-1【1号井戸跡】調査状況（東から）
6. I-2【2号井戸跡】土層断面（西から）
7. I-3【3号井戸跡】投棄された礎石？（北東から）
8. I-4【4号井戸跡】土層断面（南から）
9. I-5【5号井戸跡】調査状況（東から）

PL24

1. W-1【1号溝跡・蒼海城堀跡】調査状況（南から）
2. W-2【2号溝跡・蒼海城堀跡】調査状況（東から）
3. W-1 調査区北壁土層断面（南から・合成）
4. W-1 南東調査区壁土層断面（北西から）
5. W-1 と中世調査面（東から）

Ⅰ　調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴い実施され、20 年目にあたる。本調査地は、周辺で埋蔵文化財調査が長年にわたって行われていることから、遺跡地であることが確認されている。

平成 30 年 4 月 20 日付で前橋市長　山本　龍（区画整理課）（以下「前橋市」という。）より、埋蔵文化財発掘調査・整理業務に係る依頼が、前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）に提出された。市教委では既に他の発掘調査を実施計画中のため、市教委直営による調査実施が困難であると判断し、民間調査組織へ発掘調査業務を委託することで合意に至った。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することとなった。同年 6 月 18 日付で前橋市と民間調査組織である山下工業株式会社との間で業務委託契約が締結され発掘調査に着手した。

なお、遺跡名称「元総社蒼海遺跡群（127）」（遺跡コード：30A235）の「元総社蒼海」は土地区画整理事業名を採用し、「（127）」は過年度に実施した発掘調査と区別するために付したものである。（文化財保護課）

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置

今回発掘調査を実施した元総社蒼海遺跡群（127）は、前橋市西部の元総社地区に位置する。一体は俗に「利根西」と呼ばれ、かつては市内でも開発の遅れた地域と言われていたが、昭和 40 年代の国道 17 号高前バイパスの開通、次いで昭和 50 年代の関越自動車道前橋インターチェンジ共用開始と共に周辺地域の区画整理が継続的に実施され、市街化と共に大きく変貌を遂げた。今回の調査原因となった前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業もそうした流れで実施されるもので、事業も終盤に差しかかろうとしている。本地区の南方には未だ田畑の残る部分も多いが、今後も予定されている区画整理事業は、街の変貌をより加速度的に進めるものとなるだろう。

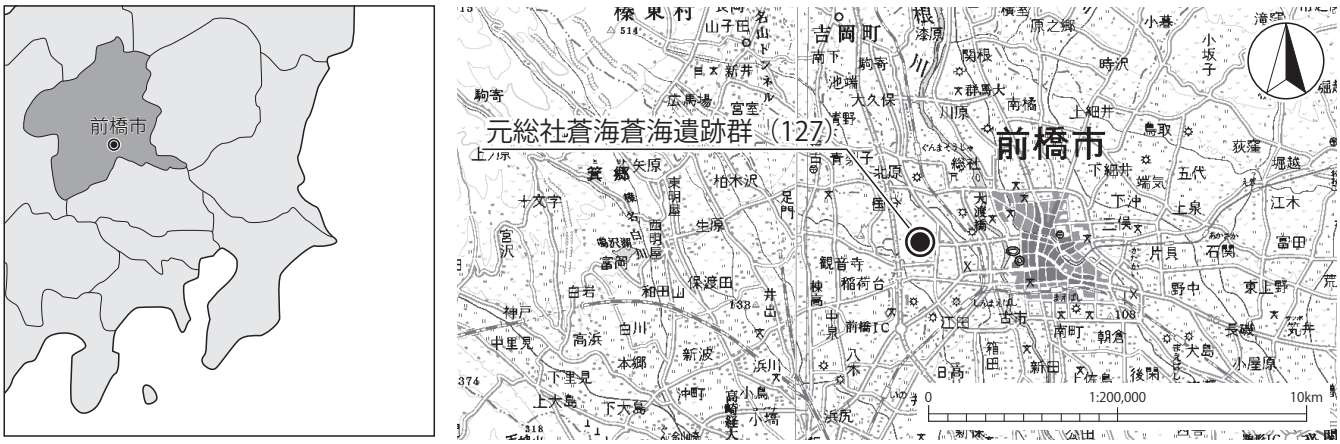


Fig.1　遺跡の位置

Fig.2　周辺調査地点とグリッド設定図

2 地理的環境

遺跡は榛名山東麓の末端に位置し、約 13,000 年前の榛名山系の山体崩壊である「陣場岩屑なだれ」によって形成された広大な扇状地形である「相馬ヶ原扇状地」最末端でもある。

岩屑なだれ由来の厚い砂礫層下には、約 20,000 年前に形成された「前橋泥流」が堆積しており、南東に広がる前橋台地の基層をなしている。

岩屑なだれや前橋泥流の上には、「前橋下部泥炭層」の堆積後、浅間－板鼻黄色軽石（As-YP・約 13,000 年前）・浅間－総社軽石（約 11,000 年前）を含む「前橋上部泥炭層」が堆積し、それを洪水性堆積物である「総社砂層」が厚く覆っている。総社砂層上には黒ボク土が生成された後、浅間Ｃ軽石（３世紀末降下）以降複数回に及ぶ火山灰を被っている。

地形を詳しく見ると、扇状地の等高線に直行して下る中小の河川が顕著で、北から八幡川・牛王頭川・染谷川・牛池川等がある。これらの河川は、総社砂層の供給源となる半面、砂層を深く抉る部分も多く、特に総社周辺の地形を左右する存在であったのだろう。また、古墳時代後期の榛名山活動期には、火山灰を泥流として押し流して谷筋を埋堆させ、今日に近い比較的平坦な地形を造り出した。

3 歴史的環境

総社周辺は、先述の「総社砂層」堆積後、地表面が安定して黒ボク土が生成され始めた縄文時代前期以降、遺跡の分布がみられるようになる。以下、本遺跡の主体となる古墳～奈良・平安時代の考古学的な経緯について、やや広域でまとめておきたい。

弥生～古墳時代中期前半　総社地区では積極的に弥生時代に遡る遺跡はほぼ無い状態だが、高崎市日高遺跡（21）や新保田中村前遺跡（20）では弥生中期～後期の集落が知られている。特に日高遺跡（21）では浅間Ｃ軽石下から水田跡が確認されている。総社砂層の堆積範囲の南端に相当する地形変換部に相当し、湧水を狙った集落設営とすれば当該期遺跡の在り方を示すものとして興味深い。

古墳前期になると総社地区にも遺跡が進出し、元総社蒼海遺跡群では前方後方形の可能性をもつ周溝墓が確認されているが、集落共々小規模なものである。同様の事例は井野川水系の高崎市熊野堂遺跡（30）にもある。なお、当該期の主要な古墳はより標高の低い前橋台地縁辺に集中（朝倉・広瀬古墳群中の前橋天神山古墳や八幡山古墳、高崎市元島名将軍塚古墳）することから、中心となる生産基盤も当然前橋台地上に求められよう。総社地区の古墳前期の遺跡は、通常は低地を指向する当該期の在り方よりも、谷津田に依存するような弥生後期社会の延長線上にあったものと考えられる。

古墳中期前半の遺跡は、総社地区ではっきりしないが、前期からの継続的様相と考えられる。総社古墳群中の大小路山古墳（へ）が過去に採集された埴輪から当該期の可能性が指摘されているが、未調査であり詳細は不明である。中期前半の古墳は倉賀野地区等の烏川流域に集中していることを考えれば、総社地区周辺に遺跡が少ない点も合点がゆくところである。

古墳時代中期後半～後期前半　中期後半になると、総社地区とその周辺には遺跡が急増する。南西方向の高崎市井出村東遺跡（31）も同様で、標高の高いエリアに開発の手が伸びるようである。高崎市三ツ寺Ⅰ遺跡（32）や北谷遺跡（36）では、「豪族居館」と言われる河川を取り込んだ大規模な遺構が検出されているが、これを単に豪族の住まいではなく、祭祀権と水利権を豪族が具象化する施設と読み替えれば、当該期における開発の到達点を示していると言えるだろう。古墳についても総社古墳群中の遠見山古墳（ホ）や地図外だが保渡田古墳群の井出二子山古墳。八幡塚古墳・薬師塚古墳等、大規模な前方後円墳が築造されており、三ツ寺Ⅰ遺跡（32）周辺の集落遺跡群に対する保渡田古墳群などは奥津城と呼ぶに相応しい。これらの遺跡・古墳からは渡来系遺物の出土も確認されており、当該期に高位へ開発の手が伸びる現象の背景として興味深いものがある。

後期初頭には先の円熟した社会を、榛名山の火山災害が覆う。榛名山二ツ岳形成期の火山活動に相当するこの火山災害は Hr ‐ FA と呼ばれ、大規模な火砕流による火山灰降下と、その後の洪水堆積物として認識される。特に後者は河川の谷筋に沿って厚く堆積している事が多く、下位からの水田跡の検出も普遍的である。逆を言えば可耕地の多くが埋もれてしまい、中期中頃からの開発が進んだ社会は一旦のリセットを余儀なくされる。総社地区では河川の刻む谷筋が

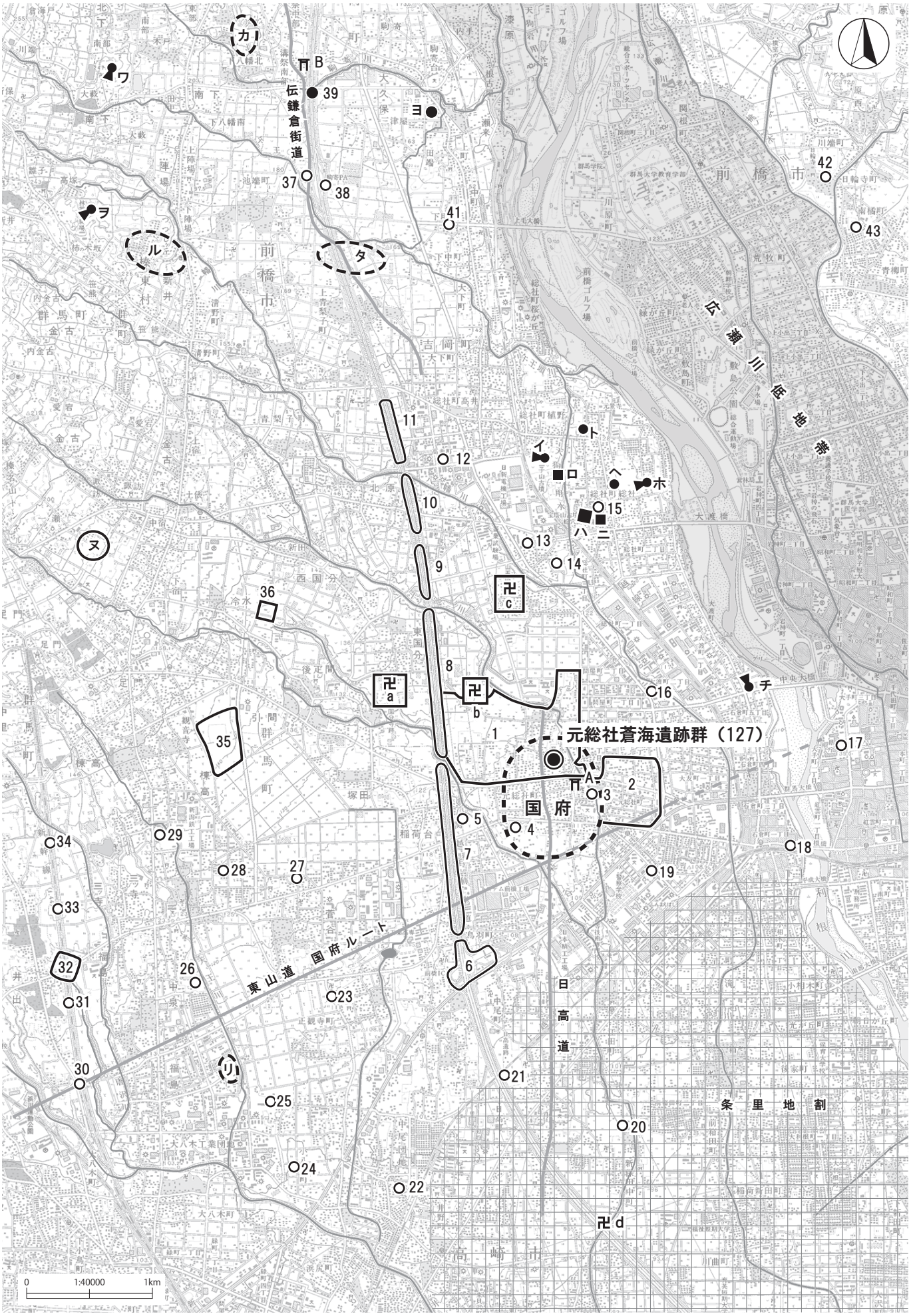


Fig.3　元総社蒼海遺跡群（127）の周辺遺跡

Tab. 1　周辺遺跡一覧

集落		14	大屋敷遺跡	28	棟高村北遺跡	42	日輪寺観音前遺跡	ヲ	高塚古墳
1	元総社蒼海遺跡群	15	総社町屋敷遺跡	29	棟高南八幡街道遺跡	43	南橘東原遺跡	ワ	大藪城山古墳
2	元総社寺田遺跡	16	大渡道場遺跡	30	熊野堂遺跡	古墳・古墳群		カ	南下古墳群
3	大友屋敷遺跡	17	前橋城	31	井出村東遺跡	イ	総社二子山古墳	ヨ	三津屋古墳
4	天神遺跡	18	石倉下宅地遺跡	32	三ツ寺Ⅰ遺跡	ロ	愛宕山古墳	タ	清里・長久保古墳群
5	弥勒遺跡	19	元総社稲葉遺跡	33	三ツ寺Ⅱ遺跡	ハ	宝塔山古墳	神社	
6	中尾遺跡	20	新保田中村前遺跡	34	三ツ寺Ⅲ遺跡	ニ	蛇穴山古墳	A	総社神社
7	鳥羽遺跡	21	日高遺跡	35	棟高遺跡群	ホ	遠見山古墳	B	三宮神社
8	上野国分僧寺・尼寺中間地点	22	小八木村東遺跡	36	北谷遺跡	ヘ	大小路山古墳	寺院	
9	国分境遺跡	23	正観寺遺跡Ⅰ～Ⅳ	37	池端北耕地下ノ割遺跡	ト	稲荷山古墳	a	上野国分僧寺
10	北原遺跡	24	小八木志志貝戸遺跡	38	七日市遺跡	チ	王山古墳	b	上野国分尼寺
11	下東西遺跡	25	正観寺西原遺跡	39	大久保Ａ遺跡	リ	諸口古墳群	c	山王廃寺
12	柿木遺跡	26	中泉源十内遺跡群	40	熊野・辺玉遺跡	ヌ	如来古墳群	d	新保廃寺
13	村東遺跡	27	菅谷万年貝戸遺跡	41	金竹西遺跡	ル	長久保古墳群		

深い為、谷津田は埋没して放棄されているが、集落自体は影響も少なかったのか存続している。周辺ではFAを鋤き込んだ畝状遺構が広く検出されるので、水田から畑へ生産基盤を変えて復興を果たした側面もあるのかも知れない。

後期前半の墳墓として総社古墳群南端の王山古墳（チ）は初期横穴式石室を備えた前方後円墳で、火山災害の軽微だった地域の復興後直ぐに築造された記念碑とも考えられる。また、後期中頃には標高220 m前後に榛東村高塚古墳（ヲ）や吉岡町大藪城山古墳（ワ）といった中規模の前方後円墳が出現しており、眼下に相馬ケ原扇状地の下半を望む立地からは、標高の高いエリアの開拓を進めた指導者の奥津城と言えるだろう。

古墳時代後期後半　榛名山火山災害後の復興的様相がさらに発展し、標高150 m程度まで大小の集落遺跡が連綿と点在する様相へと至る。今回報告する元総社蒼海遺跡群とその周辺では、これまでの調査で夥しい数の当該期の竪穴建物跡が検出されており、大型竪穴建物跡を複数棟伴うような破格の集落遺跡の側面も見え始めている。

後期後半の墳墓としては、総社地区の北部に総社二子山古墳（イ）と総社愛宕山古墳（ロ）が相次いで築造されている点は示唆的である。**総社二子山古墳**（イ）は全長90 mを超える前方後円墳で、葺石・埴輪をもつとされる。後円部に角閃石安山岩の加工石材を用いた横穴式石室、前方部に安山岩乱石積の一回り小さい横穴式石室をもつ。２つの石室に時期差が存在するか否かは明らかにし得ないが、前者は６世紀中葉に榛名火山から噴出した軽石を加工して用いる特徴的な石室構造で、高崎市綿貫観音山古墳（全長98 mの前方後円墳）に代表され、利根川中流域に広くその分布をもつ。一方の後者は榛名山南東麓に通有のもので、榛東村高塚古墳（ヲ）等がそのプロトタイプとなろうか。つまり２系統の石室を一つの墳丘に内包する総社二子山古墳（イ）は、２系統の集団によって構築された前方後円墳であった可能性が考えられる。なお、前方部石室からは過去に頭椎大刀の優品が出土していることが絵図によって知れるが、この種の大刀が物部氏との関係を強調されている点は興味深い。**総社愛宕山古墳**（ロ）は一辺56 mの大方墳で、墳丘には葺石は確認されるものの、埴輪については認められないとされるが、破片を採集したという話もある。安山岩乱石積の大規模な横穴式石室内には畿内にも引けを取らない精美な刳抜式家形石棺が納められているが、残念ながら副葬品は不明である。とは言え本古墳が方墳であること、前方後円墳である総社二子山古墳（イ）に次いで築造されたと考えられることは重要である。同時期の畿内に目を転じると、奈良県桜井市赤坂天王山古墳が墳形・規模、家形石棺をもつという点で酷似している。とは言え横穴式石室の構造に異なる点も認められ、慎重を期す必要もある。なお、赤坂天王山古墳は崇峻陵であるという森浩一の説が有力視されているが、崇峻天皇が蘇我馬子と深い関係にあった点は興味深い。何れにせよ、畿内中枢部と深い関わりを持っていた事は確かであろう。

古墳時代終末期（飛鳥・白鳳期） 集落遺跡は元総社地区に広がり、竪穴建物跡の数は増加の一途を辿る。当該期後半には元総社蒼海遺跡群東端で桁行の長大な掘立柱建物跡や区画溝が、山王廃寺（c）下層からは規則的に並ぶ掘立柱建物跡群も確認されており、これらは正方位に斜行する地割を指向している。特に後者建物跡群については、豪族居館や群馬評衙ないしはその前身である屯倉に関係する遺構群との理解があり、南方の元総社蒼海遺跡群等で夥しく確認されている同時期の竪穴建物跡についても、これに付随するものと考えられる。

墳墓として、まず総社古墳群中の宝塔山古墳（ハ）と蛇穴山古墳（ニ）について確認する。**宝塔山古墳**（ハ）は一辺66 mの大形方墳で、三段築成で葺石をもつ。複室構造の横穴式石室は截石切組積の精美なものであるにも関わらずさらに漆喰を厚く塗って仕上げており、玄室に納められた脚部をもつ特異な刳抜式家形石棺には格狭間の意匠があしらわれている。格狭間は仏教文化の影響とされており、墳墓の事例としては大阪府太子町の聖徳太子墓の棺台が知られる程度である。また、横穴式石室はその平面形態が奈良県奈良市帯解黄金塚古墳（一辺 30 mの方墳）と酷似していることが指摘されている。帯解黄金塚古墳は蘇我石川麻呂の墓であるという奥田尚の説があり、総社愛宕山古墳（ロ）共々、蘇我氏との関わりが見え隠れする点は魅力的である。**蛇穴山古墳**（ニ）は一辺 44 mの方墳ないしは長方墳で、近年の調査では二重周溝で法面に葺石をもつ中堤の存在が明らかとなっている。石室は硬質の加工石材をパネル状に組み合わせた玄室と截石切組積の短い羨道とハの字状に開く前庭部という特殊な構造で、石室内には漆喰が塗られ、玄室中央には棺台とされる大きな加工石がある。形態的には横口式石槨の影響を受けている可能性があり、宝塔山古墳に比べて墳丘規模・石室規模が小さくなる半面、荘厳な中堤を伴う等の外側を飾る傾向が指摘できる。

群集墳については、元総社周辺では確認されておらず、総社古墳群北方の稲荷山古墳（ト）等、小円墳数基が点在する程度である。また、元総社地区を流れる染谷川・牛池川・八幡川・牛王頭川の上流部には榛東村長久保古墳群（ル）・前橋市清里長久保古墳群（タ）・吉岡町南下古墳群（カ）、高崎市金古如来古墳群（ヌ）があり、長久保古墳群（ル）は後期後半からの継続で、数十基が裾を重ねる程に密集し小規模前方後円墳を群中に伴う等、典型的な後期群集墳の様相を示しているが、清里長久保古墳群（タ）は小円墳の点在で石室内から鉄釘を出土する例が、南下古墳群（カ）は宝塔山古墳（ハ）に類似する截石切組積の精美な石室を伴う円・方墳が数基点在、金古如来古墳群（ヌ）は帯金具を多量に出土するものを含むといった様相で、元総社周辺集落に対する墓域とも考えられる。また、吉岡町三津屋古墳（ヨ）は明確な八角墳で截石切組積の横穴式石室をもち、やはり元総社地区との関係で理解すべきと思われる。

白鳳期には総社古墳群北方に**山王廃寺**（c）が建立される。前期評段階に創建された寺院としては上野唯一のもので、昭和・平成の二回におよぶ確認調査が行われ、出土瓦に見られる線刻・押印から旧寺名が「放光寺」であった可能性が考えられる点、塔跡周辺から出土した大量の塑像から畿内中枢部の寺院と深く関わる寺であった事が判明している。また、先述した**下層遺構を豪族居館や評衙・屯倉**とした場合、そうした重要施設を移動させて造営していることになり、極めて特異な事例である。また、塑像はその造形技術の水準は高く、作風は斑鳩法隆寺塔本塑像に類似しているという。奇しくもここで再び蘇我氏の影を見いだせる点は、総社愛宕山古墳（ロ）から蛇穴山古墳（ニ）への流れに沿う事象と言い得る。

また、**東山道駅路**の開鑿もこの時期で、今日までの研究によって「牛堀・矢ノ原ルート」→「下新田ルート」→「国府ルート」へ３時期・３ルートの変遷が定説となっている。最初の「牛堀・矢ノ原ルート」は太田―伊勢崎―高崎の平野部をほぼ東西の直線で通ることが発掘調査により判明している。元総社エリアからは遠く南方であり、その間を南北に繋ぐ連絡路として「日高道」が以前より指摘されているが、開鑿時期については不明である。

奈良時代 元総社蒼海遺跡群の南東、総社神社に近い一帯で竪穴建物跡が姿を消す。代わりに正方位の区画溝や掘立柱建物跡、基壇建物が出現する。無論、元総社エリア内に以前より推定されている上野国府との関わりで理解されると考えられるが、国府域の一角に設けられたと考えられる群馬郡衙も視野に入れた調査が望まれる。現在前橋市教育委員会による確認調査が継続中であり、今後の動向が注目されるところである。また、やや標高の高い前橋市池端北耕地下ノ割遺跡（37）では廂をもつ大規模な掘立柱建物跡が単独的に検出されており、その性格については不明であるが、前時代の南下古墳群（カ）や三津屋古墳（ヨ）等が近傍であることを勘案すれば、国府の出先施設等の可能性もある。他にも高崎市棟高南八幡街道遺跡（29）では、布掘の掘立柱建物跡や大形竪穴建物跡からなる公的な雰囲気をもつ遺構群が検出されており、郷の中心的な施設である可能性も考えられる。

推定国府域の西方には、**国分寺**（a）・**国分尼寺**（ｂ）も建立される。上野国分寺（a）は昭和の調査成果からある程

度の整備が行われていたが、近年群馬県教育委員会の再調査で伽藍配置が異なることが判明しており、その研究は新たなスタートラインに立っている。国分尼寺（b）は近年高崎市教育委員会によって確認調査が進められており、これまで不鮮明であった伽藍配置が判明しつつある。

一方で国府周辺域を含め、古墳時代以来の生産域の再編が行われる。前橋・高崎台地とその間の井野川低地帯を包括する**広域条里**の施工である。前橋市南部拠点地区遺跡群№11では坪交点からまとまった土器の出土が確認され、施工年代を示している。また、条里の施工に伴い**用水路網**の整備も行われており、前橋台地では広瀬川から取水した用水路網（女溝や川曲大溝）が、高崎台地から井野川低地帯では榛名白川から取水した用水路網（後の長野堰用水）が開鑿されたと考えられる。これらの用水路からは発掘調査によって「物部」と記した遺物が出土している点は注目される。また、交通網の整備も行われたと考えられ、高崎市倉賀野地区や新保・日高地区では条里余剰帯を利用した道路跡と推定される遺構が検出されている。当該期前半に想定される東山道駅路の「下新田ルート」も、現状広瀬川以西では未確認だが、おそらく条里余剰帯を利用したものであったと推定される。なお、当該期における条里施工は確実であるが、先行する飛鳥時代にその設営に関わると推定される短命な集落遺跡が点在していることは興味深い。本地域における条里施工時期は、今後も検討を深める必要がある。

平安時代　国府域やその周辺では、集落・寺院・条里は前時代からの継続と理解されるが、集落は標高の高いエリアに集中する傾向が指摘できる。高崎市棟高遺跡群（35）や吉岡町大久保A遺跡（39）はその規模も大きく、多くの施釉陶器や瓦塔の出土は注意される。これら標高の高い位置に新たに成立した集落はその生産基盤に水田以外を想定せざるを得ないもので、畑作や馬匹生産を視野に置く必要があるだろう。特に大久保A遺跡（39）については、関越自動車道建設に伴う調査・報告時に「有馬島牧」の可能性も示唆されたが、その後渋川市半田中原遺跡から「有牛」墨書土器が出土したことで牧関係遺跡説は否定された経緯がある。現状では三宮神社（B）が北に隣接して鎮座していることや、古代伝路の可能性がある「鎌倉街道」沿いに位置する点から、群馬郡桃井郷の中心的集落であると考えられる。何れにせよ、それら集落の成立背景は条里水田の荒廃と対をなす現象と言えるのだろう。（永井）

Ⅲ　調査の方針と経過

1　調査の基本方針

今回の発掘調査は区画整理事業に先立ち実施したもので、戦後に形成された古い住宅地内の一画が調査地点である。直接の原因は区画整理事業に伴う宅地造成工事で、全面的な切土で破壊は免れないとの判断から、記録保存として発掘調査に至ったものである。

調査区は最近まで平屋のアパート、直前まで北側民家の庭木が存在していた。南側と東側に接する道路部分の発掘調査（元総社蒼海遺跡群（65））等の成果を参考に、事前の確認調査は行わずに本調査となった。調査区は文化財保護課と区画整理課の協議によって現道を避け設定され、廃土は場外へ搬出する条件であった。

なお、調査地点の北東隣接地は、文化財保護課直営の発掘調査（元総社蒼海遺跡群（99）・（113））と上野国府範囲確認調査の33・34トレンチで大規模な基壇建物跡が確認されていることから、今回何らか関連する遺構の発見も予て期待された。

現地調査は表土をバックホウによって後退しながら掘削し、軽ダンプトラックで搬出した。表土下は昭和までの耕作土で、その下は黒褐色の遺物包含層が露呈した。当初はそれを重機で注意深く掘削して黄褐色の総社砂層上面まで下げるべきか、検討しながら表土を浅く剥がす作業をしていた矢先、機械の刃先が硬い土に当たって滑った。その面はそぼ降る雨に濡れて光沢を放って見えた。直感的に基壇建物跡を疑って移植コテで削ってみたところ、それは硬化面ではなく硬化層の頭であると理解できた。したがってそれ以降の重機掘削は必然的に浅めとなり、結果として重要遺物を多数含む包含層は残った。かくして一回目の表土剥ぎを終えた確認面は、遺物が多数露呈する反面、遺構のプランはAs-Bを混じた中世の遺構が認識できる程度で、古代の遺構は皆目見当もつかない状態であった。

その後、公共座標に準拠した4ｍピッチの格子状にベルト（土層観察畦）を残して掘り下げ、細かい遺物はグリッド単位で一括取り上げ、大きい遺物は位置記録を作成した。遺構の様子がおぼろげながら見えてくるとベルトは邪魔となるが、残される遺構覆土が薄いことから新たに遺構毎にベルトは設定せず、基本最初のベルトを優先させた。

基壇建物跡は国府推定地でもある元総社地区にとって、最重要と言い得る遺構であることは誰の目にも明らかであった。確認されたその時から、文化財保護課・区画整理課の協議は重ねられ、最終的に今回の調査では断ち割りを行わず、暫定的ではあるが現状保存となった。反面それ以外の遺構については記録保存との判断に至り、通常調査を続行した。

なお、現状保存となった基壇建物は、調査終了時にベルト等を土嚢で補強した上でブルーシートを敷き、良質の土でこれを覆って保護した。

2　調査経過

平成30年8月8日、事務所の設営と表土除去開始。表土は調査区西方の区画整理課管理地へ搬出。8月17日まで実施。その後人力で精査。

8月24日未明、台風接近。調査区壁の一部が崩壊したが、それ以外は水も溜まらず大した被害はなかった。水はけの良い、高燥な場所であることを認識。

8月下旬以降、学識経験者や行政要人の見学頻繁となりその応対片手間に調査続行。9月までには基壇建物跡の現状保存の方向性が定まり、古代末の遺物を多量に含む溝跡や、下層の竪穴建物跡の掘り下げに集中する。

10月に入り、遺構の切り合い順から遅れていた11号竪穴建物跡に作業集中。床面から多数の人骨が検出され始める。類例のほとんど無い貴重な事例である為、慎重を期して調査に臨むが現地での繊細な作業は困難と判断、遺構の一部を犠牲にしてしまうが発泡ウレタンで土ごと包んで室内に持ち込むことにする。取り上げ作業は調査の残務も片付いて現地から撤収する10月22日に行った。

遺構掘り下げがほぼ完了した10月5日には文化財保護課の完了立会いを受け、いくつかの指摘事項をその後に残務として継続した。10月10日には調査区全景写真をドローンで撮影。

整理作業と報告書作成は、調査終了後30年12月末まで基礎整理、31年2月末まで報告書作成の為のデジタル編集と原稿執筆を実施、3月頭には印刷業者へ入稿、校正を経て3月22日に本書の刊行となった。（永井）

Ⅳ　基本層序

調査区は直前まで借家数棟が建つ宅地であり、かつ中世に蒼海城によって相当の攪乱を被っていると予想されたが、少なくとも蒼海城の堀以外の場所では思いのほか良好に残存していた。とはいえその残存部分ですら大半が古墳時代～平安時代にかけての遺構となっており、基本層序は隣接地点を参考に調査を進めざるをえない状況であった。

以下、本地点における本来的な基本層序を説明しておく。

Ⅰ　灰褐色土　　AS- A等を含む砂質土壌。表土。
Ⅱ　暗灰褐色土　AS- B軽石を含む。いわゆるB混。
Ⅲ　灰褐色砂　　AS- B軽石。
Ⅳ　灰褐色土　　Hr － FAを含む。
Ⅴ　黄褐色土　　Hr － FA。シルト質。
Ⅵ　黒褐色土　　AS- Cを多量に含む。いわゆるC黒。
Ⅶ　灰白色砂　　AS- C。
Ⅷ　淡黒褐色土　しまり強い。いわゆる黒ボク。
Ⅸ　淡黄褐色土　総社砂層。

Fig.4　今回調査区と隣接調査区

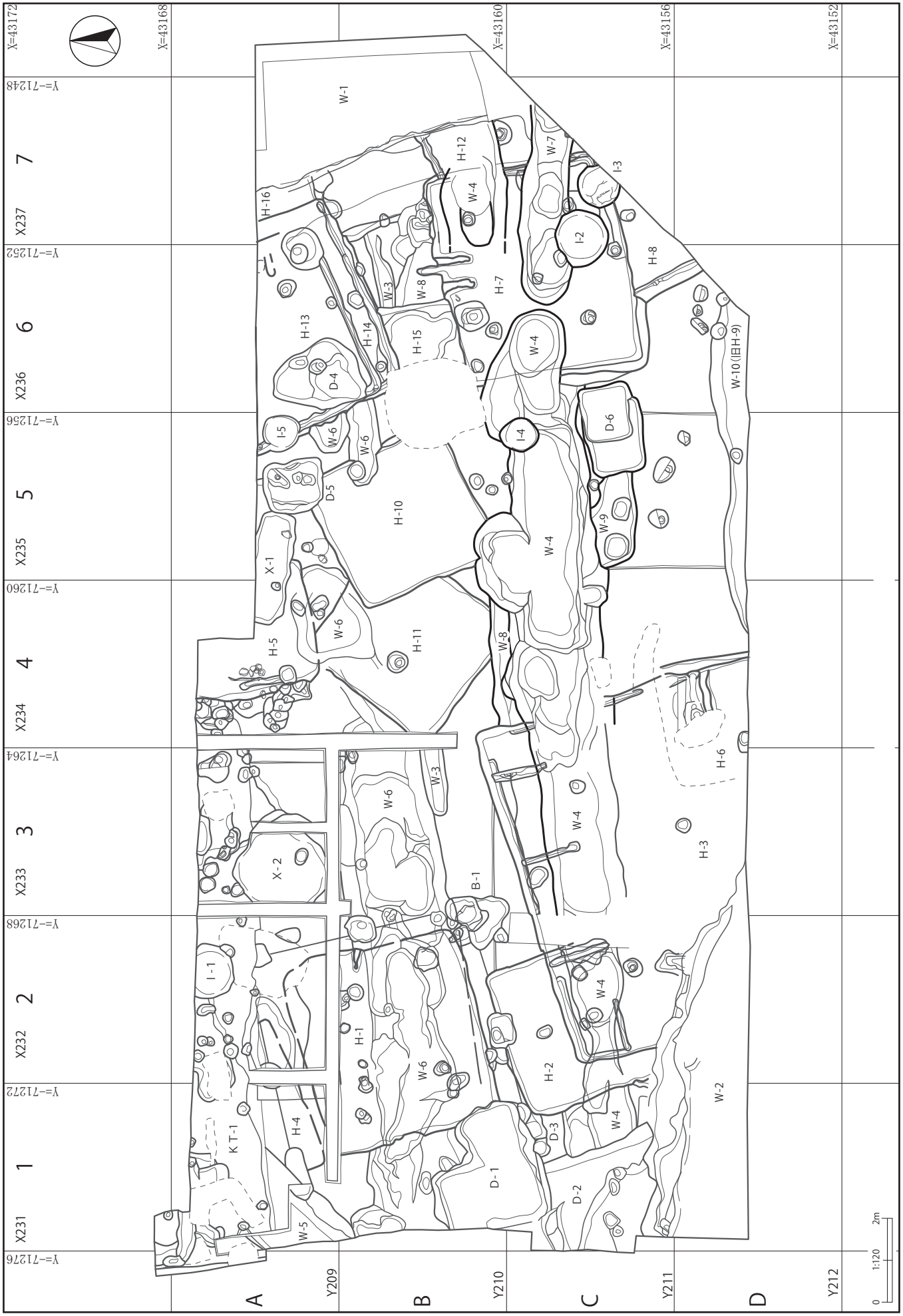


Fig.5　元総社蒼海遺跡群（127）全測図

Ⅴ　遺構と遺物

今回の発掘調査で検出した遺構は、古墳時代後期の竪穴建物跡（略称 H）15 軒、奈良時代初頭の掘立柱建物跡（略称 B）1 棟、奈良時代の基壇建物跡 1 棟、奈良・平安時代と中世の溝跡（略称 W）が計 10 条、平安時代・中世・時期不明の土坑（略称 D）６基、中世の井戸跡（略称Ｉ）５基、平安時代の性格不明遺構（略称 X）２箇所、遺物については土師器・須恵器・陶器・石製品・鉄製品・銅製品が収納箱 35 箱分出土している。詳細は各一覧表・観察表に譲り、ここでは遺構種別毎に概要を説明する。

（1）竪穴建物跡

調査区全域から検出されており、現地調査初期の段階で 16 軒まで付番し、調査途上での欠番（H-9 としたものが W-10 に変更）を経て合計 15 軒であった。これらは５世紀後半の H-3 から７世紀中葉の H-1 までの時間的な幅を有するが、大半は６世紀代であった。以下、時期毎に代表的なものに触れる。

５世紀後半の H-3 は一辺８ｍを超える大形で、貧弱な柱穴ではあるが転ばし根太を据えた溝（間仕切り溝）を有している。竪穴部の中央付近には小規模な地床炉が１箇所認められ、暖を取るための施設とすれば、集会施設や宿舎的機能を想定できるのかも知れない。典型的な内斜口縁坏（7・8）が出土。

６世紀前半の H-11 は一辺４ｍの小規模なもので、後続の H-10 に切られてカマド等の施設は不明であったが、床面から多数の**人骨が検出**された。骨は骨格を窺えるような状態ではなく、大小の礫や土器破片の集中の下から検出されるが、特に覆った様子は無い。おそらく上屋のある状態で安置されていた遺体が、野犬等に喰い荒らされるような状態が想定される。当該建物は焼失建物でもなく、上層に EP の堆積は認められるが、特に遺体の主の死因とは無関係なものであった。出土した土師器坏に、ミガキを多用する北毛地域的なもの（31）が含まれる点も興味深い。

６世紀後半の H-7 は今回の調査で全容の判明した唯一の例で、一辺８ｍ程度の竪穴部の北壁中央東寄りにカマドをもち、カマドに向かって右側に貯蔵穴をもつ。柱穴は対角線上に４カ所、カマドの対面には出入口の梯子を据えた穴が１箇所確認された。土師器坏には蓋模倣・身模倣、利根川中流域に象徴的な有段口縁坏等、多様である。

７世紀中葉のＨ - １は大半を W-6 に破壊されているが、東壁にカマド、右側に貯蔵穴、対角線上に主柱穴４本を基本とするようだが、P-3・5 の在り方を見れば西側に拡張したようである。北武蔵型土師器坏の古段階のものと蓋模倣坏の終末的なものが共伴するようである。

カマド位置の変化　カマドの確認された竪穴建物跡は４軒で、その設置位置は５世紀後半が東、５世紀末～６世紀後半までは北、７世紀以降は東という推移で変化するようである。

（2）基壇建物跡

調査区北西から検出した。東西辺 13 ｍの大規模なもので、北側の大半は調査区外となっている。現状保存の可能性が模索されたので、今回の調査では上面の確認に努め、養生を施して慎重に埋め戻した。従ってその構造の詳細は不明だが、I-1 や攪乱の側面で観察した限り、確認面から深さ 60㎝近く掘り下げた中を、下層に基盤Ⅸ層やⅧ層土を入れて雑に整地した後、茶褐色系土によってかなり細かい版築状の地業を行った、総地業の基壇建物であったと推定される。なお、上面は平安末の遺物を含む包含層によって削平・被覆されており、明確な礎石・礎石据え痕は確認できなかった。明確に伴う遺物は確認できなかったが、８～９世紀と考えておきたい。

（3）溝跡

調査区各所から 10 条を検出した。重複関係と出土遺物から W-5 が最も古く、走軸は北東 - 南西、B-1（掘立柱建物跡）を切り、KT-1（基壇建物跡）の下に潜る。断面形状は逆台形で、堆積土中位に硬化面をもつことから、区画溝として開鑿された後に通路へ転じたと想定される。７世紀末頃と推定。

次いで古いのは出土遺物から W-9 と推定する。９世紀後半の酸化焔焼成気味の須恵器坏が出土しているが、10 世紀以降の土師質の小皿も出土していることから、繰り返しの使用が想定される。検出は部分的であったが、西の延長線に

同軸方向の硬化面があるので、あるいは道路に伴う掘り込みの可能性がある。W-8 も切り合い関係から W-9 と同時期と思われるが、出土遺物が不明確で詳細な時期は不明である。W-4・6・10 は 10 世紀末～ 11 世紀初頭頃の遺物を主体に含むことから平安時代後半に位置づけられる。ロクロ整形で土師質の「白色土器」を中心に灰釉・緑釉陶器、土器片円板や碁石、瓦・羽口・鉄器は国府を彷彿とさせる遺物群として特筆されるものだが、下層の集落に伴う６～７世紀の土師器・須恵器、８世紀後半の転用硯（207）や９世紀代と思われる円面硯（68）等も目立つ。おそらく先の W-8・9 に次いで開鑿され、幾度も掘り直しを経て平安後期に埋没が進んだものと推定される。なお、W-8・9 も含め W-4・６・10 の走軸は東西方向で、先述の基壇建物跡と同方向である点から、関連する区画遺構と考えられるだろう。なお、W-6 は基壇建物の南東隅で北へ分岐するようで、調査直後の工事立会調査時にプランが観察されている。

W-1・2・3 は中世で、特に W-1・2 は蒼海城の堀跡として隣接調査区で確認されているものと一体を成すものである。W-3 については堀に先行するようで、蒼海城以前の遺構と思われる。

(4) 掘立柱建物跡

調査区西側から１棟検出された（B-1）。桁行２間、梁行は調査区外となり不明だが３間以上の長舎である。７世紀中葉の H-1 を取り込むような位置関係で、軸方向も揃っているが、直接の切り合い関係は無い。図示に耐えるような遺物は無いが、Ｐ１から北武蔵型坏の細片が出土しており、本遺構は H-1 に伴う施設ないしは直後に造営された単独の側柱建物と想定される。なお、P7 において、明確な切り合い関係は断面観察できていないが、平面での所見では７世紀末頃と推定される W-5 に切られており、時期的な上限を示している。

(5) 性格不明遺構

調査区中央北寄りから２カ所検出。X-1 は掘り上がりこそ W-6 と連続的であるが、断面観察の所見では W-6 がある程度埋没した後に不定形に浅く掘り込み、見かけ上の中央は長方形土坑状に一段下がる。一段浅い部分にはタタキ状の硬化面が形成され、多量の炭化物が充満している。遺物としては土器以外に、多量の鉄滓と羽口、獣骨と共に白磁片が出土している。X-2 は基壇建物跡を切る不定形な落ち込みで、基壇建物跡南側に形成された 10 世紀末～ 11 世紀初頭の遺物包含層の一部と思われる。

(6) 土坑・井戸

調査区各所には土坑が点在する。10 世紀末～ 11 世紀初頭の遺物を含む古代のものと、中世と推定されるものがあるが、特に何かを埋納したり廃棄したような形跡は認められず、性格については不明と言わざるを得ない。井戸跡は５基検出し、全て中世である。底面まで掘り下げたものはないが、I-4 は完全に埋め戻され、I-2 は上面に礫が廃棄されていた。また、I-3 上位には巨大な安山岩が廃棄されていたが、これは本来、基壇建物跡に伴う礎石であったと考えられる。

Tab. 2　遺構一覧表（竪穴建物跡）

単位（m）　壁（直・有段・斜）（深：30㎝以上　普：10 ～ 30㎝　浅 10㎝以下）　不明は―。

遺構名	位置	時期	平面形	規模	長軸方向	壁	柱穴	貯蔵穴（位置／深さ）	カマド位置	カマド構造材	備考
H-1	B-2	7c 中葉	正方形	4.7 × 4.3	N- 15° -W	直 深	(5)	南東隅 カマド右	東辺中央？	粘土	カマド左袖の一部残存。 W-6 に中央切られている。
H-2	C-2	6c 後半	正方形	3.7 × <3.3>	N- 17° -W	― 深	(1)	―	東辺中央？	―	カマド　W-4 に切られている。 H-3 覆土上に床。
H-3	C-3	5c 後半	正方形	8.3 × <6.7>	N- 17° -W	直 深	(3)	―	東辺中央やや南寄り	粘土	床面中央北寄りに地床炉？ 根太痕 4 条。
H-4	A-1	古墳後期	―	3.7 × <1.3>	N- 27° -W	― 浅	―	―	―	―	KT-1 に切られている。 プラン確認のみ。
H-5	A-4	6c 後半	―	3.0 × <3.0>	N- 25° -W	― 普	(1)	―	北辺？	―	上位に X-1。 床面柔らかい。
H-6	D-4	古墳後期	―	<2.3> × <0.6>	N- 17° -W	直 深	―	―	―	―	H-3 を切る。 大半、調査区外。
H-7	C-6	6c 後半	正方形	5.0 × 4.6	N- 12° -W	― 深	4	北辺西寄り カマド左／ 0.5m	北辺中央	粘土	南辺中央にハシゴ穴と思われる小ピット。
H-8 H-12	B-7 C-6	6c 前半	―	<5.0> × <3.0>	N- 30° -W	― 深	(2)	北辺中央？	―	―	H-8・H-12 は同一 大半を H-7 に切られる。 覆土中位に Hr-FP ？
H-10	B-5	6c 中葉	正方形	3.5 × 3.5	N- 32° -W	― 深	―	―	―	―	カマド　W-6 に破壊されたか？ 床面柔らかい。
H-11	B-4	6c 前半	正方形	3.7 × 3.5	N- 54° -W	― 深	―	―	―	―	カマド　H-10 に破壊されたか？ 床面柔らかい。人骨出土。 覆土中位に Hr-FP。
H-13	A-6	6c 後半	―	4.5 × <3.4>	N- 22° -W	直 普	(2)	南西隅 カマド右？	東辺中央	粘土	北半調査区外。壁際からこも石。 H-14 の中に入れ籠状。
H-14	A-6	6c 後半	―	4.9 × <4.0>	N- 22° -W	― 深	―	―	―	―	H-13 に大半切られる。
H-15	B-6	7c 中葉	―	<1.6> × <1.25>	N- 25° -W	― 浅	―	―	―	―	H-7・H-14 を切る。 掘削を中止した竪穴か？
H-16	A-7	古墳後期	―	<1.5> × <0.56>	N- 17° -W	― 浅	―	―	―	―	H-13・W-1 に大半切られている。

Tab. 3　掘立柱建物跡

遺構名	建物規模・構造			柱間		面積（㎡）	主軸	備考
	構造	向き	桁行×梁行	桁行	梁行			
B-1	側柱	南？	2 ×（3）	（2.8）	（2.8）	7.84	N-77° -E	KT-1 に切られる。

Tab. 4　掘立柱建物跡　柱穴

遺構名	位置（グリッド）	種別	長軸	短軸	深さ	平面形状	備考
B-1P1（D-3)	C-1	柱穴	1.4	(0.82)	0.33	不整形	古代。
B-1P2	B-2	柱穴	0.82	0.61	0.58	不整形	古代。
B-1P3	B-2・3	柱穴	1.72	0.7	0.74	不整形	古代。
B-1P4	B-2	柱穴	0.74	0.63	0.47	不整形	古代。
B-1P5	A-2	柱穴	0.53	<0.29>	0.25	不整形	古代。
B-1P6	A-2	柱穴	0.62	(0.58)	0.43	円形	古代。

Tab. 5　溝跡

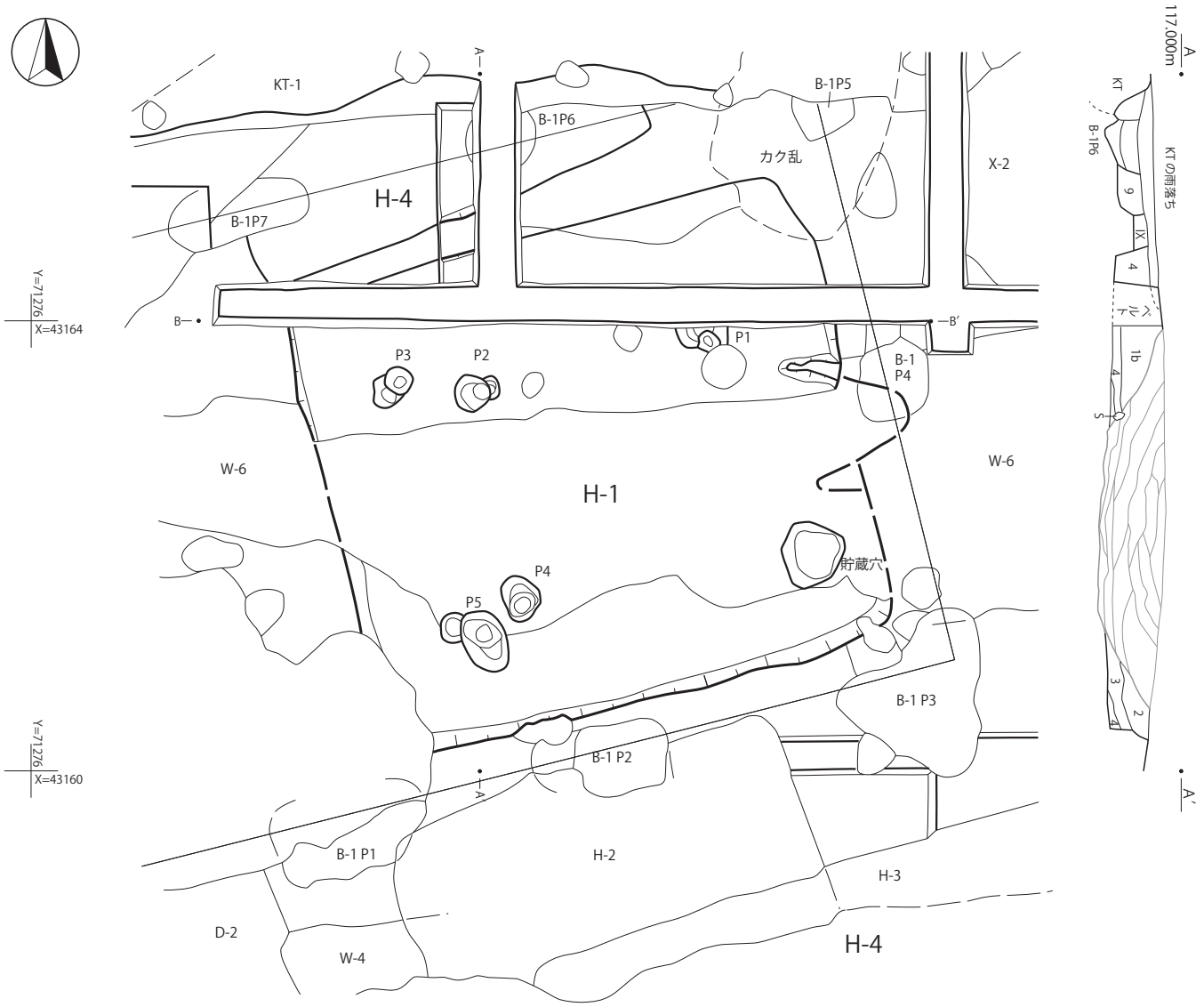
遺構名	位置	主軸方向	断面形状	備考
W-1	B-7	南・北	—	蒼海城堀。
W-2	D-1~2	東・西	—	蒼海城堀。
W-3	B-6	東・西	U 字状	中世。B 混覆土。
W-4	C-1~B-7	東・西	逆台形	土坑連結状。10 ～ 11C の遺物主体。
W-5	A-1	北東 - 南西	逆台形	箱薬研・覆土中位に硬化面。7C 末。B-1 を切り、KT-1 に切られる。
W-6	B-1~7	東・西	逆台形	土坑連結状。X-1 と連続。10 ～ 11C の遺物主体。
W-7	C-6~7	東・西	逆台形	土坑連結状。W-4 から分岐。同時期。
W-8	B-4~7	東・西	逆台形	断続的。H-7 を切り、W-4 に切られる。
W-9	C-5	東・西	逆台形	短い。D-6 と重複。東延長線に同軸の硬化面。道路跡分。
W-10	D-4~6	東・西	逆台形	旧 H-9。

Tab. 6　土坑・井戸

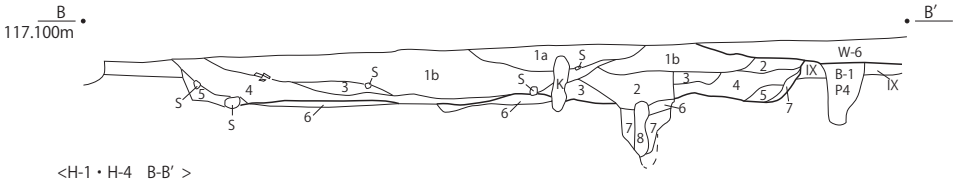
遺構名	位置（グリッド）	種別	長軸	短軸	深さ	平面形状	備考
D-1	B-1	土坑	3.0	2.7	0.99	不整形	中世？
D-2	C-1	土坑	2.5	2.6	1.02	不整形	中世？
D-4	A-6	土坑	2.21	1.67	0.42	不整形	カクラン？
D-5	A-5	土坑	1.4	1.25	0.48	長方形	古代。
D-6	C-5	土坑	1.3	1.15	0.17	円形	古代。W-9 を切る。10 ～ 11C の土器出土。
I-1	A-2	井戸	1.3	(1.3)	0.72	円形	中世。
I-2	C-6・7	井戸	1.25	1.3	1.12	円形	中世。
I-3	C-7	井戸	1.0	1.0	0.89	楕円形	中世。
I-4	C-5	井戸	0.95	0.8	0.19	円形	中世。
I-5	A-5	井戸	0.9	0.9	0.63	円形	中世。

Tab. 7　性格不明遺構

遺構名	位置（グリッド）	長軸	短軸	深さ	平面形状	備考
X-1	A-5	2.7	0.95	0.27	長方形	W-6 と連続。古代。
X-2	A-3	2.3	2.1	0.0	円形	KT-1 を切る。古代。



H-1・H-4

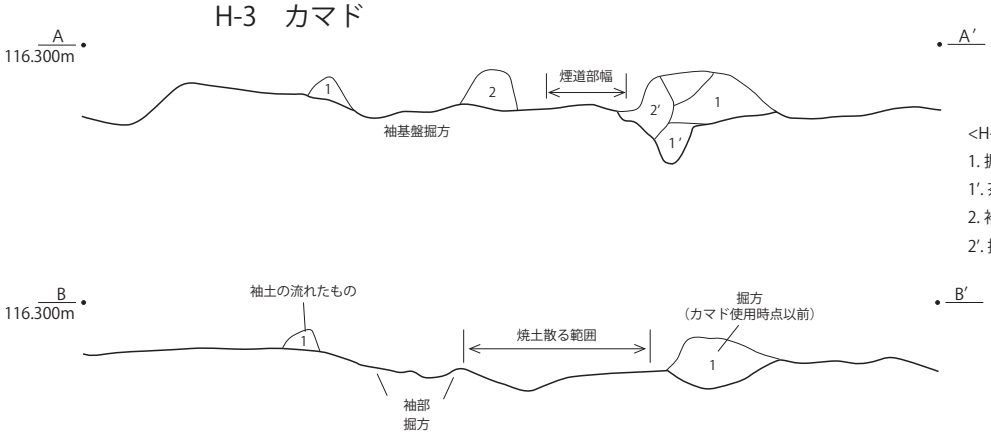


<H-1・H-4　B-B′>

1. 淡黒褐色土　a・b2 層細別される。
2. 黒褐色土　Ⅸ層ブロック含む。
3. 黒褐色土　2 層より暗い。
4. 淡黒色土　Ⅸ層ブロック極少量含む。
5. 茶褐色土　Ⅸ層土主体。
6. 黄褐色土　Ⅸ層土主体。貼床。
7. 黄褐色土　Ⅸ層土主体。
8. 黄褐色土　風化したⅨ層土。
9. 黒褐色土　Ⅷ層とⅨ層の混合土。

0　1:60　2m

H-3　カマド



<H-3 カマド　A-A′　B-B′>

1. 掘方の土　褐色土・黄褐色土ブロック
1′. 茶褐色土＋黒色土ブロック（充填土）
2. 袖の土　灰白色粘質土＋黄褐色土混合土　粘性あり。
2′. 掘方及び充填土（茶褐色土＋黄褐色土ブロック）

0　1:30　1m

Fig.6　H-1　H-3 カマド　H-4

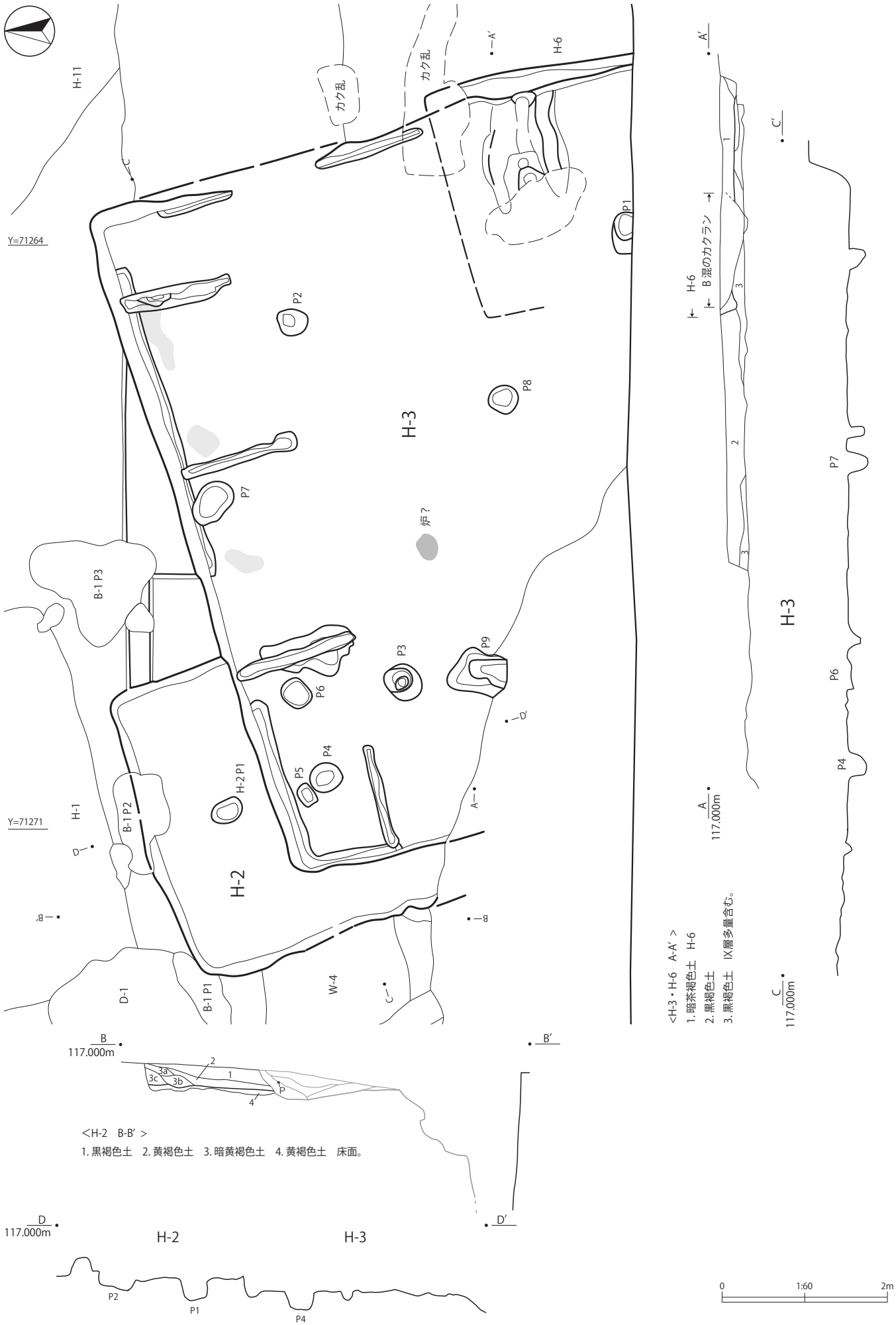
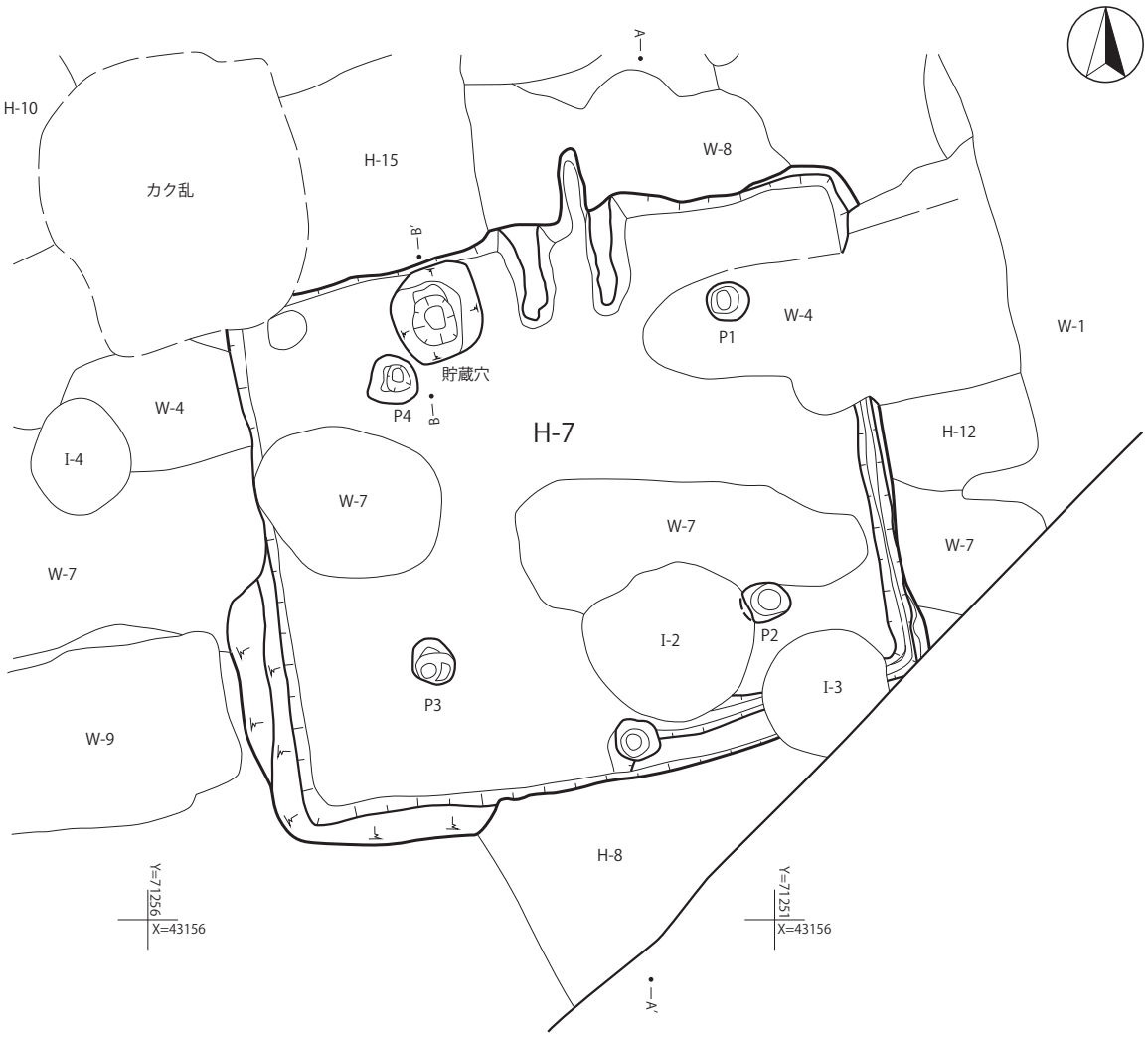
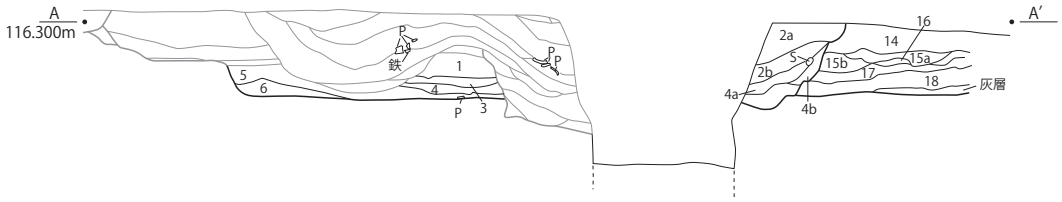

H-11
カク乱
カク乱
H-6
A′
A
Y=71264
Y=71271
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
H-3
H-2
炉？
B-1 P3
B-1 P2
B-1 P1
H-2 P1
H-1
D-1
W-4
B
B′
C
C′
D
D′
H-6
B 湿のカクラン
1
2
3
117.000m
<H-3・H-6 A-A′ >
1. 暗茶褐色土 H-6
2. 黒褐色土
3. 黒褐色土 IX層多量含む。
3a
3b
3c
4
P
<H-2 B-B′ >
1. 黒褐色土 2. 黄褐色土 3. 暗黄褐色土 4. 黄褐色土 床面。
0
1:60
2m

Fig.7 H-2・H-3・H-6



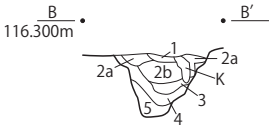


<H-7　A-A′>

1. 茶褐色土　Ⅸ層ブロック含む。
2. 茶褐色土　Ⅸ層ブロック多量。
3. 黒色土　炭化物主体。
4. 暗灰褐色土　しまりやや弱。
5. 暗茶褐色土　Ⅸブロック少量。
6. 淡茶褐色土　白色粘土ブロック含む。

※14 ～ 18 は Fig.11 参照。

H-7　貯蔵穴

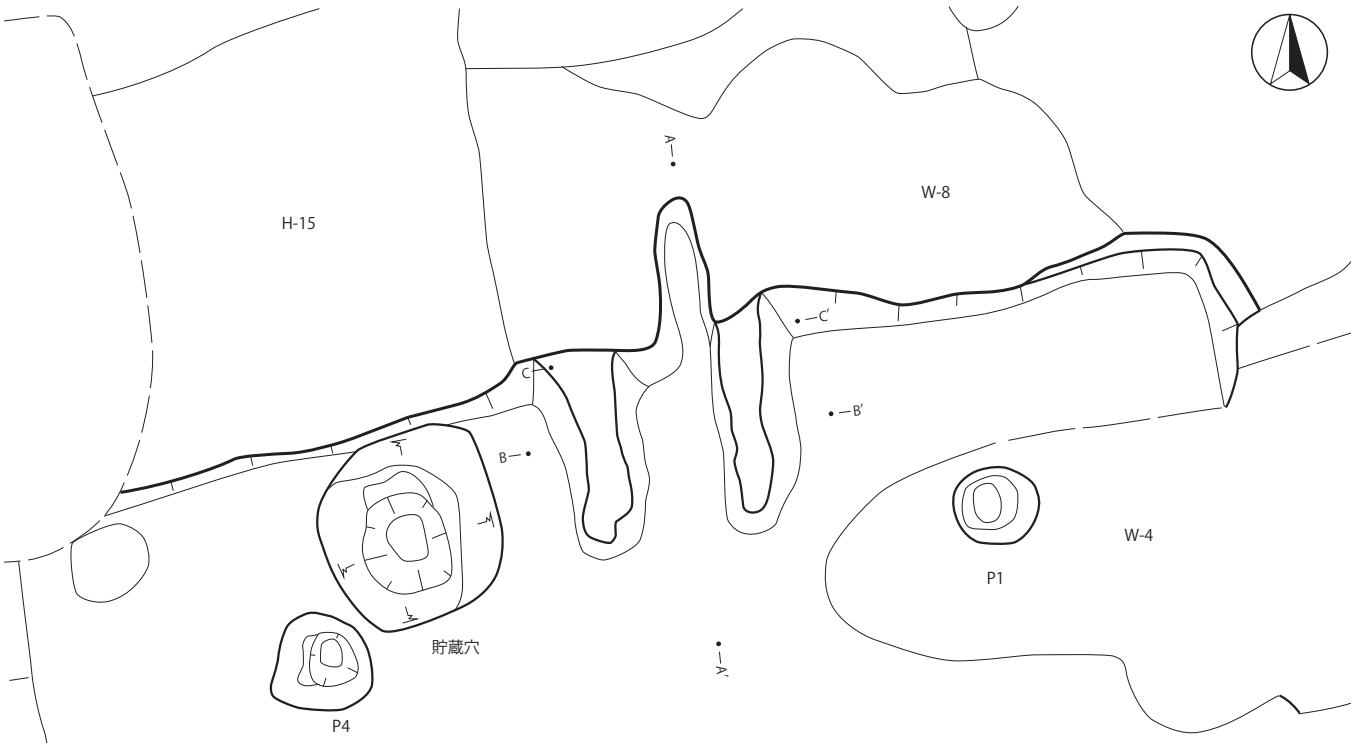


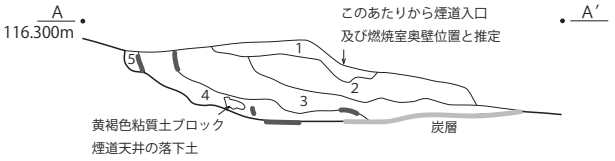
<H-7 貯蔵穴 B-B′>

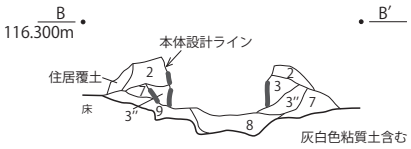
1. 黒褐色土　炭化物主体。
2. 暗黄褐色土　Ⅳ層主体。
3. 茶褐色土　Ⅳ層土含む。
4. 暗茶褐色土　炭化物含む。
5. 3 層と同じ。

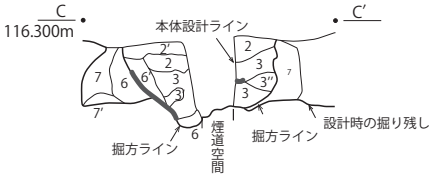
0　1:60　2m

Fig.8　H-7









＜カマド A-A′ B-B′ C-C′共通＞

1. 茶褐色粘質土　焼土炭混合（住居覆土流入土）
2. 灰褐色粘質土＋黄褐色粘質土　黒色粘質土・焼土粒混合・As-C 軽石粒
2′.2 層に黄褐色土ブロックが多量。カマド被覆土。
3. 茶褐色粘質土＋黄褐色粘質土ブロック　灰褐色粘質土ブロック・焼土
As-C 軽石粒は 2 層より少量。
（カマドや煙道及び被覆の土＝本体構築の充填土）
3′. 側壁崩落土　黄褐色土ブロック
3″. 焼土ブロック　この場合は掘方充填か。

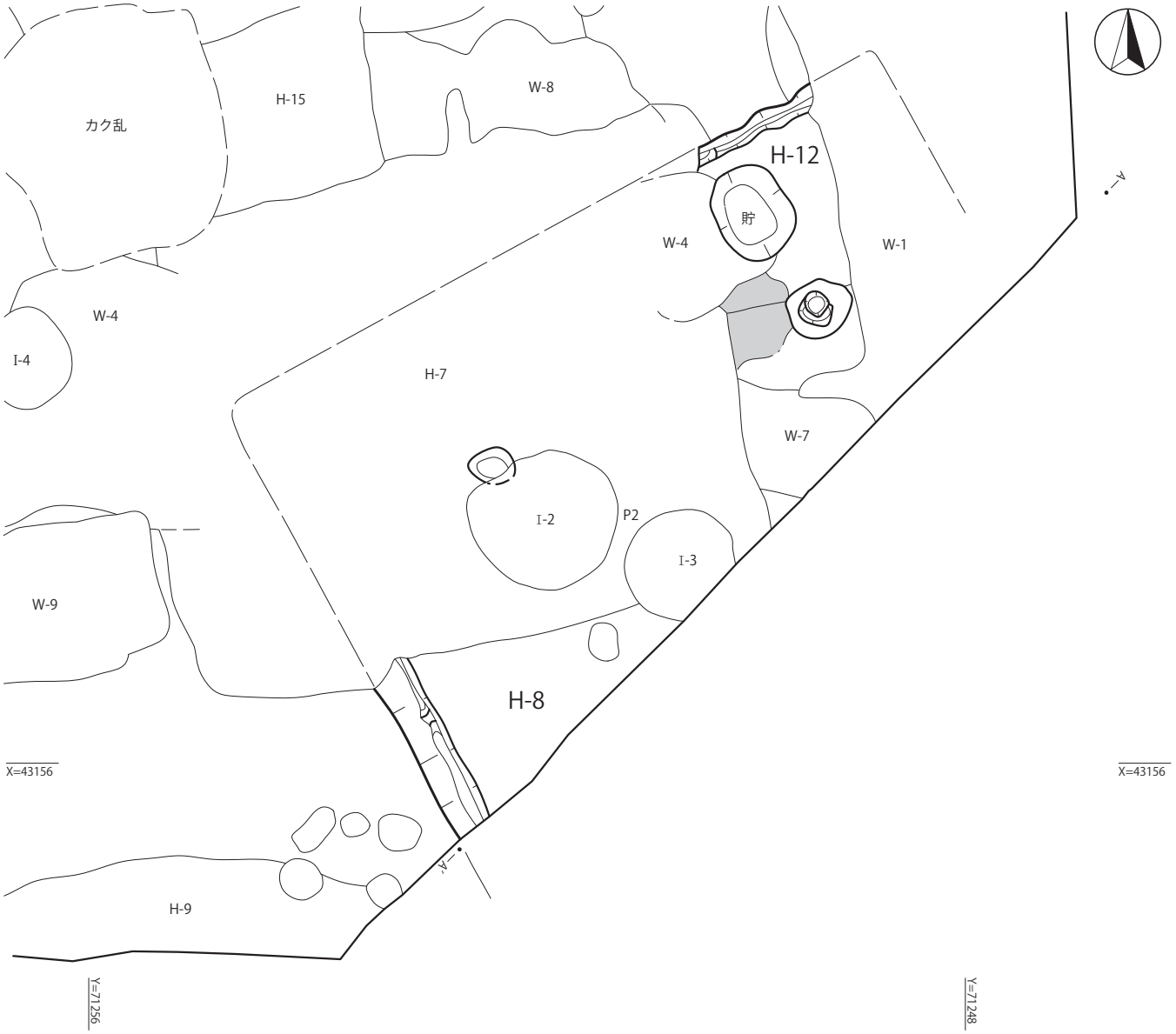
4. 暗褐色粘質土　均質で柔らかい。下部に灰・炭化物層・焼土層
上部に焼土層＝煙道空間部分に流入した層が見える。
煙道出口では黄褐色粘質土ブロック多量。
5. 黄褐色粘質土＋茶褐色粘質土ブロックの混合土。掘方の土。
6. 掘方の土　茶褐色土・焼土・黄褐色土
6′ 掘方の充填土　黄褐色土・焼土・炭混合　粘性あり。
6″ 掘方の土　灰褐色粘土・茶褐色土・黄褐色土
7. 袖取り付け部の土　茶褐色土・黄褐色土ブロック
8. 構築時の土坑状の土　上面に掘方の焼土あり。
9. 床の土　茶褐色土　上面に黄褐色粘質土がみられる。

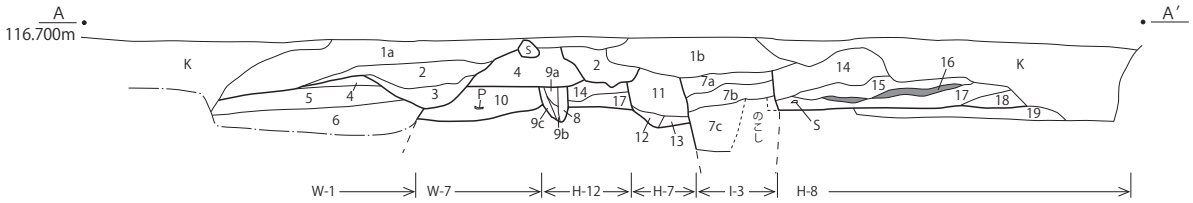
赤化部分（空焚き痕　焼土化）
炭層

※この断面位置はカマド煙道部と袖の取り付け部の関係で
左側が二重の充填を行っている為、やや複雑。

0　1:30　1m

Fig.9　H-7 カマド





1. 暗茶褐色　砂層ブロック含む。
2. 灰白色　砂層ブロック主体、C 黒ブロック少量。
3. 暗灰褐色　砂層ブロック含む。
4. 暗茶褐色　砂層・C 黒・黒色土ブロック含む。
5. 淡茶褐色　砂層ブロック主体。
6. 黒褐色　砂層ブロック少量含む。

（1～6：W-1 関係層）

7. 黒褐色　砂層ブロック少量、As-B 含む。I-3 覆土。
8. 灰白色　砂層主体。
9. 黒褐色　砂層少量。

（8～9：中世 pit）

10. 黒褐色土　As-C 含む、W-7 覆土。
11. 黒褐色　As-C 含む。
12. 黒褐色　砂層少量含む。
13. 茶褐色　砂層多い。

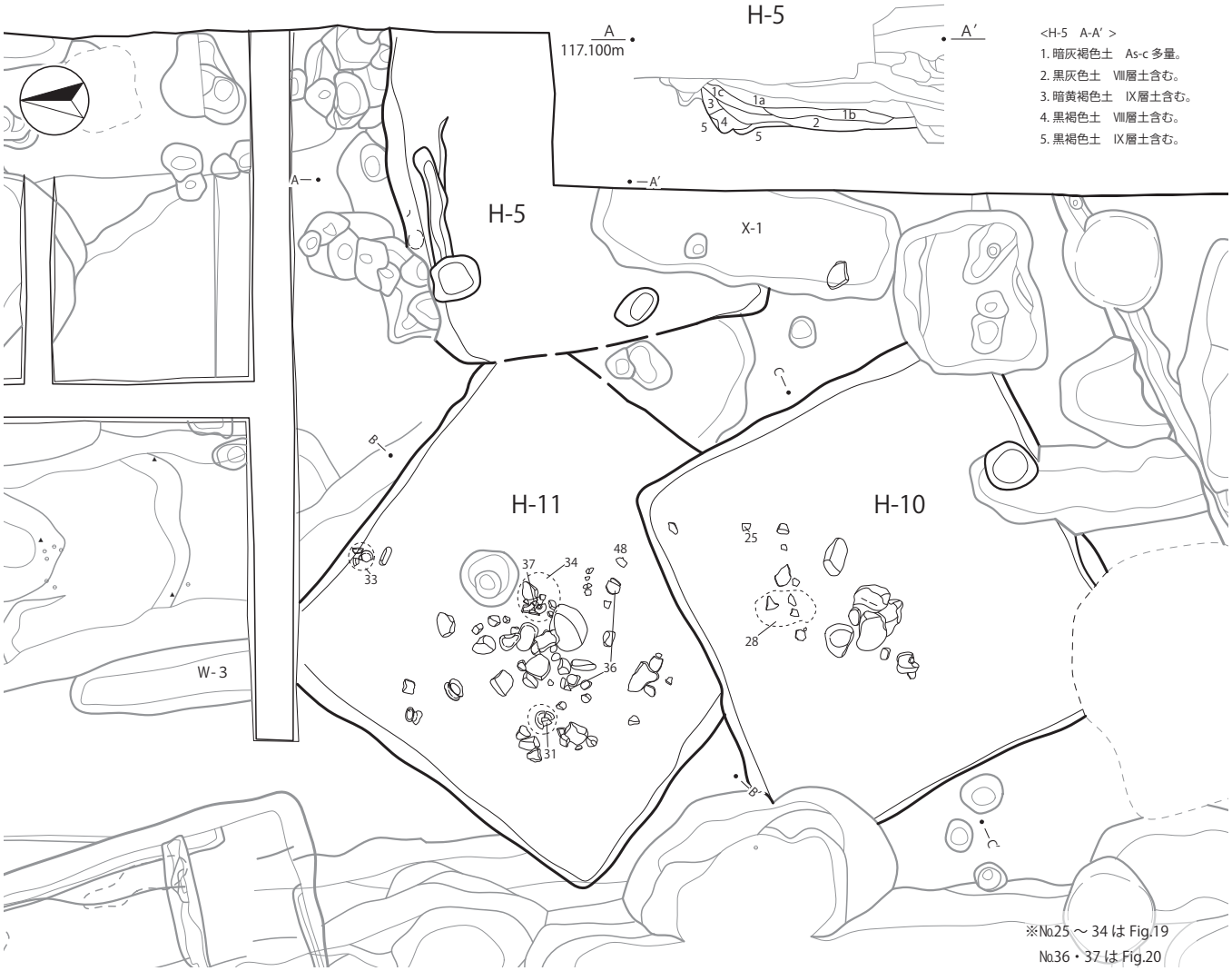
（11～13：H-7 覆土）

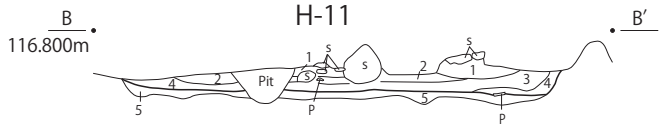
14. 黒褐色　As-C 含む。
15. 黒褐色　砂層含む。
16. 黒褐色　Hr-FP 灰ブロック含む。
17. 黒褐色　砂層含む。
18. 黒褐色　砂層ブロック多い。
19. 暗茶褐色　砂層ブロック主体、黒色土含む。

（14～19：H-8・12 覆土）

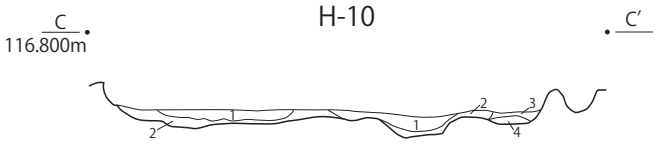
0　1:60　2m

Fig.10　H-8・H-12





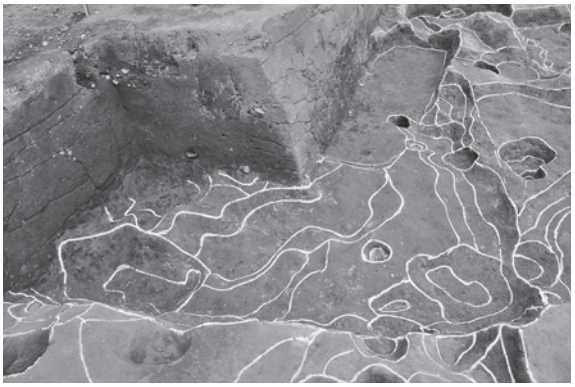
<H-11 B-B′ >
1. 暗茶褐色土 As-C 含む。
2. 暗茶褐色土 Hr-FP 灰ブロック・炭化物含む。
3. 暗茶褐色土 Ⅸ層土ブロック多量。
4. 暗黄褐色土 Ⅸ層土多量。
5. 黄褐色土 Ⅸ層主体。掘方。



<H-10 C-C′ >
1. 暗茶褐色土 Ⅸ層多量。
2. 暗黄褐色土 Ⅸ層多量。
3. 1 層と同じ。
4. 2 層と同じ。

0 1:60 2m

H-10（奥）・11（手前）掘方



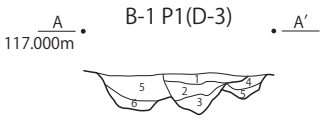
H-5 掘方

Fig.11 H-5・H-10・H-11

<C-C′>

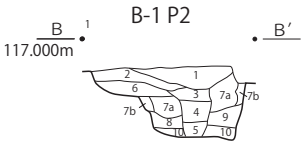
1. 黒褐色土　IX層ブロック多量。
2. 暗黄褐色土　IX層多量。
3. 暗黄褐色土　IX層主体。
4. 黄褐色

Fig.12　H-13~16



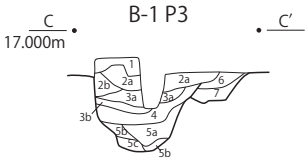
<B-1 P1(D-3)　A-A′ >

1. 灰褐色土
2. 暗灰色土　炭化物含む。
3. 暗茶褐色土　Ⅸ層土含む。
4. 灰褐色土　Ⅸ層ブロック含む。
5. 淡灰褐色土
6. 淡灰褐色土　Ⅸ層土少ブロック含む。



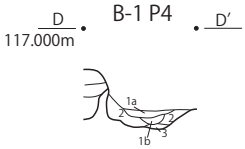
<B-1 P2　B-B′ >

1. 灰褐色土
2. 灰褐色土　Ⅸ層少量含む。
3. 暗褐色土　Ⅸ層土多量含む。
4. 淡灰褐色土
5. 暗灰褐色土
6. 3層と同じ
7. 4層と同じ　bは地山含む。
8. 5層と同じ
9. 暗灰色土　Ⅸ層少量含む。
10. 淡黒褐色土　Ⅸ層含む。



<B-1 P3　C-C′ >

1. 黒褐色土　カクランか。
2. 灰褐色土
3. 暗灰褐色土　Ⅸ層土ブロック含む。
4. 茶褐色土　Ⅸ層土多量含む。
5. 暗黄褐色土　Ⅸ層土主体。
6. 暗黄褐色土　Ⅸ層土主体。
7. 4層と同じ。



<B-1 P4　D-D′ >

1. 灰褐色土
2. 灰褐色土　Ⅸ層土多量含む。
3. 茶褐色土　Ⅸ層土主体。

0　1:60　2m

Fig.13　B-1

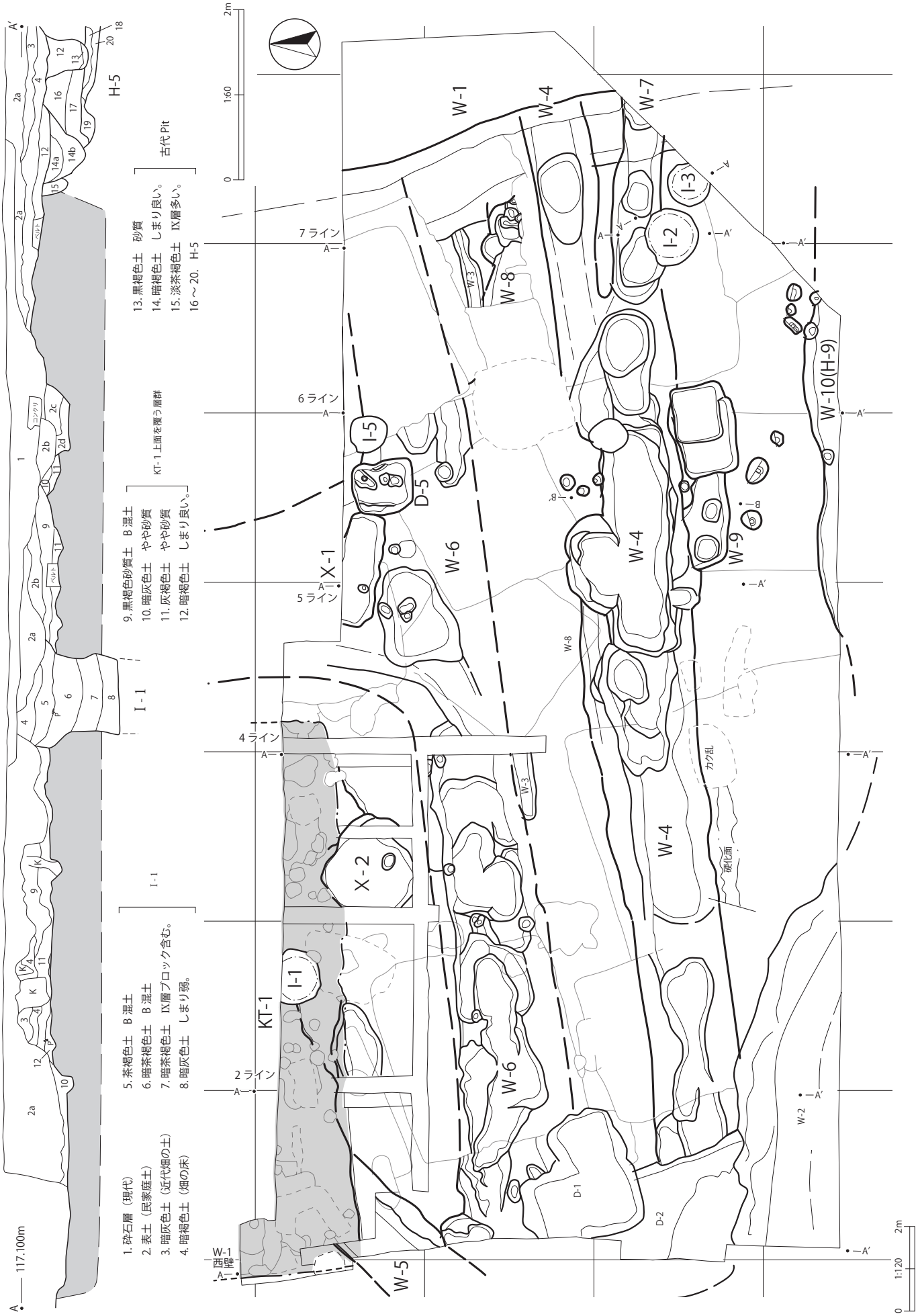


Fig.14　基壇建物跡（KT）・溝跡（W）・土坑（D）・井戸跡（I）・性格不明遺構（X）

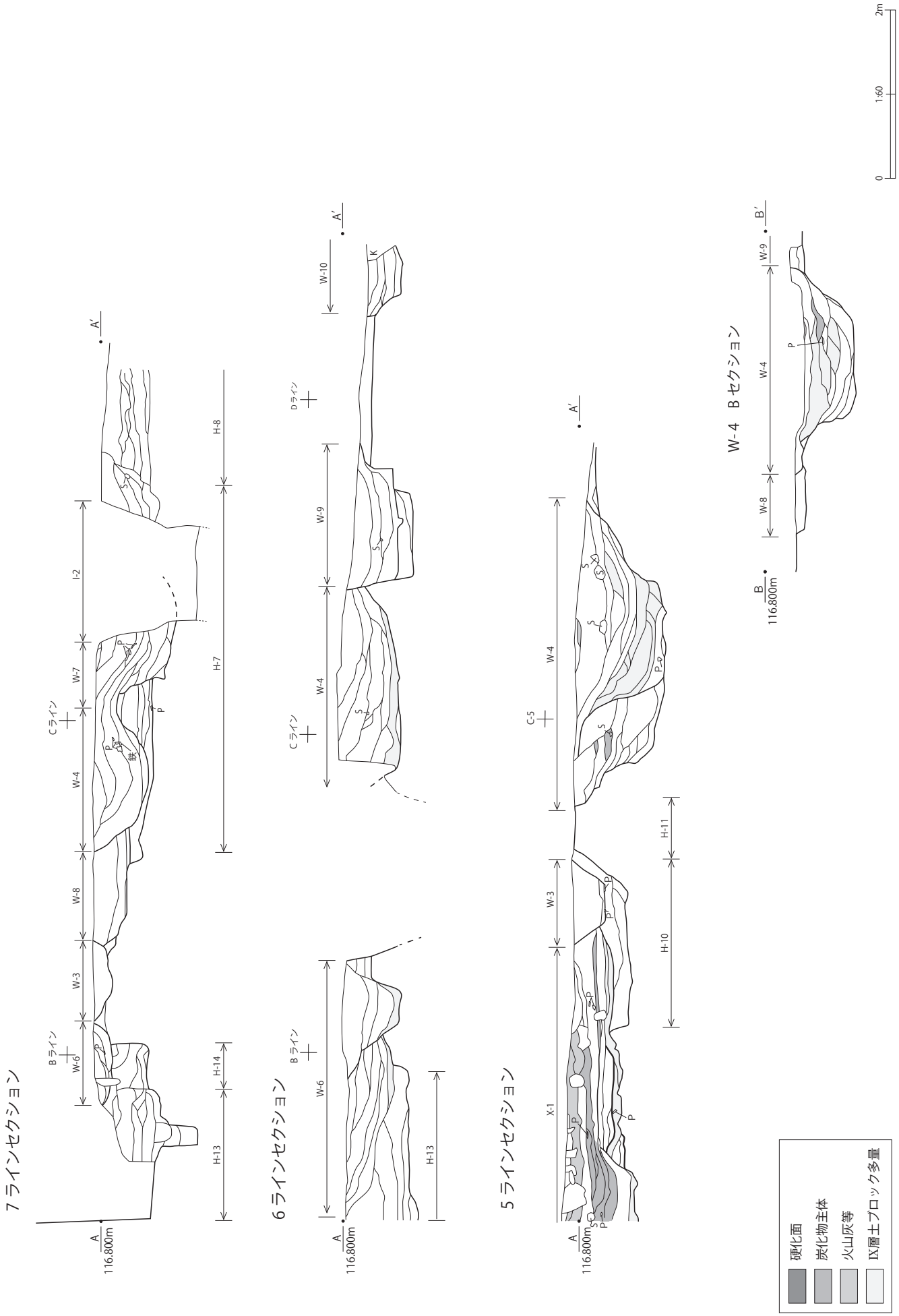


Fig.15　調査区土層断面図①

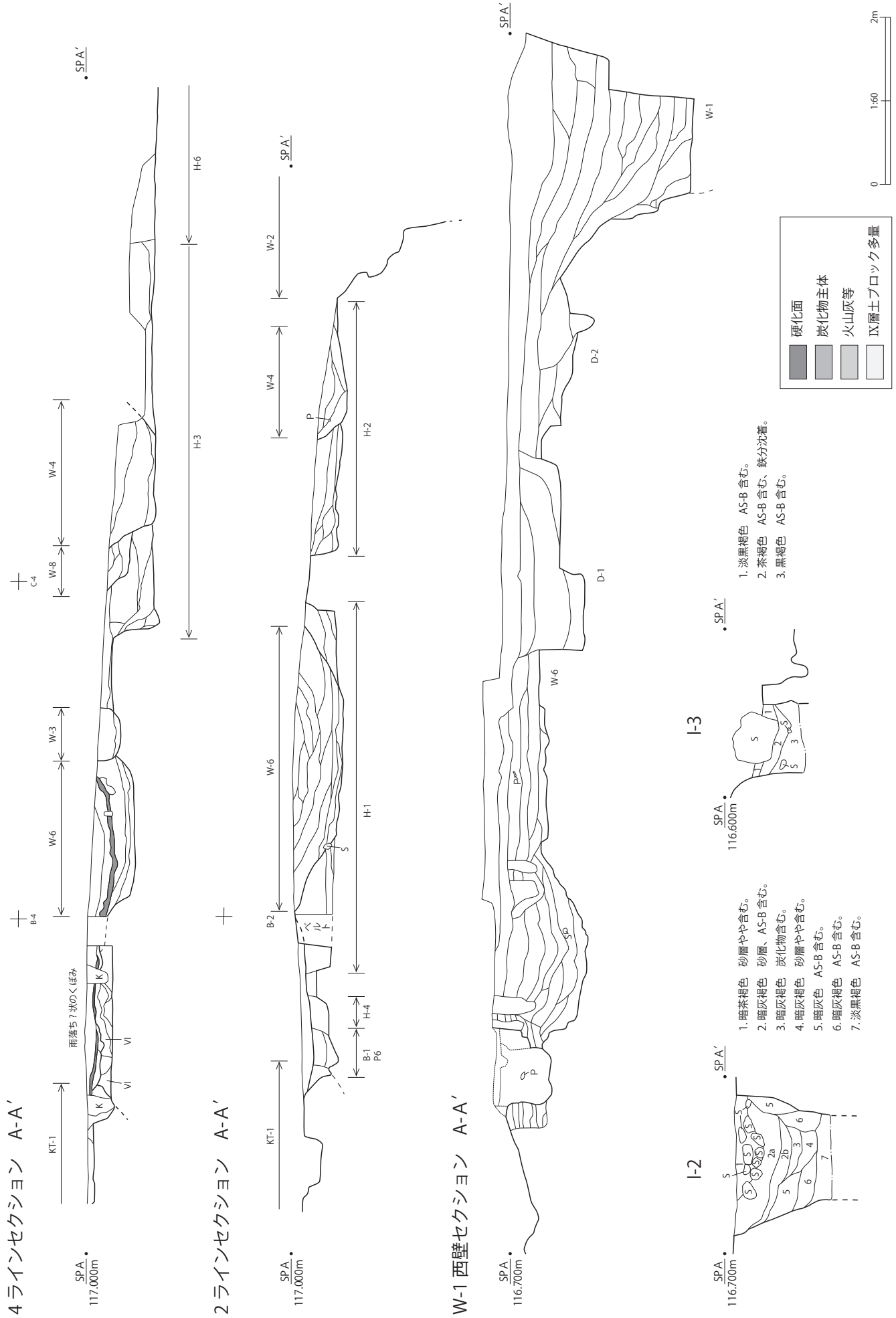


Fig.16　調査区土層断面図②

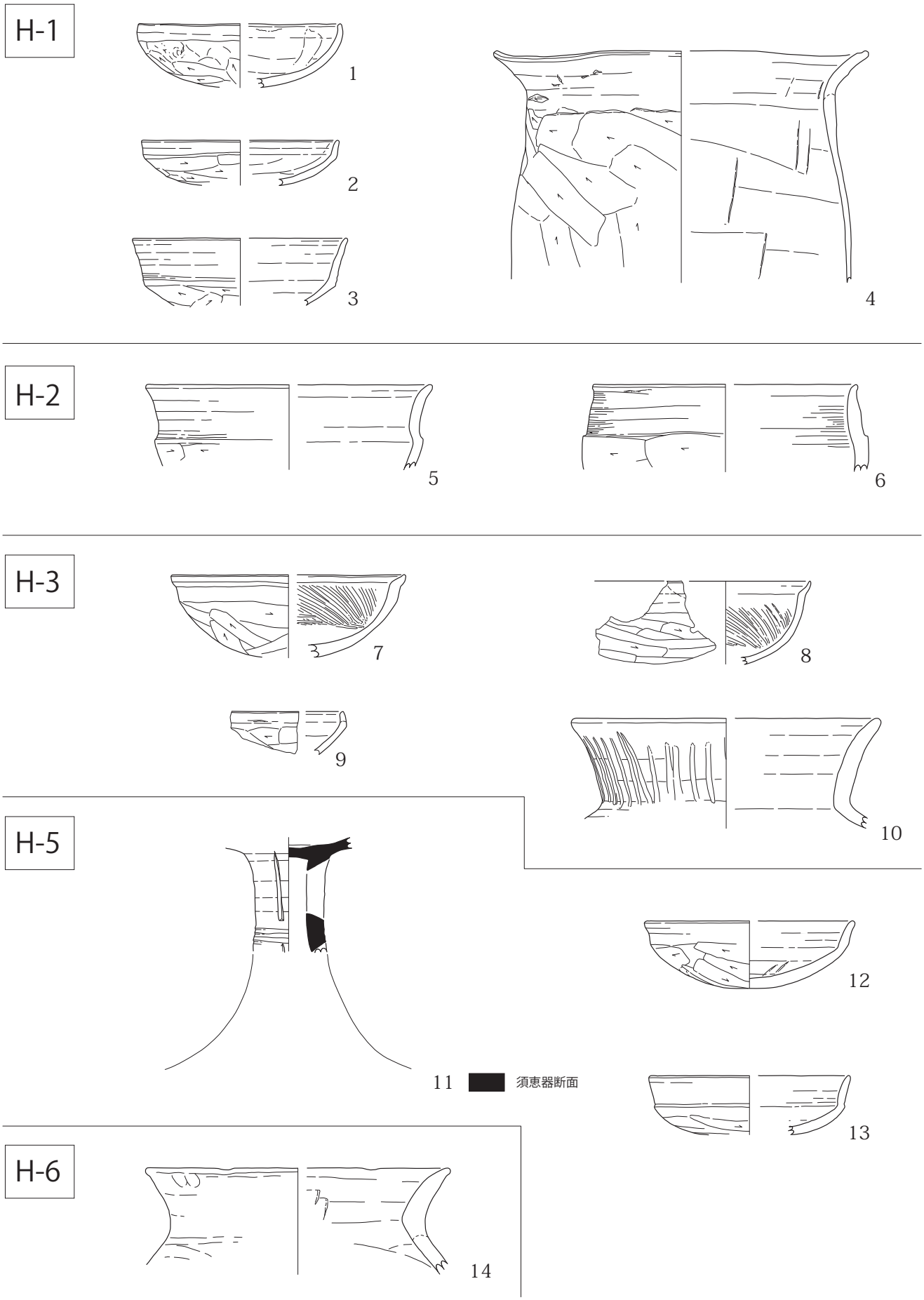


Fig.17　出土遺物（1）

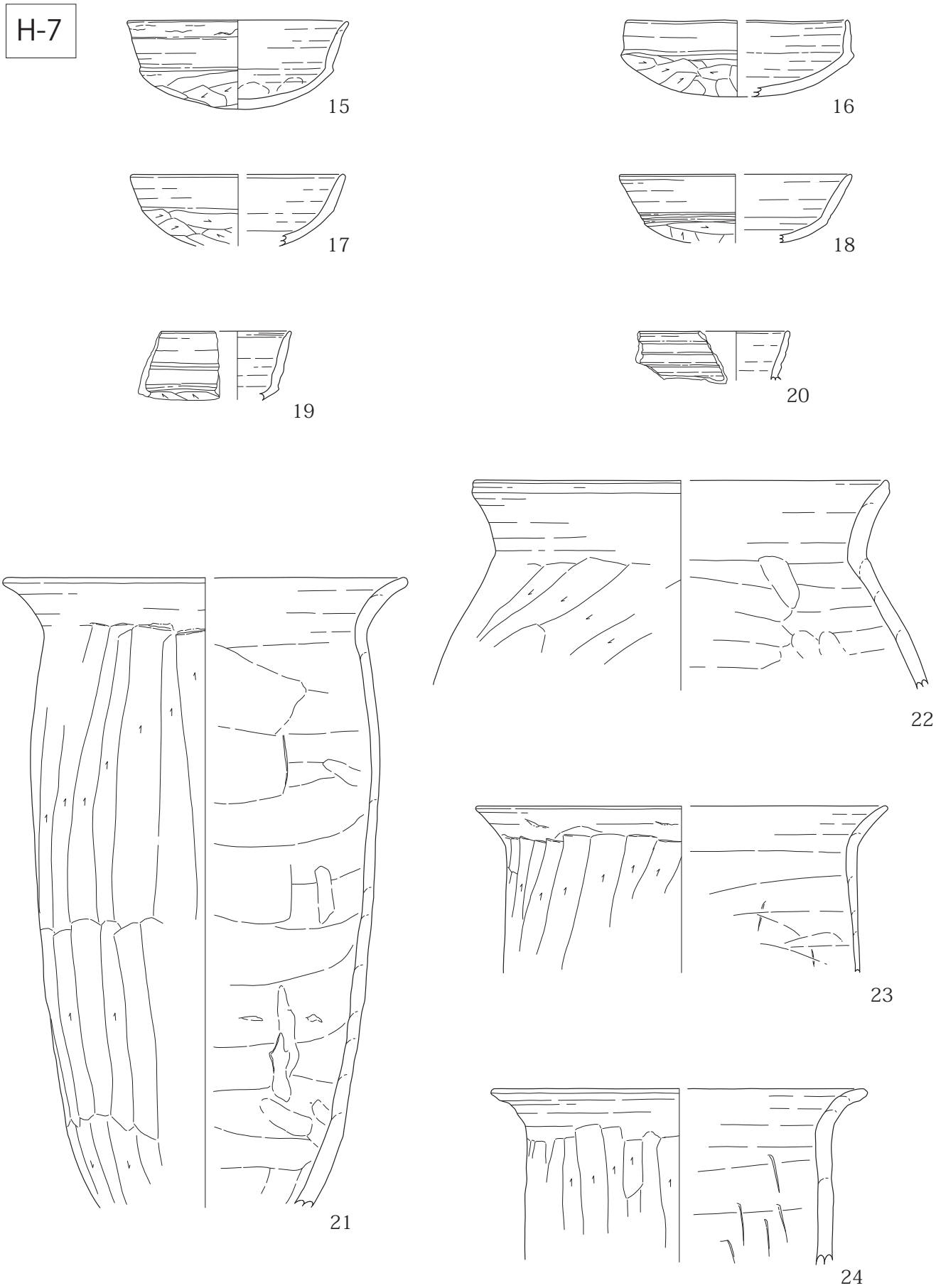


Fig.18　出土遺物（2）

0　1:3　6cm

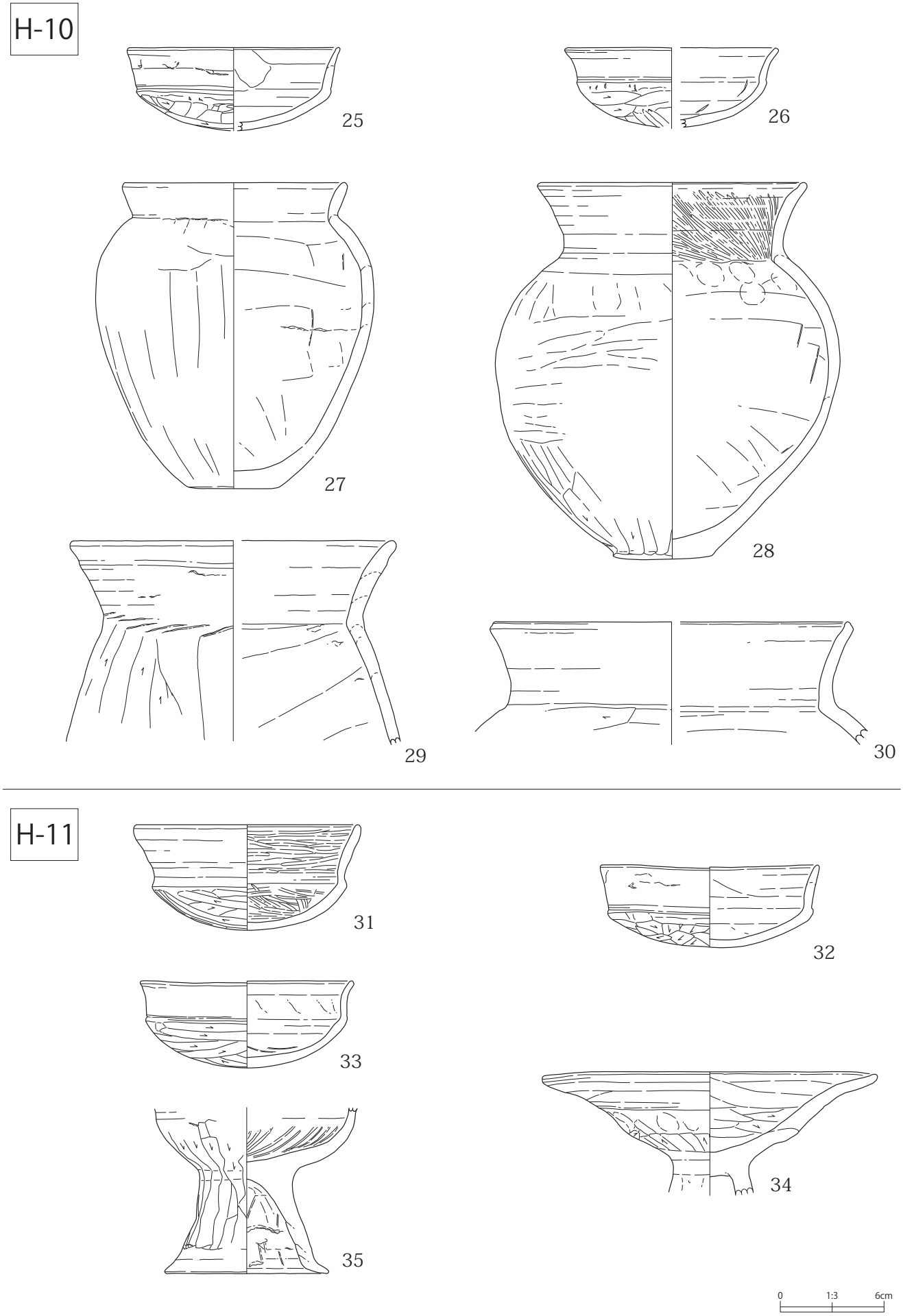
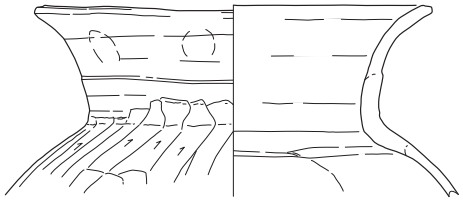
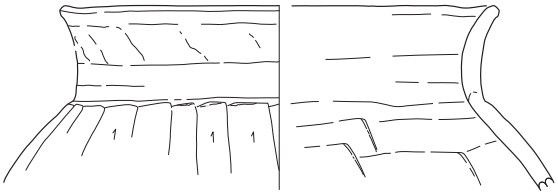
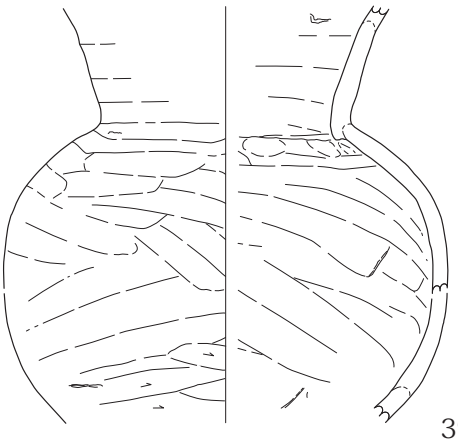
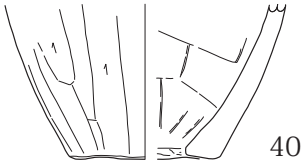


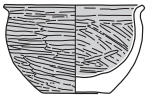
Fig.19　出土遺物（3）



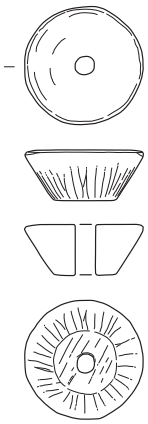








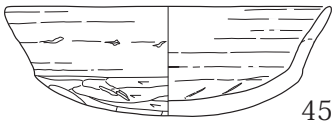
黒色処理

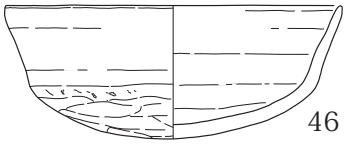


0 1:2 5cm

H-12

須恵器断面





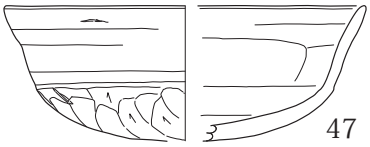


Fig.20　出土遺物（4）

0 1:3 6cm

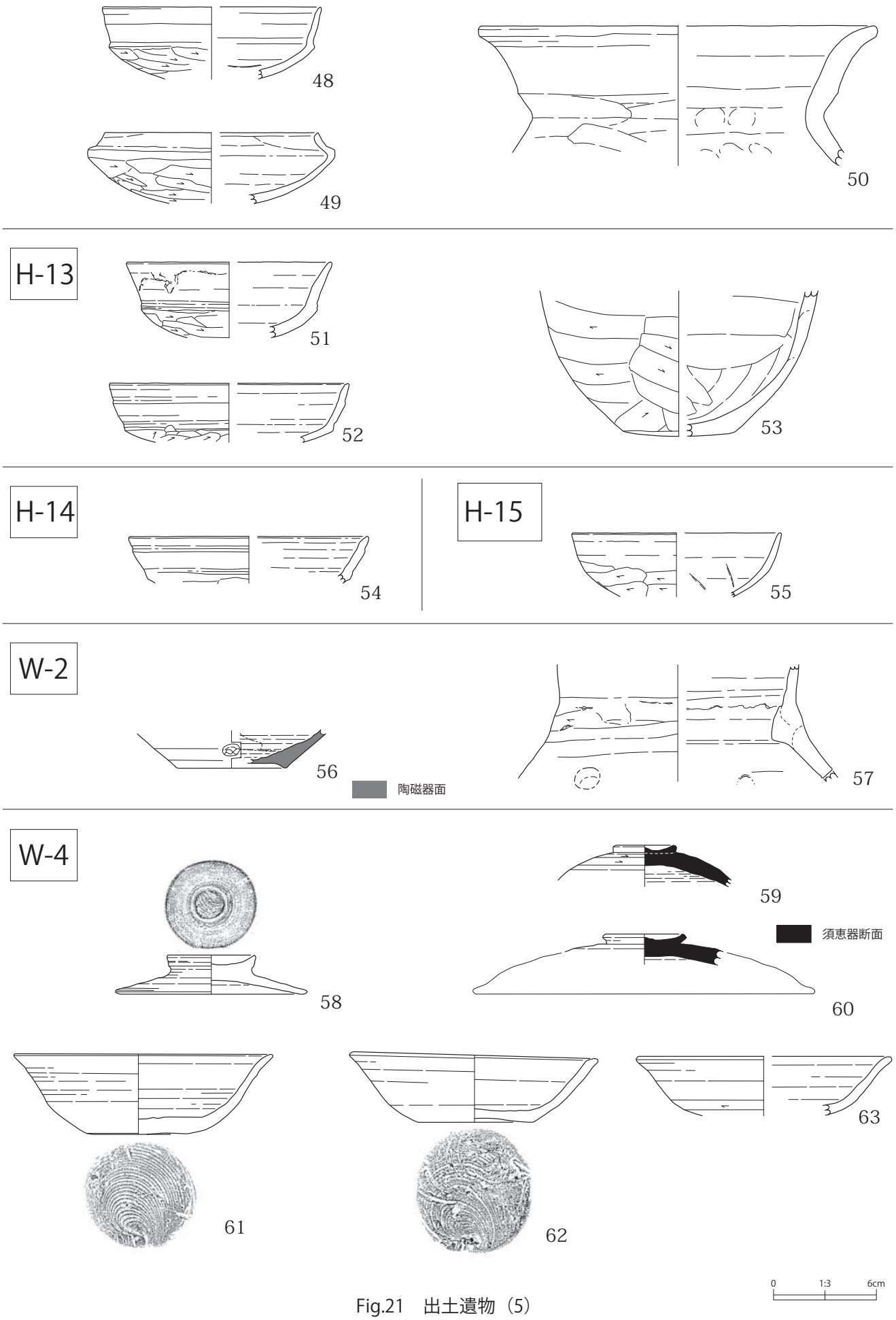

48
49
50
H-13
51
52
53
H-14
54
H-15
55
W-2
56
陶磁器面
57
W-4
58
59
須恵器断面
60
61
62
63
0
1:3
6cm

Fig.21　出土遺物（5）

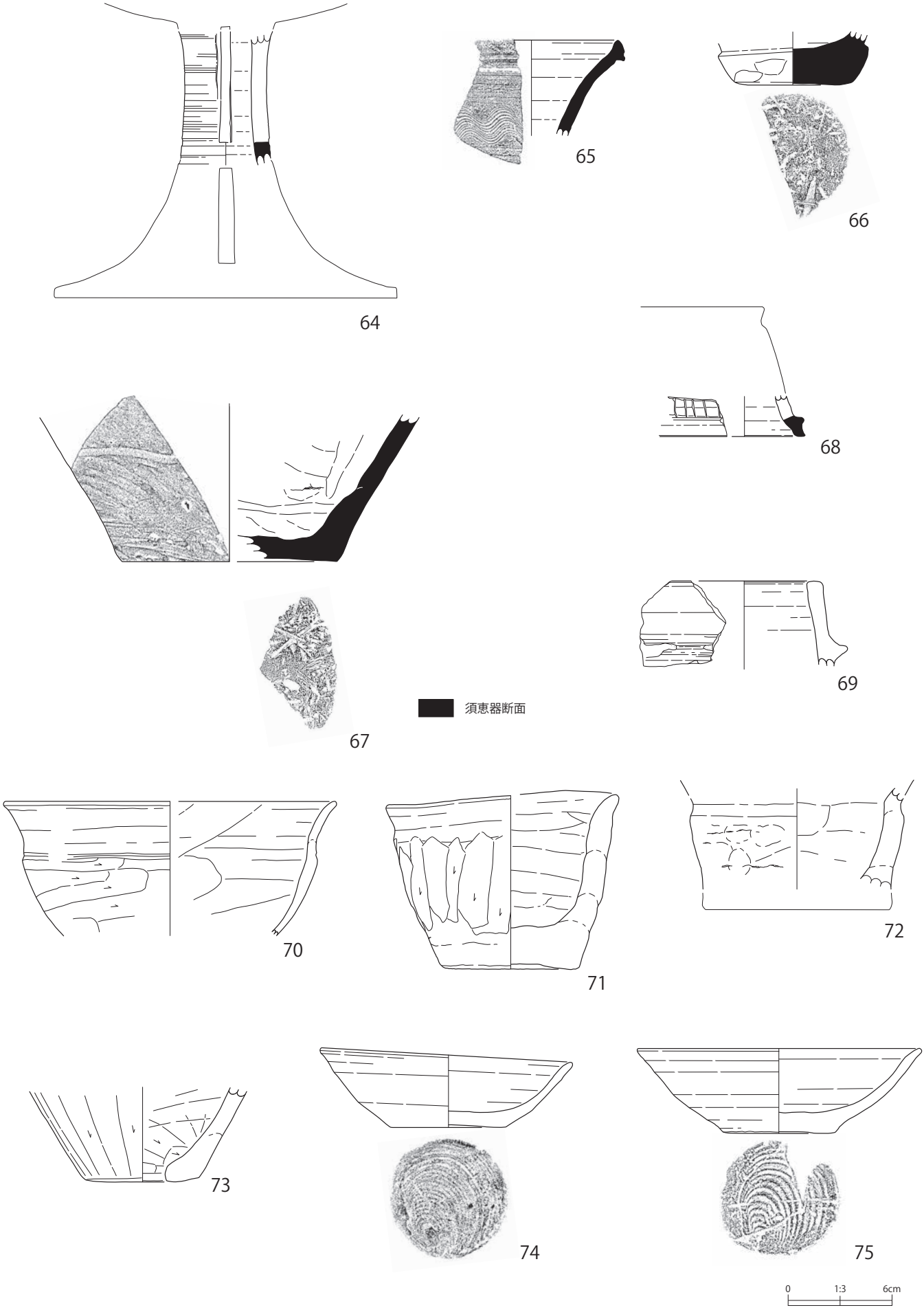


Fig.22　出土遺物（6）

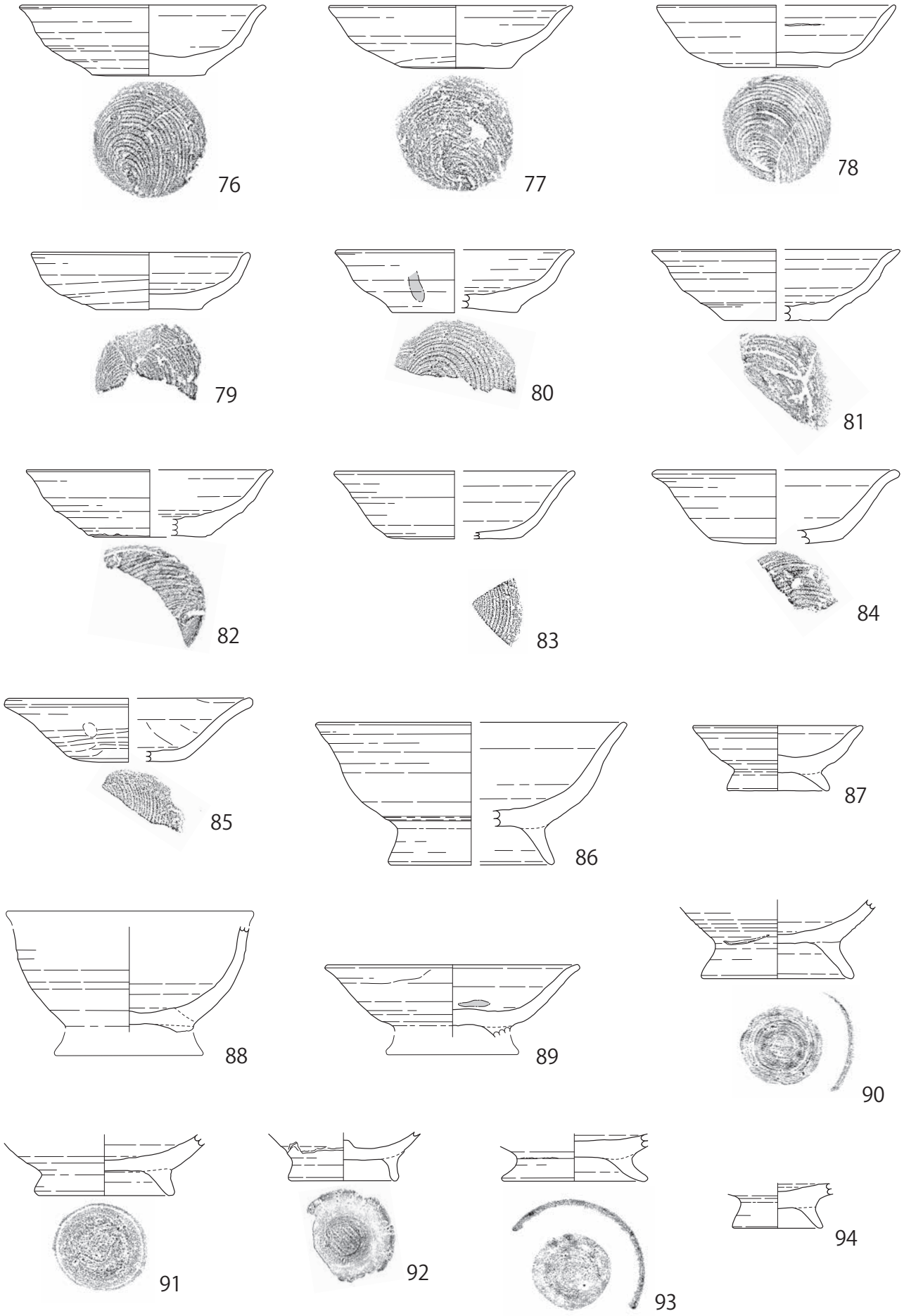


Fig.23　出土遺物（7）

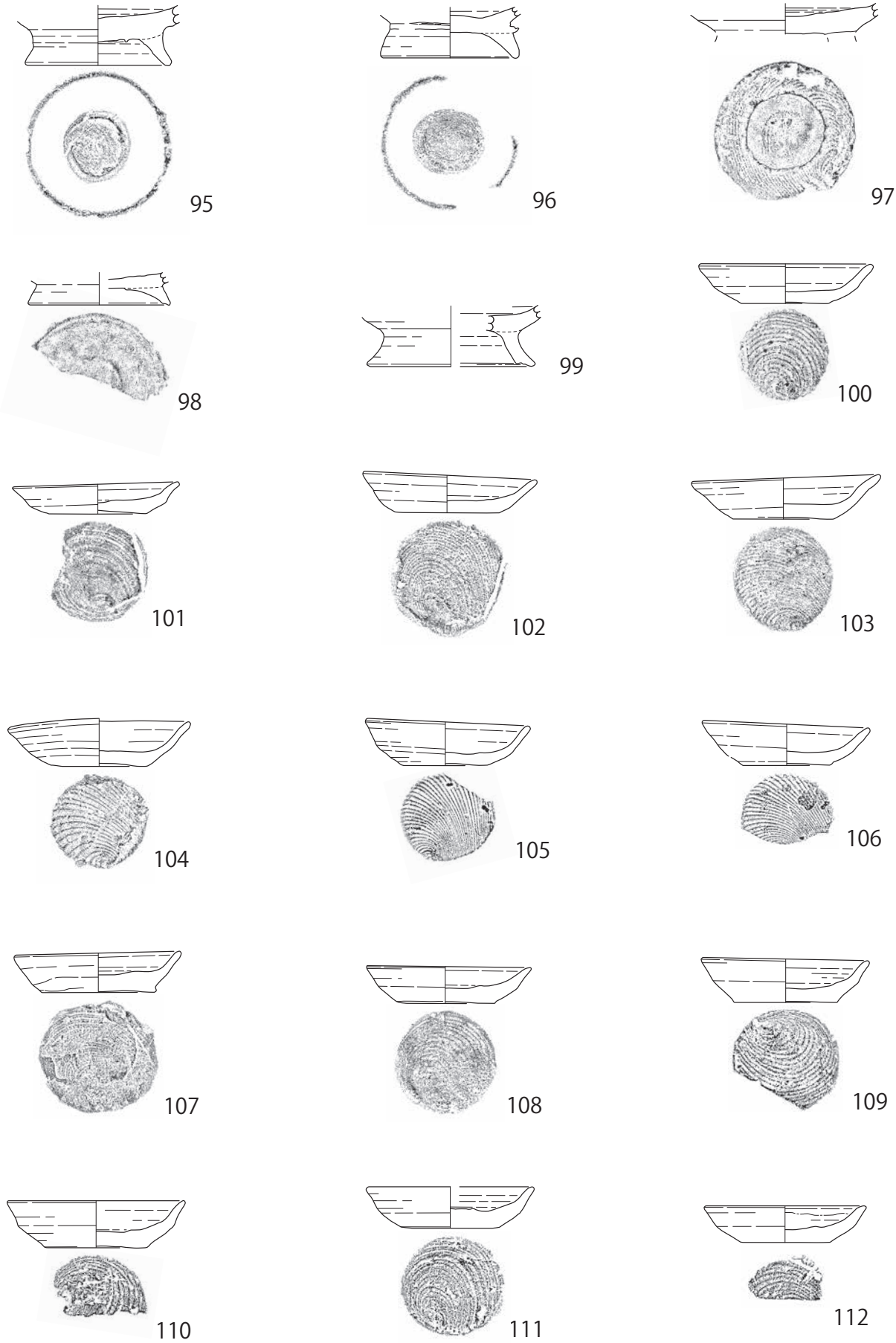

95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
0
1:3
6cm

Fig.24　出土遺物（8）

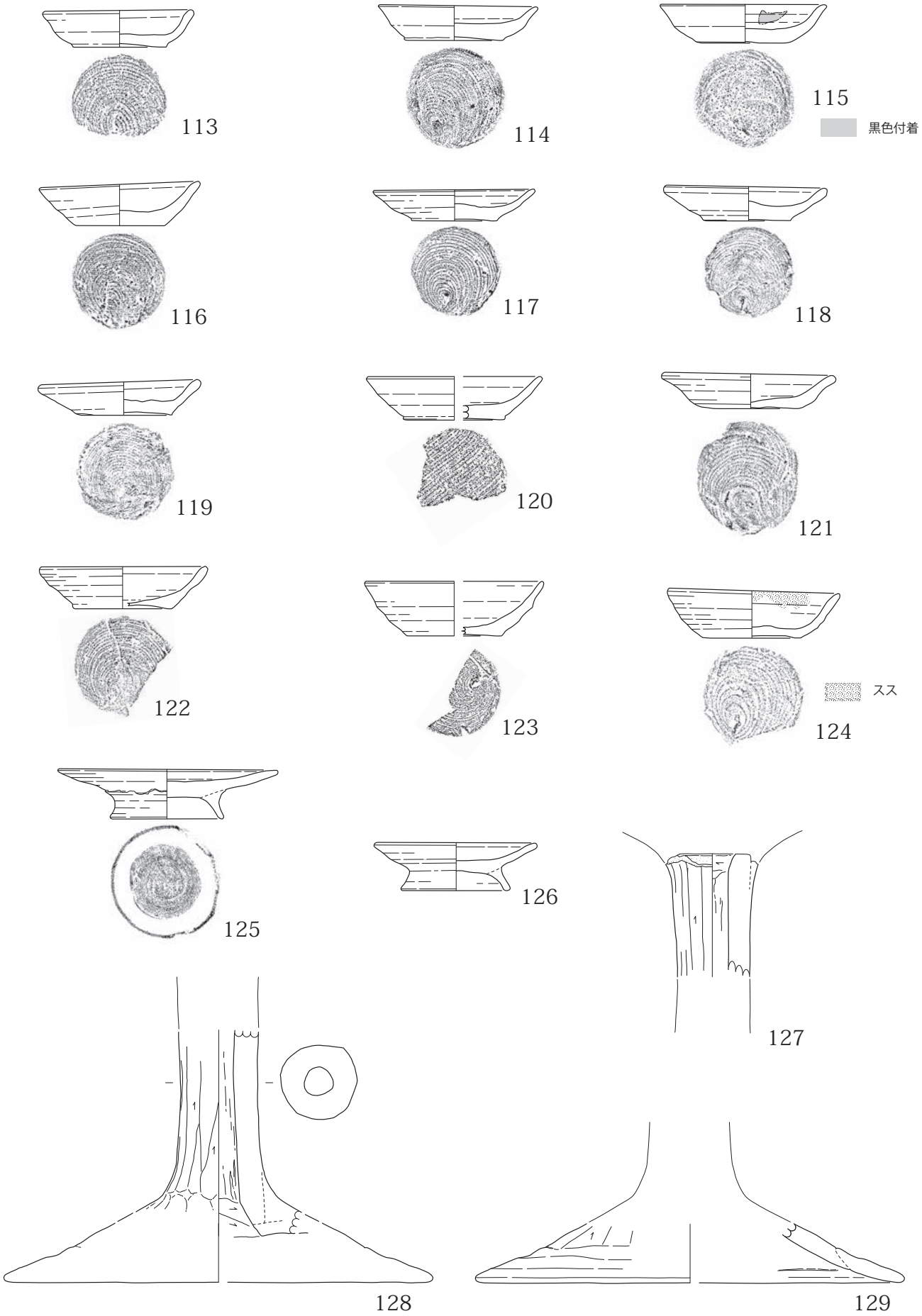

113
114
115
黒色付着
116
117
118
119
120
121
122
123
124
スス
125
126
127
128
129
0
1:3
6cm

Fig.25　出土遺物（9）

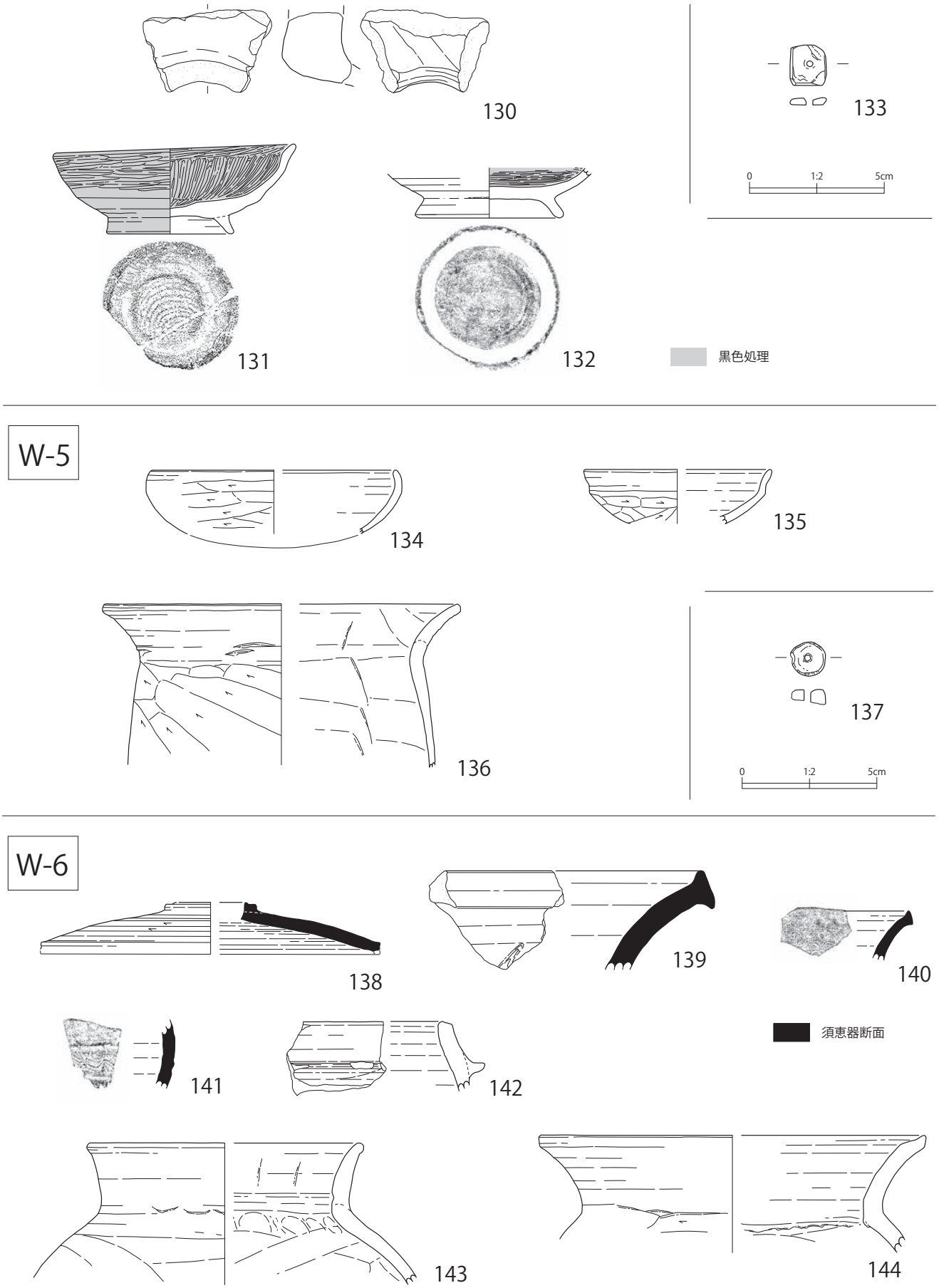


Fig.26　出土遺物（10）

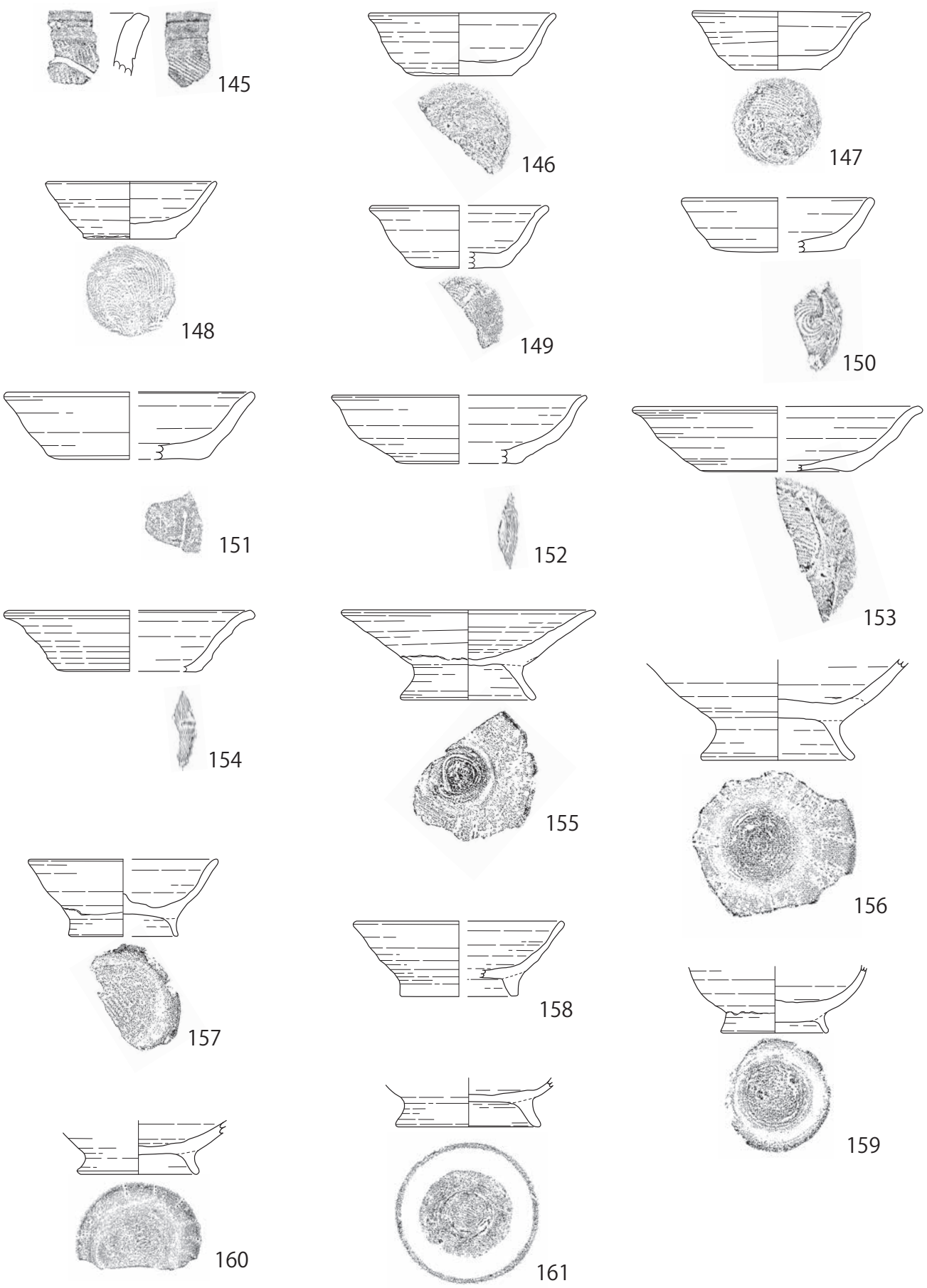


Fig.27　出土遺物（11）

0　1:3　6cm

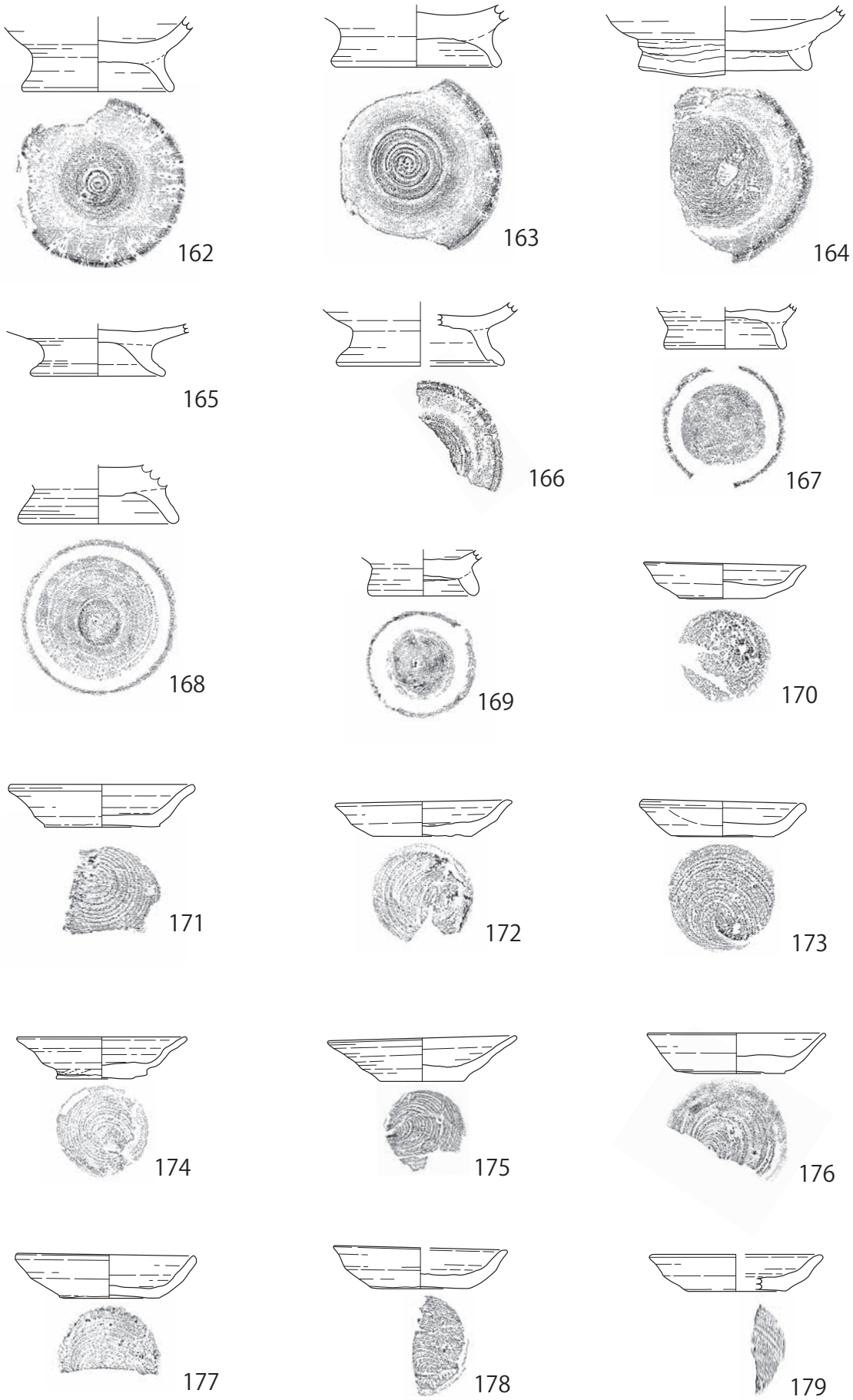


Fig.28　出土遺物（12）

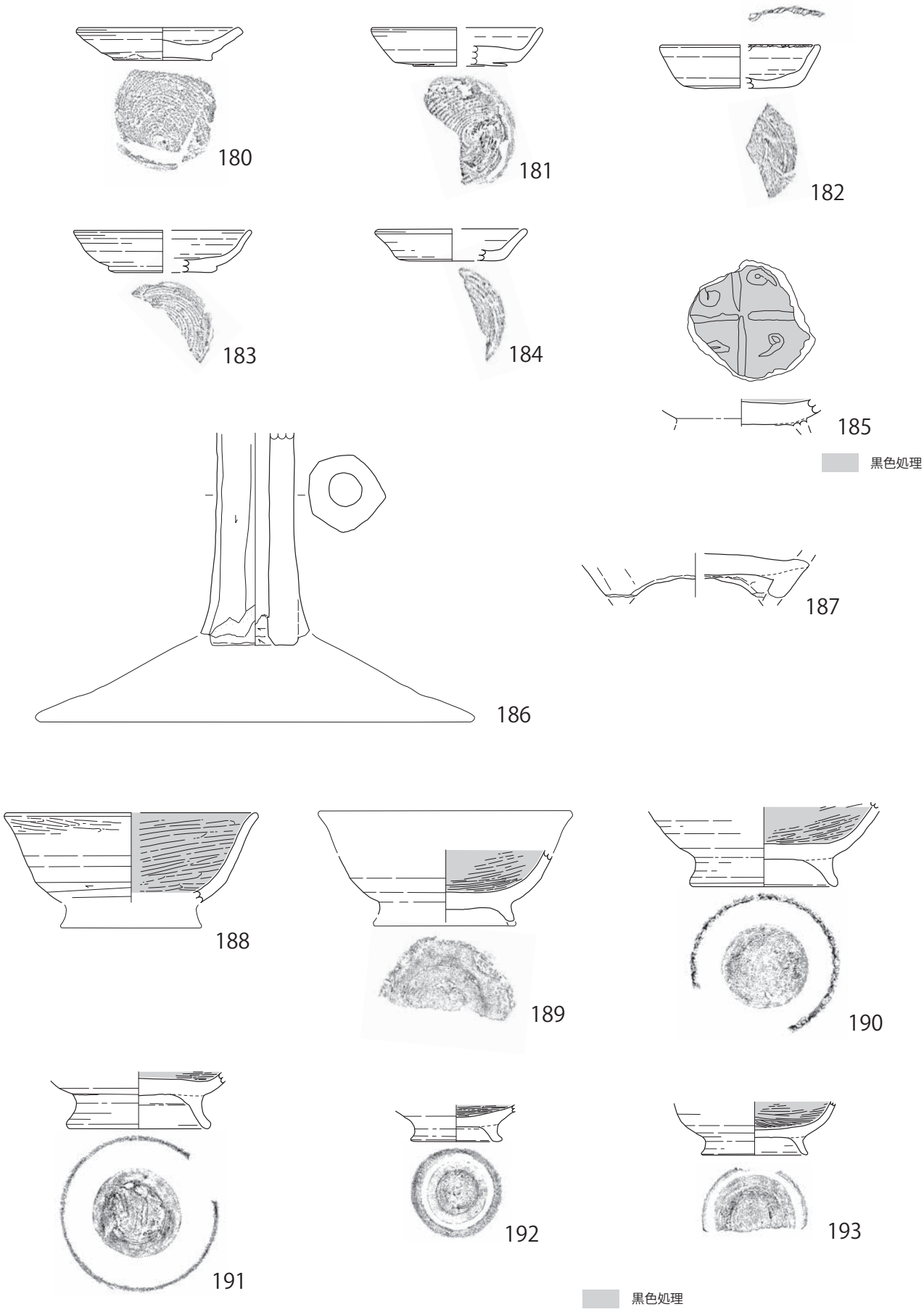


Fig.29　出土遺物（13）

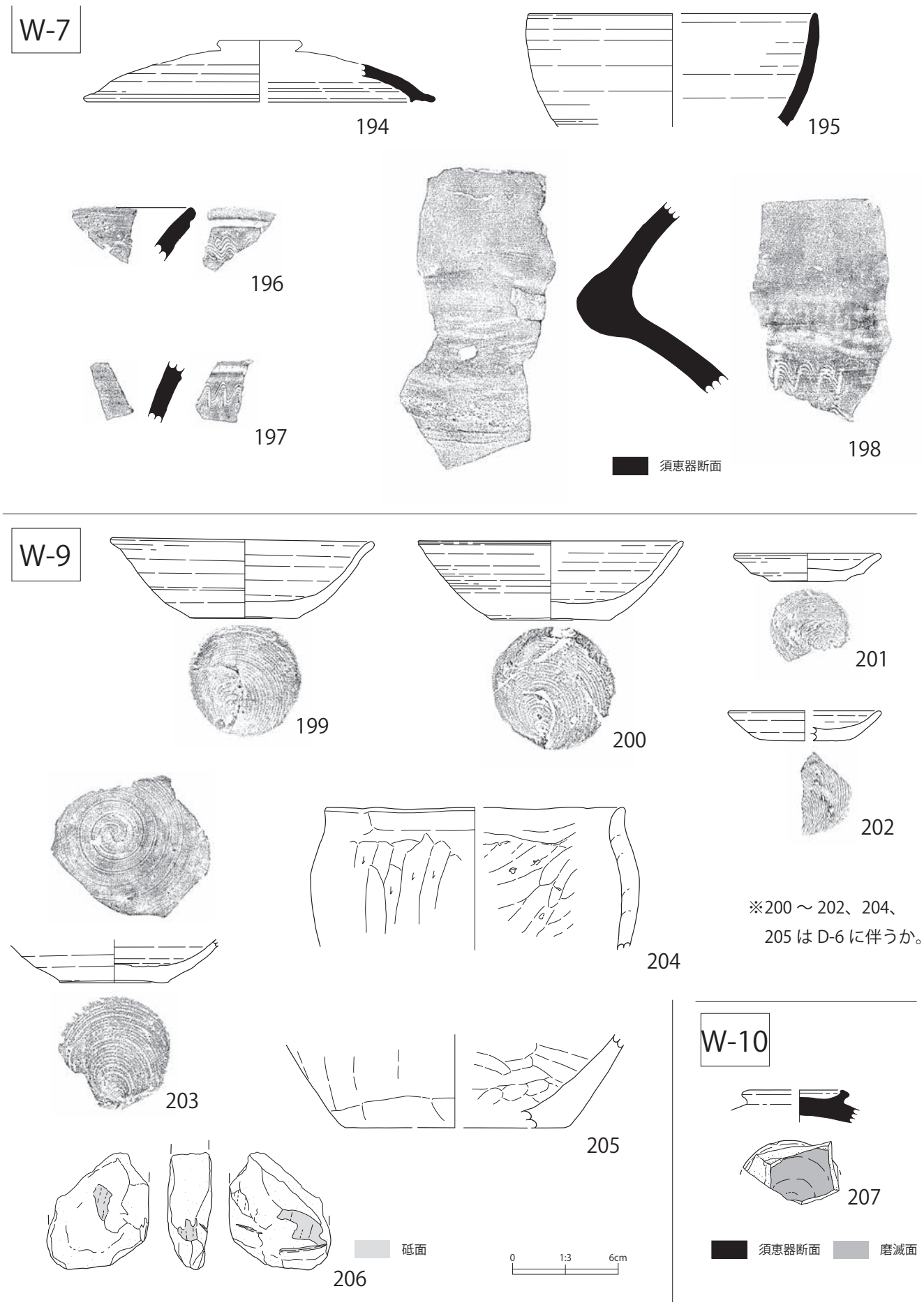


Fig.30　出土遺物（14）

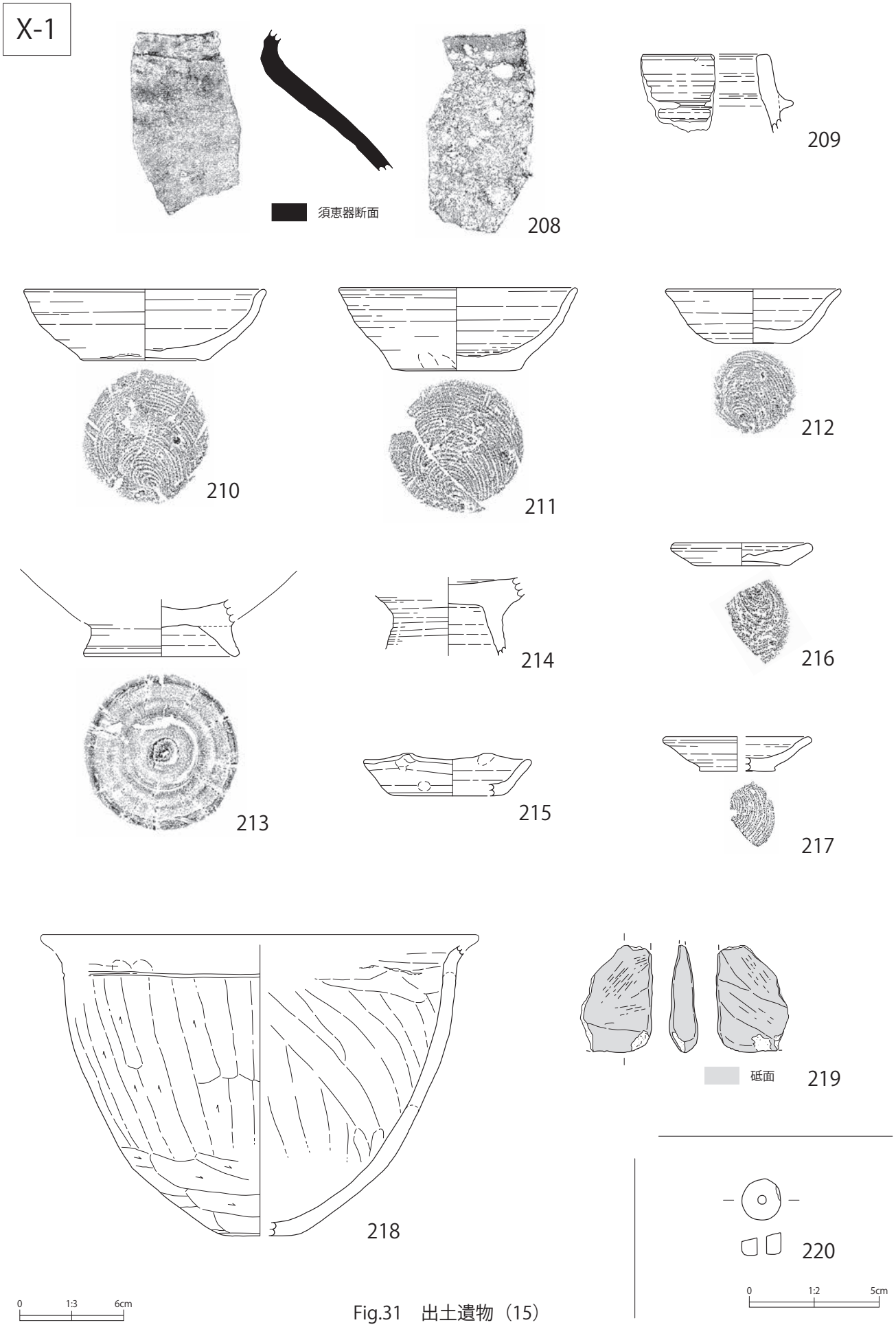


Fig.31　出土遺物（15）

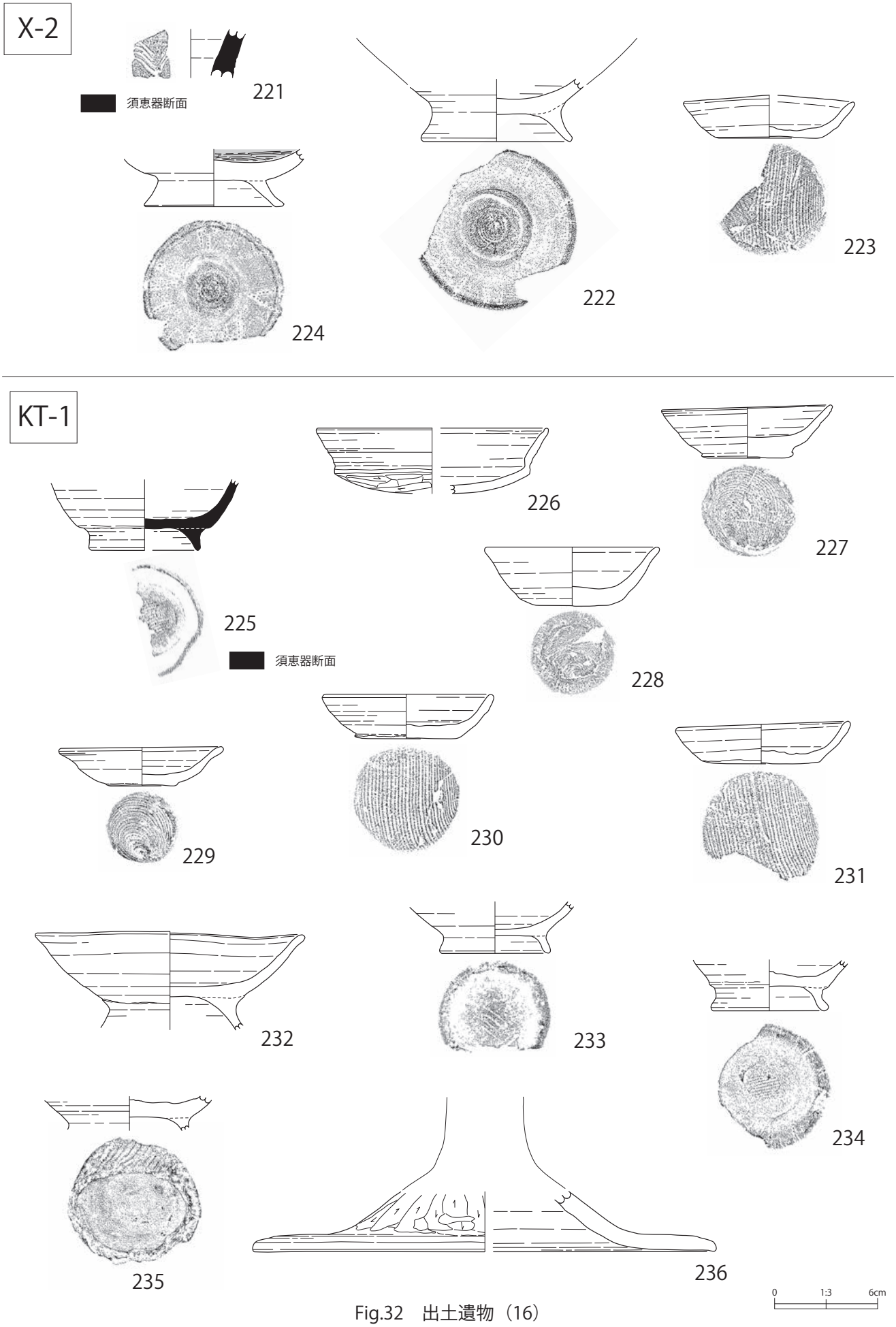
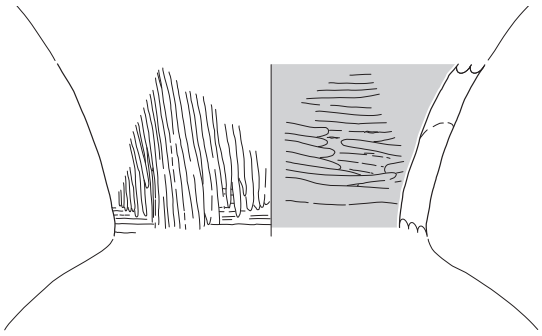


Fig.32　出土遺物（16）



黒色処理

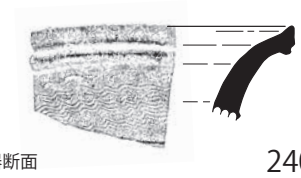
237

I-2

238

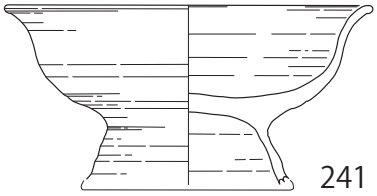
239

A-2G



須恵器断面

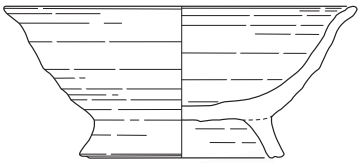
240

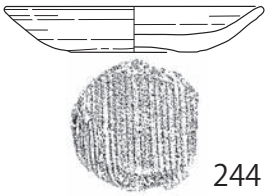


241

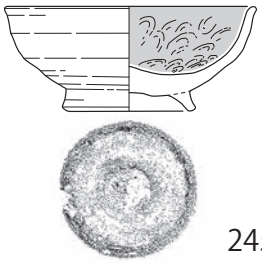
A-4G

242

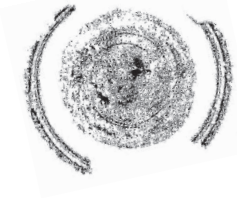




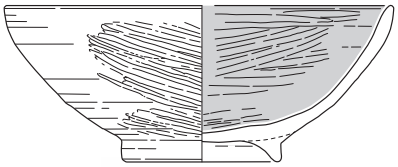
244

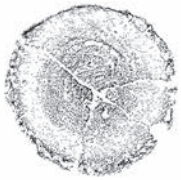


245

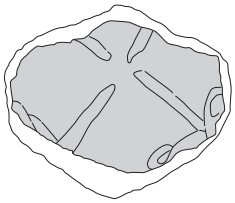


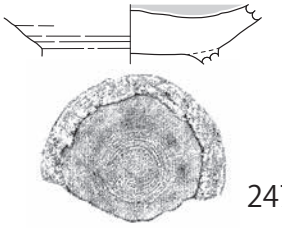
243





246

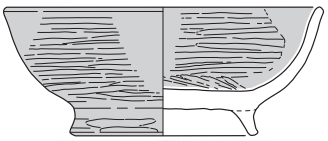


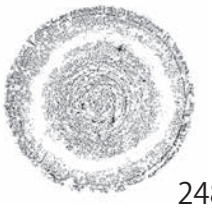


247

黒色処理

A-5G





黒色処理

248

Fig.33　出土遺物（17）

0　1:3　6cm

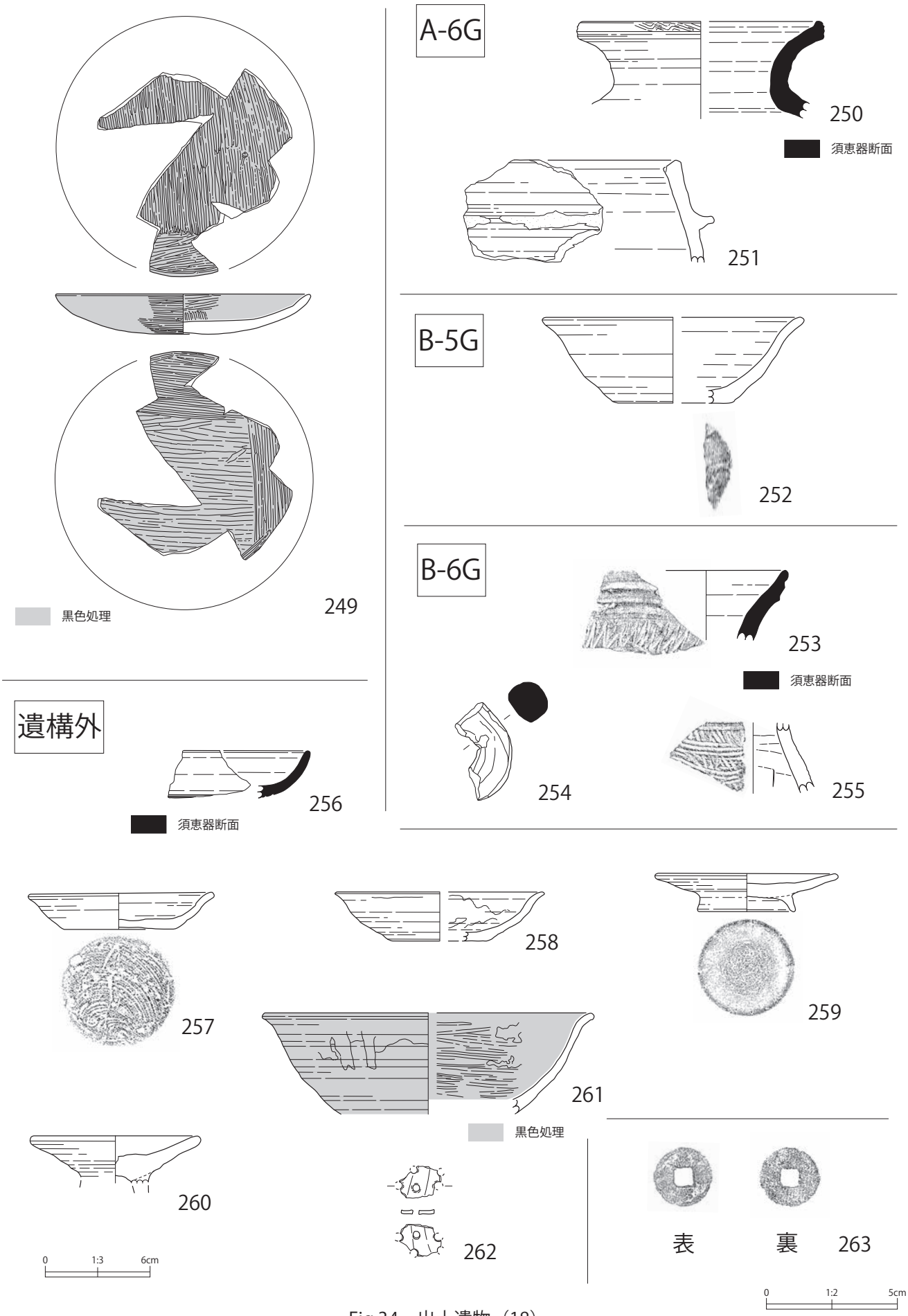


Fig.34　出土遺物（18）

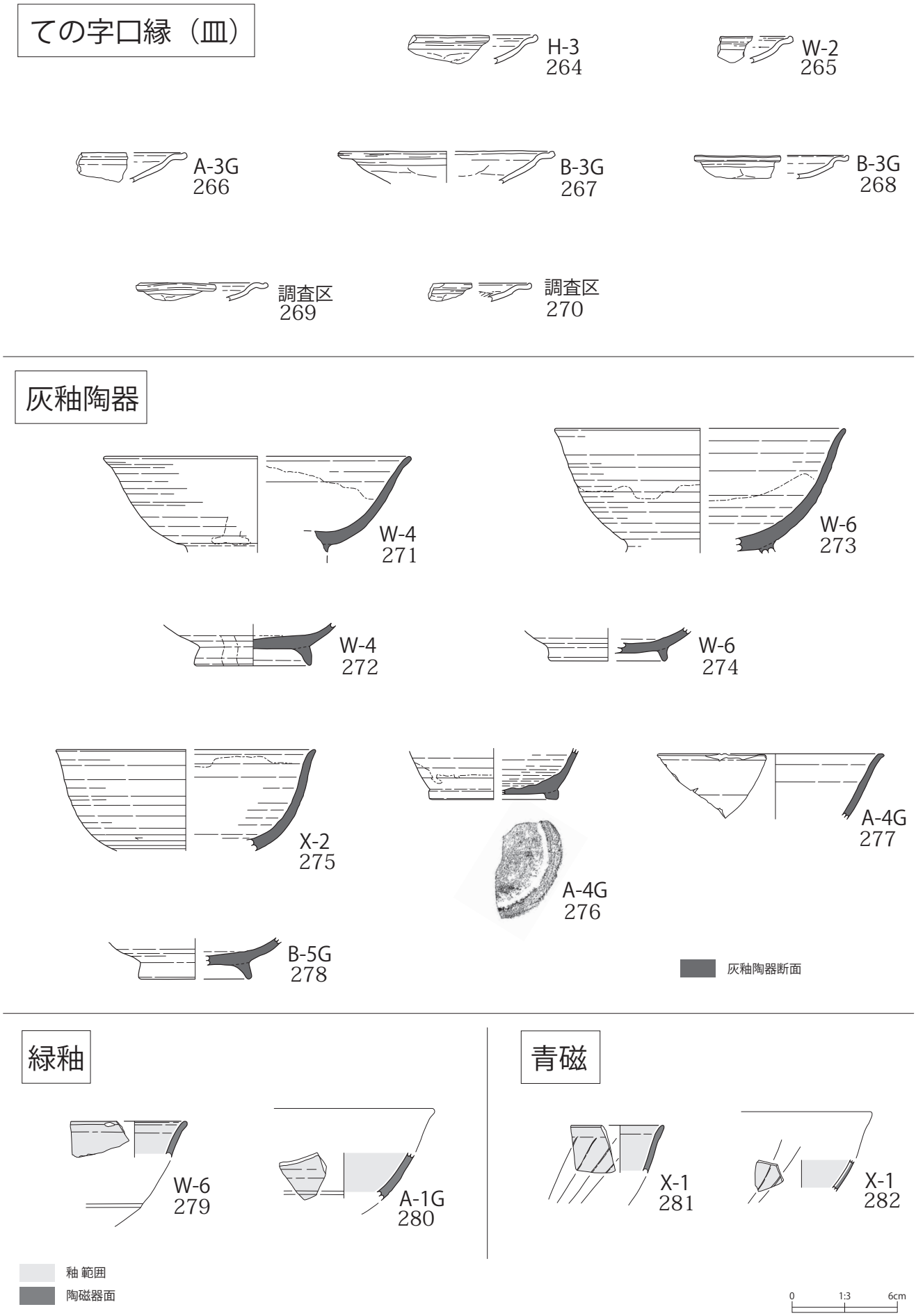
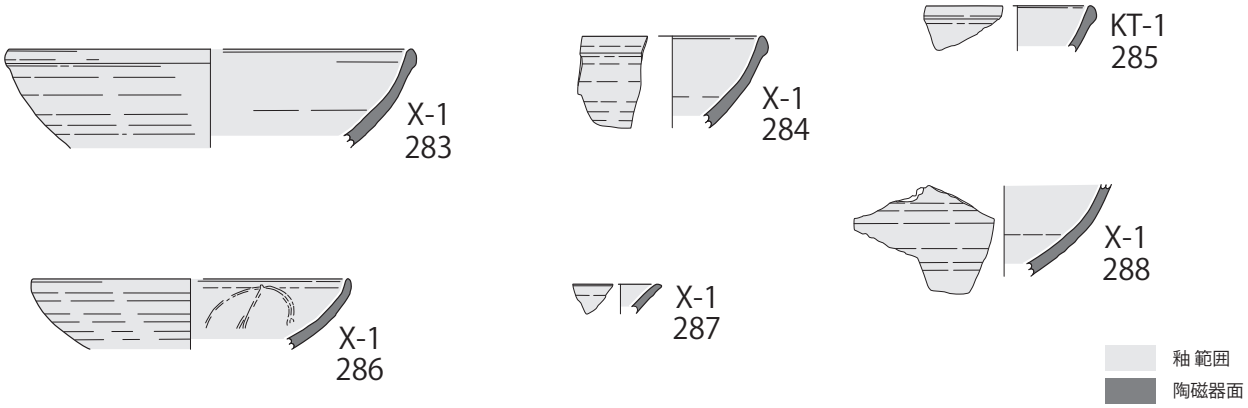


Fig.35　出土遺物（19）

白磁



円盤

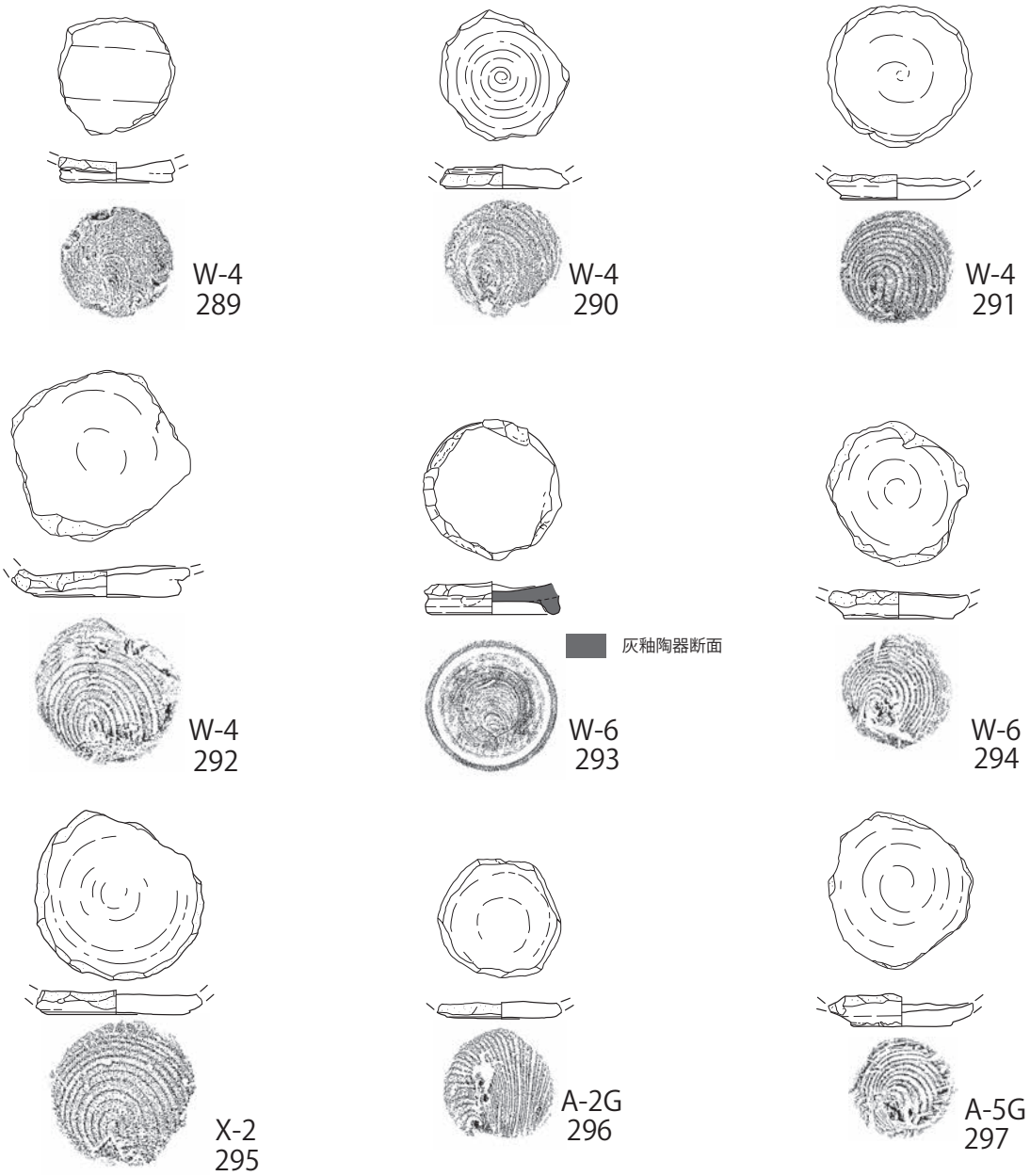


Fig.36　出土遺物（20）

0　1:3　6cm

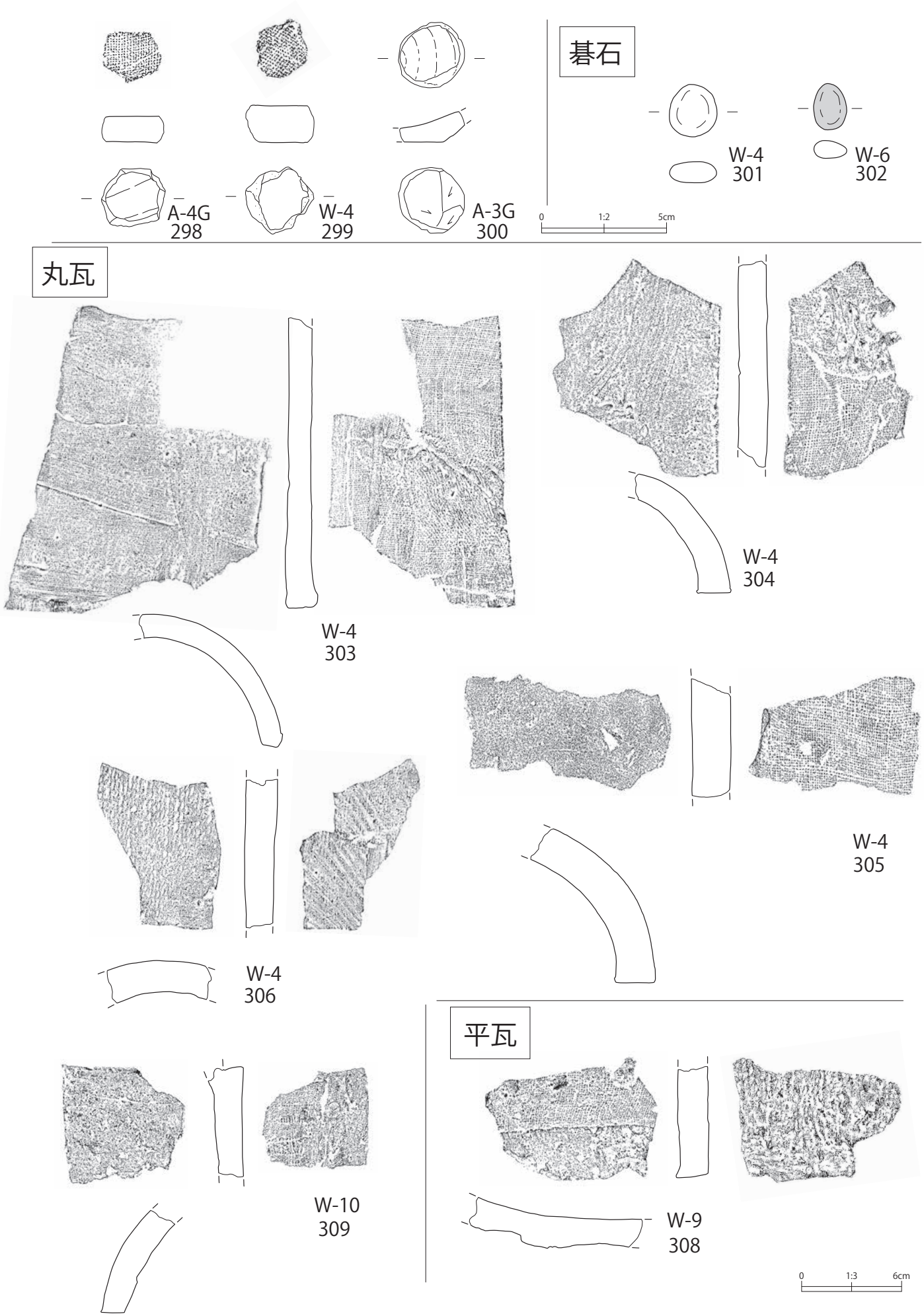


Fig.37　出土遺物（21）

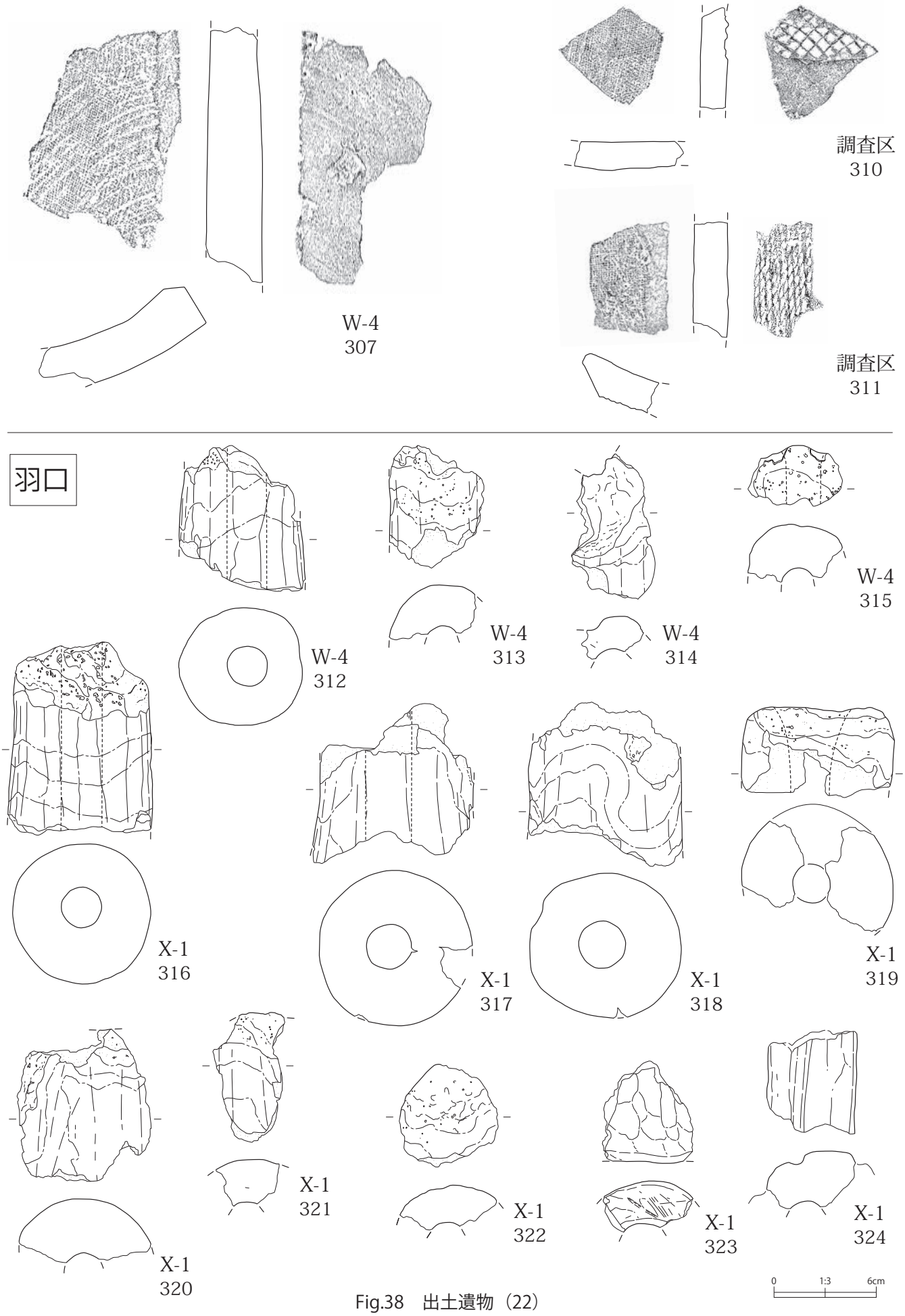


Fig.38　出土遺物（22）

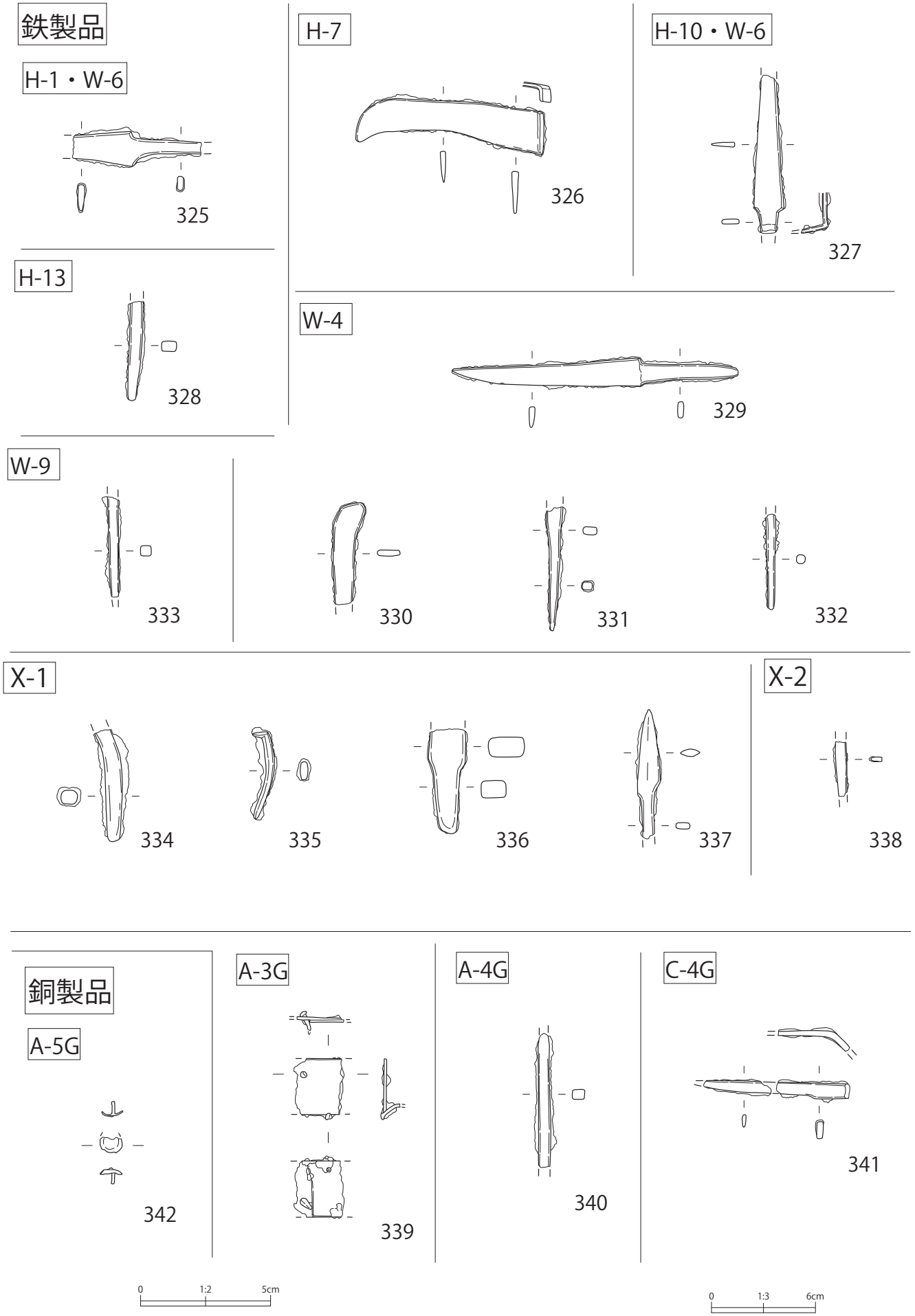


Fig.39　出土遺物（23）

Tab. 8　出土遺物観察表

掲載No.	遺構	遺物内容			法量			胎土	焼成	色調	調整・特徴	備考
		種別／器種	部位	残存	口径	器高	底径					
1	H-1	土師器 坏	口縁～底部	1/4	(11.8)	<3.6>	—	白.黒粒 角閃石 雲母	普通	橙	外：口横ナデ　体～底ナデ後ヘラケズリ 内：口～体横ナデ　底ナデ	
2	H-1	土師器 坏	口縁～体部	破片	(11.0)	<2.5>	—	白.黒粒 石英	普通	橙	外：口横ナデ　体未調整　底ケズリ 内：口～体横ナデ　底ナデ	
3	H-1	土師器 坏	口縁～体部	破片	(12.0)	<3.8>	—	白.黒.褐粒	良	橙	外：口横ナデ　体ケズリ 内：口～体横ナデ　底ナデ	
4	H-1	土師器 甕	口縁～胴部	3/5	20.8	<13.1>	—	白粒 角閃石 石英	普通	にぶい黄橙	外：口横ナデ　胴ヘラケズリ 内：口横ナデ　胴ヘラナデ	
5	H-2	土師器 坏	口縁～体部	破片	(16.0)	<4.8>	—	白.褐粒	普通	橙	外：口横ナデ　体ヘラケズリ 内：口横ナデ　体ナデ	
6	H-2	土師器 鉢	口縁～胴部	破片	(14.8)	<4.9>	—	白.褐粒	普通	橙	外：口横ナデ　胴ケズリ 内：口横ナデ　胴ナデ	
7	H-3	土師器 坏	口縁～底部	1/4	(13.1)	<4.7>	—	白.黒粒 石英 雲母	普通	にぶい赤褐	外：口横ナデ　体ヘラケズリ 内：口横ナデ　体ミガキ	
8	H-3	土師器 坏	口縁～体部	破片	—	<4.7>	—	白.黒.褐粒 石英　礫	良	橙	外：口横ナデ　体ケズリ 内：口横ナデ　体ミガキ	
9	H-3	土師器 坏	口縁～体部	破片	—	2.4	—	白.黒粒	普通	橙	外：横ナデ　ヘラケズリ 内：横ナデ　ナデ	B-1（柱穴）
10	H-3	土師器 甕	口縁～頸部	破片	(17.2)	<6.2>	—	白.黒.褐粒 石英	普通	橙	外：口～頸横ナデ後ミガキ 内：口～頸横ナデ	
11	H-5	須恵器 高坏	脚部	破片	—	<6.6>	—	白.黒粒	還元	灰	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形 坏底ナデ	
12	H-5	土師器 坏	口縁～底部	破片	(11.6)	3.8	—	白.褐粒 雲母	普通	橙	外：口横ナデ　体ヘラケズリ 内：口～体横ナデ　体～底ヘラナデ	
13	H-5	土師器 坏	口縁～体部	破片	(11.2)	<3.4>	—	白粒 雲母	普通	にぶい赤褐	外：口横ナデ　体ヘラケズリ 内：口～体横ナデ　底ナデ	
14	H-6	土師器 甕	口縁～頸部	破片	(17.0)	<6.0>	—	白.黒.赤粒 雲母	普通	にぶい褐	外：口横ナデ　指頭圧痕　頸ヘラナデ 内：口横ナデ　頸ヘラナデ	
15	H-7	土師器 坏	口縁～底部	4/5	12.2	5.0	—	褐.黒粒 角閃石	普通	橙	外：口横ナデ　底ケズリ 内：口～体横ナデ　底ナデ　指頭圧痕	
16	H-7	土師器 坏	口縁～底部	1/4	(12.2)	<4.3>	—	白粒 角閃石 石英	普通	橙	外：口横ナデ　底ケズリ 内：口～体横ナデ　底ナデ	
17	H-7	土師器 坏	口縁～底部	破片	(11.7)	<4.0>	—	白.褐粒	普通	にぶい橙	外：口横ナデ　底ケズリ 内：口～体横ナデ　底ナデ	
18	H-7	土師器 坏	口縁～底部	破片	(12.9)	<3.8>	—	黒粒 礫　雲母	普通	にぶい橙	外：口横ナデ　体ナデ　底ケズリ 内：口～体横ナデ　底ナデ	
19	H-7	土師器 坏	口縁～体部	破片	—	<3.8>	—	褐.黒粒 角閃石	普通	黒褐	外：口横ナデ　底ヘラケズリ 内：口～体横ナデ	
20	H-7	土師器 坏	口縁～体部	破片	—	<2.7>	—	白.黒粒 石英	普通	黒	外：口横ナデ 内：口横ナデ	
21	H-7	土師器 甕	口縁～胴部	1/4	(22.2)	<35.2>	—	白.黒粒 雲母　石英 チャート　礫	普通	外：にぶい橙 内：にぶい褐	外：口横ナデ　胴ケズリ 内：口横ナデ　胴ヘラナデ後ナデ	
22	H-7	土師器 甕	口縁～胴部	2/5	(22.8)	<11.6>	—	白.黒粒 雲母　石英 角閃石　礫	普通	にぶい黄橙	外：口横ナデ　胴ケズリ 内：口横ナデ　胴ヘラナデ後ナデ 指頭圧痕	
23	H-7	土師器 甕	口縁～胴部	破片	(22.7)	<9.3>	—	白.黒粒 雲母　石英 角閃石　礫	普通	にぶい橙 ～にぶい褐	外：口横ナデ　胴ケズリ 内：口横ナデ　胴ヘラナデ後ナデ	
24	H-7	土師器 甕	口縁～胴部	破片	(20.6)	<9.7>	—	白.褐粒 雲母　石英 チャート　礫 片岩	普通	にぶい赤褐	外：口横ナデ　胴ヘラケズリ 内：口横ナデ　胴ヘラナデ後ナデ	
25	H-10	土師器 坏	口縁～底部	7/8	12.1	4.8	—	褐.黒粒 礫	良	橙	外：口横ナデ　体ナデ　底ケズリ後ナデ 内：口～体横ナデ　底ナデ	
26	H-10	土師器 坏	口縁～底部	1/4	(12.0)	<4.6>	—	褐粒 雲母	良	橙	外：口横ナデ　体ナデ　底ケズリ 内：口～体横ナデ　底ナデ	
27	H-10	土師器 小型壺	口縁～底部	1/2	(12.7)	17.7	5.3	白.黒.褐粒 石英 角閃石	普通	橙	外：口横ナデ　胴ナデ・ケズリ 底器面摩耗調整不明 内：口～胴上横ナデ　胴中～底ヘラナデ	
28	H-10	土師器 甕	口縁～底部	2/5	15.2	21.8	(5.7)	白.黒.褐粒 石英	普通	明赤褐	外：口横ナデ　胴ナデ・ケズリ　底ケズリ 内：口横ナデ後ミガキ　胴上ナデ 指頭圧痕　胴中～底ヘラナデ	
29	H-10	土師器 甕	口縁～胴部	破片	(18.8)	<11.8>	—	白.黒.褐粒 チャート	普通	にぶい黄橙	外：口横ナデ　胴ヘラケズリ 内：口横ナデ　胴ヘラナデ	
30	H-10	土師器 甕	口縁～頸部	破片	(20.4)	<7.1>	—	白.褐粒 雲母	良	橙	外：口横ナデ　胴ケズリ 内：口横ナデ　胴ヘラナデ	
31	H-11	土師器 坏	口縁～底部	ほぼ完形	12.8	6.1	—	白.黒.褐粒 石英	普通	橙	外：口横ナデ　底ケズリ後ナデ 内：ミガキ	
32	H-11	土師器 坏	口縁～底部	完形	12.5	4.8	—	白.黒.褐粒 雲母	良	橙	外：口横ナデ　体ナデ　底ケズリ 内：口～体横ナデ後ナデ　底ナデ	
33	H-11	土師器 坏	口縁～底部	7/8	12.2	5.0	—	白.黒.褐粒 雲母	良	橙	外：口横ナデ　底ケズリ 内：口～体横ナデ　底ヘラナデ後ナデ	
34	H-11	土師器 高坏	坏部	7/8	19.0	<7.1>	—	白.褐粒	普通	にぶい黄橙	外：口横ナデ　体ナデ・ケズリ　指頭圧痕 脚横ナデ 内：口横ナデ　体ケズリ　脚ナデ	
35	H-11	土師器 高坏	体～脚部	4/5	—	<9.7>	9.3	白.黒.褐粒 雲母	良	橙	外：口ナデ　坏～脚ケズリ　底横ナデ 内：口ナデ　体ミガキ 脚ヘラナデ後ナデ　底横ナデ	

掲載No.	遺構	遺物内容			法量			胎土	焼成	色調	調整・特徴	備考
		種別／器種	部位	残存	口径	器高	底径					
36	H-11	土師器 甕	口縁～胴部 胴～底部	3/5 2/3	(17.6)	<33.0>	7.0	白.黒.褐粒 雲母 チャート	普通	にぶい橙	外：口横ナデ　胴ヘラケズリ・ナデ 指頭圧痕 内：口横ナデ　胴～底ヘラナデ	図上復元
37	H-11	土師器 甕	口縁～胴部	4/5	15.0	<7.6>	—	白.黒粒 石英 角閃石　礫	良	にぶい黄橙	外：口横ナデ　指頭圧痕　胴ケズリ 内：口横ナデ　胴ヘラナデ	
38	H-11	土師器 甕	口縁～胴部	1/3	(17.0)	<7.3>	—	白.黒粒 石英 褐色粒　礫	普通	にぶい黄橙	外：口横ナデ後ナデ　胴ケズリ 内：口横ナデ　胴ヘラナデ	
39	H-11	土師器 小型壺	口縁～胴部	1/4	—	<16.5>	—	白.黒.褐粒 石英 角閃石	普通	明赤褐	外：口横ナデ　胴ナデ・ケズリ後ナデ 内：口横ナデ　胴ヘラナデ　指頭圧痕	図上復元
40	H-11	土師器 甑	胴～底部	1/4	—	<6.1>	(6.0)	白.黒粒 石英　礫	普通	にぶい橙	外：胴ケズリ　底ケズリ 内：胴ヘラナデ　底ナデ	
41	H-11	土師器 ミニチュア 甕	口縁～底部	1/2	(5.4)	3.5	2.7	白粒 石英	良	黒	外：ミガキ 内：ミガキ 内外面：黒色処理	

掲載No.	遺構	種別／器種	計測値／特徴等	備考
42	H-11	石製品 紡錘車	上径 4.7　下径 2.5　孔径 0.8　厚さ 2.0　重さ 62.9g　石材：滑石	
43	H-11	石製品 臼玉	径 0.6　孔径 0.2　厚さ 0.35　重さ 0.1g　石材：滑石	

掲載No.	遺構	遺物内容			法量			胎土	焼成	色調	調整・特徴	備考
		種別／器種	部位	残存	口径	器高	底径					
44	H-12	須恵器 蓋	鈕部	破片	鈕径 (4.9)	<1.5>	—	白.黒粒	還元	灰白～灰	外：ロクロ整形　天～体回転ヘラケズリ 内：ロクロ整形 鈕部貼付時周辺部回転ナデ	
45	H-12	土師器 坏	口縁～底部	2/3	(12.8)	4.3	—	白.褐粒 石英 角閃石	普通	明赤褐	外：口横ナデ　体ナデ　底ケズリ後ミガキ 内：口横ナデ　底ヘラナデ	
46	H-12	土師器 坏	口縁～底部	1/2	(13.3)	5.3	—	白.黒.褐粒 石英 角閃石	普通	明赤褐	外：口横ナデ　体～底ケズリ後ナデ 内：口～体横ナデ　底ヘラナデ	
47	H-12	土師器 坏	口縁～底部	1/3	(14.2)	<5.3>	—	白.黒.褐粒 礫 角閃石	普通	明赤褐	外：口横ナデ　体～底ケズリ後ナデ 内：口～体横ナデ　底ナデ	
48	H-12	土師器 坏	口縁～底部	1/4	(12.7)	<4.2>	—	白.褐粒 雲母	良	外：明赤褐 内：灰黄褐	外：口横ナデ　体～底ケズリ 内：口～体横ナデ　底ヘラナデ	
49	H-12	土師器 坏	口縁～底部	1/4	(12.4)	<4.1>	—	白.褐粒 石英	良	外：灰黄褐 内：黒	外：口横ナデ　体未調整　底ナデ後ケズリ 内：口～体横ナデ　底ナデ	
50	H-12	土師器 甕	口縁～頸部	破片	(23.0)	<8.1>	—	白.黒粒 角閃石 礫	普通	にぶい橙	外：口横ナデ　頸ナデ 内：口横ナデ　頸ナデ　指頭圧痕	
51	H-13	土師器 坏	口縁～体部	2/5	(11.8)	<4.4>	—	白.褐粒 雲母 角閃石	普通	橙	外：口横ナデ　体～底ケズリ 内：口～体横ナデ　底ナデ	
52	H-13	土師器 坏	口縁～体部	破片	(13.9)	<3.4>	—	白.褐粒 石英	普通	黒褐	外：口横ナデ　体～底ケズリ 内：口～体横ナデ　底ナデ	
53	H-13	土師器 甕	胴～底部	2/5	—	<8.5>	6.6	白粒 雲母　礫 チャート	普通	にぶい褐	外：胴～底ケズリ 内：胴～底ナデ	
54	H-14	土師器 坏	口縁部	破片	(13.8)	<2.7>	—	白.黒粒	普通	褐色粒	外：口横ナデ　体ケズリ 内：口～体横ナデ	
55	H-15	土師器 坏	口縁～体部	破片	(12.1)	<3.7>	—	白.褐粒 雲母	普通	明赤褐	外：口横ナデ　体上未調整　体中ヘラケズリ 内：口横ナデ　体ヘラナデ	
56	W-2	陶器 土瓶	体～底部	2/5	—	<2.3>	(6.3)	密	普通	外：黄灰 内：灰白	外：体ケズリ　底ナデ 内：ロクロ整形	
57	W-2	土師器 不明	—	破片	—	<6.6>	—	白.黒.褐粒	—	にぶい橙	外：ナデ・ケズリ・ナデ 内：ロクロ整形	円孔八方向？
58	W-4	須恵器 蓋	天～口縁部	2/5	(10.4)	2.3	鈕径 5.1	白.褐粒 雲母	酸化	橙	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形 鈕部貼付時周辺部回転ナデ	
59	W-4	須恵器 蓋	天～体部	1/4	—	<2.4>	鈕径 (3.3)	白.褐粒	還元	灰白	外：ロクロ整形　天右回転ヘラケズリ 内：ロクロ整形 鈕部貼付時周辺部回転ナデ	
60	W-4	須恵器 蓋	天～体部	破片	—	<1.8>	鈕径 4.5	白.黒.褐粒	還元	灰	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形 鈕部貼付時周辺部回転ナデ	
61	W-4	須恵器 坏	口縁～底部	ほぼ完形	14.9	4.7	6.0	白.褐粒 雲母	酸化	にぶい橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
62	W-4	須恵器 坏	口縁～底部	完形	14.0	4.1	6.6	白.黒.褐粒 雲母　礫	酸化	橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
63	W-4	須恵器 坏	口縁～体部	1/8	(14.6)	<3.5>	—	白.褐粒 雲母	酸化	橙	外：ロクロ整形　体下回転ヘラケズリ 内：ロクロ整形	
64	W-4	須恵器 高坏	脚部（中位）	2/5	—	<7.7>	—	白粒	還元	灰	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	
65	W-4	須恵器 甕	口縁部	破片	—	<5.5>	—	白.黒.褐粒	還元	暗灰	外：ロクロ整形　口唇刺突文　口波状文 内：ロクロ整形	
66	W-4	須恵器 陶臼	底部	1/2	—	<3.1>	6.8	白粒	還元	暗灰	外：ロクロ整形　底ヘラケズリ 内：ロクロ整形	

掲載No.	遺構	遺物内容			法量			胎土	焼成	色調	調整・特徴	備考
		種別／器種	部位	残存	口径	器高	底径					
67	W-4	須恵器 甕	胴～底部	1/4	—	<8.3>	(13.0)	白.黒粒	還元	灰	外：胴平行タタキ後下端ケズリ　底無調整 内：胴～底ナデ	
68	W-4	須恵器 円面硯	体～底部	破片	—	<2.3>	—	白粒	還元	褐灰	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形　自然釉付着	
69	W-4	須恵器 羽釜	口縁部	破片	—	<5.0>	—	白.黒.褐粒 雲母	酸化	にぶい褐	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	
70	W-4	土師器 鉢	口縁～体部	1/5	(19.0)	<7.8>	—	褐粒	普通	明褐	外：口横ナデ　胴ヘラケズリ 内：口～胴ヘラナデ	
71	W-4	土師質土器 鉢	口縁～底部	3/4	(13.1)	10.3	8.0	白.褐粒	普通	明褐灰	外：口横ナデ　胴ヘラケズリ・ヘラナデ 底ナデ 内：口横ナデ　胴～底ヘラナデ	
72	W-4	土師質土器 鉢	頸～体部	1/6	—	<5.8>	—	白粒 礫	普通	外：黒褐 内：黄灰	外：胴横ナデ・ナデ　指頭圧痕 内：胴横ナデ・ナデ	
73	W-4	土師器 甑	胴～底部	1/2	—	<5.4>	6.6	白.黒粒	普通	にぶい黄橙	外：胴ケズリ　底ケズリ 内：胴中ナデ　胴下～底ケズリ	
74	W-4	土師質土器 坏	口縁～底部	3/4	14.4	4.6	6.7	白.黒.褐粒	普通	にぶい黄橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	白色土器模倣土器
75	W-4	土師質土器 坏	口縁～底部	3/4	(16.2)	4.9	6.5	白.黒.褐粒 礫	普通	橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
76	W-4	土師質土器 坏	口縁～底部	2/5	(13.5)	4.0	6.4	白.黒.褐粒 角閃石 石英	普通	浅黄	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
77	W-4	土師質土器 坏	口縁～底部	1/2	(13.5)	3.6	6.3	白.黒.褐粒 角閃石	普通	にぶい黄橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
78	W-4	土師質土器 坏	口縁～底部	1/2	(13.3)	3.5	6.0	白粒 礫	普通	黒褐	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
79	W-4	土師質土器 坏	口縁～底部	1/2	12.0	3.2	6.0	白.褐粒 石英 黒色粒 角閃石	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
80	W-4	土師質土器 坏	口縁～底部	2/5	(13.1)	3.6	(7.1)	褐粒 石英	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底回転糸切 黒色液体のタレ 内：ロクロ整形	
81	W-4	土師質土器 坏	口縁～底部	1/3	(13.8)	4.0	(5.8)	白.黒.褐粒	普通	にぶい黄橙～ 黄灰	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
82	W-4	土師質土器 坏	口縁～底部	1/4	(13.7)	3.8	(7.0)	白.黒.褐粒 石英	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
83	W-4	土師質土器 坏	口縁～底部	1/8	(13.4)	3.9	(7.6)	白.褐粒	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底回転糸切 内：ロクロ整形	
84	W-4	土師質土器 坏	口縁～底部	1/5	(13.4)	4.2	(7.6)	白.褐粒	普通	橙	外：ロクロ整形　底回転糸切 内：ロクロ整形	
85	W-4	土師質土器 坏	口縁～底部	1/3	(13.6)	3.6	(6.4)	白.黒.褐粒	普通	にぶい黄橙	外：ロクロ整形　指頭圧痕 底右回転糸切 内：ロクロ整形	
86	W-4	土師質土器 椀	口縁～底部	2/5	(17.2)	8.1	(9.0)	白.褐粒	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底ナデ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	白色土器模倣土器
87	W-4	土師質土器 椀	口縁～底部	3/4	9.4	3.7	5.5	黒.褐粒	普通	にぶい黄橙	外：ロクロ整形　底ナデ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
88	W-4	土師質土器 椀	体～底部	1/2	—	<6.0>	—	白.黒.褐粒	普通	灰白～灰黄褐	外：ロクロ整形　体下ナデ　底回転ナデ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
89	W-4	土師質土器 椀	口縁～底部	2/5	(14.1)	<4.1>	—	白.褐粒	普通	にぶい黄橙	外：ロクロ整形　底回転ナデ 内：ロクロ整形　高台貼付時周辺部回転ナデ　黒色付着物	
90	W-4	土師質土器 椀	体～底部	3/5	—	<4.4>	(8.3)	白.黒.褐粒	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底糸切後周辺ナデ　ヘラキズ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	白色土器模倣土器 軟質
91	W-4	土師質土器 椀	体～底部	3/5	—	<3.4>	7.4	白.黒粒	普通	橙	外：ロクロ整形　体下ナデ　底回転ナデ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
92	W-4	土師質土器 椀	体～底部	2/5	—	<2.7>	5.9	白.黒.褐粒 角閃石	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底静止糸切 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
93	W-4	土師質土器 椀	体～底部	2/5	—	<2.7>	(7.9)	白.黒粒	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底ナデ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
94	W-4	土師質土器 椀	体～底部	3/5	—	<2.5>	4.9	白.黒.褐粒 角閃石	普通	橙	外：底回転ナデ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
95	W-4	土師質土器 椀	体～底部	2/5	—	<3.2>	7.5	白.褐粒 雲母　礫	普通	にぶい褐	外：ロクロ整形　底回転ナデ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
96	W-4	土師質土器 椀	体～底部	2/5	—	<2.7>	(7.0)	白.褐粒	普通	にぶい黄橙	外：底ナデ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
97	W-4	土師質土器 椀	体～底部	4/5	—	<1.5>	—	白.黒.褐粒	普通	にぶい橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切後ナデ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
98	W-4	土師質土器 椀	体～底部	1/2	—	<1.7>	(7.4)	白.褐粒 角閃石	普通	にぶい褐	外：ロクロナデ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	

掲載№	遺構	遺物内容			法量			胎土	焼成	色調	調整・特徴	備　　考
		種別／器種	部位	残存	口径	器高	底径					
99	W-4	土師質土器 埦	体～底部	1/4	―	<3.3>	(8.6)	白.黒.褐粒	普通	にぶい橙	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
100	W-4	土師質土器 皿	口縁～底部	1/2	9.0	2.1	4.7	白.褐粒 礫	普通	にぶい黄橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
101	W-4	土師質土器 皿	口縁～底部	9/10	8.6	1.7	5.2	白.黒.褐粒	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	白色土器模倣土器
102	W-4	土師質土器 皿	口縁～底部	4/5	9.0	2.2	5.6	白.黒粒 礫	普通	橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
103	W-4	土師質土器 皿	口縁～底部	3/4	9.9	2.4	5.4	白.黒.褐粒	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	白色土器模倣土器
104	W-4	土師質土器 皿	口縁～底部	完形	9.6	2.8	5.2	黒.褐粒 礫	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底静止かけ引き糸切り 内：ロクロ整形　底部に開裂　焼け歪み	白色土器模倣土器
105	W-4	土師質土器 皿	口縁～底部	3/4	8.5	2.5	4.5	白.黒.褐粒	普通	にぶい黄橙	外：ロクロ整形　底静止かけ引き糸切り 内：ロクロ整形	白色土器模倣土器
106	W-4	土師質土器 皿	口縁～底部	1/2	8.7	2.4	4.6	白.黒.褐粒	普通	にぶい橙	外：ロクロ整形　底静止かけ引き糸切り 内：ロクロ整形	
107	W-4	土師質土器 皿	口縁～底部	完形	8.7	2.2	6.0	黒.褐粒	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	白色土器模倣土器 軟質
108	W-4	土師質土器 皿	口縁～底部	3/4	8.7	2.0	5.3	白.黒.褐粒 石英	普通	浅黄	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
109	W-4	土師質土器 皿	口縁～底部	1/2	(8.8)	2.4	5.5	白.黒.褐粒	普通	浅黄	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
110	W-4	土師質土器 皿	口縁～底部	1/3	(9.3)	2.5	(5.4)	白.褐粒	普通	にぶい黄橙	外：ロクロ整形　底回転糸切 内：ロクロ整形	
111	W-4	土師質土器 皿	口縁～底部	1/2	(8.7)	2.2	5.3	黒.褐粒	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
112	W-4	土師質土器 皿	口縁～底部	1/7	(8.4)	2.0	(4.8)	白.褐粒	普通	素：浅黄橙 赤彩：赤	外：ロクロ整形　底回転糸切 内：ロクロ整形　赤色顔料付着	
113	W-4	土師質土器 皿	口縁～底部	3/4	8.1	2.1	5.1	白.褐粒	普通	にぶい黄橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
114	W-4	土師質土器 皿	口縁～底部	9/10	8.7	2.0	5.5	白.褐粒 雲母	普通	にぶい黄橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
115	W-4	土師質土器 皿	口縁～底部	完形	9.0	2.2	5.4	白.褐粒 石英　雲母	普通	黄灰	外：ロクロ整形　底回転糸切 内：ロクロ整形　黒色付着物	
116	W-4	土師質土器 皿	口縁～底部	4/5	8.7	2.5	5.0	黒.褐粒	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
117	W-4	土師質土器 皿	口縁～底部	3/4	8.9	1.8	4.8	白.黒.褐粒	普通	橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
118	W-4	土師質土器 皿	口縁～底部	ほぼ完形	8.8	2.0	4.8	白.黒.褐粒	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
119	W-4	土師質土器 皿	口縁～底部	3/4	8.7	2.0	5.4	白.黒.褐粒 角閃石	普通	橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
120	W-4	土師質土器 皿	口縁～底部	1/4	(9.6)	2.5	(5.6)	黒.褐粒	普通	灰白	外：ロクロ整形　底静止糸切 内：ロクロ整形	白色土器模倣土器
121	W-4	土師質土器 皿	口縁～底部	4/5	9.3	2.1	6.4	白.黒粒 礫	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	白色土器模倣土器
122	W-4	土師質土器 皿	口縁～底部	3/5	8.7	2.4	5.5	白.黒.褐粒	普通	外：橙 内：灰白	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
123	W-4	土師質土器 皿	口縁～底部	2/5	(9.8)	<3.0>	(5.3)	白.黒.褐粒 礫	普通	橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
124	W-4	土師質土器 皿	口縁～底部	4/5	9.4	2.8	5.5	白.黒.褐粒 礫	普通	にぶい黄橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形　煤付着	灯明皿
125	W-4	土師質土器 皿	口縁～底部	7/8	12.1	2.8	6.1	黒.褐粒	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底ナデ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	白色土器模倣土器
126	W-4	土師質土器 皿	口縁～底部	3/4	8.8	2.7	5.7	白.褐粒 雲母	普通	にぶい橙	外：ロクロ整形　底回転ナデ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
127	W-4	土師質土器 高坏	脚部（中位）	残	―	<6.9>	―	白.黒.褐粒 角閃石	普通	浅黄橙	外：ヘラケズリ 内：ケズリ・ナデ	白色土器模倣土器
128	W-4	土師質土器 高坏	脚部	4/5	―	<11.4>	―	白.黒.褐粒 礫	普通	にぶい橙	外：ヘラケズリ・ナデ 内：ナデ・ケズリ・ナデ	白色土器模倣土器
129	W-4	土師質土器 高坏	脚部	破片	―	<3.3>	(23.2)	白.黒粒 角閃石	普通	浅黄橙	外：裾ケズリ・横ナデ 内：裾ナデ・横ナデ	
130	W-4	土師質土器 高坏	接合部	破片	長さ <4.6>	幅 <7.1>	―	白.褐粒	普通	橙	外：ケズリ 内：ナデ	
131	W-4	黒色土器 埦	口縁～底部	3/5	13.2	6.0	6.9	白粒	普通	黒褐	外：ロクロ整形　体下～底ナデ 内：口～底ミガキ　黒色処理 高台貼付時周辺部回転ナデ	
132	W-4	土師質土器 埦	体～底部	4/5	―	2.7	7.8	白.黒.褐粒 石英	普通	外：橙 内：黒	外：ロクロ整形　底回転ナデ 内：底ミガキ　黒色処理 高台貼付時周辺部回転ナデ	

掲載№	遺構	種別／器種	計測値／特徴等	備　　考
133	W-4	石製品 臼玉	長さ 1.5　幅 1.35　孔径 0.25　厚さ 0.25　重さ 0.9g　石材：頁岩　未成品か	

掲載No.	遺構	遺物内容			法量			胎土	焼成	色調	調整・特徴	備考
		種別／器種	部位	残存	口径	器高	底径					
134	W-5	土師器 坏	口縁～体部	1/7	(13.5)	<3.6>	—	褐粒	普通	にぶい橙	外：口横ナデ　体ヘラケズリ 内：口横ナデ　体ナデ	
135	W-5	土師器 坏	口縁～体部	2/5	10.3	<3.0>	—	白.褐粒 礫	普通	橙	外：口横ナデ　体ケズリ 内：口～体横ナデ	
136	W-5	土師器 甕	口縁～胴部	1/4	(19.5)	<9.1>	—	白.褐粒 雲母 チャート	普通	にぶい褐	外：口横ナデ　胴ヘラケズリ 内：口横ナデ　頸～胴ヘラナデ	

掲載No.	遺構	種別／器種	計測値／特徴等	備考
137	W-5	石製品 臼玉	径 1.3　孔径 0.25　厚さ <5.5>　重さ 1.6g　石材：滑石	

掲載No.	遺構	遺物内容			法量			胎土	焼成	色調	調整・特徴	備考
		種別／器種	部位	残存	口径	器高	底径					
138	W-6	須恵器 蓋	天～体部	1/8	—	<2.7>	鈕径 (5.0)	白粒	還元	褐灰	外：ロクロ整形　天右回転ヘラケズリ　黒色付着物 内：ロクロ整形　鈕部貼付時周辺部回転ナデ	
139	W-6	須恵器 甕	口縁部	破片	—	<5.5>	—	白粒 礫	酸化	外：にぶい褐 内：にぶい橙	外：ロクロ整形　クシ描き波状文 内：ロクロ整形	
140	W-6	須恵器 甕	口縁部	破片	—	<2.7>	—	白.褐粒	還元	黄灰	外：ロクロ整形　波状文 内：ロクロ整形	
141	W-6	須恵器 甕	胴部	破片	—	<3.8>	—	白.黒粒	酸化	外：黄灰 内：にぶい橙	外：ロクロ整形　波状文 内：ロクロ整形	
142	W-6	須恵器 羽釜	口縁部	破片	—	<3.8>	—	白.黒粒	酸化	にぶい黄橙	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	
143	W-6	土師器 甕	口縁～胴部	2/5	(14.5)	<7.9>	—	白.黒.褐粒 礫	普通	明赤褐	外：口横ナデ　胴ナデ 内：口横ナデ　胴ナデ　指頭圧痕	
144	W-6	土師器 甕	口縁～胴部	破片	(21.2)	<6.5>	—	白.黒粒 石英　雲母 礫	普通	橙	外：口横ナデ　胴ケズリ 内：口横ナデ　胴ナデ	
145	W-6	埴輪 円筒	口縁部	破片	—	<3.5>	—	白粒 雲母	普通	明赤褐	外：横ナデ　縦ハケ　ヘラ記号 内：横ナデ　斜ハケ	
146	W-6	土師質土器 坏	口縁～底部	2/5	(10.3)	3.5	5.9	白.黒粒 角閃石 礫	普通	橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
147	W-6	土師質土器 坏	口縁～底部	3/4	9.7	3.3	4.8	白.黒粒 礫	普通	橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
148	W-6	土師質土器 坏	口縁～底部	3/5	9.3	3.2	5.2	白.黒粒 石英	普通	橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
149	W-6	土師質土器 坏	口縁～底部	2/5	(9.6)	3.5	(4.8)	白.黒.褐粒	普通	橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
150	W-6	土師質土器 坏	口縁～底部	1/5	(10.3)	3.1	(7.4)	白.黒.褐粒	普通	にぶい黄橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
151	W-6	土師質土器 坏	口縁～底部	破片	(13.6)	3.7	(9.0)	白.黒粒	普通	外：橙 内：灰褐	外：ロクロ整形　底右回転ヘラケズリ 内：ロクロ整形	
152	W-6	土師質土器 坏	口縁～底部	1/4	(14.0)	3.8	(7.0)	白.黒.褐粒	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底回転糸切 内：ロクロ整形	
153	W-6	土師質土器 坏	口縁～底部	1/4	(15.6)	3.7	(8.6)	白.褐粒	普通	橙	外：ロクロ整形　底静止糸切 内：ロクロ整形	
154	W-6	土師質土器 坏	口縁～底部	1/4	(13.4)	<3.4>	(7.4)	白.黒.褐粒	普通	にぶい黄橙	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	
155	W-6	土師質土器 埦	口縁～底部	2/5	(13.9)	5.0	(7.2)	白.黒.褐粒 雲母	普通	明赤褐	外：ロクロ整形　底回転ナデ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
156	W-6	土師質土器 埦	体～底部	1/2	—	<5.6>	(8.3)	白.黒.褐粒	普通	にぶい橙	外：ロクロ整形　底回転ナデ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
157	W-6	土師質土器 埦	口縁～底部	1/4	(10.4)	4.3	(5.8)	黒.褐粒	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底静止糸切 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	白色土器模倣土器
158	W-6	土師質土器 埦	口縁～底部	2/5	(11.4)	4.2	(6.4)	白.黒.褐粒 角閃石	普通	橙	外：ロクロ整形　底回転ナデ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
159	W-6	土師質土器 埦	体～底部	3/5	—	<3.7>	5.8	白.黒.褐粒 礫	普通	にぶい橙	外：ロクロ整形　底回転糸切 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
160	W-6	土師質土器 埦	体～底部	3/4	—	3.0	6.5	黒.褐粒 チャート	普通	にぶい黄橙	外：ロクロ整形　底静止糸切 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
161	W-6	土師質土器 埦	体～底部	2/5	—	<2.8>	7.6	白.褐粒 雲母	普通	橙	外：ロクロ整形　底回転糸切 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
162	W-6	土師質土器 埦	体～底部	2/5	—	<3.8>	7.6	白.黒.褐粒 雲母	普通	明赤褐	外：ロクロ整形　底回転ヘラ切り 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
163	W-6	土師質土器 埦	体～底部	2/5	—	<3.2>	(8.3)	白.褐粒	普通	橙	外：底回転ヘラ切り 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
164	W-6	土師質土器 埦	体～底部	2/5	—	<3.3>	(8.6)	白.黒.褐粒	普通	橙	外：ロクロ整形　底ナデ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	

掲載№	遺構	遺物内容			法量			胎土	焼成	色調	調整・特徴	備　　考
		種別／器種	部位	残存	口径	器高	底径					
165	W-6	土師質土器 埦	体～底部	3/4	―	<2.7>	(6.6)	黒.褐粒 石英	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底回転ナデ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	白色土器模倣土器
166	W-6	土師質土器 埦	体～底部	1/4	―	<3.3>	(8.4)	白.褐粒 雲母	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底ナデ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
167	W-6	土師質土器 埦	体～底部	2/5	―	<2.3>	6.0	黒.褐粒	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底ナデ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
168	W-6	土師質土器 埦	底部	残存	―	<3.1>	7.8	白.黒粒	普通	橙	外：底回転ナデ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
169	W-6	土師質土器 埦	体～底部	4/5	―	<2.3>	5.3	白.黒.褐粒	普通	橙	外：底回転ナデ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
170	W-6	土師質土器 皿	口縁～底部	ほぼ完形	8.2	1.9	4.5	白粒 角閃石	普通	にぶい黄橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切　器面摩耗 内：ロクロ整形	
171	W-6	土師質土器 皿	口縁～底部	2/5	(9.4)	2.2	(6.0)	白.黒.褐粒	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
172	W-6	土師質土器 皿	口縁～底部	3/4	8.8	1.9	5.1	白粒 雲母	普通	にぶい黄橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
173	W-6	土師質土器 皿	口縁～底部	完形	8.0	1.9	5.3	白.黒.褐粒	普通	にぶい橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
174	W-6	土師質土器 皿	口縁～底部	1/2	(8.6)	3.2	4.7	白粒 石英　礫	普通	橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
175	W-6	土師質土器 皿	口縁～底部	1/2	(9.6)	2.4	4.3	白.褐粒 雲母	普通	橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
176	W-6	土師質土器 皿	口縁～底部	2/3	9.0	2.1	6.0	白粒	普通	にぶい黄褐	外：ロクロ整形　底ナデ　回転糸切 内：ロクロ整形	
177	W-6	土師質土器 皿	口縁～底部	3/5	9.1	2.3	5.1	白.黒.褐粒 石英	普通	橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
178	W-6	土師質土器 皿	口縁～底部	2/5	8.8	2.2	5.0	白.褐粒 角閃石	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
179	W-6	土師質土器 皿	口縁～底部	1/4	(8.6)	1.9	(5.0)	白.黒.褐粒	普通	にぶい黄橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
180	W-6	土師質土器 皿	口縁～底部	4/5	8.7	1.8	5.4	白.黒.褐粒	普通	にぶい橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
181	W-6	土師質土器 皿	口縁～底部	1/3	(9.2)	2.1	(7.0)	白.黒.褐粒	普通	にぶい黄橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切　切り損ねあり　内：ロクロ整形	
182	W-6	土師質土器 皿	口縁～底部	1/4	(8.6)	2.4	(6.2)	白粒	普通	にぶい褐	外：ロクロ整形　底ヘラケズリ 内：ロクロ整形　口端部に粗朶状圧痕あり	
183	W-6	土師質土器 皿	口縁～底部	1/3	(9.5)	2.3	(5.8)	白.褐粒	普通	にぶい赤褐	外：ロクロ整形　底回転糸切 内：ロクロ整形	
184	W-6	土師質土器 皿	口縁～底部	2/5	(8.0)	1.8	(5.8)	白.黒.褐粒	普通	橙	外：ロクロ整形　底回転糸切 内：ロクロ整形	
185	W-6	黒色土器 埦	底部	破片	―	<1.4>	―	白.褐粒 雲母	普通	にぶい褐	外：底ナデ 内：ロクロ整形　高台貼付時周辺部回転ナデ　黒色処理	
186	W-6	土師質土器 高坏	脚部	1/2	―	<11.6>	―	白.褐粒	普通	浅黄橙	外：ヘラケズリ 内：ナデ　ケズリ	
187	W-6	土師質土器 不明	底部	1/2	―	<2.5>	―	黒.褐粒	普通	にぶい黄橙	器面荒れ調整不明	
188	W-6	黒色土器 埦	口縁～体部	1/6	(15.0)	<5.3>	―	白.黒粒 石英　雲母	普通	外：にぶい赤褐 内：黒	外：口ミガキ　体上中横ナデ 体下回転ヘラケズリ 内：ミガキ　黒色処理	
189	W-6	黒色土器 埦	体～底部	1/4	―	―	<3.8>	白.褐粒 石英　雲母	普通	灰褐	外：ロクロ整形　底ナデ 内：体ミガキ　高台貼付時周辺部回転ナデ 黒色処理	
190	W-6	黒色土器 埦	体～底部	3/5	―	<4.3>	7.8	白.黒粒 石英	普通	外：橙 内：黒	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：体ミガキ　高台貼付時周辺部回転ナデ 黒色処理	
191	W-6	黒色土器 埦	体～底部	4/5	―	<3.0>	7.6	白.黒.褐粒 石英	普通	外：橙 内：黒	外：ロクロ整形　底回転糸切 内：底ミガキ 高台貼付時周辺部回転ナデ　黒色処理	
192	W-6	黒色土器 埦	底部	残	―	<2.0>	5.0	白.黒粒 石英	普通	外：橙 内：黒	外：ロクロ整形　底回転糸切 内：底ミガキ　高台貼付時周辺部回転ナデ 黒色処理	
193	W-6	黒色土器 埦	体～底部	1/2	―	<2.9>	5.6	白.黒粒 石英	普通	外：橙 内：黒	外：ロクロ整形　底回転ナデ 内：体下～底ミガキ　高台貼付時周辺部回転ナデ　黒色処理	
194	W-7	須恵器 蓋	天～口縁部	破片	(19.2)	<2.1>	―	白粒 礫	還元	灰	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	
195	W-7	須恵器 鉢	口縁～体部	2/5	(16.2)	<6.4>	―	白.黒粒 礫	還元	灰	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	
196	W-7	須恵器 甕	口縁部	破片	―	<3.0>	―	白.黒粒	還元	灰	外：ロクロ整形　波状文 内：ロクロ整形	
197	W-7	須恵器 甕	口縁部	破片	―	<3.4>	―	白粒 チャート	還元	灰	外：ロクロ整形　波状文 内：ロクロ整形　自然釉付着	
198	W-7	須恵器 甕	頸部	破片	―	<10.8>	―	白.黒粒	還元	灰	外：ロクロ整形　波状文 内：ロクロ整形	
199	W-9	土師質土器 坏	口縁～底部	3/5	14.7	4.6	6.2	白.黒粒 石英	普通	にぶい黄褐	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	

掲載No.	遺構	遺物内容遺物内容			法量			胎土	焼成	色調	調整・特徴	備　　考
		種別／器種	部位	残存	口径	器高	底径					
200	W-9	土師質土器 坏	口縁～底部	2/3	(14.9)	4.5	6.7	白.褐粒	普通	灰褐	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
201	W-9	土師質土器 皿	口縁～底部	1/2	(8.0)	1.6	4.4	白.褐粒 石英	普通	にぶい橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
202	W-9	土師質土器 皿	口縁～底部	1/4	(8.4)	1.7	(5.0)	褐粒	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底回転糸切 内：ロクロ整形	
203	W-9	土師質土器 皿	体～底部	3/4	－	<2.4>	6.2	白.褐粒	普通	にぶい黄橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
204	W-9	土師器 鉢	口縁～体部	1/6	(16.6)	<8.0>	－	白.黒粒 石英　礫	普通	にぶい黄橙	外：口横ナデ　胴ケズリ 内：口横ナデ　胴ナデ	
205	W-9	土師器 甕	胴部～底部	1/5	－	<5.3>	(12.4)	白.黒.褐粒 礫	普通	外：明褐～明褐灰 内：橙	外：胴ナデ・ケズリ　底ナデ 内：胴ナデ　指頭圧痕	

掲載No.	遺構	種別／器種	計測値／特徴等	備　　考
206	W-9	石製品 砥石	長さ 6.6　幅 5.8　厚さ 2.5　62.7g　石材：砂岩	

掲載No.	遺構	遺物内容			法量			胎土	焼成	色調	調整・特徴	備　　考
		種別／器種	部位	残存	口径	器高	底径					
207	W-10	須恵器 蓋 (転用硯)	鈕部	破片	－	<1.8>	(4.7)	白.黒粒	還元	素：灰 釉：灰オリーブ	外：天回転ナデ 内：ロクロ成形　鈕部貼付時周辺部回転ナデ	調査時は H-9（住居） 坏蓋転用硯
208	X-1	須恵器 甕	頸～胴部	破片	－	<9.0>	－	白粒 礫	還元	黒	外：頸ロクロ整形　胴ナデ 内：器面摩耗調整不明	
209	X-1	須恵器 羽釜	口縁部	破片	－	<4.5>	－	白.黒.褐粒 礫	酸化	橙	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	
210	X-1	土師質土器 坏	口縁～底部	2/5	(13.8)	4.1	7.5	白.黒.褐粒 石英 角閃石	普通	にぶい橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
211	X-1	土師質土器 坏	口縁～底部	1/2	(13.5)	4.8	7.4	白.褐粒 石英　礫 角閃石	普通	橙	外：ロクロ整形　指頭圧痕 底右回転糸切 内：ロクロ整形	
212	X-1	土師質土器 坏	口縁～底部	3/4	9.9	3.1	4.2	白.黒.褐粒 石英	普通	橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
213	X-1	土師質土器 埦	底部	残	－	<3.2>	8.6	白.黒.褐粒	普通	橙	外：底回転ナデ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
214	X-1	土師質土器 高坏	底部	4/5	－	<4.5>	－	白.褐粒	普通	にぶい黄橙	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	白色土器模倣土器
215	X-1	土師質土器 皿	口縁～底部	1/5	(9.3)	2.5	(7.0)	白粒 礫 角閃石	普通	黒褐	外：ロクロ整形　底回転糸切後ナデ 内：ロクロ整形	
216	X-1	土師質土器 皿	口縁～底部	2/5	(7.6)	1.3	(5.5)	白.黒.褐粒 石英	普通	にぶい橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
217	X-1	土師質土器 皿	口縁～底部	2/5	(8.2)	2.0	(4.4)	白.黒.褐粒 角閃石	普通	にぶい橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
218	X-1	土師器 土釜（鉢）	頸～底部	1/4	－	<19.3>	(5.6)	白.褐粒 雲母	普通	明赤褐	外：口横ナデ　指頭圧痕　胴ヘラケズリ風ヘラナデ 内：口横ナデ　胴～底ヘラナデ	

掲載No.	遺構	種別／器種	計測値／特徴等	備　　考
219	X-1	石製品 砥石	長さ <6.2>　幅 <4.1> 厚さ 1.7　18.1 g　石材：FP	
220	X-1	石製品 臼玉	径 1.5　孔径 0.35　厚さ <0.8>　3.0 g 石材・滑石	

掲載No.	遺構	遺物内容			法量			胎土	焼成	色調	調整・特徴	備　　考
		種別／器種	部位	残存	口径	器高	底径					
221	X-2	須恵器 甕	口縁部	破片	－	<2.8>	－	白粒 礫　石英	還元	灰	外：ロクロ整形　波状文 内：ロクロ整形	
222	X-2	土師質土器 埦	体～底部	4/5	－	3.6	8.5	白.黒.褐粒 角閃石	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底ナデ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
223	X-2	土師質土器 皿	口縁～底部	2/5	(9.8)	2.5	6.2	白.黒粒	普通	灰白	外：ロクロ整形　底静止糸切 内：ロクロ整形	
224	X-2	黒色土器 埦	体～底部	4/5	－	<3.3>	8.0	白.黒.褐粒 角閃石 チャート	普通	外：にぶい黄橙 内：黒	外：ロクロ整形　底回転ナデ 内：底ミガキ　黒色処理 高台貼付時周辺部回転ナデ	
225	KT-1	須恵器 埦	体～底部	1/2	－	<4.1>	(6.2)	白.黒.褐粒 雲母 角閃石	酸化	橙～灰褐	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ　黒色付着物	
226	KT-1	土師器 坏	口縁～底部	2/5	(13.3)	<3.8>	－	白.褐粒 石英	普通	にぶい赤褐	外：口横ナデ　体～底ケズリ 内：口～体横ナデ　底ナデ	
227	KT-1	土師質土器 坏	口縁～底部	完形	9.8	3.1	5.3	白.黒.褐粒	普通	橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
228	KT-1	土師質土器 坏	口縁～底部	4/5	7.9	3.4	6.1	白.黒.褐粒 石英	普通	橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
229	KT-1	土師質土器 皿	口縁～底部	3/5	9.3	2.3	4.1	白.褐粒 雲母　礫	普通	橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	

掲載№	遺構	遺物内容			法量			胎土	焼成	色調	調整・特徴	備　　考
		種別／器種	部位	残存	口径	器高	底径					
230	KT-1	土師質土器 皿	口縁～底部	1/3	(9.6)	2.6	6.0	黒.褐粒	普通	灰白	外：ロクロ整形　底静止糸切 内：ロクロ整形	白色土器模倣土器
231	KT-1	土師質土器 皿	口縁～底部	2/3	9.8	2.5	6.9	黒.褐粒 角閃石	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底静止糸切 内：ロクロ整形	白色土器模倣土器
232	KT-1	土師質土器 埦	口縁～底部	5/6	15.4	<5.7>	―	黒.褐粒 角閃石	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底回転ナデ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	白色土器模倣土器
233	KT-1	土師質土器 埦	体～底部	3/4	―	<3.0>	6.2	黒.褐粒 角閃石	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底回転ナデ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
234	KT-1	土師質土器 埦	体～底部	2/5	―	<2.9>	6.4	黒.褐粒 礫	普通	灰白	外：ロクロ整形　底静止糸切 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
235	KT-1	土師質土器 埦	体～底部	4/5	―	<2.1>	―	白.黒.褐粒	普通	灰白～褐灰	外：ロクロ整形　底静止糸切 内：ロクロ整形　高台貼付時周辺部回転ナデ	
236	KT-1	土師質土器 高坏	底部	1/4	―	<3.5>	(26.9)	白.黒.褐粒 角閃石 石英	普通	にぶい橙	外：脚下横ナデ後ヘラケズリ　底横ナデ 指頭圧痕 内：脚下回転ヘラケズリ　底横ナデ	
237	KT-1	土師器 長頸壺	口縁～頸部	破片	―	<6.8>	―	白.褐粒	普通	灰黄褐	外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ　黒色処理	
238	I-2	土師質土器 坏	体～底部	2/5	―	<4.0>	6.8	白粒 礫	普通	灰褐	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
239	I-2	土師質土器 皿	体～底部	1/2	―	<1.5>	(3.6)	白.黒.褐粒 角閃石 チャート	普通	橙	外：ロクロ整形　底回転ナデ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
240	A-2G	須恵器 甕	口縁部	破片	―	<3.7>	―	白粒	還元	灰	外：ロクロ整形　波状文 内：ロクロ整形	
241	A-2G	土師質土器 埦	口縁～底部	3/5	(14.2)	<7.1>	―	白.黒.褐粒	普通	にぶい黄橙	外：ロクロ整形　底ナデ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	白色土器模倣土器
242	A-4G	土師器 甕か	口縁部	破片	―	<2.3>	―	白.褐粒 角閃石	普通	橙	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	
243	A-4G	土師質土器 埦	口縁～底部	2/5	13.7	6.0	7.2	白.黒.褐粒 礫	普通	橙	外：ロクロ整形　底回転ナデ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
244	A-4G	土師質土器 皿	口縁～底部	2/5	(10.1)	1.8	5.0	黒.褐粒	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底静止糸切 内：ロクロ整形	白色土器模倣土器
245	A-4G	黒色土器 埦	口縁～底部	2/5	(9.8)	4.1	4.8	白.褐粒 石英 角閃石	普通	外：橙 内：黒	外：ロクロ整形　底回転ナデ 内：口～底ミガキ　黒色処理 高台貼付時周辺部回転ナデ	
246	A-4G	黒色土器 埦	口縁～底部	1/2	(15.2)	6.2	6.0	白.黒.褐粒 角閃石	普通	外：橙 内：黒	外：口～体ミガキ　底回転糸切 内：口～底ミガキ　黒色処理 高台貼付時周辺部回転ナデ	
247	A-4G	黒色土器 埦	体～底部	3/4	―	<2.3>	―	白.褐粒 石英 角閃石	普通	外：橙 内：黒	外：体中ロクロ整形　体下ナデ 　　底回転ナデ 内：底ミガキ　黒色処理 高台貼付時周辺部回転ナデ	
248	A-5G	黒色土器 埦	口縁～底部	1/2	(12.4)	5.1	7.0	白.黒粒 石英	普通	外：黒褐 内：黒	外：口～体ミガキ　底回転ナデ 内：底ミガキ 高台貼付時周辺部回転ナデ 内外面：黒色処理	
249	A-5G	黒色土器 皿	口縁～底部	2/5	(14.4)	2.3	4.0	白粒 石英	普通	黒	外：ミガキ 内：ミガキ 内外面：黒色処理	
250	A-6G	須恵器 横瓶	口縁～頸部	2/5	(13.4)	<5.5>	―	白.黒粒	還元	灰	外：ロクロ整形　口唇波状文 内：ロクロ整形	
251	A-6G	須恵器 羽釜	口縁部	破片	―	<5.9>	―	白.褐粒	還元	黒褐	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	
252	B-5G	土師質土器 坏	口縁～底部	1/4	(14.5)	5.0	(7.0)	白.黒.褐粒	普通	にぶい橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
253	B-6G	須恵器 壺	口縁部	破片	―	<4.0>	―	白粒	還元	灰	外：ロクロ整形　波状文 内：ロクロ整形	
254	B-6G	須恵器 壺	把手	破片	長さ <5.6>	幅 <3.3>	厚さ 2.2	白粒	還元	灰	外：ナデ	
255	B-6G	土師器 不明	胴部	破片	―	<4.0>	―	白.黒.褐粒	普通	にぶい橙	内：胴上横ナデ　胴中ヘラナデ	
256	西壁	須恵器 盤	口縁～体部	破片	―	<2.7>	―	白.黒粒	還元	黄灰	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	
257	西壁	土師質土器 皿	口縁～底部	ほぼ完形	10.4	2.1	6.3	白.褐粒 礫　雲母 チャート	普通	橙	外：ロクロ整形　底右回転糸切 内：ロクロ整形	
258	調査区 南西	土師質土器 皿	口縁～底部	破片	(11.6)	2.8	(5.0)	白.黒粒	普通	浅黄	外：ロクロ整形　煤付着　底回転糸切 内：ロクロ整形　煤付着	
259	調査区 北西	土師質土器 皿	口縁～底部	1/2	(10.1)	2.2	5.4	黒.褐粒	普通	浅黄橙	外：ロクロ整形　底ナデ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	白色土器模倣土器
260	西壁	土師質 埦	口縁～底部	2/5	(9.2)	<2.8>	―	白.褐粒 雲母	普通	にぶい褐	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
261	調査区 南東	黒色土器 坏類	口縁～体部	破片	(18.7)	<5.8>	―	白粒 角閃石	普通	外：灰黄褐 内：黒	外：ロクロ整形　黒色液体付着 内：ミガキ　黒色被膜	
262	調査区 一括	土師器か	不明	破片	長さ <1.8>	幅 2.4	厚さ 0.2	白粒 石英	良	明赤褐	孔径 0.4	

掲載№	遺構	種別／器種	計測値／特徴等	備　　考
263	調査区一括	古銭	径 2.3　孔径 0.7　ひどく摩耗。不鮮明。	

掲載№	遺構	遺物内容			法量			胎土	焼成	色調	調整・特徴	備　　考
		種別／器種	部位	残存	口径	器高	底径					
264	H-3	土師器「て」の字状口縁皿	口縁部	破片	—	<1.7>	—	白.褐粒	普通	橙	外：口横ナデ　体ナデ 内：口～体横ナデ	
265	W-2	土師器「て」の字状口縁皿	口縁部	破片	—	<1.5>	—	白粒 礫	普通	橙	外：口横ナデ　体ナデ 内：口横ナデ	
266	A-3G	土師器「て」の字状口縁皿	口縁部	破片	—	<1.7>	—	白.褐粒 雲母	普通	橙	外：口横ナデ　体ナデ 内：口横ナデ　体ナデ	
267	B-3G	土師器「て」の字状口縁皿	口縁部	破片	(12.1)	<1.8>	—	白.褐粒 雲母	普通	橙	外：口横ナデ　体ナデ 内：口横ナデ　体ナデ	
268	B-3G	土師器「て」の字状口縁皿	口縁部	破片	—	<1.3>	—	白.褐粒	普通	橙	外：口横ナデ　体ナデ 内：口～体上横ナデ　体中ナデ	
269	調査区	土師器「て」の字状口縁皿	口縁部	破片	—	<1.0>	—	白.黒.褐粒	普通	橙	外：口横ナデ　体ナデ 内：口横ナデ　体ナデ	
270	調査区	土師器「て」の字状口縁皿	口縁部	破片	—	<1.0>	—	白.黒.褐粒	普通	にぶい黄橙	外：口横ナデ　体ナデ 内：口～体上横ナデ　体中ハケ	
271	W-4	灰釉陶器 埦	口縁～底部	1/8	(17.2)	<5.5>	—	白粒	普通	素：灰白 釉：灰白	外：ロクロ整形　釉 内：ロクロ整形　釉 高台貼付時周辺部回転ナデ	
272	W-4	灰釉陶器 埦	体～底部	1/2	—	2.4	6.5	白粒	普通	素：灰 釉：灰オリーブ	外：ロクロ整形　釉 内：ロクロ整形　釉 高台貼付時周辺部回転ナデ	
273	W-6	灰釉陶器 埦	口縁～底部	1/4	(16.4)	<7.1>	—	白.褐粒	普通	素：白 釉：灰オリーブ	外：ロクロ整形　釉　底回転糸切 内：ロクロ整形　釉 高台貼付時周辺部回転ナデ	
274	W-6	灰釉陶器 埦	体～底部	1/4	—	<1.9>	(6.5)	白粒	普通	灰白	外：ロクロ整形　底回転ナデ 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	
275	X-2	灰釉陶器 埦	口縁～体部	1/4	(14.6)	<5.7>	—	白粒	普通	素：灰白 釉：白	外：口～体中ロクロ整形 体下回転ヘラケズリ 内：ロクロ整形　釉	
276	W-6	灰釉陶器 壺	体～底部	1/5	—	<2.9>	(7.2)	白.褐粒	普通	素：褐灰 釉：灰黄褐	外：ロクロ整形　釉 内：ロクロ整形　釉 高台貼付時周辺部回転ナデ	
277	A-4G	灰釉陶器 埦	口縁～体部	破片	—	<3.7>	—	白粒	普通	素：灰白 釉：暗赤　明褐	外：ロクロ整形　釉 内：ロクロ整形　釉	火を受けている
278	B-5G	灰釉陶器 埦	体～底部	1/2	—	<2.8>	(6.2)	白粒	普通	灰白	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形 高台貼付時周辺部回転ナデ	内面平滑転用硯？
279	W-6	緑釉陶器 埦	口縁部	破片	—	<2.1>	—	やや密	普通	素：にぶい黄橙 釉：暗オリーブ	外：ロクロ整形　釉 内：ロクロ整形　釉	№282と同一
280	A-1G	緑釉陶器 埦	体部	破片	—	<2.7>	—	やや密	普通	素：淡黄 釉：オリーブ灰	外：ロクロ整形　釉 内：ロクロ整形　釉	№281と同一
281	X-1	青磁 埦	口縁部	破片	—	<2.7>	—	密	普通	素：灰白 釉：灰白	外：釉 内：釉	№283と同一
282	X-1	青磁 埦	体部	破片	—	<1.8>	—	密	普通	灰黄	外：釉 内：釉	№281と同一
283	X-1	白磁 埦	口縁～体部	破片	(18.4)	<3.9>	—	密	普通	素：灰白 釉：灰白	外：ロクロ整形　釉 内：ロクロ整形　釉	
284	X-1	白磁 埦	口縁～体部	破片	—	<3.6>	—	密	普通	素：灰白 釉：灰白	外：ロクロ整形　釉 内：ロクロ整形　釉	№283と同一
285	KT-1	白磁 埦	口縁部	破片	—	<1.8>	—	密	普通	素：灰白 釉：灰白	外：ロクロ整形　釉 内：ロクロ整形　釉	№283と同一
286	X-1	白磁 埦	口縁～体部	破片	(12.5)	<2.5>	—	密	普通	素：灰白 釉：灰白	外：ロクロ整形　釉 内：ロクロ整形　釉	
287	X-1	白磁 埦	口縁部	破片	—	<1.2>	—	密	普通	素：灰白 釉：灰白	外：釉 内：釉	
288	X-1	白磁 埦	体部	破片	—	<4.3>	—	密	普通	素：灰白 釉：灰白	外：釉 内：釉	

掲載№	遺構	種別／器種	残存	法量				胎土	色調	調整・特徴	備　　考
				長さ	幅	厚さ	重さ				
289	W-4	土器片製 円盤	—	4.9	4.9	1.1	20.7	白.黒粒	橙	外：ロクロ整形 底ナデ　右回転糸切 内：ロクロ整形 酸化焼成の須恵器転用	
290	W-4	土器片製 円盤	—	5.5	5.4	1.0	25.3	白.黒粒	橙	外：ロクロ整形 底ナデ　右回転糸切 内：ロクロ整形 土師質土器皿転用	
291	W-4	土器片製 円盤	—	6.0	6.0	1.1	29.6	白.褐粒	にぶい橙	外：ロクロ整形 底ナデ　右回転糸切 内：ロクロ整形 土師質土器皿転用	
292	W-4	土器片製 円盤	—	7.2	7.5	1.4	48.1	白.黒.褐粒	内：にぶい橙 外：褐灰	外：ロクロ整形 底ナデ　右回転糸切り 内：ロクロ整形 土師質土器皿転用	

掲載No.	遺構	種別／器種	残存	法量				胎土	色調	調整・特徴	備考
				長さ	幅	厚さ	重さ				
293	W-6	土器片製円盤	--	5.9	5.8	1.4	43.2	白.褐粒	素：灰白 釉：オリーブ灰	外：ロクロ整形 底右回転糸切 内：ロクロ整形 釉 灰釉埦転用　高台貼付時周辺部回転ナデ	
294	W-6	土器片製円盤	--	6.1	6.0	1.2	33.3	白.褐粒 角閃石 チャート	にぶい橙	外：底ナデ　右回転糸切り 内：ロクロ整形 土師質土器皿転用	
295	X-2	土器片製円盤	--	7.0	7.1	1.1	50.7	白.黒粒	灰白	外：底ナデ　右回転糸切 内：ロクロ整形 土師質土器皿転用	
296	A-2G	土器片製円盤	--	5.0	5.2	0.7	20.6	黒.褐粒	浅黄橙	外：ナデ　回転糸切 底静止かけ引き糸切り 内：ロクロ整形 土師質土器底部転用	
297	A-5G	土器片製円盤	--	6.6	6.1	1.4	30.7	黒.褐粒	灰白	外：底ナデ　右回転糸切り 内：ロクロ整形 土師質土器皿転用	
298	A-4G	土器片製円盤	--	2.3	2.5	1.05	8.9	白.黒粒	灰白	布目痕　ナデ 瓦転用	
299	W-4	土器片製円盤	--	2.7	2.8	1.5	11.4	白.黒粒	灰	布目痕　ナデ 瓦転用	
300	A-3G	土器片製円盤	--	2.6	2.6	0.9	0.9	白.褐粒 石英	外：にぶい橙 内：褐灰	外：ケズリ 内：ナデ 土師質土器底部転用	

掲載No.	遺構	種別／器種	計測値／特徴等	備考
301	W-4	石製品 碁石（白）	長さ 2.1　幅 1.9　厚さ 0.85　重さ 5.3g	
302	W-6	石製品 碁石（黒）	長さ 1.85　幅 1.3　厚さ 0.7　重さ 2.8g	

掲載No.	遺構	種別／器種	残存	法量				胎土	焼成	色調	調整・特徴	備考
				長さ	幅	厚さ	重さ					
303	W-4	瓦 丸瓦	破片	<17.5>	<8.6>	1.9	411.3	白.黒.褐粒	還元	灰白～褐灰	外：縄タタキ後ナデ 内：布目	
304	W-4	瓦 丸瓦	破片	<12.3>	<5.6>	1.9	264.9	白.黒.褐粒 .礫	やや酸化	黄灰	外：平行タタキ後ナデ 内：布目	
305	W-4	瓦 丸瓦	破片	<7.1>	<7.5>	2.3	277.4	白.黒粒.石英	酸化	褐灰	外：ナデ 内：布目	
306	W-4	瓦 丸瓦	破片	<9.0>	<6.3>	2.0	168.2	白.黒粒.礫	還元	灰	外：縄タタキ後ナデ 内：布目　糸切り痕	
307	W-4	瓦 平瓦	破片	<15.0>	<9.0>	3.0	463.8	白.黒粒.チャート.石英	酸化	灰褐～橙	外：布目　内：平行タタキ	
308	W-9	瓦 平瓦	破片	<6.7>	<10.4>	1.9	169.0	黒粒	還元	灰白	外：布目　内：縄タタキ	
309	W-10	瓦 丸瓦	破片	<6.6>	<4.4>	1.8	133.1	白粒.礫	還元	灰	外：ナデ　内：布目　玉縁式	
310	調査区	瓦 平瓦	破片	<6.0>	<6.4>	1.6	73.0	白.黒粒.礫	還元	暗青灰	外：布目　内：ナデ後格子タタキ	
311	調査区	瓦 平瓦	破片	<6.8>	<4.5>	2.1	95.3	白粒.礫	還元	灰	外：布目　内：縄タタキ　一枚造	

掲載No.	遺構	種別／器種	残存	法量				胎土	色調	調整・特徴	備考
				長さ	幅	厚さ	重さ				
312	W-4	土製品 羽口	破片	<8.6>	7.3	2.8	247.9	白.黒.褐粒	黄灰・にぶい橙	吸気部内径　2.4	
313	W-4	土製品 羽口	破片	<7.2>	<5.5>	2.4	72.7	白.黒.褐粒	灰・橙	吸気部内径（2.0）	
314	W-4	土製品 羽口	破片	<8.5>	<4.9>	2.0	57.2	白.黒.褐粒	灰・にぶい黄橙	吸気部内径（2.2）	
315	W-4	土製品 羽口	破片	<3.6>	<5.3>	2.6	51.5	白.黒.褐粒	灰黄褐	吸気部内径（2.0）	
316	X-1	土製品 羽口	破片	<11.3>	8.5	3.3	566.3	白.黒.褐粒	灰・橙・灰黄褐	吸気部内径 2.4	
317	X-1	土製品 羽口	破片	<9.4>	9.0	3.5	335.5	白.黒.褐粒	褐灰・にぶい橙	吸気部内径 2.6	
318	X-1	土製品 羽口	破片	<9.6>	9.0	3.3	352.9	白.黒.褐粒	黄灰・にぶい橙	吸気部内径 2.8	
319	X-1	土製品 羽口	破片	<5.3>	8.9	3.8	199.4	白.黒.褐粒	褐灰・橙・明黄褐	吸気部内径 2.2	
320	X-1	土製品 羽口	破片	<8.9>	<7.8>	3.2	153.8	白.黒.褐粒	褐灰・にぶい褐	吸気部内径（2.5）	
321	X-1	土製品 羽口	破片	<7.6>	<3.7>	2.5	68.8	白.黒.褐粒	黄灰・にぶい橙	吸気部内径（2.0）	
322	X-1	土製品 羽口	破片	<6.0>	<5.7>	2.2	55.6	白.黒.褐粒	灰褐・橙	吸気部内径（2.6）	
323	X-1	土製品 羽口	破片	<6.0>	<5.3>	2.6	59.5	白.黒.褐粒	灰褐・にぶい橙	吸気部内径（3.0）	
324	X-1	土製品 羽口	破片	<6.1>	<5.2>	3.4	72.9	白.黒粒	にぶい黄橙	吸気部内径（2.3）	

掲載No.	遺構	種別／器種	計測値／特徴等	備　　考
325	H-1	鉄製品 刀子	全長 <7.4>　刃幅 3.0　茎幅 0.6　厚さ 0.3　　重さ 20.1 g	
326	H-7	鉄製品 鎌	長さ <11.0>　幅 2.4　厚さ 0.35　重さ 32.6 g　完形	
327	H-10	鉄製品 刀子	長さ <9.2>　幅 1.7　厚さ 0.25　重さ 16.6 g　刃身端部欠損	
328	H-13	鉄製品 不明	長さ <5.7>　幅 0.85　　厚さ 0.6　重さ 8.9 g	釘状鉄製品か？
329	W-4	鉄製品 刀子	長さ 16.5　幅 1.6　厚さ 0.3　重さ 29.5 g　完形	
330	W-4	板状鉄製品	長さ <5.9>　幅 1.3　厚さ 0.35　重さ 8.8 g	
331	W-4	鉄製品 不明	長さ <7.2>　幅 0.5　厚さ 0.5　重さ 9.7 g	釘状鉄製品か？
332	W-4	鉄製品 不明	長さ <5.5>　幅 0.5　厚さ 0.5　重さ 3.7 g	釘状鉄製品か？
333	W-9	鉄製品 不明	長さ <5.8>　幅 0.6　厚さ 0.5　重さ 7.5 g	釘状鉄製品か？
334	X-1	鉄製品 不明	長さ <6.4>　幅 0.95　厚さ 0.8　重さ 23.5 g	釘状鉄製品か？
335	X-1	鉄製品 鉄釘	長さ <5.3>　幅 0.45　厚さ 1.0　重さ 7.0 g　完形	
336	X-1	鉄製品 不明	長さ <6.0>　幅 2.1　厚さ 1.15　重さ 45.4 g	工具か？
337	X-1	鉄製品 鉄鏃	長さ <7.5>　幅 1.3　厚さ 0.4　重さ 10.7 g	
338	X-2	鉄製品 刀子？	長さ <3.2>　幅 0.6　厚さ 0.3　重さ 1.9 g	
339	A-3G	板状鉄製品	長さ 1.9　幅 2.15　厚さ 0.75　重さ　1.58 g 2 枚合せの鋲止め 2 箇所。	
340	A-4G	棒状鉄製品	長さ <7.7>　幅 0.7　厚さ 0.6　重さ 16.8 g	
341	C-4G	鉄製品 刀子？	長さ <8.5>　幅 0.95　厚さ 0.4　重さ 7.9 g	
342	A-5G	鋲状銅製品	長さ 0.6　幅 0.6　厚さ 0.2　重さ 0.2 g	飾り金具か？

Ⅵ　火山灰分析報告

１．前橋市元総社蒼海遺跡群（127）テフラ分析

（株）火山灰考古学研究所

１．はじめに

関東地方北西部に位置する前橋市域とその周辺には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺に分布する火山のほか、中部地方や中国地方さらには九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ（tephra．火山砕屑物，いわゆる火山灰）が数多く降灰している。とくに後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログ（町田・新井，1992，2011）などに収録されており、考古遺跡などで調査分析を行いテフラを検出することで、地形や地層の形成年代のみならず、考古遺跡の遺物包含層や遺構の層位や年代などを明らかにすることができる。

前橋市蒼海遺跡群（127）の発掘調査で検出されたH-11・骨１付近の土層には、明色の細粒火山灰の小塊が多く認められたことから、室内でテフラ分析（テフラ検出分析・テフラ組成分析・火山ガラスおよび鉱物の屈折率測定）を実施して、骨１の層位と年代に関する資料を収集することになった。

２．テフラ検出分析

（１）分析方法

H-11･骨１の周辺の白色細粒火山灰の小塊を多く含む部分（以下, H-11･骨１テフラ試料とする）を対象として、軽石、スコリア、火山ガラス、遊離結晶などのテフラ粒子の特徴や量を定性的に把握するテフラ検出分析を実施した。分析の手順は次のとおりである。

１）可能な限り高純度の部分を選んで、電子天秤で５ｇ分を秤量。
２）超音波洗浄装置により泥分を除去。
３）恒温乾燥器により80℃で恒温乾燥。
４）実体顕微鏡下で観察。

（２）分析結果

テフラ検出分析の結果をTab. ９に示す。H-11・骨１テフラ試料では、比較的粗粒の軽石やスコリアは検出されないものの、スポンジ状軽石型ガラスが比較的多く含まれている。その色調は、灰白色あるいは白色である。磁鉄鉱など不透明鉱物以外の重鉱物（以下，重鉱物とする）には、斜方輝石、単斜輝石、角閃石が認められる。なお、角閃石の中には火山ガラスが付着した本質的なものがある。

Tab. ９　テフラ検出分析結果

地点・試料	軽石・スコリア			火山ガラス			重鉱物
	量	色調	最大径	量	形態	色調	（不透明鉱物以外）
H-11・骨１テフラ試料				**	pm（sp）	灰白，白	opx，cpx，am

****：とくに多い，***：多い，**：中程度，*：少ない，(*)：非常に少ない．最大径の単位は，mm.
bw：バブル型 , md：中間型，pm：軽石型，sp：スポンジ状，fb：繊維束状，sc：スコリア型.
ol：カンラン石，opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，am：角閃石，bi：黒雲母.

３．テフラ組成分析

（１）分析方法

次に、H-11・骨１テフラ試料に含まれるテフラ粒子について定量的に検討を行うために、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析を合わせたテフラ組成分析を実施した。分析の手順は次のとおりである。

１）テフラ検出分析済み試料について、分析篩を用いて1/4-1/8mmと1/8-1/16mmの粒子を志別。

2）偏光顕微鏡で 250 粒子の検鏡を行い、火山ガラスの形態（一部色調）別含有率、軽鉱物および重鉱物の含有率を求める（火山ガラス比分析）。
3）偏光顕微鏡で重鉱物 250 粒子の検鏡を行い、重鉱物組成を明らかにする（重鉱物組成分析）。

（2）分析結果

テフラ組成分析の結果をダイヤグラムにして Fig.40 に、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析の結果の内訳を Tab.10 と Tab.11 に示す。H-11・骨 1 テフラ試料には、スポンジ状軽石型ガラスが 2.0％含まれている。軽鉱物と重鉱物の含有率は、それぞれ 40.4％と 24.8％である。また、磁鉄鉱など不透明鉱物以外の重鉱物としては、含有率が高い順に、斜方輝石（52.0％）、単斜輝石（16.8％）、角閃石（3.2％）、カンラン石（0.4％）が含まれている。なお、角閃石の中には、ごく微量ながら酸化角閃石が認められる。

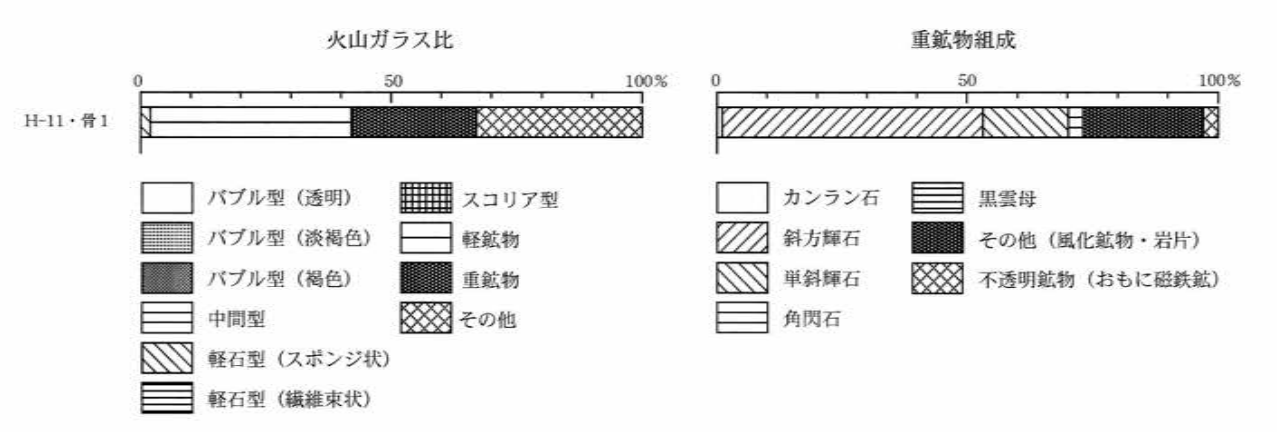


Fig.40　テフラ組成ダイヤグラム

Tab.10　火山ガラス比分析結果

地点・試料	bw（cl）	bw（pb）	bw（br）	md	pm（sp）	pm（fb）	軽鉱物	鉱物	その他	合計
H-11・骨 1 テフラ試料	0	0	0	0	5	0	101	62	82	250

bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型，cl：無色透明，pb：淡褐色，br：褐色，sp：スポンジ状，fb：繊維束状.
数字：粒子数.

Tab.11　重鉱物組成分析結果

地点・試料	ol	opx	cpx	am	bi	opq	その他	合計
H-11・骨 1 テフラ試料	1	130	42	8	0	61	8	250

ol：カンラン石，opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，am：角閃石，bi：黒雲母，opq：不透明鉱物．数字は粒子数.

4．屈折率測定（火山ガラス・鉱物）

（1）測定方法

わが国では、一般に指標テフラとの同定の際に火山ガラスや斜方輝石や角閃石などの鉱物の屈折率測定を行って、指標テフラとの同定精度を向上させている。そこで、H-11・骨 1 テフラ試料についても、火山ガラスと鉱物の屈折率測定を実施した。測定対象の火山ガラスは、1/8-1/16mm 粒子中のものである。一方、鉱物の測定は、>1/4mm の角閃石を実体顕微鏡下でピッキングした後に、軽く粉砕して行った。

（2）測定結果

屈折率測定結果を Tab.12 に、その内訳を Tab.13・Tab.14 に示す。火山ガラス（30 粒子）の屈折率（n）は、1.501-1.513 である。一方、角閃石（34 粒子）の屈折率（n2）は、1.672-1.681 である。

Tab.12　屈折率測定結果

試料・テフラ（噴出年代）・試料		火山ガラス		角閃石		文献
		屈折率（nd）	測定点数	屈折率（n2）	測定点数	
H-11・骨１テフラ試料		1.501-1.513	30	1.672-1.681	34	本報告
＜関東地方北西部の指標テフラ－ AT 降灰以降＞						
浅間Ａ（As-A，1783 年）		1.507-1.512				1）
浅間 A'（As-A'）		1.515-1.521				2）
浅間粕川（As-Kk，1128 年）		未報告				2）
浅間Ｂ（As-B，1108 年）		1.524-1.532				1）
榛名二ツ岳伊香保（Hr-FP，６世紀中葉）		1.501-1.504		1.672-1.677		1）
榛名二ツ岳渋川（Hr-FA，６世紀初頭）		1.500-1.502		1.671-1.695		1）
		1.499-1.504				3）
榛名有馬（Hr-AA，５世紀）		1.500-1.502		1.671-1.677		4）
浅間Ｃ（As-C，３世紀後半）		1.514-1.520				1）
浅間Ｄ（As-D）		1.513-1.516				1）
鬼界アカホヤ（K-Ah，約 7,300 年前）		1.506-1.513				1）
浅間総社（As-Sj）		1.501-1.518				5）
浅間草津（As-K）		1.501-1.503				1）
浅間板鼻黄色(As-YP, 約 1.5 ～ 1.65 万年前）		1.501-1.505				1）
浅間大窪沢２（As-Ok2）		1.502-1.504				1）
浅間大窪沢１（As-Ok1）		1.500-1.502				1）
浅間白糸（As-Sr）		1.506-1.510		1.675-1,680		1）
浅間萩生（As-Hg）		1.500-1.502				2）
浅間板鼻褐色（群）（As-BP Group）	上部	1.515-1.520				1）
	中部	1.508-1.511				1）
	下部	1.505-1.515				1）
姶良 Tn（AT，約 2.8 ～３万年前）		1.499-1.500				1）

1）：町田・新井（2011），２）：早田（1996），３）早田（2014），４）町田ほか（1984），５）早田（未公表）.
本報告・２）・３）・５）：温度変化型屈折率測定法（壇原，1993）．１）・４）：温度一定潟屈折率測定法（新井，1972，1993）.

５．考察

一般に、白色や無色透明の火山ガラスは屈折率が低く（1.505 程度以下）、褐色や灰色などを帯びた火山ガラスは屈折率が高い傾向（ｎ：1.505 以上）にある。従って、テフラ検出分析で検出された白色の火山ガラスは、屈折率が得られた火山ガラスのうち、低めの値をもつものに対応すると考えられる。さらに、このような珪長質ガラスには、角閃石が伴うことが多いことから、屈折率が低めの白色火山ガラスと、角閃石や一部の斜方輝石は、同じ系統のテフラに由来すると推定される。角閃石の屈折率特性を合わせると、元総社とその周辺に降灰したテフラの中では、古墳時代の５～６世紀に降灰した榛名火山二ッ岳系テフラ群が同定候補にあげられる。

H-11・骨１テフラ試料には、６世紀初頭の榛名二ッ岳渋川テフラ（Hr-FA，６世紀初頭，新井，1979，坂口，1986，早田，1989，町田・新井，1991 など）に含まれるとされている酸化角閃石（町田・新井，2011 など）がごく少量ながら認められたこと、また角閃石の中に比較的高い屈折率をもつもの（n2：1.678-1.680）が存在していることから、Hr-FA が混在している可能性が高い。

ただし、同試料の肉眼観察で認められたテフラは小塊ながら細粒の火山灰で、Hr-FA によく認められる軽石や比較的粗粒の軽石型ガラスは目立たない。したがって、H-11・骨１テフラ試料に含まれる白色細粒火山灰の小塊は、堆積状況によっては元総社周辺でも認められる、６世紀中葉の榛名二ッ岳伊香保テフラ（Hr-FP，新井，1962，坂口，1986，早田，1989，町田・新井，1991 など）の最上部（早田，1998 など）に由来する可能性が高い。

一方、やはりテフラ検出分析で検出された灰白色のスポンジ状軽石型ガラスは、岩相から３世紀後半の浅間Ｃ軽石（As-C，荒牧，1968，新井，1979，町田･新井，1992，2003，2011，坂口，2010）に由来すると考えられる。実際、屈折率測定でも、わずかながら As-C に特徴的なやや高めの値（n：1.513 程度）が得られている。なお、Hr-FP と As-C の間の屈折率測定特性をもつ火山ガラスは、後期更新世後半～完新世中期の浅間系テフラや、後期更新世以前の榛名系テフラに由来する可能性がある。

以上のようなことから、H-11・骨１の層位は、Hr-FA より上位で、Hr-FP 降灰期前後の可能性が高いと考えられる。

６．まとめ

前橋市蒼海遺跡群（127）で検出された H-11･骨１の包含層から採取した、細粒火山灰を多く含む土壌試料を対象に、テフラ分析（テフラ検出分析・テフラ組成分析・火山ガラスおよび鉱物の屈折率測定）を実施した。その結果、浅間Ｃ軽石（As-C，３世紀後半）、榛名二ッ岳渋川テフラ（Hr-FA，６世紀初頭）、榛名二ッ岳伊香保テフラ層（Hr-FP，６世紀中葉）に由来する可能が高いテフラ粒子などを認めることができた。この結果、H-11･骨１の包含層の年代については、Hr-FP 降灰期の可能性が指摘される。

Tab.13　H-11・骨１テフラ試料の屈折率測定結果（火山ガラス）

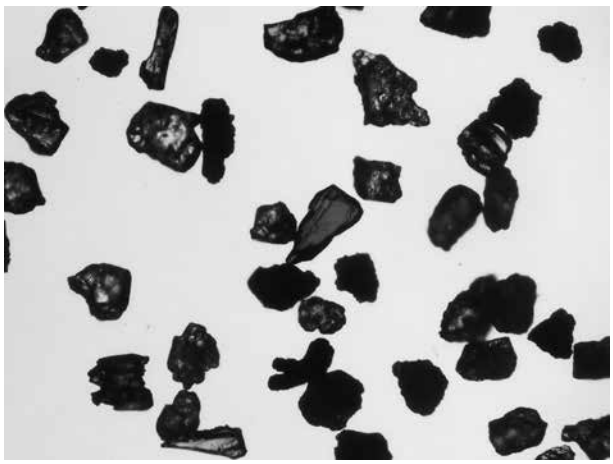
屈折率（n）	粒子数
1.4950 ～ 1.4959	0
1.4960 ～ 1.4969	0
1.4970 ～ 1.4979	0
1.4980 ～ 1.4989	0
1.4990 ～ 1.4999	0
1.5000 ～ 1.5009	2
1.5010 ～ 1.5019	0
1.5020 ～ 1.5029	8
1.5030 ～ 1.5039	3
1.5040 ～ 1.5049	4
1.5050 ～ 1.5059	3
1.5060 ～ 1.5069	3
1.5070 ～ 1.5079	2
1.5080 ～ 1.5089	1
1.5090 ～ 1.5099	0
1.5100 ～ 1.5109	0
1.5110 ～ 1.5119	2
1.5120 ～ 1.5129	1
1.5130 ～ 1.5139	1
1.5140 ～ 15149	0
1.5150 ～ 1.5159	0
測定粒子の合計	30

測定：温度変化型屈折率測定法（壇原，1993）

Tab.14　H-11・骨１テフラ試料の屈折率測定結果（角閃石）

屈折率（n）	粒子数
1.6650 ～ 1.6659	0
1.6660 ～ 1.6669	0
1.6670 ～ 1.6679	0
1.6680 ～ 1.6689	0
1.6690 ～ 1.6699	0
1.6700 ～ 1.6709	0
1.6710 ～ 1.6719	0
1.6720 ～ 1.6729	1
1.6730 ～ 1.6739	5
1.6740 ～ 1.6749	3
1.6750 ～ 1.6759	8
1.6760 ～ 1.6769	2
1.6770 ～ 1.6779	2
1.6780 ～ 1.6789	8
1.6790 ～ 1.6799	2
1.6800 ～ 1.6809	3
1.6810 ～ 1.6819	0
1.6820 ～ 1.6829	0
1.6830 ～ 1.6839	0
1.6840 ～ 1.6849	0
1.6850 ～ 1.6859	0
測定粒子の合計	34

測定：温度変化型屈折率測定法（壇原，1993）



0.2mm

写真
Ｈ -11・骨１テフラ試料（透過光）
中央右下など：スポンジ状軽石型ガラス .
中央左下（有色鉱物）：斜方輝石 .
中央（有色鉱物）：角閃石 .

文献

新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編，10，p.1-79.
新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，11，p.254-269.
新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル，no.53，p.41-52.
新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀研究試料分析法２」，p.136-149.
荒牧重雄（1968）浅間火山の地質．地団研専報，no.14，p.1-45.
壇原　徹（1993）温度変化型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀研究試料分析法２」，p.149-158.
町田　洋・新井房夫（1992）「火山灰アトラス」．東京大学出版会，276p.
町田　洋・新井房夫（2011）「新編火山灰アトラス（第２刷）」．東京大学出版会，336p.
町田　洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学－考古学研究と関連するテフラのカタログ．古文化財編集委員会編「考古学研究に関係する保存科学と人文・自然科学」，p.865-928.
坂口　一（1986）榛名二ツ岳起源 FA・FP 層下の土師器と須恵器．群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」，p.103-119.
坂口　一（2010）高崎市・中居町一丁目遺跡周辺集落の動向－中居町一丁目遺跡 H22 の水田耕作地と周辺集落との関係－．群馬県埋蔵文化財調査事業団編「中居町一丁目遺跡３」，p.17-22.
早田　勉（1989）６世紀における榛名火山の２回の噴火とその災害．第四紀研究，27，p.297-312.
早田　勉（1996）関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴－とくに御岳第１テフラより上位のテフラについて－．名古屋大学加速器質量分析計業績報告書，no.7，p.256-267.
早田　勉（1998）榛名火山－古墳時代の大噴火をさぐる．高橋正樹・小林哲夫編「関東・甲信越の火山Ｉ」，築地書館，p.74-92.
早田　勉（2014）渋川市有馬寺畑遺跡におけるテフラ分析．渋川市教育委員会編「有馬寺畑遺跡」，p.197-211.

Ⅶ　炭化材樹種同定報告

株式会社　古生態研究所

はじめに

元総社蒼海遺跡群は、利根川右岸の前橋台地上に位置する。今回の調査区では、掘立柱建物跡や鍛冶炉などと考えられる遺構が検出されている。

本報告では、鍛冶炉から出土した炭化材について、木材利用を検討するための樹種同定を実施した。

１．試料

試料は、W-4 を中心とした遺構等から点上げで採取された炭化材 24 試料と、W-4 の炭化物を含む覆土 1 試料（炭化物サンプリング）である。点上げされた試料のうち、W-4 炭化層には接合しない 4 点、A-6G 一括と C-3G W-4 には形状が異なる 2 点が認められたため、それぞれについて同定を実施する。また、覆土試料については、抽出した炭化材の中から 5 点を選択して樹種同定を実施する。したがって、合計点数は 34 点である。点上げされた炭化材に同名の試料が複数存在すること、同袋中の複数の破片について樹種同定を実施する試料があること等から、混乱を避けるために全ての試料に通し№（分析№）を付した。

２．分析方法

各試料について、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の割断面を作製し、アルミ合金製の試料台にカーボンテープで固定する。走査型電子顕微鏡（低真空）を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995，1996，1997，1998，1999）を参考にする。

３．結果

樹種同定結果を Tab.15 に示す。炭化材は、針葉樹 1 分類群（ヒノキ）と広葉樹 10 分類群（エノキ属・ヤマグワ近似種・モモ・サクラ属・ブナ属・コナラ属クヌギ節・コナラ属コナラ節・クリ・カバノキ属・カエデ属）に同定された。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・ヒノキ Chamaecyparis obtusa（Sieb. et Zucc.）Endlcher　ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、１分野に 1 ～ 3 個。放射組織は単列、1 ～ 10 細胞高。

・エノキ属　Celtis　アサ科

環孔材。孔圏部は 1 ～ 3 列、孔圏外でやや急激に径を減じる。晩材部の小道管は塊状に複合して接線・斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列し、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1 ～ 6 細胞幅、1 ～ 50 細胞高で鞘細胞が認められる。

・ヤマグワ近似種　cf. Morus australis Poiret　クワ科クワ属

環孔材。孔圏部は 3 ～ 5 列、孔圏外への移行は緩やかで孔圏部との協会は不明瞭。晩材部の小道管は単独または 2 ～ 4 個が複合して斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列し、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1 ～ 6 細胞幅前後、1 ～ 50 細胞高前後と考えられるが、いずれも潰れており詳細は不明である。

道管配列などからヤマグワと考えられるが、放射組織の詳細が観察できなかったことから近似種とした。

・モモ　Prunus persica（L.）Batsch　バラ科スモモ属

環孔性を帯びた散孔材。年輪のはじめにやや大型の道管が 4 ～ 5 列配列した後、やや急激に径を減じる。小径の道管は単独または 2 ～ 5 個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1 ～ 6 細胞幅、1 ～ 60 細胞高。

Tab. 15　樹種同定結果

グリッド	遺構	位置	試料名	形状	種類	分析№
	X-1	東半		芯持丸木	コナラ属クヌギ節	1
	X-1			破片	モモ	2
	X-1	東半		破片	エノキ属	3
	X-1	東半		破片	コナラ属クヌギ節	4
	W-4		№52	半裁状	コナラ属クヌギ節	5
	W-4		№100	柾目状	コナラ属クヌギ節	6
C-3G	W-4			ミカン割状	コナラ属クヌギ節	7
	W-4	炭化層		ミカン割状	クリ	8
				ミカン割状	コナラ属コナラ節	9
				芯持丸木	コナラ属コナラ節	10
				ミカン割状	ヤマグワ近似種	11
B-6G	W-4			破片	コナラ属クヌギ節	12
C-3G	W-4			柾目状	コナラ属クヌギ節	13
C-3G	W-4			柾目状	クリ	14
				柾目状	コナラ属コナラ節	15
	W-4			ミカン割状	コナラ属クヌギ節	16
C-3G	W-4			ミカン割状	コナラ属クヌギ節	17
C-4G	W-4			ミカン割状	コナラ属クヌギ節	18
C-3G	W-4		炭化物サンプリング	破片	クリ	19
				破片	コナラ属クヌギ節	20
				破片	カエデ属	21
				破片	ヤマグワ近似種	22
				柾目状	サクラ属	23
B-3G	W-6			破片	コナラ属クヌギ節	24
B-3G	W-6			ミカン割状	コナラ属クヌギ節	25
B-2G	W-6			半裁状	ブナ属	26
A-4G				破片	モモ	27
B-3G		南ベルト		破片	カバノキ属	28
A-6G			一括	柾目状	コナラ属クヌギ節	29
A-6G			一括	ミカン割状	コナラ属クヌギ節	30
				ミカン割状	ヒノキ	31
A-4G		北西上層		ミカン割状	コナラ属クヌギ節	32
A-4G		上層		ミカン割状	コナラ属クヌギ節	33
A-7G				柾目状	ブナ属	34

・サクラ属　Cerasus　バラ科

散孔材。道管は単独または２～６個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、１～３細胞幅、１～30細胞高。

・ブナ属　Fagus　ブナ科

散孔材。道管は単独または２～３個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管の穿孔板は単穿孔板および階段穿孔板、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織はほぼ同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・コナラ属クヌギ節　Quercus sect. Cerris　ブナ科

環孔材。孔圏部は１～３列、孔圏外で急激に径を減じる。晩材部の小道管は単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ節　Quercus sect. Prinus　ブナ科

環孔材。孔圏部は１～３列、孔圏外で急激に径を減じる。晩材部の小道管は、多数が集まって火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科クリ属

環孔材。孔圏部は３～４列、孔圏外でやや急激に径を減じる。晩材部の小道管は多数が集まって火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15 細胞高。

・カバノキ属　Betula　カバノキ科

散孔材。道管は単独または２～４個が放射方向に複合して散在し、年輪界付近でやや径を減ずる。道管の穿孔板は階段穿孔板、壁孔は対列状～交互状に配列する。放射組織は同性、1～4 細胞幅、1～30 細胞高。

・カエデ属　Acer　ムクロジ科

散孔材。道管は単独または２～３個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は対列～交互状に配列し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～3 細胞幅、1～30 細胞高。木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

４．考察

(1) 用材選択

炭化材には、合計 11 種類が確認された。各種類の材質等についてみると、針葉樹のヒノキは、山地・丘陵地の主に尾根筋に生育する常緑高木であり、木材は木理が通直で割裂性と耐水性が高い。広葉樹のブナ属とカバノキ属は、山地の冷温帯性落葉広葉樹林に生育する落葉高木である。ブナ属の木材は、比較的重硬な部類に入り、強度は高いが、保存性は低い。カバノキ属は、重硬・緻密で強度が高い。コナラ節、クリ、サクラ属、カエデ属は、二次林や山地・丘陵地に生育する落葉小高木～高木である・木材は、いずれも重硬で強度が高い部類に入る。エノキ属、ヤマグワ（近似種）、クヌギ節は、河畔等に生育する落葉高木である。クヌギ節とヤマグワの木材は重硬で強度が高い。エノキ属の木材はやや重硬な部類に入る。モモは大陸から持ち込まれた栽培種である。木材は、比較的重厚な部類に入る。

鍛冶炉の燃料材と考えられる炭化材は、クヌギ節を中心に 11 種類が認められ、材質的にみると重硬な材質の広葉樹材が多い。重硬な木材は、一般的に火付きは悪いが火持ちが良く、また燃え残り易いと考えられる。ただし、クリについては、木炭にした場合には柔らかく燃焼性が高いとされる（岸本・杉浦，1985）。また、今回の結果では、比較的軽軟な材質のヒノキも認められ、重硬な材質の木材と共に火付きの良い軽軟な木材も利用されたことが推定される。なお、科学的な数値に基づくものではないが、クヌギ節に同定された炭化材の多くは、硬く焼き締まっており、電子顕微鏡観察用の木片加工が困難な状況であった。

群馬県の古代における鉄生産は、八ヶ峰生産址遺跡（旧大胡町）における砂鉄溜の検出から砂鉄を原料としていたことが推定される（山下，1986）。砂鉄から鉄を生産する場合には還元効果が必要であり、乙西尾引遺跡（旧大胡町）や金井製鉄遺跡（渋川市）では火持ちの良いクヌギ節の木炭が燃料材として大量に利用された状況が明らかにされている（高橋・鶴原，1995；塚・高橋，2015）。一方、鍛冶には還元効果は必要無く、むしろ鉄が加工できる柔らかさになるまで熱するための高い火力が必要である。岸本・杉浦（1985）では、鍛冶燃料材として、高い火力が得られるマツ炭やクリ炭を挙げている。大塚（2000）は、薬師遺跡 J 地点（渋川市）等から検出された、壁面に焼成痕のある円形土坑について、鍛冶関連遺構に伴う状況から、鍛冶燃料材を製炭した伏せ焼きの炭穴窯である可能性を指摘している。薬師遺跡 J 地点の炭化材については、全てクリに同定されている（高橋ほか，1999）。一方で、伊東･山田（2012）のデータベースをみると、群馬県内では鍛冶燃料材と分かる炭化材の分析例は掲載されておらず、実際にクリが鍛冶燃料材として利用されたかは不明である。

今回の試料が鍛冶燃料材とすれば、上記のような鍛冶燃料材の用材選択とは異なる傾向を示していることになる。高い火力を得られる軽軟な木材と、火力を維持するための堅い木材を混在して利用し、軽軟な木材の大部分は灰化した可能性もあるが、失われた部分の復元は困難である。今後、類例を蓄積し、解明していくことが望まれる。

(2) 周辺植生

燃料材という性格と、複数種類が混在する状況を考慮すると、木材を遠方から搬入したとは考えにくく、遺跡周辺で入手可能な種類を中心に利用した可能性がある。本遺跡周辺地域における古代の古植生に関連する調査例をみると、元総社寺田遺跡の低地部から出土した種実遺体の調査があり、木本類ではオニグルミ、コナラ亜属、クワ属、モモ、ウメ、アンズ、サクラ節が確認されている（吉川，1996）。また、元総社西川・塚田中原遺跡では、周辺の古植生を強く反映

すると考えられる住居の建築部材と考えられる炭化材の樹種同定が実施されており、9 世紀末～ 10 世紀の住居跡からクリを中心にカエデ属、ウメまたはモモ、ケヤキ、コナラ節、ヤマグワ、ニレ属、ヤシャブシ亜属、アスナロが確認されている（植田，2003）。花粉分析は、元総社寺田遺跡において古代よりも古い古墳時代後期（6 世紀初頭の FA 直下）の層から良好な結果が得られており、コナラ亜属が最も多く、針葉樹のスギ属、モミ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、常緑広葉樹のアカガシ亜属、落葉広葉樹のクマシデ属－アサダ属、ニレ属－ケヤキ属などが比較的多い結果が報告されている（藤根・鈴木，1994）。

これらの調査事例を考慮すれば、今回確認された分類群のうち、コナラ節は台地上を中心に二次林を構成し、そこにはクリ、カエデ属、サクラ属等も生育していたと考えられる。クヌギ節、エノキ属、ヤマグワは、遺跡の東西を南流する牛池川や染谷川の河畔等に生育していた可能性がある。これらの分類群は、遺跡周辺で木材の入手が可能であったと考えられる。また、栽培種のモモは、周辺地域での栽培を示唆する。一方、山地等に生育するヒノキ、ブナ属、カバノキ属については、遺跡周辺に生育していたとは考えにくい。群馬県の現植生（戸部ほか，1987）をみると、ヒノキは多野山地、甘楽郡の山地、足尾山地等に希に生育するとされる。カバノキ属は、遺跡に近い地域では、榛名山や赤城山にダケカンバ、ミズメ、シラカンバ等が生育するとされる。ブナ属も榛名山や赤城山にブナやイヌブナが生育するとされる。ヒノキ、ブナ属、カバノキ属は、遺跡に比較的近い榛名山や赤城山などの山地から木材を得た可能性がある。

元総社寺田遺跡では、古代の木製品の中にヒノキ、ブナ属、カバノキ属の利用が認められる（藤根・鈴木，1994）。燃料材のためのみに木材を遠方から運ぶとは考えにくく、こうした木製品を製作する過程で生じた端材、不要となった木製品等が燃料材に利用された可能性がある。

引用文献

藤根　久・鈴木　茂，1994，元総社寺田遺跡出土材の樹種同定と周辺植生.「元総社寺田遺跡Ⅱ　一級河川牛池川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 2 集＜木器編＞」，（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第 167 集，財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団，135-185.

林　昭三，1991，日本産木材　顕微鏡写真集．京都大学木質科学研究所.

伊東隆夫，1995，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料，31，京都大学木質科学研究所，81-181.

伊東隆夫，1996，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ．木材研究・資料，32，京都大学木質科学研究所，66-176.

伊東隆夫，1997，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ．木材研究・資料，33，京都大学木質科学研究所，83-201.

伊東隆夫，1998，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ．木材研究・資料，34，京都大学木質科学研究所，30-166.

伊東隆夫，1999，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ．木材研究・資料，35，京都大学木質科学研究所，47-216.

大塚昌彦, 2000, 伏焼法による炭焼き土坑　－薬師・半田中原遺跡の製鉄関連炭焼き土坑－. 群馬考古学手帳, 10, 群馬土器観会, 55-67.

大塚昌彦・高橋　敦，2015，古代製鉄炉に併設する炭窯木炭の一考察　－金井製鉄遺跡の炭窯を中心として－．利根川，37，利根川同人，97-103.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編), 2006, 針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト．伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p.[Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

島地　謙・伊東隆夫，1982，図説木材組織．地球社，176p.

高橋　敦・鶴原　明，1994，乙西尾引遺跡における製鉄燃料材について.「大胡西北部遺跡群　乙西尾引遺跡・西天神遺跡・柴崎遺跡　県営ほ場整備事業大胡西北部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 1 集」，大胡町教育委員会，41-49.

高橋　敦・辻本裕也・橋本真紀夫，1999，半田薬師 J 遺跡出土炭化材の樹種.「渋川市内遺跡 XII　－久宮間戸遺跡・薬師遺跡・寺畑遺跡・中原遺跡・田中遺跡－」，渋川市発掘調査報告書第 67 集，渋川市教育委員会，5-6（1999）

戸部正久・里見哲夫・島野好次・松沢篤郎・須藤志成幸，1987，群馬県自生高等植物目録.「群馬県植物誌　改訂版」，群馬県・群馬県高等学校教育研究会生物部会，153-393.

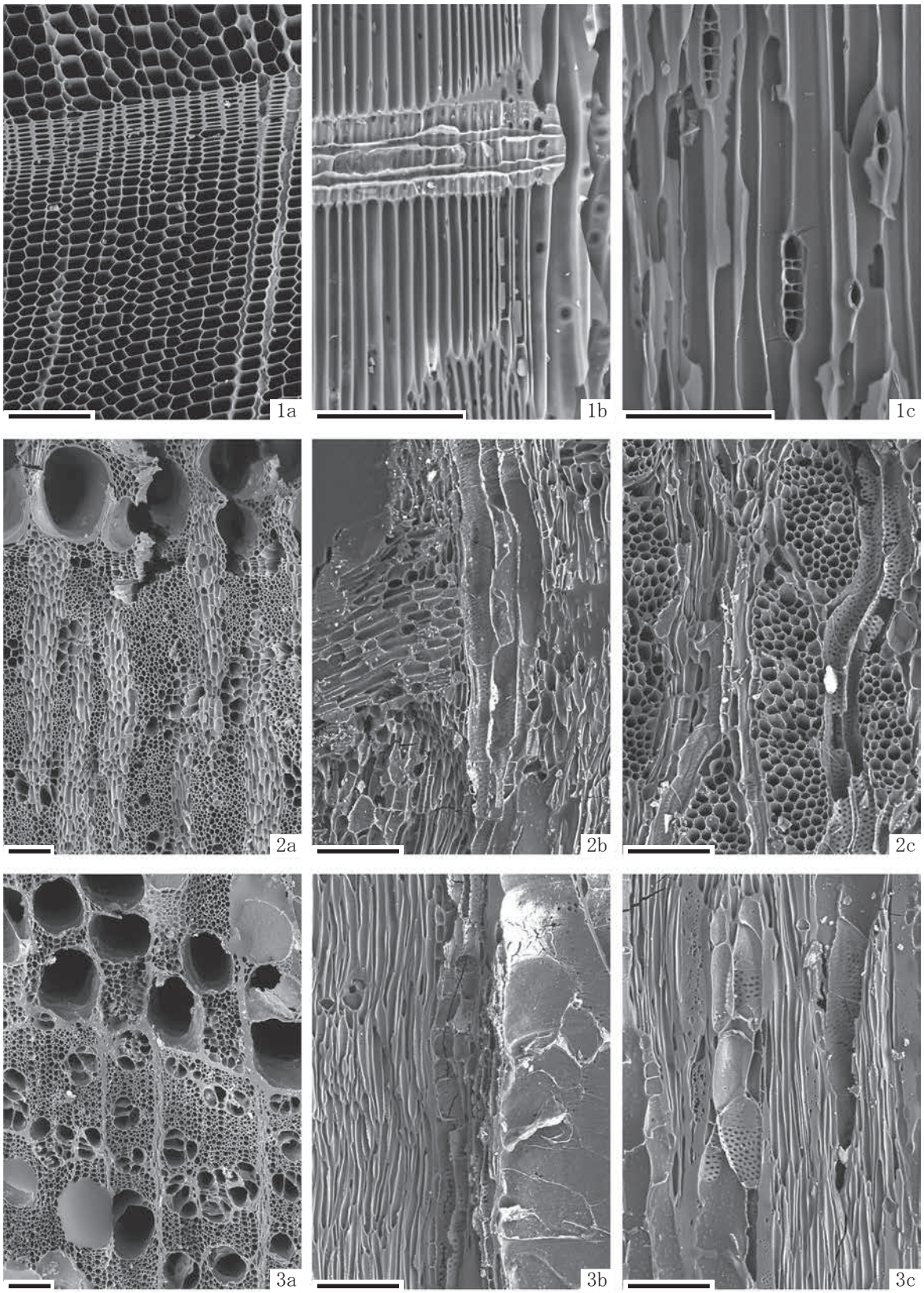
植田弥生，2003，元総社西川・塚田中原遺跡 123 号住居出土炭化材の樹種同定.「元総社西川・塚田中原遺跡　一般県道前橋・足門線バイパス（西毛広域幹線道路）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第一分冊　遺構・本文編」，財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第 323 集，財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団，323-331.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編），1998，広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト．伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修），海青社，122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

山下歳信，1986，上大屋・樋越地区遺跡群　主要地方道、前橋・大間々・桐生線（大胡バイパス）建設の事前埋蔵文化財発掘調査報告書．大胡町発掘調査報告書Ⅲ，大胡町教育委員会，283p.

吉川純子，1996，元総社寺田遺跡Ⅵ区低地出土の大型植物化石.「元総社寺田遺跡Ⅲ　一級河川牛池川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 3 集＜本編＞」，（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第 208 集，財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団，251-255.

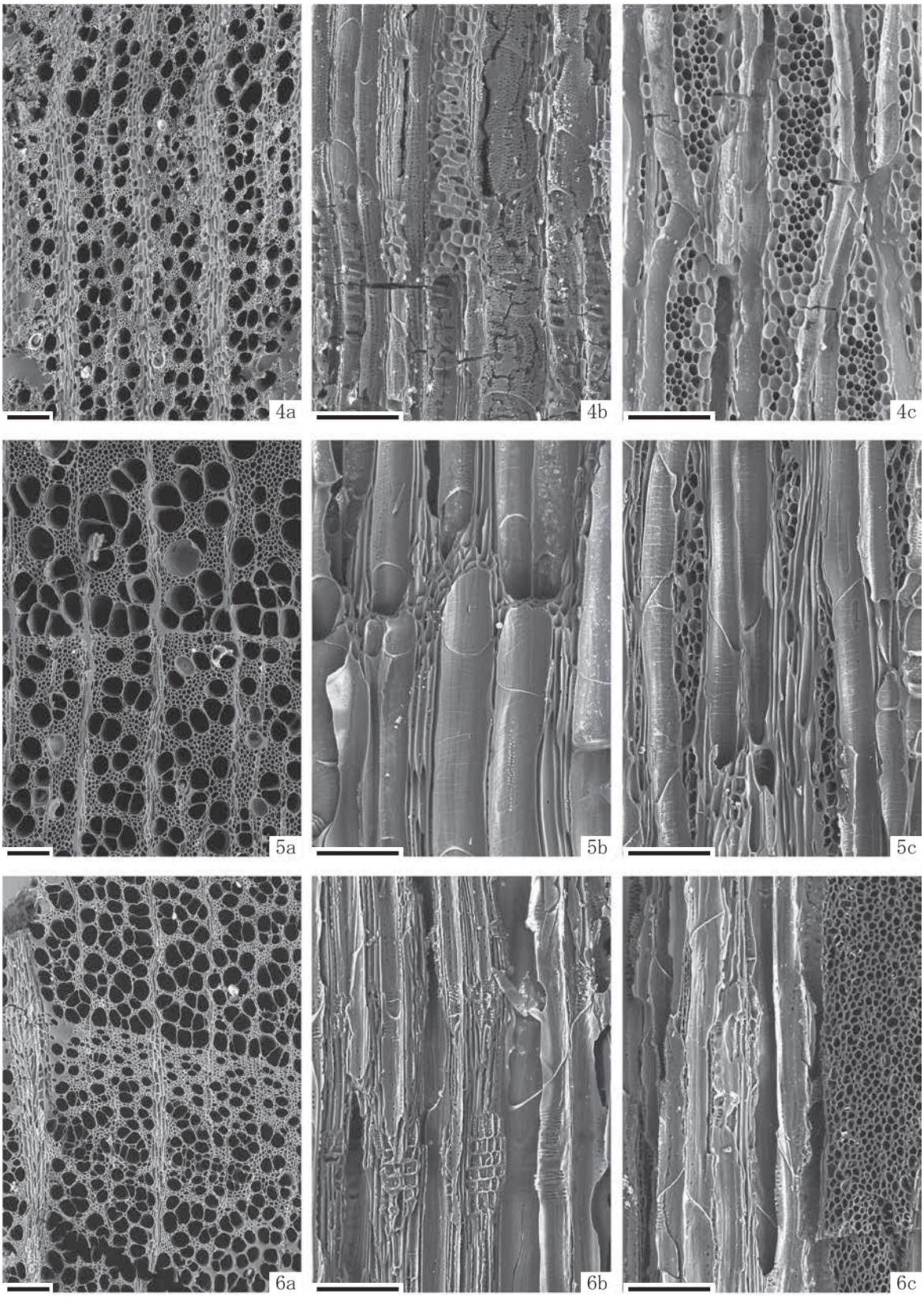
Fig.41　炭化材（1）



各写真のスケールは0.1㎜

1. ヒノキ(分析№31)
2. エノキ属(分析№3)
3. ヤマグワ近似種(分析№11)
　a：木口，b：柾目，c：板目

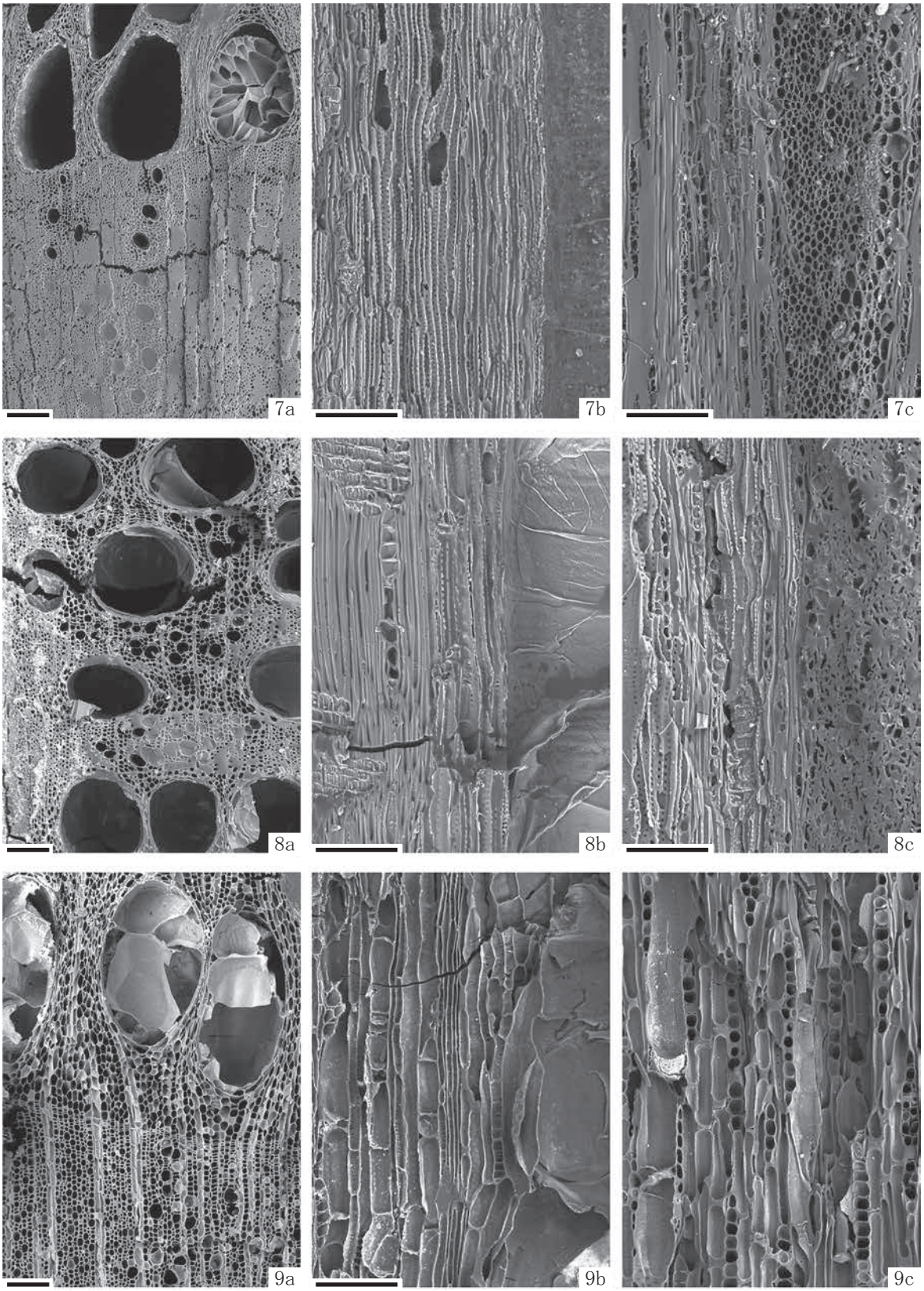
Fig.42　炭化材（2）



各写真のスケールは0.1㎜

4. モモ（分析№2）
5. サクラ属（分析№23）
6. ブナ属（分析№26）
　a：木口，b：柾目，c：板目

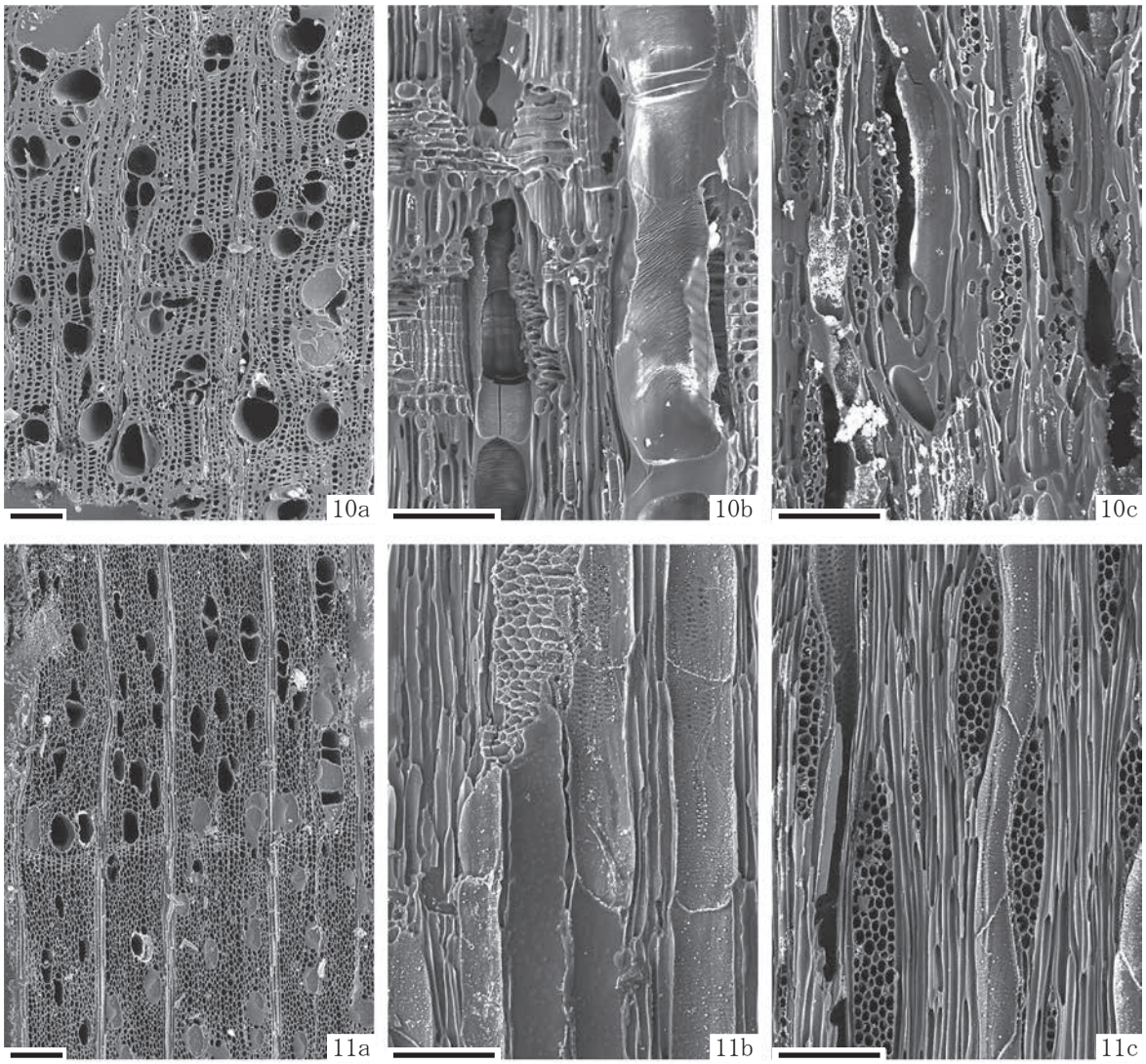
Fig.43　炭化材（3）



各写真のスケールは0.1㎜

7. コナラ属クヌギ節(分析№33)
8. コナラ属コナラ節(分析№9)
9. クリ(分析№14)
　a：木口，b：柾目，c：板目

Fig.44　炭化材（4）



10. カバノキ属(分析№28)
11. カエデ属(分析№21)
　a：木口，b：柾目，c：板目

各写真のスケールは0.1㎜

Ⅷ　人骨鑑定報告

橋本裕子：京都大学大学院医学研究科
附属先天異常標本解析センター

1．はじめに

今回報告する人骨は、2018 年に群馬県元総社蒼海遺跡群の発掘調査において出土した資料である。出土した人骨は非常にもろい状態であり、周囲の土壌をクリーニングすることがかなわなかったため、解剖学的な配列を保った一次葬であるか否かを確認することはできなかった。歯は歯列を保った状態で出土しているものも確認できたが、もともと歯は顎骨に植立しているため、移動させた後も歯列を保った状態で出土する可能性が高い。そのため、歯列を保った状態の歯をもって、一次葬であると断定することは困難である。

出土した人骨は体幹体肢骨格の殆どが、もろく取り上げると粉々になることが予想できたため、土壌を含めて骨の周囲を硬化剤で固めて取り上げたために、詳しい鑑定は困難であった。明らかに大腿骨であると判定できるものもあるが、クリーニングに耐えうる状態ではなく、現状維持に努めた。頭部に当たる骨格は確認が困難であったが、歯のみは取り上げることができた。出土した歯は殆どが歯冠部のみ、もしくはエナメル質の細片という状態であり、細片の復元はせずにそのままの状態にとどめた。

歯冠が壊れているが、接合可能な資料ついては修復を行った。修復に利用した薬品は BUTVAL で、アセトン 70% で溶かしたものを接着剤として利用した。

骨の鑑定は、取り上げた歯を中心に行った。歯は、個体識別のできる状態での取上ではなかったため、ラベルごとに記載をした。また、歯種については表にまとめて別途記載を行った。

2．人骨鑑定

本遺跡から出土した人骨は頭骨片、体幹体肢骨格片など多くの部位が確認できたが、直接取り上げると粉砕してしまう可能性が予想でき、周囲を硬化剤で固めて取り上げたため、骨格に関する鑑定は諦めざるを得なかった。人骨が確認できた層において、複数の歯が確認できた。表面採集において取り上げ可能な歯については、すべて取り上げ、その点数は 65 点を数えた。取り上げの際にエナメル質が割れてしまった歯も多いが復元に努めたが、細片については更なる破損を考慮してそのままの状態にとどめた。取り上げた歯は殆どが歯冠のみもしくは歯冠の一部、エナメル質片であり、歯根の確認できる資料は皆無であった。調査時の写真を確認したが、調査当時から歯根部は確認できず歯冠のみの状態であった。よって、個別に記載を行うのではなく、項目を決めて一覧表にまとめたものを以下に示した。

3．考察

本遺跡から出土した人骨の総数は、同一歯種の重複から同定した。重複した歯種は上顎左側の第一大臼歯である。推定最少個体数は 6 個体を数えた（Tab.16）。出土した人骨の年齢は歯の咬耗状態から推定した。全体的に歯の咬耗状態は弱く、最も咬耗が進んでいる歯は咬耗の 2 段階（30 代もしくはそれ以上）が 1 点（No.50）で、僅かに 1-2 段階が確認できるものの、多くは 0 もしくは 0-1 段階である。したがって、埋葬されている 6 個体のうち半数以上が 10 代後半から 20 代という比較的若い年齢層の被葬者の割合が高いようなである。当時の平均寿命は現代人に比べると若いことは間違いないが、古墳時代の平均寿命（30 代半ばから後半）と比較しても全体的に若い年齢での死亡率が高いことが本遺跡出土人骨の一つの特徴である。ただし乳児や幼児などの小児骨の骨や乳歯は成人骨や永久歯に比べると残存されにくいため、鑑定した歯のみから被葬者の年齢層の割合を直接論じるのは慎重にならざるを得ない。

ここで、問題となるのは被葬者が古墳などの埋葬施設に葬られておらず、住居址に埋葬（もしくは廃棄）されていることである。人骨が出土したのは H-11 の住居のみである。また、住居内の全てを利用するのではなく、南西部の一角のみに人骨の出土が集中しており、あらかじめ被葬者の埋葬もしくは廃棄する場所として、住居址内のエリアを決めていた可能性が高い。また、周辺の住居との切りあい関係をみると、H-11 は最下層の古い段階であることが分かる。利用されなくなった廃屋を埋葬場所もしくは廃棄場所として選択したことが考えられる。古墳時代の廃屋葬については、類例は皆無に等しい。唯一、住居内埋葬と確認できる例として、埼玉県の城北遺跡の例が挙げられる。城北遺跡は人骨

の出土状況が良く確認でき、解剖学的な配列を保った状態で出土が確認されている。４つの住居址のそれぞれからは１～３個体が出土し、合計９個体が報告されている。解剖学的な配列を保っている個体と、そうでない個体があるものの、比較的若い年齢層が住居址内に埋葬されていることが報告されている。

城北遺跡と本遺跡の出土人骨について比較をしてみた。どちらの遺跡も比較的若い年齢層が埋葬されているという点は共通しているが、城北遺跡が複数の住居址に１～３個体を埋葬していたのに対し、本遺跡は人骨全てが、最下層（最も時代が古い）となる１つの住居址 H-11 から出土した点である。本遺跡出土の人骨は解剖学的な配列を保っているかについては、判断できる資料がなかったため、その点の比較はできない。２つの遺跡の事例から住居址の埋葬について論じることは控えたい。

本遺跡出土人骨を鑑定するにあたり、古墳時代における廃屋葬の類例を検索したところ、上記の埼玉県城北遺跡の例以外は非常に少ない（埼玉県本庄市藤塚 B 地点、群馬県渋川市中筋遺跡、長野県長野市榎田遺跡）。また、いずれも詳細な記載がないために、埋葬の詳しい状況は読み取れなかった。唯一、藤塚遺跡 B 地点については、火災住居であることから、災害による被災者の指摘がなされている。報告されている記載で突発的な事故や災害以外の住居内埋葬については、城北遺跡に続いて、本例が２例目となる事例のようである。もし、類例をご存じの方がおられたらご教示願いたい。

最後になるが、近年ではストロンチウム分析から、被葬者の出自（生まれ育った場所）を特定する研究が世界規模で飛躍的に増えている。群馬県渋川市の金井東裏遺跡出土の甲冑を着用したまま死亡した古墳時代人骨についても、顔面の形態とストロンチウム分析の結果から、渡来系（２世の可能性を指摘）の人物で、長野県で生まれ育った後、群馬県へ移り被災した可能性が報告された（田中他 2019）。今後、安定同位体分析、ストロンチウム分析、ミトコンドリア DNA や核 DNA などの分析も見据えて、今後の人骨保存につとめたい。

謝辞

元総社蒼海遺跡群出土の貴重な人骨資料を調査する機会を提供してくださいました皆さまに感謝いたします。また、資料の鑑定にあたり京都大学大学院医学研究科の山田重人教授、研究室の皆様、中部学院大学看護リハビリテーション学部の清水大輔准教授には多くの助言をいただきました。記して感謝申し上げます。

参考文献

Brothwell, D.R. 1981 Digging up Bones. Cornell University Press.
船来山古墳群発掘調査団 1999『船来山古墳群』糸貫町教育委員会・本巣町教育委員会
橋本裕子 2001「平戸台古墳群第２号墳出土人骨」『平戸台古墳群第２号墳』千葉県八千代市教育委員会
Hashimoto 2014 “Life history indicated by the pilaster of femur - Neolithic Jomon Japan and Early Bronze Age Jordan.” Annual Conference of IUAES
Hashimoto 2016 “Characters observed on femurs of riders during the Kofun Period in Japan.” The 8th World Archaeological Congress
橋本裕子 2017「船来山古墳群出土人骨」『船来山古墳群総括報告書』岐阜県本巣市教育委員会
橋本裕子・馬場悠男 2002「人骨の分析」『千葉県八千代市市内出土人骨分析委託報告書』八千代市教育委員会
橋本裕子・松井章 2006「第１節　大野町北部山麓古墳群出土人骨」『大野町北部山麓古墳群発掘調査報告書－堂ヶ洞古墳群、三ヶ原古墳群、カイト古墳群、物干山遺跡、カイト遺跡、柚木洞・布賀利神社遺跡－』岐阜県大野町教育委員会
田中良之 他 2019「金井東裏遺跡出土人骨」『金井東浦遺跡』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
山口敏 1985「国家成立前後の日本人Ⅴ　東日本 - 特に関東・東北南部地方」『季刊人類学』
YAMAGUCHI, B. 1987 Metric Study of the Crania from Protohistoric Sites in Eastern Japan. Bulletin of the National Science Museum Tokyo 13
White, T. D. 1991 Human Osteology. Academic Press, Inc.
財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995『城北遺跡』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

Tab.16　出土資料一覧

ラベル番号	上顎U/ 下顎L	左L/ 右R	歯種	保存状態	咬耗	特記事項
1	U	R	P2	歯冠のみ	0	
2	U	R	M1	咬合面のみ	0	
3	U	R	M2	咬合面遠心舌側のみ	0	
4	U	L	M1	歯冠のみ、近心２／３保存	1 - 2	
5	unknown			2㎜未満の歯冠片	-	
6	U	R	M3	歯冠のみ	0-1	
7	U	L	M1	歯冠片、近心舌側部	0-1	カラベリー結節
8	unknown			2㎜未満の歯冠片	-	
9	U	R	M1	歯冠のみ	0-1	第５咬頭
10	L	L	P2	歯冠のみ	0	
11	U	R	M1	歯冠のみ、近心１／２保存	0	
12	L	R	M2	歯冠のみ	0-1	
13	U	R	I2	歯冠のみ	0-1	シャベル型（強）
14	U	R	C	唇側面のみ	0-1	
15	U	L	M1	歯冠のみ	0	歯のサイズ小さい
16	U	unknowun	I	2㎜程度の歯冠片	-	
17	L	L	M2	歯冠のみ	0	
18	L	L	M1	歯冠のみ	0	屈曲隆線
19	R	L	P2	歯冠のみ	0	
20	U	L	C	歯冠のみ	0	エナメル質減形成
21	U	L	P	3-4㎜の歯冠片	-	
22	L	unknowun	P	5㎜程度の歯冠片	-	エナメル質減形成
23	U	L	I1	歯冠唇側面片	-	
24	L	L	I2	5㎜程度の歯冠片	-	
25	U	R	C	歯冠片	-	
26	L	R	P2	歯冠のみ	0	
27	U	R	C	歯冠のみ	0	
28	U	L	M1	歯冠のみ	0	第５咬頭
29	L	R	P2	歯冠片	0	
30	直系１㎝未満の四肢骨辺３点。肩甲骨片、寛骨片					
31	U	unknowun	I	２㎜以下のエナメル質片	-	
32	U	L	M3	歯冠のみ	0	
33	L	L	P1	歯冠のみ	1	歯のサイズ小さい
34	U	R	I1	歯冠唇側のみ	0-1	
35	L	L	M2	歯冠のみ	0-1	
36	L	R	M1	歯冠のみ	0-1	第６・第７咬頭
37	L	L	M3	歯冠のみ	0	
38	unknown			2-3㎜程度の歯冠片	-	
39	L	unknowun	C	3㎜未満の歯冠片	-	
40	L	L	M1	歯冠のみ	0-1	中心結節
41	L	unknowun	M	歯冠片	-	
42	U	L	P2	歯冠のみ	0	
43	U	R	P2	歯冠のみ	0	
44	unknown		M	歯冠片	-	
45	L	unknowun	M	歯冠片	-	
46	L	unknowun	I	歯冠片	-	
47	U	R	I2	歯冠のみ	1 - 2	遊離３点
	L	L	M1	歯冠のみ	1 - 2	
	L	L	M2	歯冠のみ	1 - 2	
48	U	unknowun	I	歯冠片	-	遊離歯
49	unknown		M	歯冠片	-	

ラベル番号	上顎 U/ 下顎 L	左 L/ 右 R	歯種	保存状態	咬耗	特記事項
50	U	R	M1	歯冠のみ	0	遊離３点
	U	R	M1	歯冠のみ	0-1	
	L	R	M2	歯冠のみ	2	
51	unknown		M	歯冠片	-	
52	L	L	P2	歯冠のみ	0-1	
53	U	unknowun	C	エナメル質片	-	遊離２点
	U	unknowun	M	エナメル質片	-	
54	U	L	P1	歯冠のみ	0	遊離３点
	U	L	M1	歯冠のみ	0	
	U	L	M3	歯冠のみ	0	
55	L	R	C	歯冠のみ	0	歯のサイズ小さい
56	L	unknowun	I	エナメル質片	-	遊離２点
	L	unknowun	C	エナメル質片	-	
57	unknown			エナメル質片	-	
58	骨・歯にあらず					
59	U	R	C	歯冠のみ	0-1	

Fig.45　H-11　人骨出土状況

Ⅸ　獣骨同定報告

今回の元総社蒼海遺跡群（127）の調査では、多数の獣骨が出土した。出土位置を見ると大半が１号性格不明遺構内の炭化物層から鉄滓・羽口と共に出土している。その他は４・６号溝跡、グリッドからの出土であるが、溝跡２条は１号性格不明遺構とほぼ同時期の遺構、グリッドは１号性格不明遺構と６号溝跡の接点付近である。つまり出土獣骨の全ては、古代後半のある段階にもたらされた可能性が考えられる。

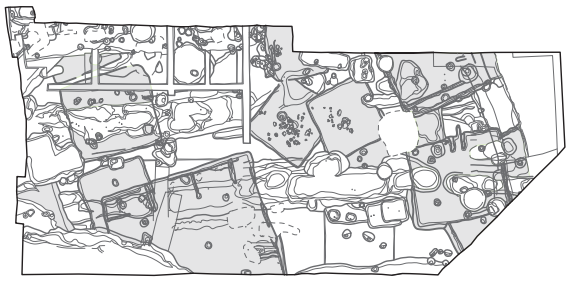
ここでは出土獣骨の同定所見を、一覧表（Tab.17）として掲載しておく。なお、同定については国学院大学研究開発推進機構学術資料センターの阿部常樹氏に依頼した。以下の表作成も同氏によるものである。

Tab.17　出土獣骨一覧

№.	出土位置	種	部位	左右	被熱	備　　考
1	A-4G B 下	同定不可	四肢骨	—	○	1 点。骨幹部分破片。うさぎ類サイズ。
2	A-5G（D-5 付近）	ニホンジカ	上顎後臼歯	左	—	2 点。M1 及 M2 ？
3	X-1　№. 17	ノウサギ類	橈骨	右	○	1 点。近位から中位にかけて残存。
4	X-1　№. 27	ノウサギ類	上腕骨	右	○	1 点。近位端部残存。
5	X-1　№. 37	同定不可	四肢骨	—	○	1 点。骨幹部分破片。うさぎ類サイズ。
6	X-1　№. 160	ニホンジカ	臼歯	—	—	破片資料（12 片）。1 点分？
7	X-1　西半	同定不可	四肢骨	—	○	1 点。骨幹部分破片。タヌキサイズ。
8	X-1　炭化物最下層	ノウサギ類	上腕骨	左	○	1 点。遠位端部のみ残存。
9	X-1　下層炭化物	同定対象外	—	—	○	破片資料（多数）。
10	W-4　№. 111	同定不可	歯	—	—	破片資料（9 片）。歯冠部分。形質及びサイズからウシ？
11	W-6　№. 124	未同定	四肢骨	—	×	1 点。ニホンジカ？
12	W-6　№. 120	未同定	歯	—	—	上顎及び下顎歯共に解剖学的位置を保って出土。ニホンジカ？
13	X-1　№. 181	未同定	頭蓋骨	—	—	1 点。脳頭蓋部分。ニホンジカ。

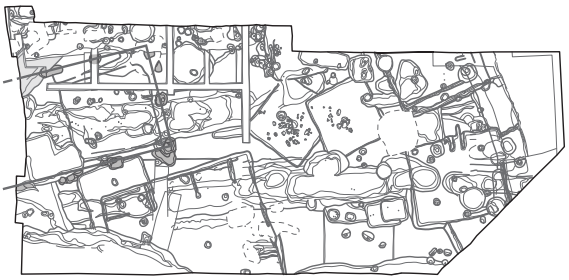
元総社蒼海遺跡群(127)
遺構変遷

①古墳時代後期 (5C 後半～ 7C 中葉)



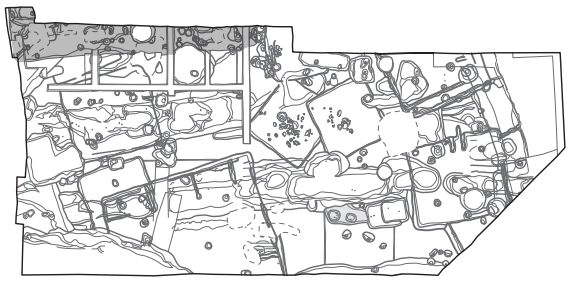
・牛池川右岸に形成された大集落の一角
・夥しく重複する竪穴建物跡

②古墳時代末 (7 世紀後半) ～白鳳期 (7 世紀末)



・竪穴建物跡が消える（移動？）
・掘立柱建物跡の出現
・斜行する区画溝の開鑿

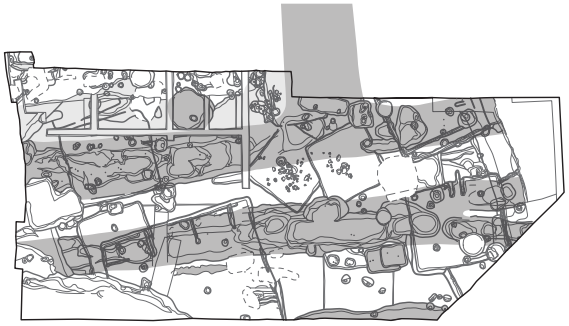
③奈良 (8 世紀) ～平安前期 (9 世紀)



・大規模基壇建物跡

群馬郡正倉？

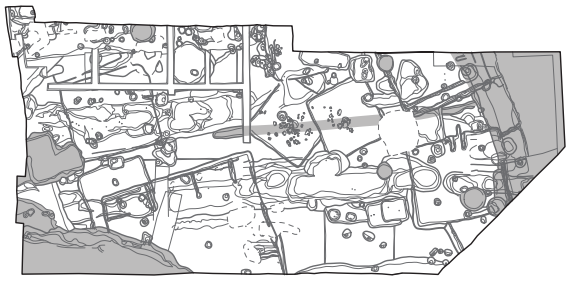
④平安後期 (10 ～ 11 世紀)



・基壇建物の廃絶
・並行する区画溝の開鑿
・鍛冶関係遺物
・大量の白色土器と貿易陶磁器等
・遊興具？（碁石・土器片円盤）

国府

⑤中・近世 (12C 以降)



・大規模な堀
・井戸跡多数

蒼海城

0 1:400 6m

Fig.46　遺構変遷図

X　発掘調査の成果と課題

今回の発掘調査は、古墳時代後期の集落遺跡、奈良・平安時代の官衙的遺構と特殊遺物群、中世蒼海城関係遺構の、大きく三要素からなる。ここで全てに検討を加えることは、紙面の都合で叶わない。従って本章では、調査・報告を通じて特に重視して取り組んだ点に触れ、総括としたい。

①　古墳時代後期の人骨を出土した H-11

H-11 の床面上からは、複数個体分の人骨が出土した。Ⅷ章において橋本裕子が鑑定結果を報告しているように６体分で、半数以上が 10 代後半から 20 代という結果であった。これら人骨群を橋本は住居内埋葬と考える立場で報告しているが、周到な現地調査を行ったにもかかわらず副葬品と思しき遺物は確認することはできなかった。また、保存状態が決して良いとは言えない状況であったが、無攪乱の自然堆積層によって覆われていたにも関わらずかなり攪乱された状態（別個体の同一部位が重なって出土した）で、長期間曝された環境下で動物等が「喰い散らかした」結果とも思える。報告者としての意見をここで付け加えると、埋葬の前段階を示している可能性を想定してみたい。つまり古墳に埋葬される前段階≒殯の状態ではないかと考える。半数以上が当時としては若い年齢層であった点は、例えば予期せぬ死を迎えた若者が、新たな古墳の築造を待っているような状況で、何らかの理由によって放置・埋没した可能性もあるのではないか。だとすれば H-11 は殯家であった可能性も生ずる。

何れにせよ、H-11 の人骨群は、「古墳に埋葬されなかった古墳時代人」として極めて稀有な事例であり、複数個体が共伴するその出土状態からは、相互の血縁関係や性別等、今後の分析次第で興味深い資料となることが大いに期待される資料であることは間違いない。

②　基壇建物の性格

今回新たに確認された基壇建物跡は総地業構造であったと推定され、時期について積極的な根拠に乏しいものの８～９世紀と考えられた。周囲の溝跡から出土している円面硯や転用硯、あるいは環状摘みの須恵器坏蓋がその時期を示していると考えれば、８世紀後半～９世紀前半に狭められようか。

東に隣接する元総社蒼海遺跡群（99）調査区（福田ほか 2016）で確認された建物跡のとほぼ同規模と考えられるが、その軸方向は若干異なるようで、建物の軒も違えているようである。もっとも（99）のそれは総地業と布地業が一体で一つの建物なのか、それとも重複なのか結論は保留されているため、極めて限られた調査である今回の基壇建物跡と、直接対比することは難しい。

とはいえ今回確認された基壇建物跡と（99）の建物跡は、互いに似た機能を有していたであろうことは疑い無い。また、北西 30 mで確認されている（国府 28 トレンチ他）布地業建物跡も、類似の建物と考えて良いのだろう。今回の調査地点は、兼ねてより国庁Ｃ案とされた宮鍋神社南方エリアの中央である。宮鍋神社は「宮の辺」が転じたとも云われており、神社境内には礎石と思しき大石が数個集積されている。今回調査区の I-3 や、東側の（98）調査区からも礎石の可能性が指摘される大石が出土しており、宮鍋神社南方に礎石を伴う建物が複数存在している事は明らかである。今回の調査終了後、早稲田大学院生の協力と地元のご理解を頂き、地中レーダー探査を実施したところ、基壇建物跡の可能性を指摘し得る反応が２箇所浮かび上がった（Fig.47 参照）。２箇所の反応があった場所の発掘調査は実施されていないため確証は無いが、これらが基壇建物跡であるならば、少なくとも５棟以上の礎石建物によって構成される一定の施設を想定することが可能である。今回調査区の南方 100 mに位置する元総社蒼海遺跡群（95）で確認されている側柱建物跡とそれを囲む区画溝は、ここで想定した施設群に深く関連した別の施設群と見做すことが可能であろう。これらが何であったのか、結論を出すことは時期尚早と承知しているが、国府の何らかの施設か、あるいは国府の傍らに設置されたであろう群馬郡衙が想起される。もし後者であるならば、群馬郡の正倉を構成する倉庫の一つが今回の基壇建物跡ということになろうか。今後の調査の進展に委ねたい。

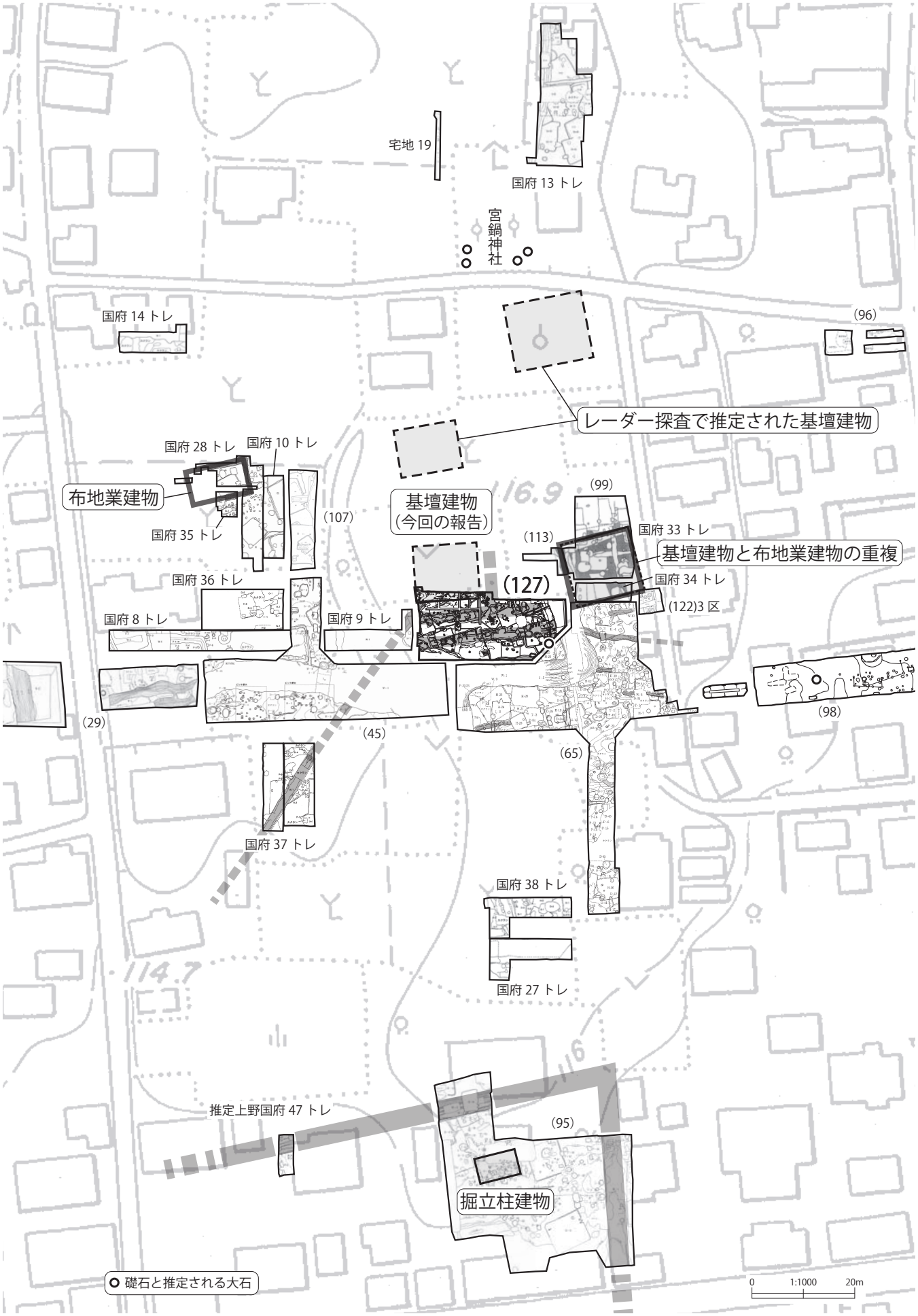
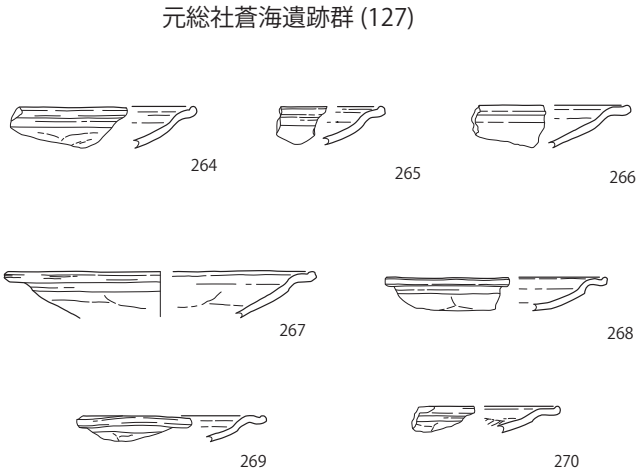
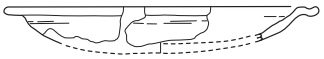


Fig.47　元総社蒼海遺跡群（127）と周辺の調査区

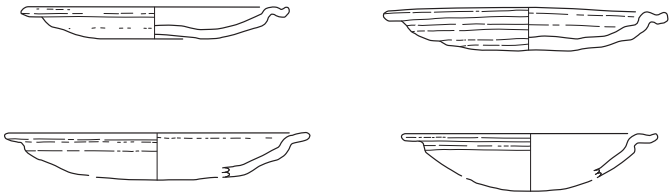


1．藤岡市中Ⅰ遺跡　2．上里町田中前遺跡　3．上里町田中西遺跡

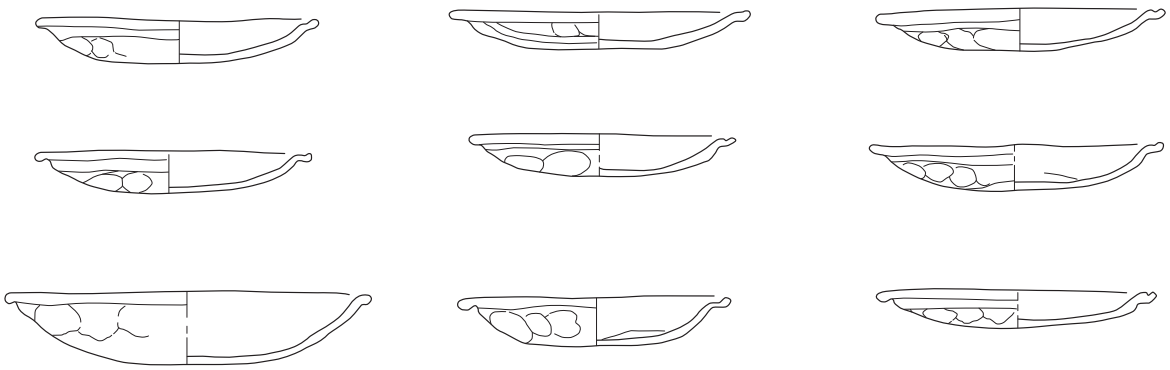
4．神川町愛染遺跡第 7 地点　5．落川遺跡



1. 藤岡市中Ⅰ遺跡



2. 埼玉県上里町田中前遺跡



3. 埼玉県上里町田中西遺跡

4. 埼玉県神川町愛染遺跡

5. 東京都日野市落川遺跡

0　1:3　6cm

※各報告書掲載の実測図を再トレースさせていただいた。

Fig.48　ての字状口縁皿出土遺跡（関東地方）

③　平安時代後半の「ての字口縁皿」について

今回の調査において出土した遺物は遺構の時間幅と内容に応じて多種・多様・多彩であったが、特に注目されるのはW-4・6を中心に調査区各所から出土した平安後期の土器群であろう。

これらの土器群は白色で土師質焼成の皿・埦・高坏を主体に、黒色処理した埦・皿があり、共に平安京で使用される土師器を色調面で模倣したものと考えられ、「国府」ならではの土器群と言える。

その土器群の中に、小破片ではあるが平安京域で特徴的な土師器皿を見出すことができた。「ての字状口縁皿」と呼ばれるこの土器は、器形こそ都のそれに酷似しているが、胎土・焼成は一般的な上野地域の土師器であり、搬入品ではない、在地産と考えられるものである。

今回、関東地方における出土事例を探してみたが、今回の出土事例を入れても６例しか確認することができなかった。出土遺跡は県内では藤岡市中Ⅰ遺跡１例のみ、近隣では埼玉県児玉郡上里町田中前遺跡・田中西遺跡、神川町愛染遺跡に３例がまとまり、他に東京都日野市落川遺跡がある。さしあたって実見することが叶った上里町の２遺跡例を見る限り、今回の出土例がそうであったように在地での製作を思わせる胎土・焼成であった。

上里町・神川町の「ての字皿」出土３遺跡は、武蔵国嘉美郡に相当する。近傍の「勅使河原」地名は、上里町中堀遺跡の性格を勅旨田の経営拠点と推定する根拠の一つとされる（田中 1997）。勅旨田の需給対象者が天皇・上皇等の後院、経営は国司による直営であるのなら、中堀遺跡の周辺から都の器である「ての字皿」が出土する背景と言えるのかも知れない。今回の出土例は国府域であることを踏まえれば、上記埼玉県の３事例と異なる背景を考える必要があるだろう。

今回の発掘調査・報告書作成を通じ、元総社の方々や多くの研究者と新たな関わりを持つことができ、調査担当としては多くの「財産」を構築することができたことを誇りに思います。反面、調査によって得た膨大な情報と、その後の整理作業段階で抱いた着想のほとんどを本書に反映できなかったのは、偏に調査担当者の怠慢に他なりません。今後も折を見て今回の成果を蒸し返して披露することで、その責務を果たしたいと思います。（永井智教）

参考文献

小森俊寛　1994 「２土師器・黒色土器・瓦器」『平安京提要』

小森俊寛　2005 『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房

市川　修　1977 『田中前遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書　第 32 集　埼玉県遺跡調査会

金子彰男　2004 『愛染遺跡第６・７・８・９・10 地点　青柳古墳群元阿保支群』埼玉県児玉郡神川町遺跡調査会

長谷部達雄　1983 『森遺跡　中Ⅰ遺跡　中Ⅱ遺跡』 上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第２集　群埋文

福田健司　1997 『落川遺跡－都営落川第２アパート建設に伴う発掘調査報告－』日野市落川遺跡調査会

田中広明　1997 「中堀遺跡の特色と歴史的性格」『中堀遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 190 集

中村岳彦　2018 『推定上野国府周辺の古代景観』群馬文化 332　群馬県地域文化研究協議会

丸山　修　2017 『第二次田中西遺跡発掘調査報告書』上里町教育委員会

神宮　聡・高山　剛　2017 『元総社蒼海遺跡群(122)』前橋市教育委員会

並木勝洋ほか　2013 『平成 23 年度発掘調査報告　推定上野国府』前橋市教育委員会

阿久澤智和ほか　2013 『平成 24 年度発掘調査報告　推定上野国府』前橋市教育委員会

阿久澤智和ほか　2015 『平成 25 年度発掘調査報告　推定上野国府』前橋市教育委員会

阿久澤智和ほか　2016 『平成 26 年度発掘調査報告　推定上野国府』前橋市教育委員会

阿久澤智和ほか　2017 『平成 27 年度発掘調査報告　推定上野国府』前橋市教育委員会

福田貫之・並木史一・阿久澤智和　2016 『元総社蒼海遺跡群(99)』前橋市教育委員会

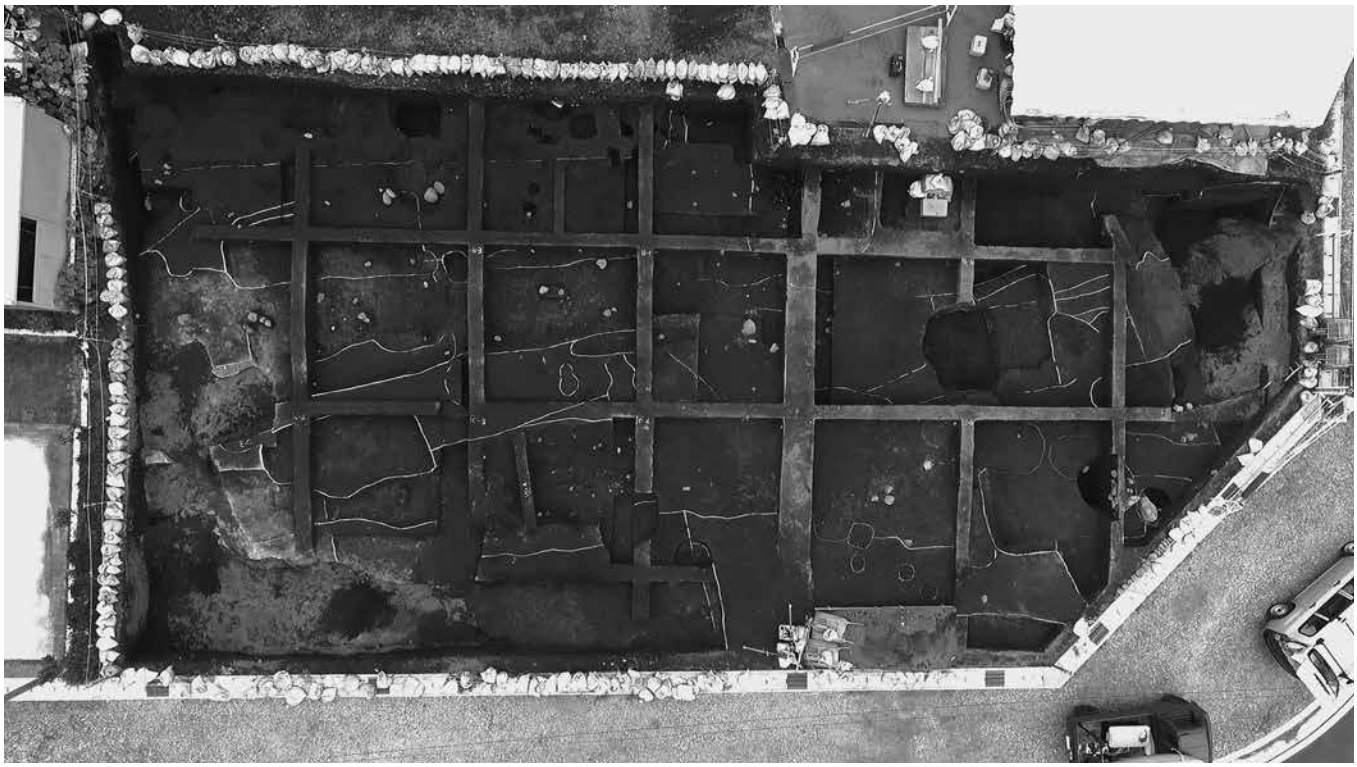
福田貫之・山田誠司　2013 『元総社蒼海遺跡群(44)、(45)』前橋市教育委員会

藤坂和延・中村岳彦　2016 『元総社蒼海遺跡群(65)』前橋市教育委員会

写　真　図　版

1．調査区遠景（南から） 後方の立木は宮鍋神社の社叢

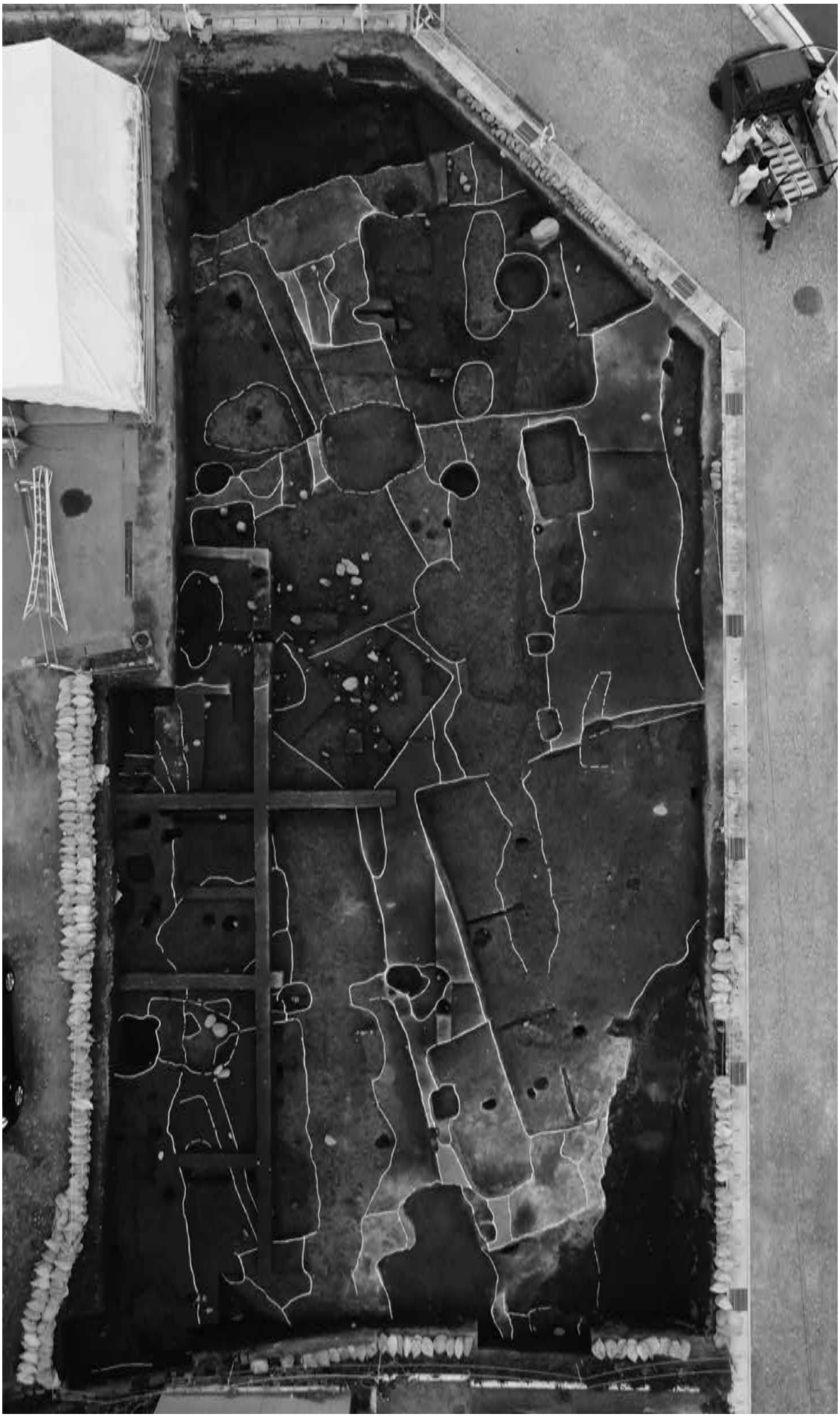
2．調査区近景（南西から）



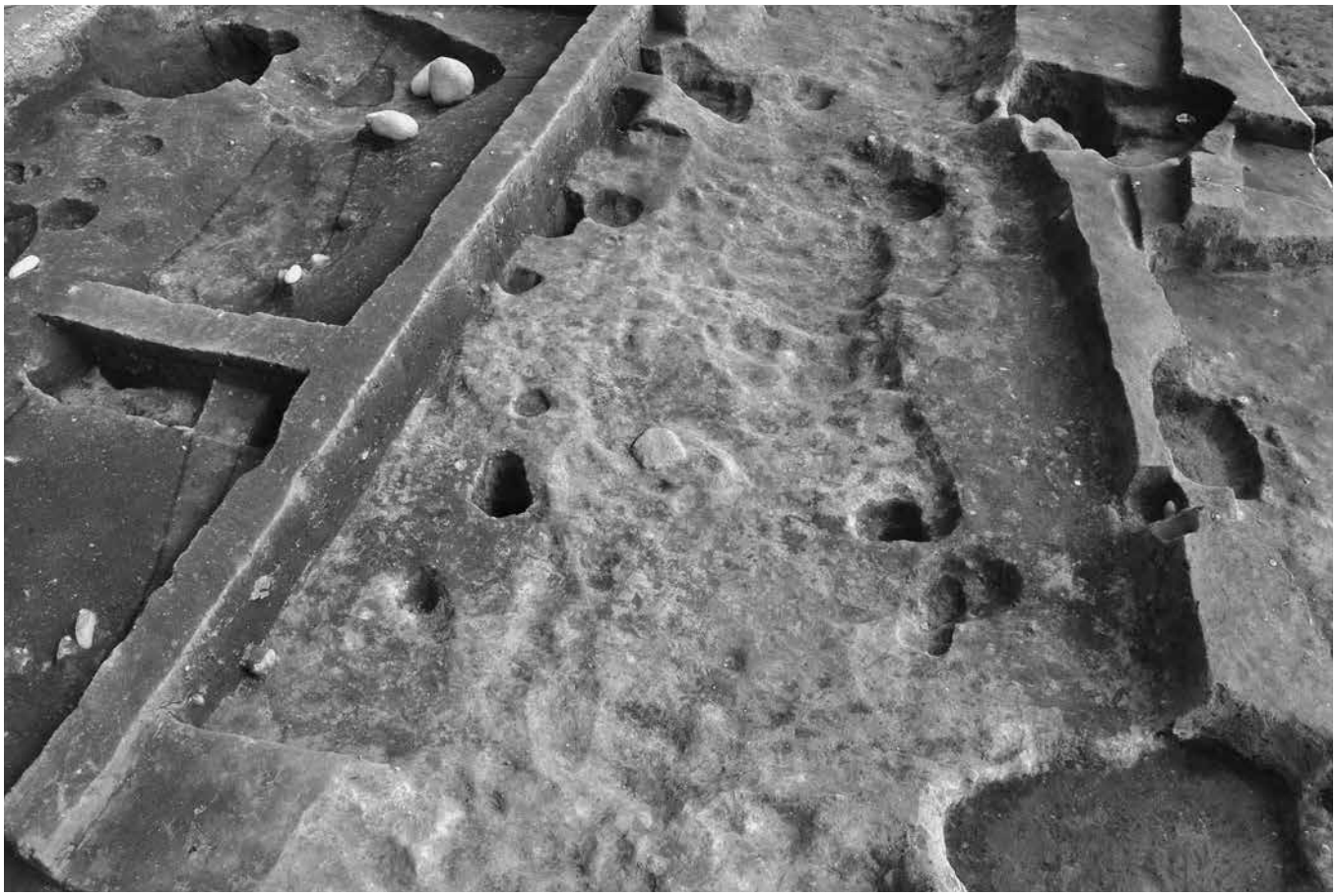
1．調査状況（垂直・上が北）

2．調査状況（南東から）

遺構の重複が激しく、グリッドに沿ってベルトを設けて掘り下げているところ。



1．調査区完掘（垂直・左が北）



1．Ｈ－１〔１号竪穴建物跡〕完掘（南西から）中央を東西にＷ－６が切る。

2．Ｈ－１床面（西から）

3．Ｈ－１床面下の掘形（北西から）

4．Ｈ－１土層断面（南から・合成）

1．Ｈ－２・３〔２・３号竪穴建物跡〕調査状況（南西から）

2．Ｈ－２〔２号竪穴建物跡〕完掘

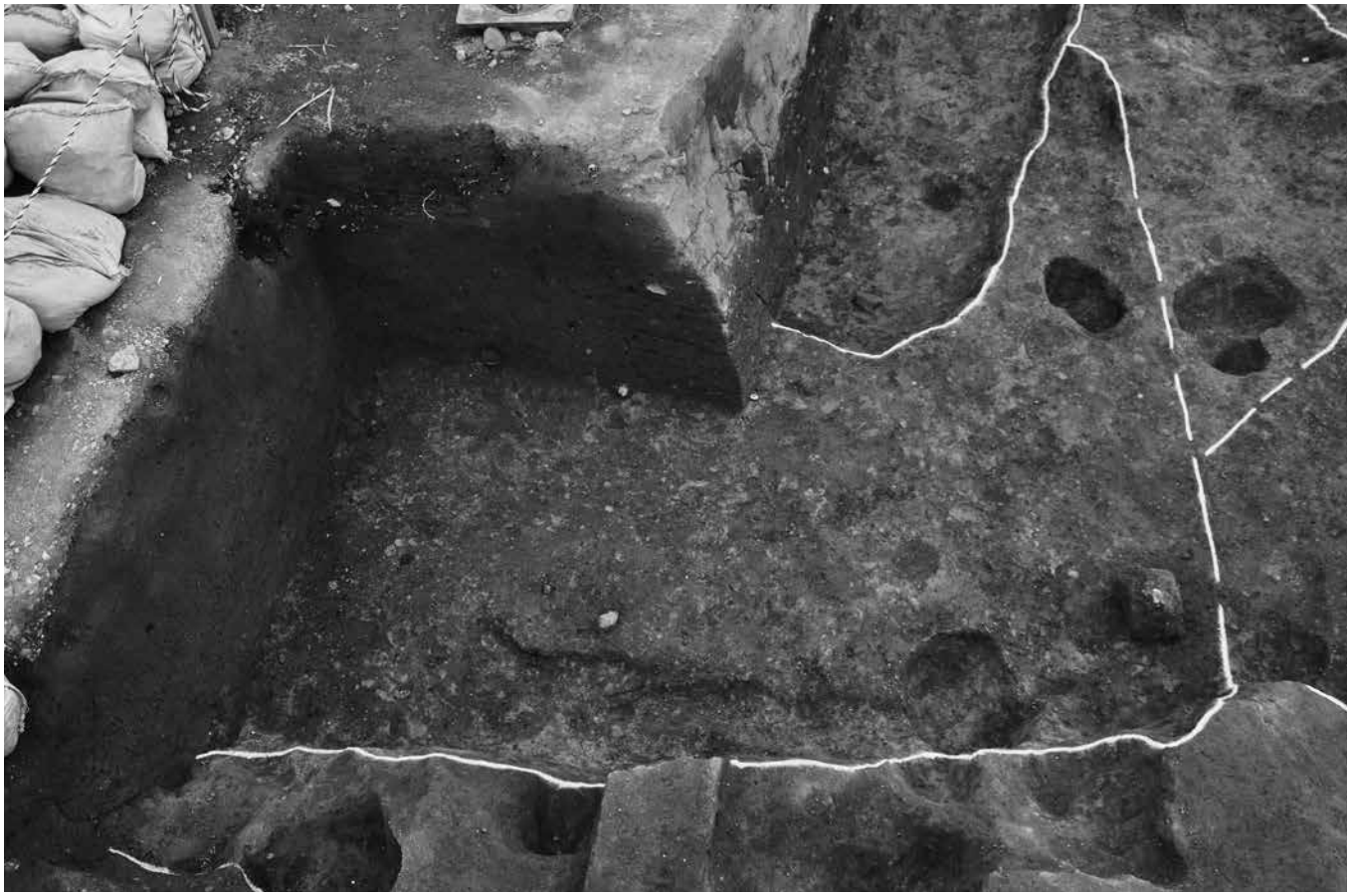
3．Ｈ－３〔３号竪穴建物跡〕完掘（南西から）

4．Ｈ－３ カマド（南西から）

5．Ｈ－３ 遺物出土状況（南東から）

1．Ｈ－４〔４号竪穴建物跡〕検出状況（南西から）

2．Ｈ－５〔５号竪穴建物跡〕建物出土状況（南西から）



3．Ｈ－５　完掘（南西から）

4．Ｈ－６〔６号竪穴建物跡〕土層断面（南から）

5．調査状況（東から）

1．Ｈ－７〔７号竪穴建物跡〕完掘（北から）

2．Ｈ－７　完掘（南から）

3．Ｈ－７　カマド（南から）

4．Ｈ－７　カマド調査状況（南西から）

5．Ｈ－７　カマド調査状況（南から）

H－12　　H－8

1．H－8・12〔8・12号竪穴建物跡．同一遺構〕完掘（北西から）大半をH－7に切られている。

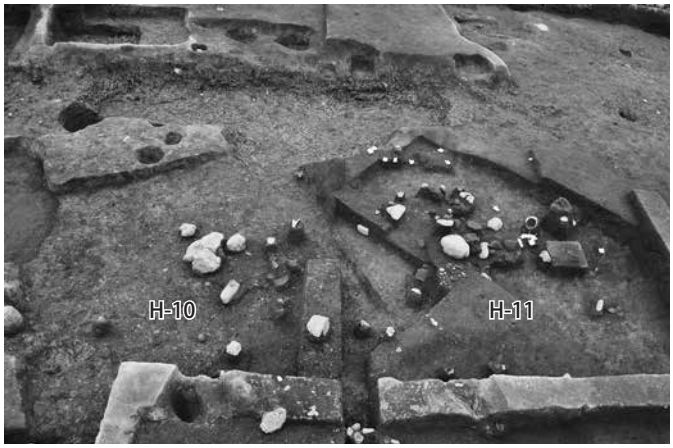
2．H－12貯蔵穴（北から）

3．H－12完掘（北西から）

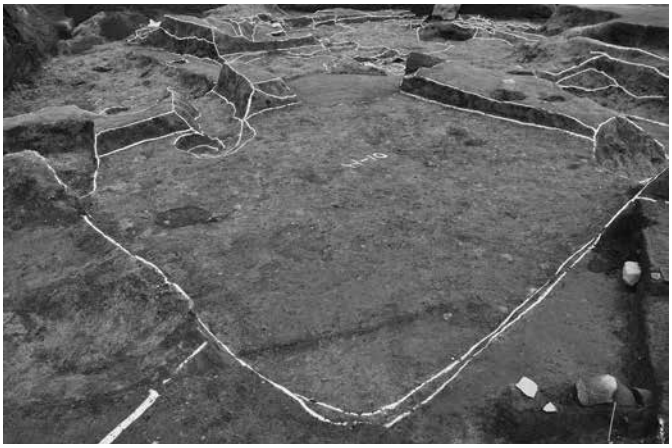
4．H－8完掘（北西から）

5．H－10・11〔10・11号竪穴建物跡〕（南西から）手前H－11床面．奥はH－10掘形

1．H－10・11〔10・11号竪穴建物跡〕遺物出土状況（南西から） 手前H－11．奥H－10



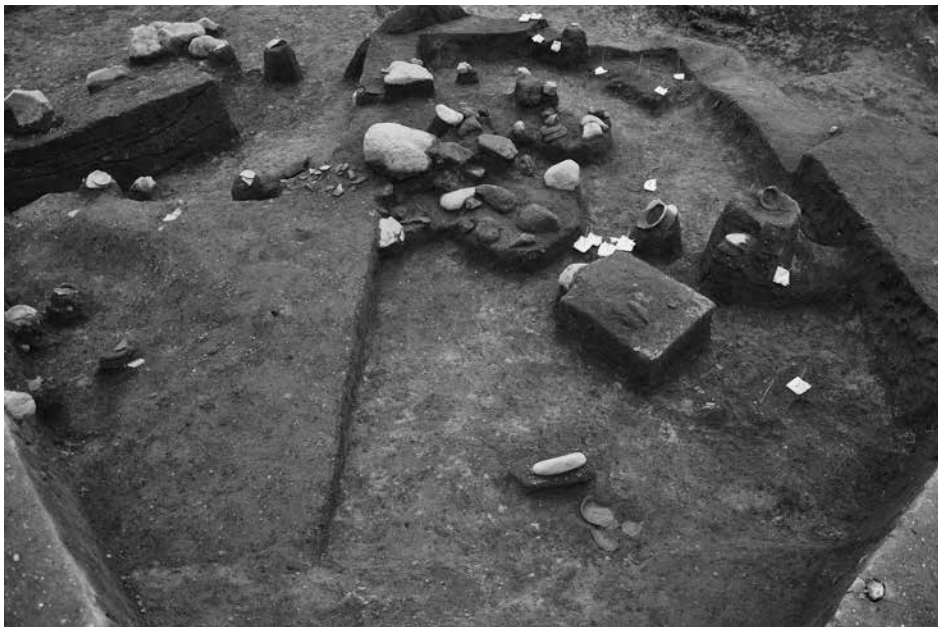
2．H－10・11遺物出土状況（北から）
左H－10．右H－11



3．H－10床面（西から）

4．H－10遺物取り上げ状況（東から）

5．H－10床面下の掘形（南西から）

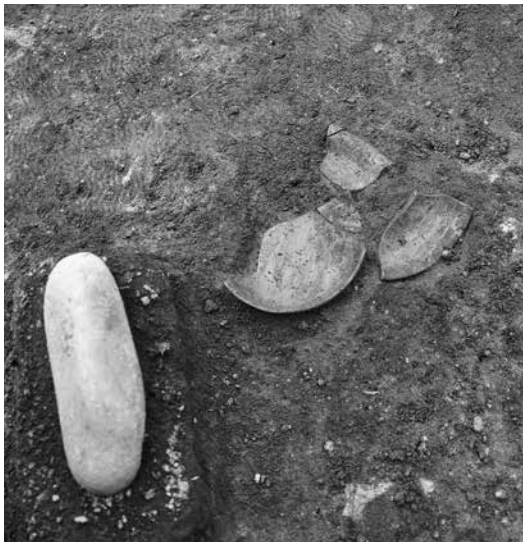


1．H－11〔11号竪穴建物跡〕遺物出土状況①（北西から）

2．H－11遺物出土状況②(北西から)

3．H－11遺物出土状況③
ベルト下（南東から）

4．H－11遺物出土状況④ベルト下（北西から）

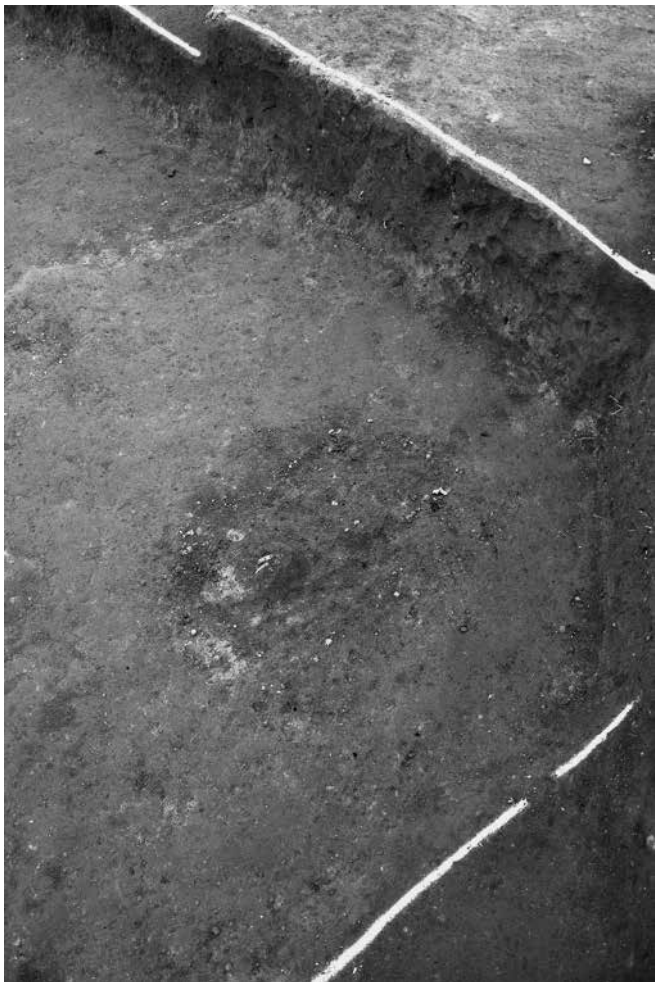


5．H－11遺物出土状況⑤
土師坏とこも石（北東から）

6．H－11床面完掘　一部人骨含(南西から)

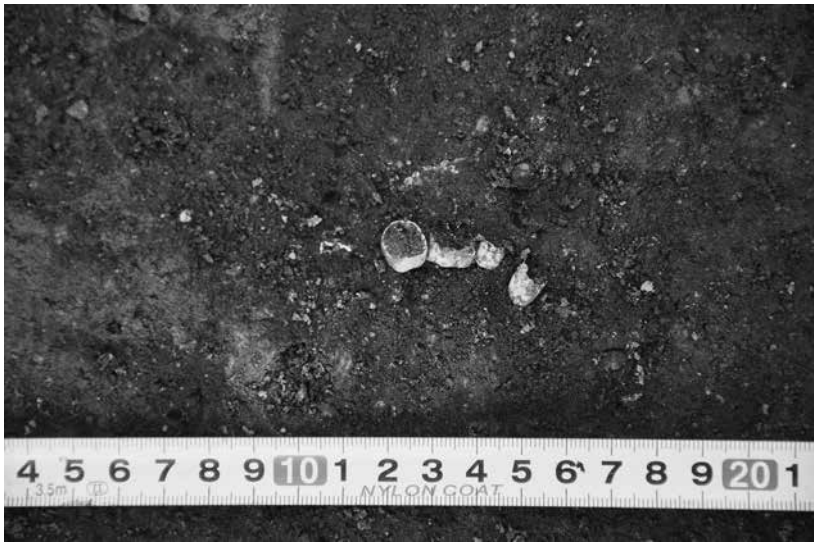
1．H－11〔11 号竪穴建物跡〕人骨検出状況①（北西から）

2．H－11 人骨検出状況②（北東から）



3．H－11 人骨検出状況③（北から）

4．H－11 人骨検出状況④（南東から）



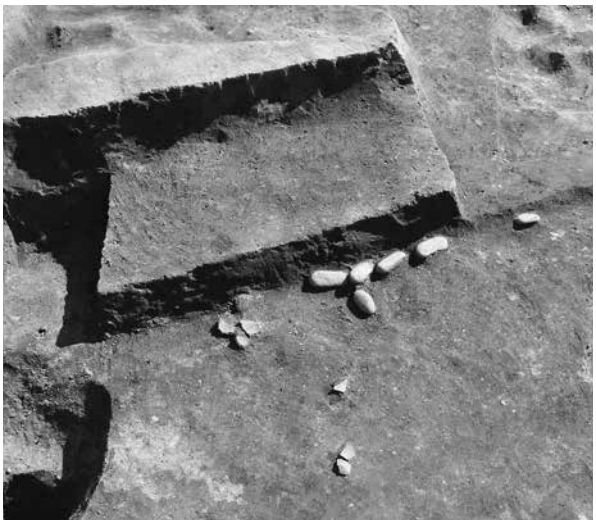
5．H－11 人骨検出状況⑤（南から）

6．H－11 覆土中位の火山灰（南西から）

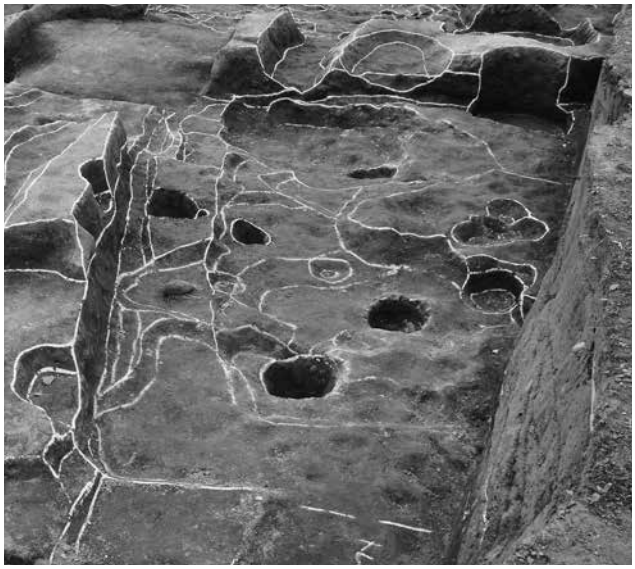
1．H－13・14〔13・14号竪穴建物跡〕完掘（南西から）

2．H－13・14完掘（北東から）

4．H－13・14調査状況（南西から）



4．H－13遺物出土状況（北から）

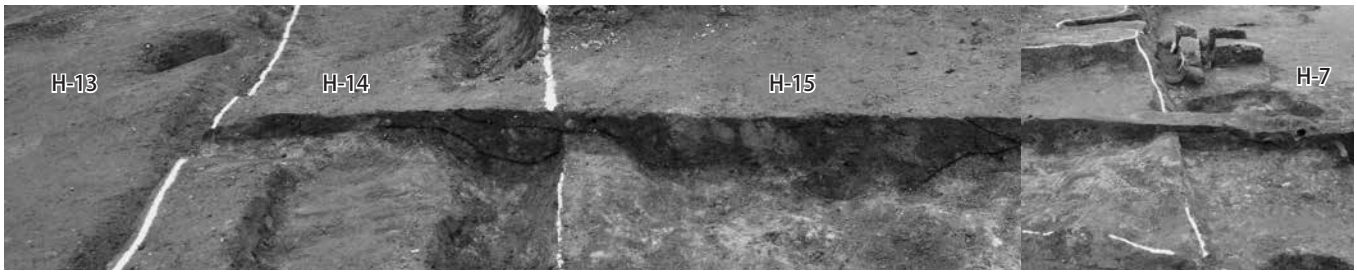


5．H－13・14床下掘方（北東から）

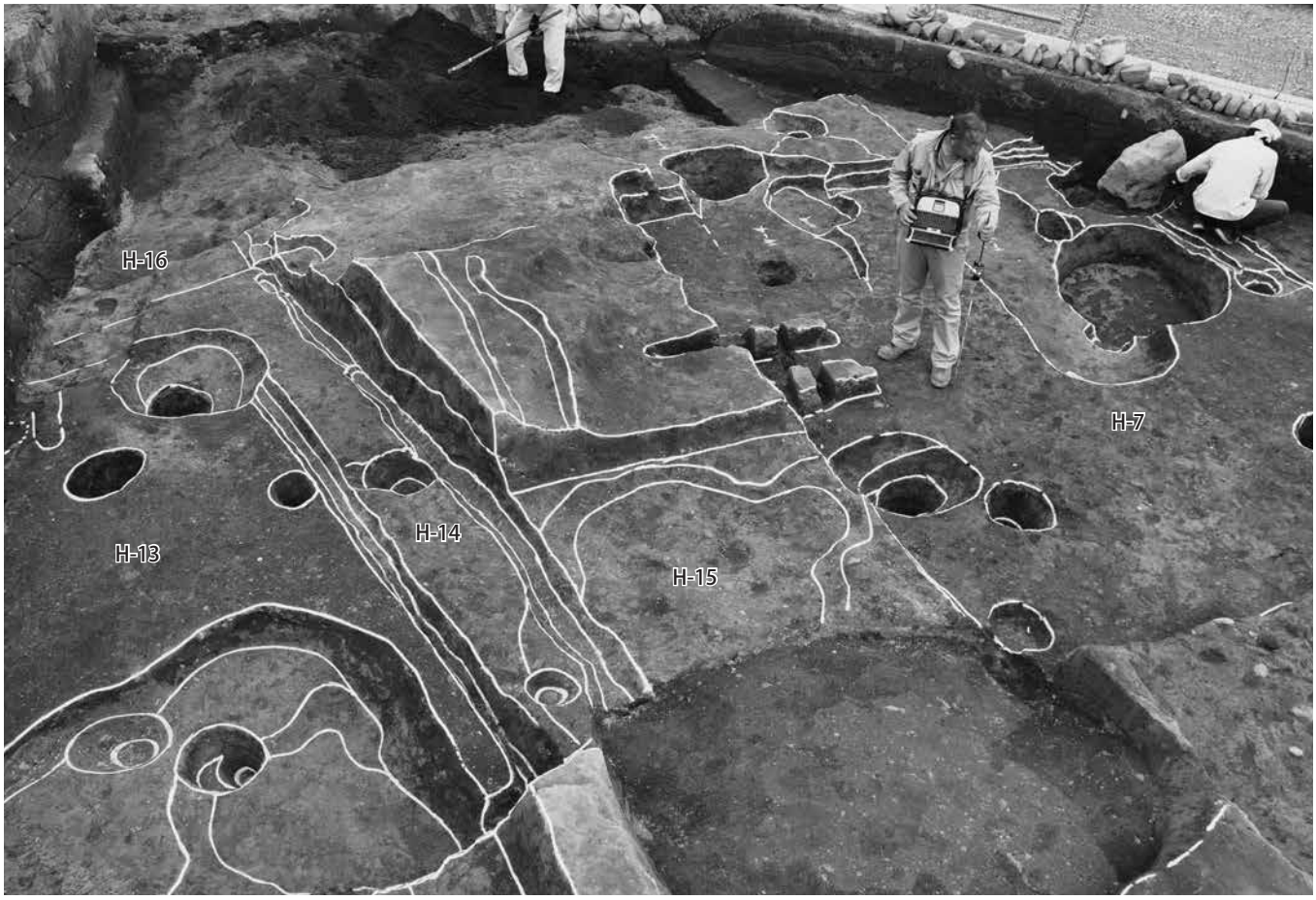
6．H－13カマド土層断面（南から）

1．H－15〔15 号竪穴建物跡〕掘形（南西から）

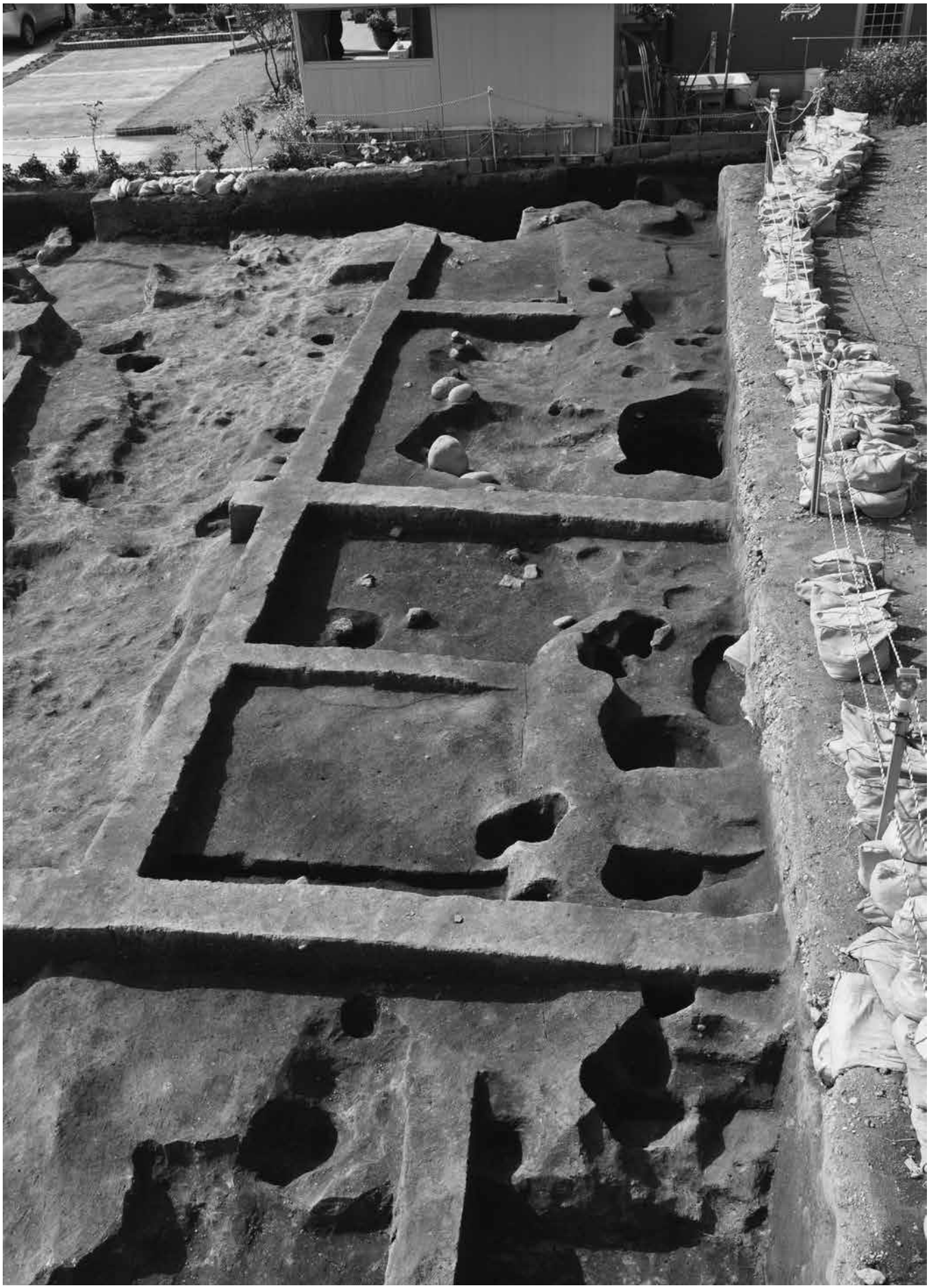
2．H－16〔16 号竪穴建物跡〕完掘（北東から）



3．H－15 掘形と切り合う遺構の土層断面（南西から）

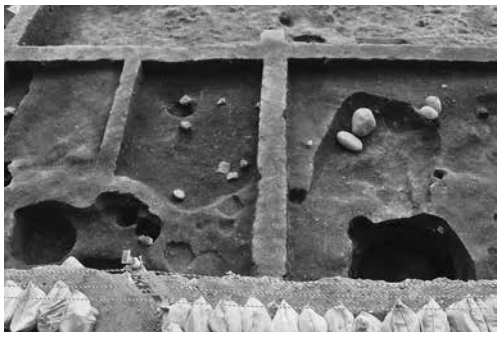


4．H－7・13・14・15・16 の位置関係（西から）



1．KT－1〔1号基壇建物跡〕調査完了状況（東から）

1．KT－1〔1号基壇建物跡〕東端（北から）



2．KT－1中央（北から）

3．KT－1西端（北から）

4．KT－1東隅　中央は白磁片（南から）

5．KT－1断面．I－1側壁（東から）

6．KT－1西辺検出状況（北から）

7．KT－1断面　わかりにくいが、横に潰れた黄色土粒子が細かく重なっている。

1．Ｗ－５〔５号溝跡〕土層断面（東から）中位に硬化層があり、通路とされていたらしい。

2．Ｗ－４〔４号溝跡〕 西半調査状況（東から）

3．Ｗ－４西半遺物出土状況①（西から）
南側から炭化物と共に投棄された様相

4．Ｗ－４西半遺物出土状況②（東から）
完形に近い個体も散見される。

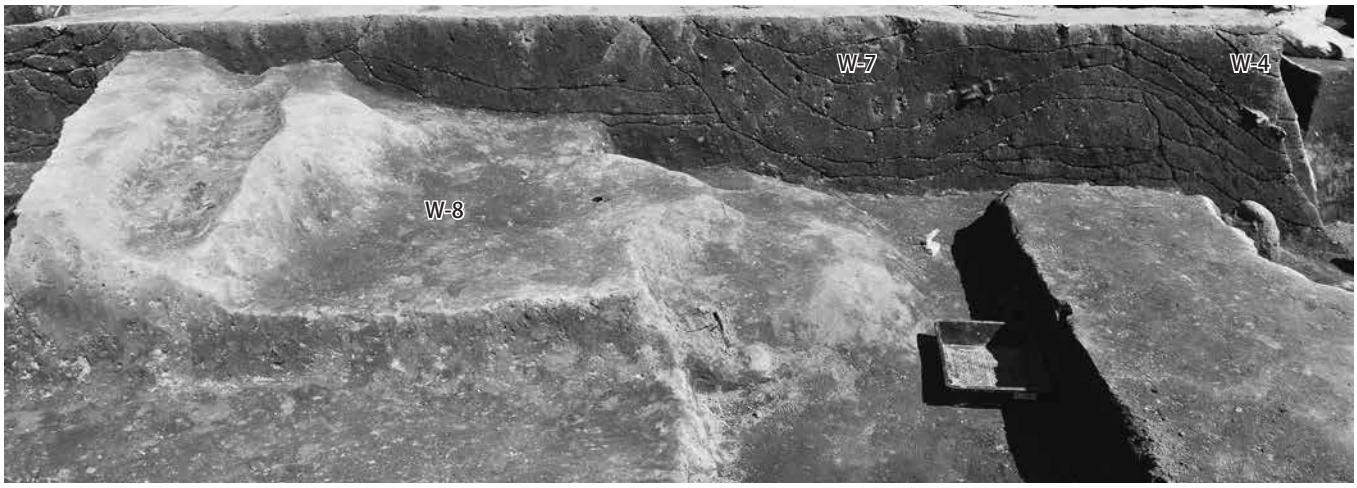
1．Ｗ－４〔４号溝跡〕西半完掘（東から）

2．Ｗ－４西半完掘（西から）

3．Ｗ－４・Ｗ－７〔７号溝跡〕完掘（東から）

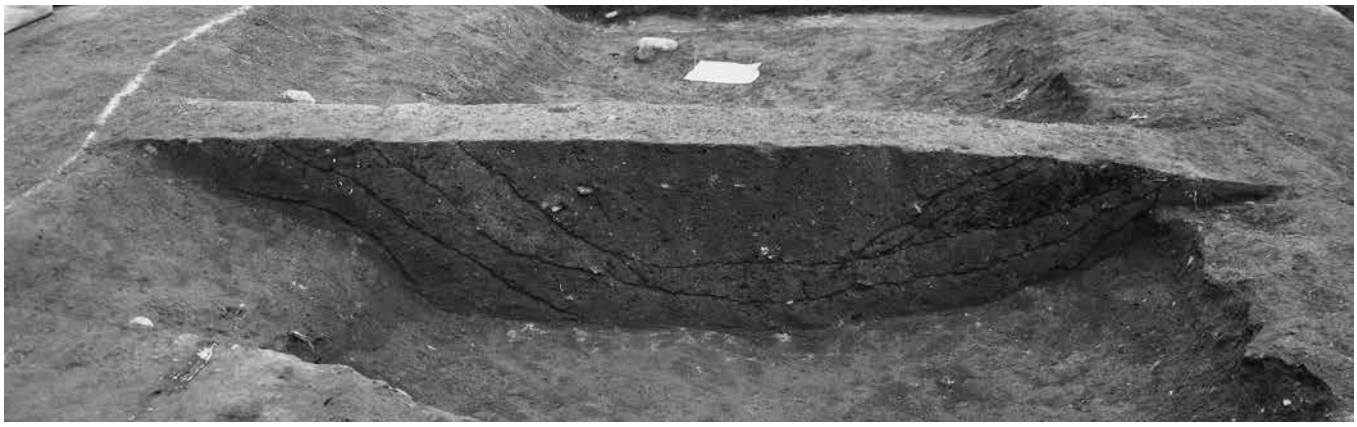
4．手前Ｗ－７．奥Ｗ－４（東から）

5．Ｗ－４東半溝底（西から）



1．Ｗ－８〔８号溝跡〕土層断面（東から）中央に硬化層があり、通路とされていたらしい。

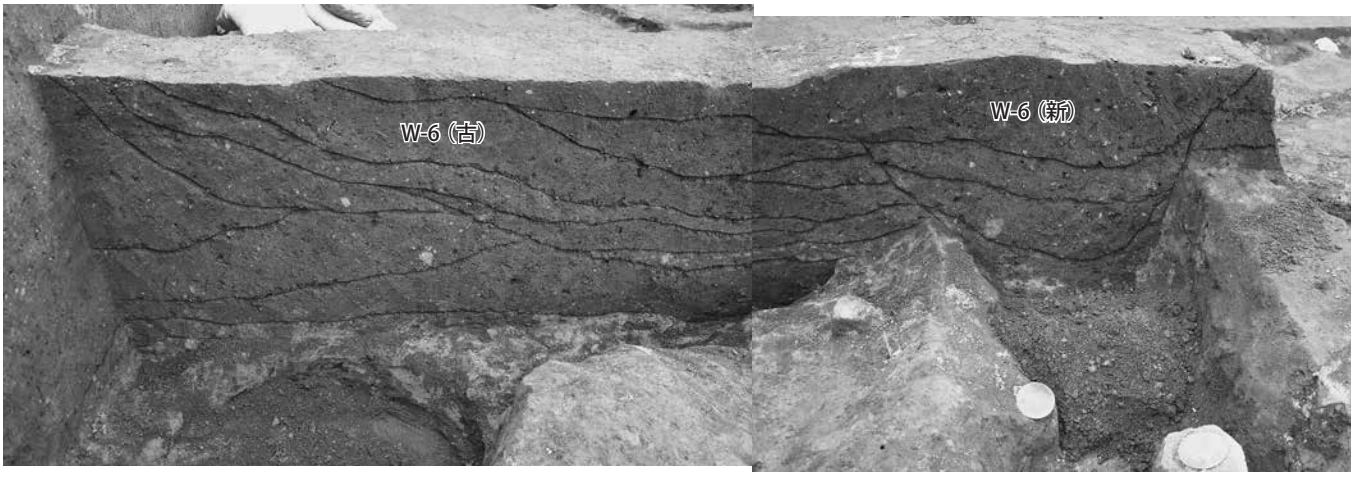
2．Ｗ－４〔４号溝跡〕 西半調査状況（東から）



3．Ｗ－４東半（西から）

1．Ｗ－６〔６号溝跡〕
遺物出土状況（西から）

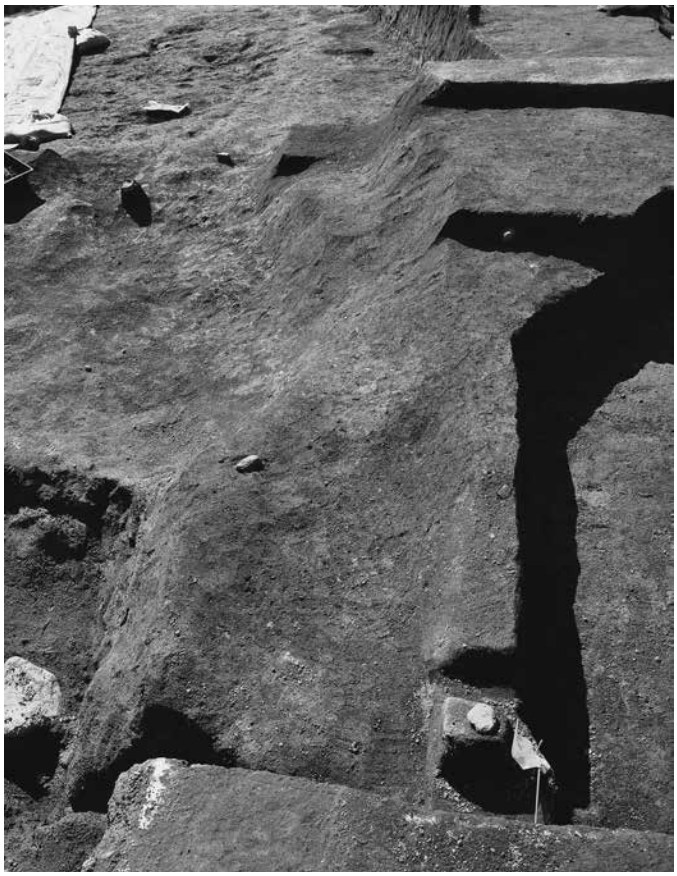
2．Ｗ－６西半完掘（東から）



3．Ｗ－６．東半土層断面（６ライン・西から・合成）幅広の溝を幅狭の溝に掘りなおした様子。

4．Ｗ－６中央付近底面の硬化面
（Ｂ－４Ｇ東から）

5．Ｗ－７〔７号溝跡〕完掘（西から）



1．Ｗ－８〔８号溝跡〕中央部完掘（東から）

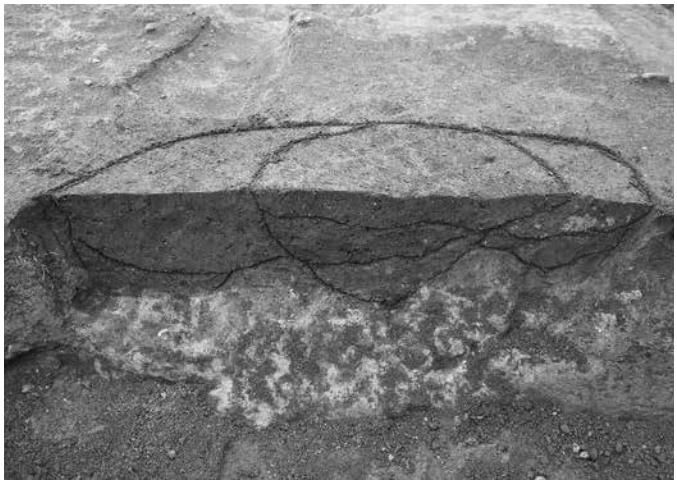
2．Ｗ－９〔９号溝跡〕完掘（西から）奥はＤ－６。

3．Ｗ－９土層断面（６ライン・西から）Ｄ－６部分。

4．Ｗ－10〔10号溝跡．旧Ｈ－９〕土層断面（６ライン・西から）

5．Ｗ－10完掘（西から）

1．Ｂ－１〔１号掘立柱建物跡〕完掘（東から） Ｈ－１を切り、KT－１とＷ－６に切られる。



2．Ｂ－１Ｐ１土層断面（北から）

3．Ｂ－１Ｐ２土層断面（南から）

4．Ｂ－１Ｐ３土層断面（西から）

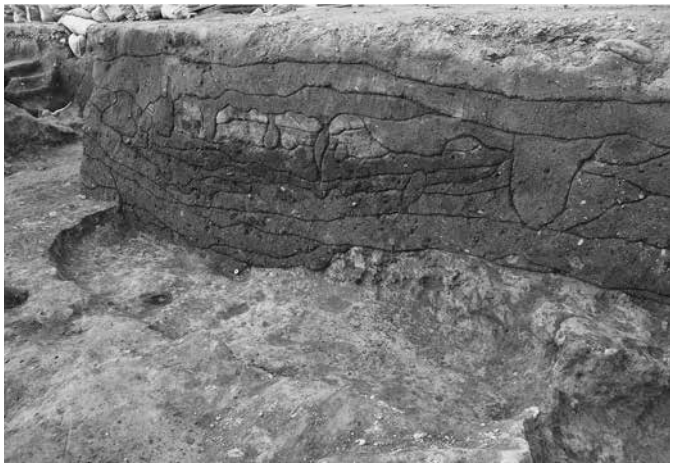
5．Ｂ－１Ｐ４土層断面（西から）

1．Ｘ－１〔１号性格不明遺構〕上半土層断面（５ライン・西から・合成）上層にＡｓ－Ｂの一次堆積、その下は炭化物主体。

2．Ｘ－１下半土層断面（５ライン・西から）

4．Ｘ－１下半上面（西から）

3．Ｘ－１上半遺物出土状況（南から）羽口片が目立つ。

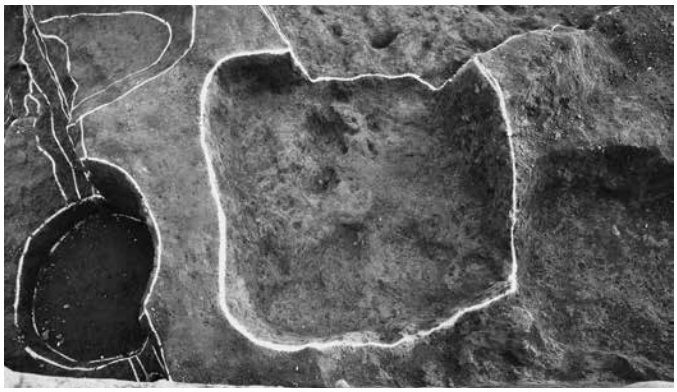


5．Ｘ－１完掘．土層断面（南東から）

6．Ｘ－１完掘（西から）

1．X－2〔2号性格不明遺構〕遺物出土状況（北から）

2．D－1・2〔1・2号土坑〕完掘（北から）



3．D－5〔5号土坑〕完掘（北から）

4．D－6〔6号土坑．W－9の一部〕完掘（東から）

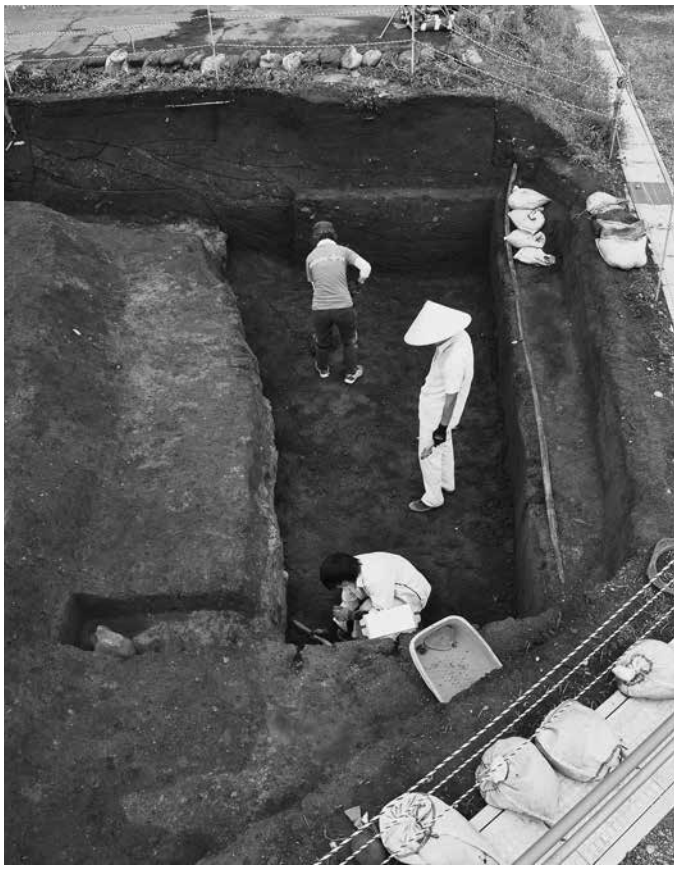
5．I－1〔1号井戸跡〕調査状況（東から）

6．I－2〔2号井戸跡〕土層断面（西から）

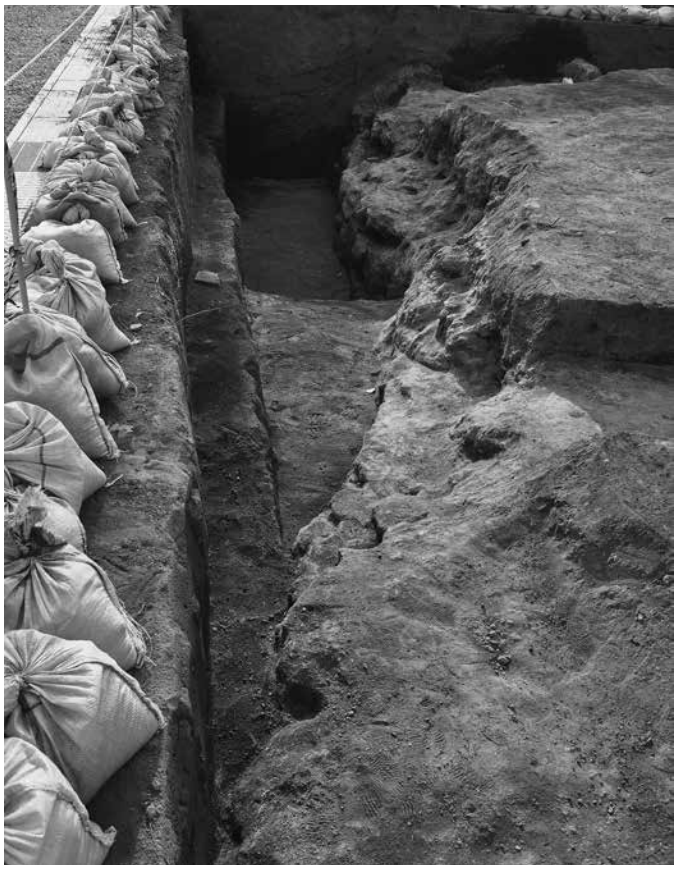
7．I－3〔3号井戸跡〕投棄された礎石？（北東から）

8．I－4〔4号井戸跡〕土層断面（南から）

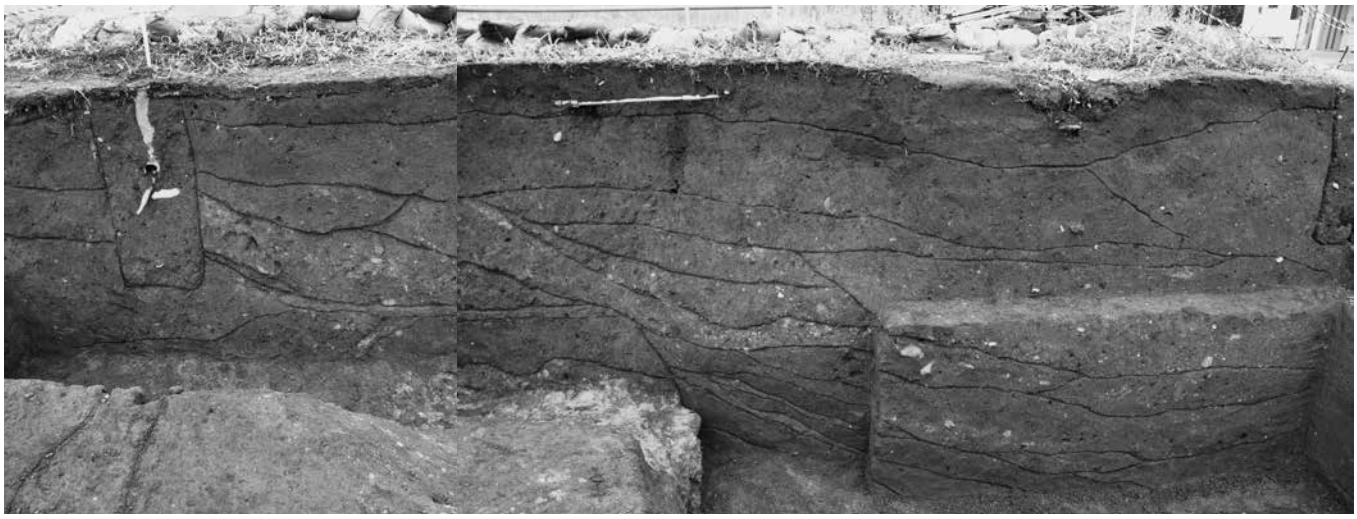
9．I－5〔5号井戸跡〕調査状況（東から）



1．W－1〔1号溝跡・蒼海城堀跡〕調査状況（南から）

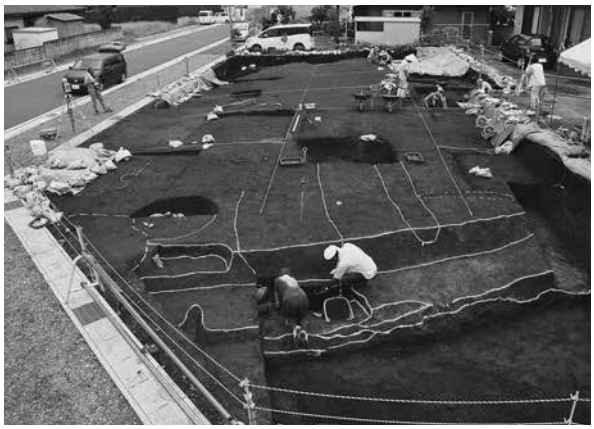


2．W－2〔2号溝跡・蒼海城堀跡〕調査状況（東から）



3．W－1調査区北壁土層断面（南から・合成）

4．W－1南東調査区壁土層断面（北西から）

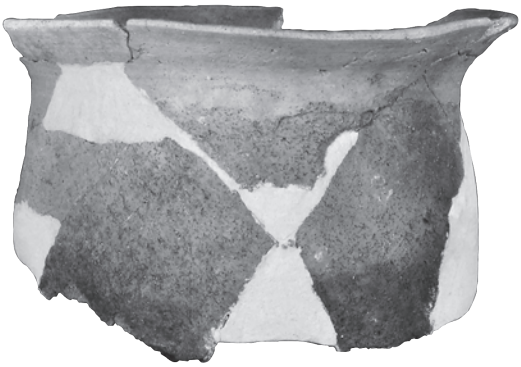


5．W－1と中世調査面（東から）

H-1-1

H-1-2

H-1-3


H-1-4

H-2-5

H-2-6

H-3-7

H-3-8

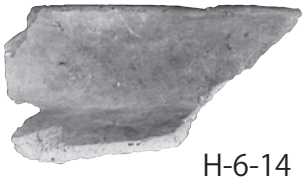
H-3-9

H-3-10

H-5-11

H-5-12

H-5-13


H-6-14

H-7-15

H-7-19

H-7-21

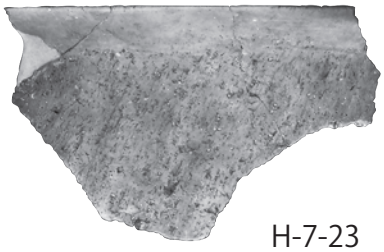
H-7-16

H-7-20

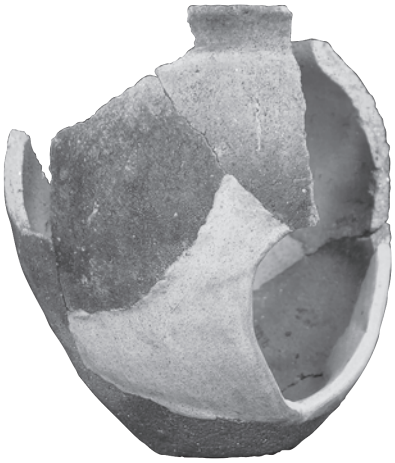
H-7-17

H-7-22

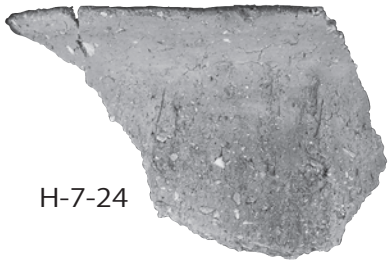
H-7-18


H-7-23

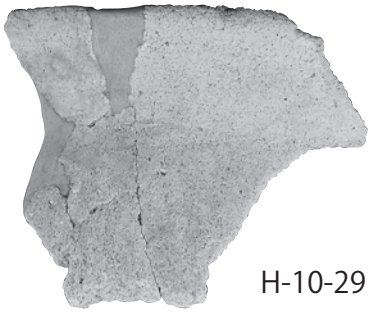
H-10-25


H-10-27

H-10-26


H-7-24

H-10-28


H-10-29

H-11-31

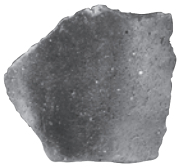
H-10-30

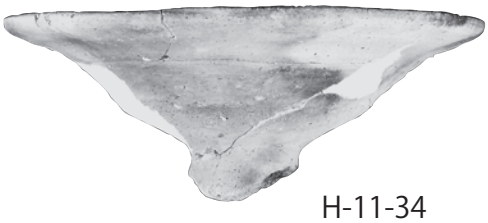
H-11-36

H-11-32

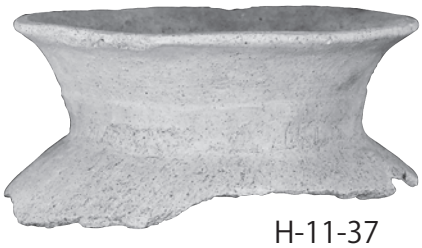
H-11-35

H-11-33


H-11-40

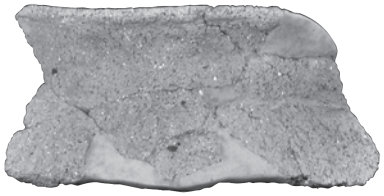

H-11-34

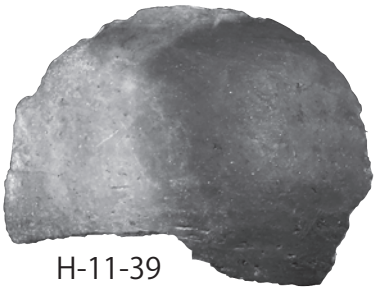
H-11-41


H-11-37

H-11-43(1/2)

H-11-42


H-11-38


H-11-39

H-12-44

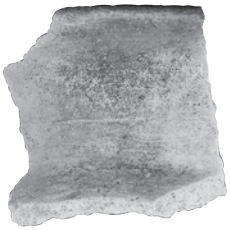
H-12-45

H-12-46

H-12-47

H-12-48

H-12-49


H-12-50

H-13-51

H-13-52

H-13-53

H-14-54

H-15-55

W-2-56

W-2-57

W-4-58

W-4-59

W-4-61

W-4-62

W-4-60

W-4-63

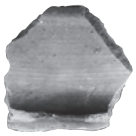
W-4-64

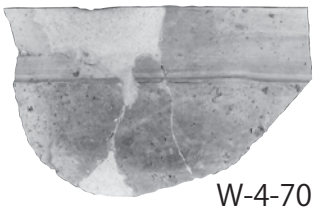
W-4-65

W-4-66

W-4-67

W-4-68


W-4-69


W-4-70

W-4-71

W-4-72

W-4-73

W-4-74

W-4-77

W-4-75

W-4-76

W-4-78

W-4-79

W-4-80

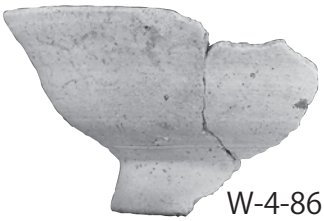
W-4-81

W-4-82

W-4-83

W-4-84

W-4-85


W-4-86

W-4-87

W-4-88

W-4-89

W-4-90

W-4-91

W-4-92

W-4-93

W-4-94

W-4-95

W-4-96

W-4-97

W-4-98

W-4-99

W-4-100

W-4-101

W-4-102

W-4-103

W-4-104

W-4-105

W-4-106

W-4-107

W-4-108

W-4-109

W-4-110

W-4-111

W-4-112

W-4-113

W-4-114

W-4-115

W-4-116

W-4-120

W-4-117

W-4-118

W-4-119

W-4-121

W-4-122

W-4-123

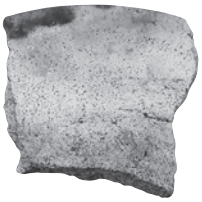
W-4-124

W-4-125

W-4-126

W-4-127

W-4-128

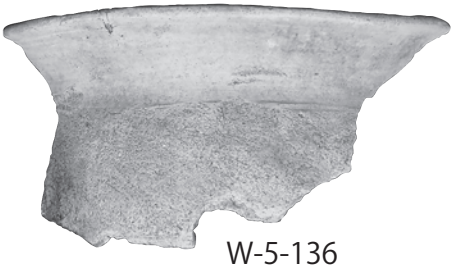

W-4-129

W-4-130

W-4-131

W-4-132

W-5-134


W-5-136

W-4-133(1/2)

W-5-135

W-5-137(1/2)

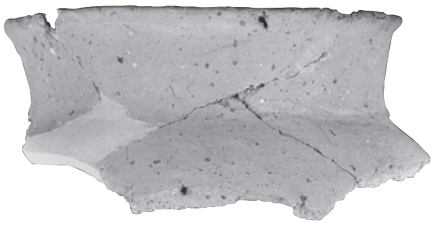
W-6-138

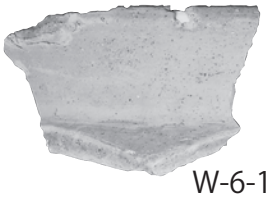
W-6-139

W-6-140

W-6-141

W-6-142


W-6-143


W-6-144

W-6-146

W-6-147

W-6-148

W-6-145

W-6-149

W-6-150

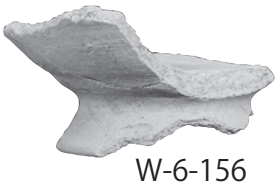
W-6-151

W-6-152

W-6-153

W-6-154

W-6-155


W-6-156

W-6-157

W-6-158

W-6-159

W-6-160

W-6-161

W-6-162

W-6-163

W-6-164

W-6-165

W-6-166

W-6-167

W-6-168

W-6-169

W-6-170

W-6-171

W-6-172

W-6-173

W-6-174

W-6-175

W-6-176

W-6-177

W-6-178

W-6-179

W-6-180

W-6-181

W-6-182

W-6-183

W-6-184

W-6-185

W-6-186

W-6-187

W-6-188

W-6-189

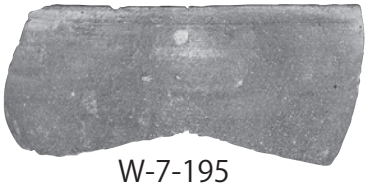
W-6-190

W-6-191

W-6-192

W-6-193

W-7-194


W-7-195

W-7-196

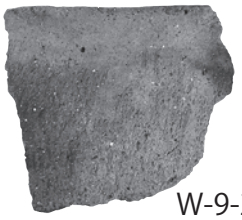
W-7-197

W-7-198

W-9-199

W-9-200

W-9-203


W-9-204

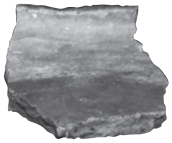
W-9-201

W-9-202

W-10-207

W-9-205

W-9-206


X-1-208

X-1-209

X-1-210

X-1-211

X-1-215

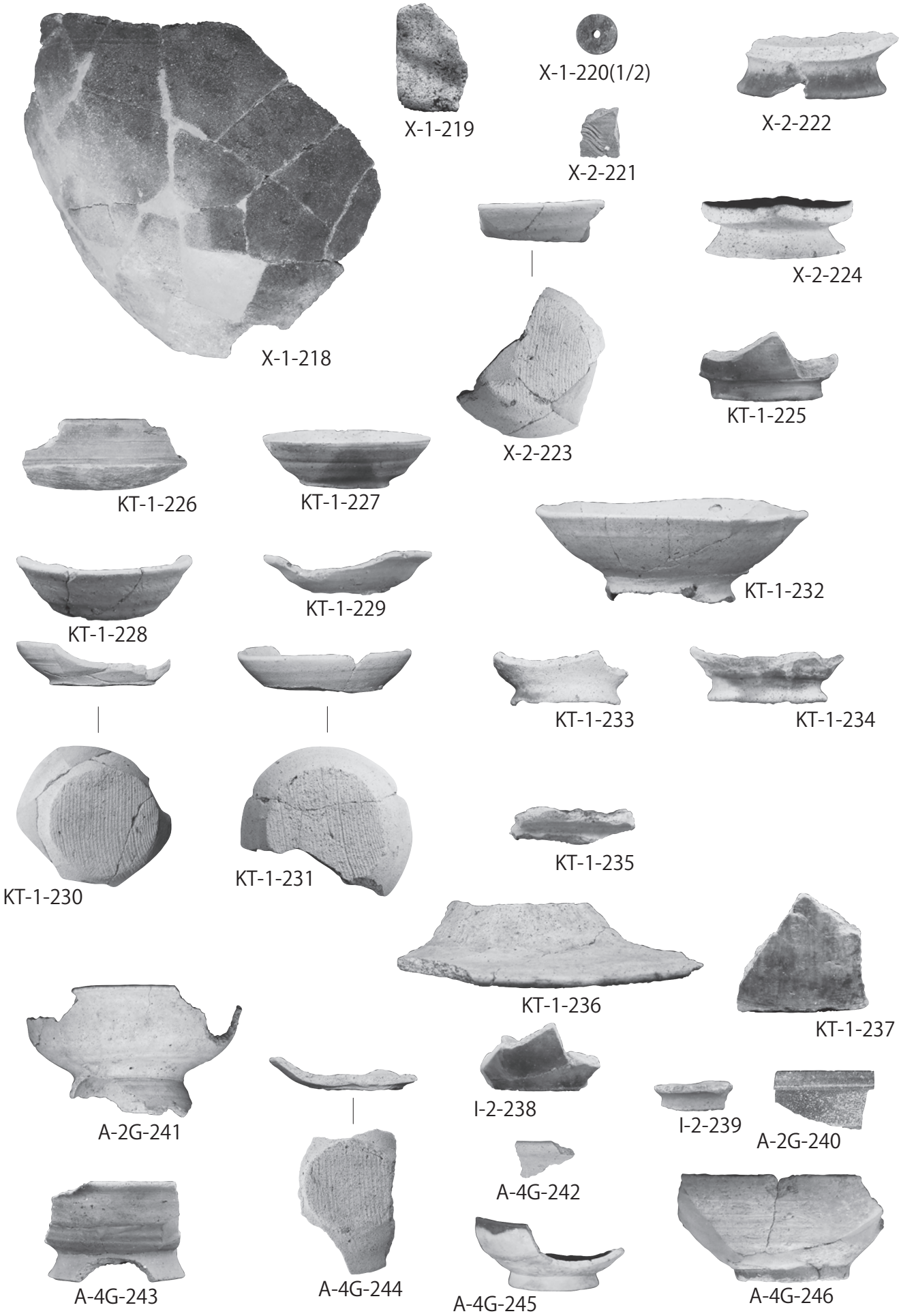
X-1-216

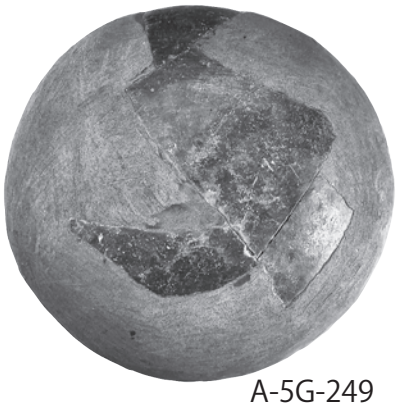
X-1-212

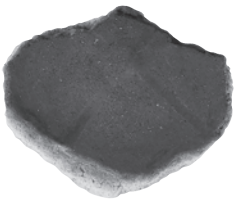
X-1-213

X-1-214

X-1-217


X-1-218
X-1-219
X-1-220(1/2)
X-2-221
X-2-222
X-2-223
X-2-224
KT-1-225
KT-1-226
KT-1-227
KT-1-228
KT-1-229
KT-1-230
KT-1-231
KT-1-232
KT-1-233
KT-1-234
KT-1-235
KT-1-236
KT-1-237
A-2G-241
I-2-238
I-2-239
A-2G-240
A-4G-242
A-4G-243
A-4G-244
A-4G-245
A-4G-246


A-5G-249



A-4G-247

A-5G-248

B-6G-253

A-6G-250

B-6G-254

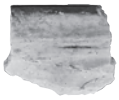
A-6G-251

B-5G-252

B-6G-255

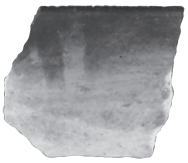
遺構外 -256

遺構外 -257


遺構外 -258

遺構外 -259

遺構外 -260


遺構外 -261

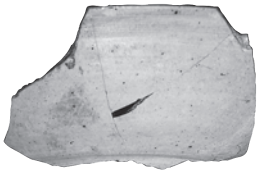
遺構外 -262

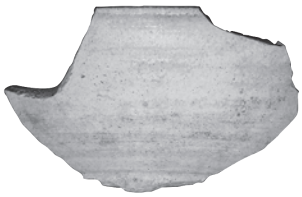
遺構外 -263(1/2)

ての字 -264

ての字 -265

ての字 -266


灰釉 -271


灰釉 -273

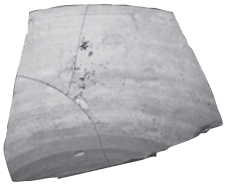
ての字 -267

ての字 -268

ての字 -269

ての字 -270

灰釉 -272


灰釉 -275

灰釉 -276

灰釉 -277

灰釉 -278

灰釉 -274

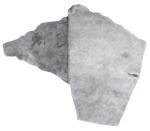
緑釉 -279

青磁 -281

白磁 -283

白磁 -284

白磁 -287


白磁 -288

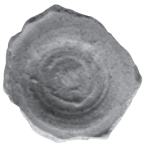
緑釉 -280

青磁 -282

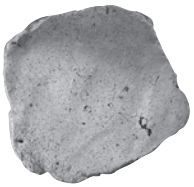
白磁 -285

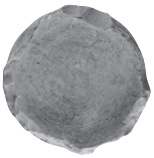
白磁 -286

円盤 -289

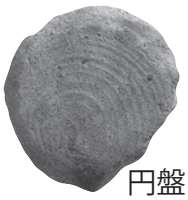

円盤 -290

円盤 -291

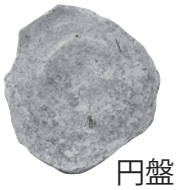

円盤 -292


円盤 -293

円盤 -294


円盤 -295

円盤 -296


円盤 -297

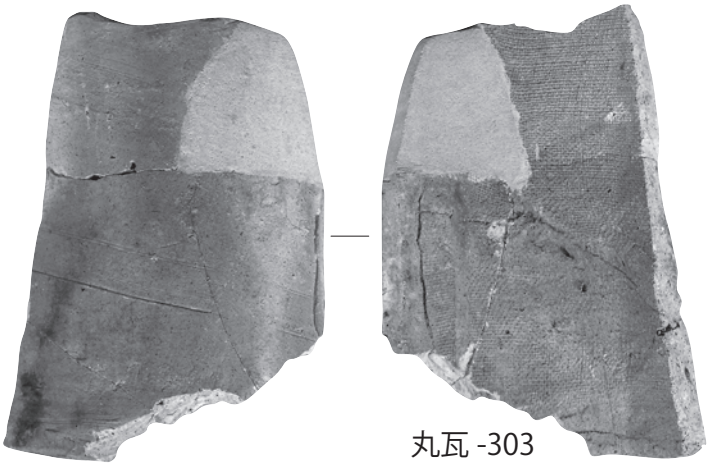
円盤 -298

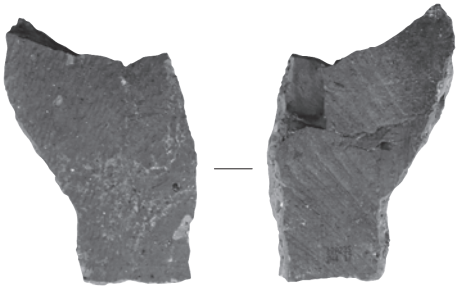
円盤 -299

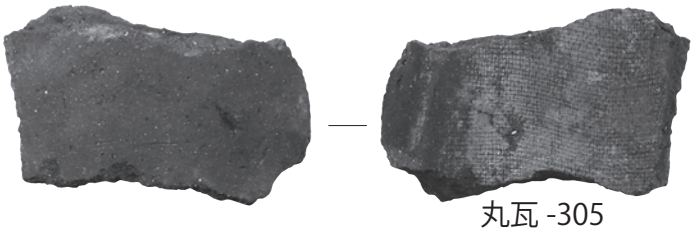
円盤 -300

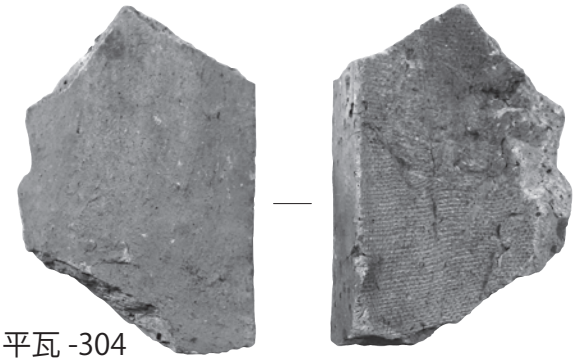
碁石 -301

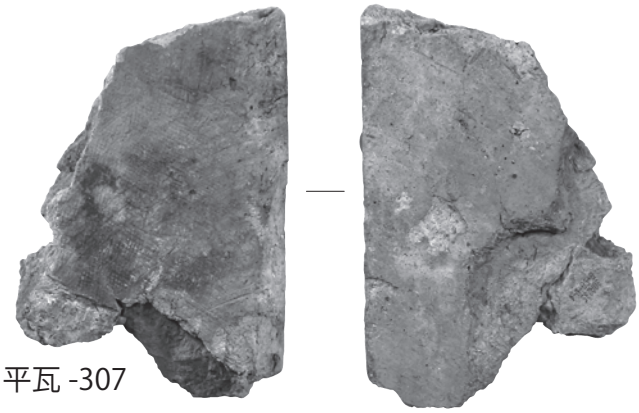
碁石 -302

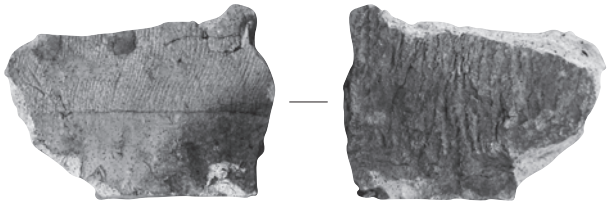

丸瓦 -303

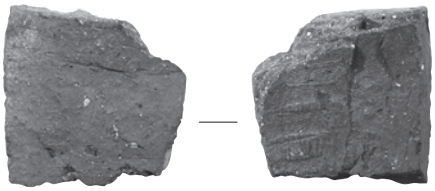

丸瓦 -306

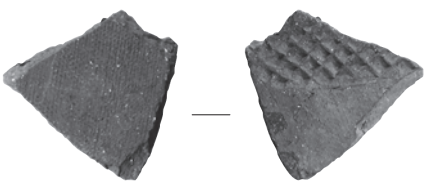

丸瓦 -305

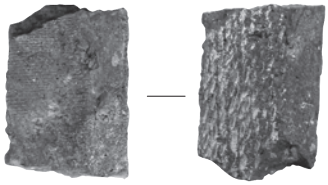

平瓦 -304


平瓦 -307

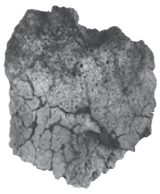

平瓦 -308

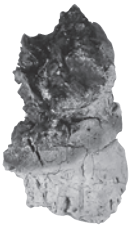

平瓦 -309


平瓦 -310


平瓦 -311

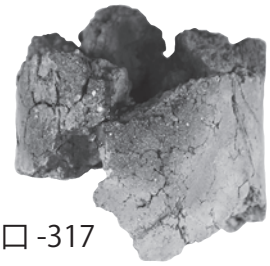
羽口 -312

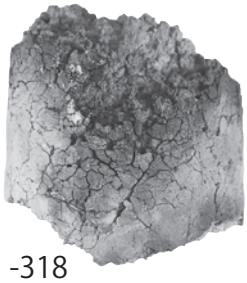

羽口 -313

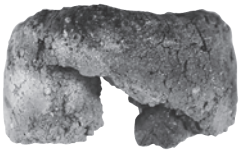

羽口 -314

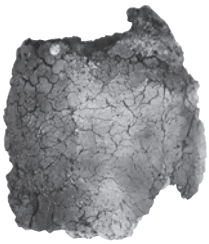
羽口 -315

羽口 -316


羽口 -317


羽口 -318


羽口 -319


羽口 -320

羽口 -321

羽口 -322

羽口 -323

羽口 -324

鉄 -325

鉄 -326

鉄 -327

鉄 -328

鉄 -329

鉄 -330

鉄 -331

鉄 -332

鉄 -333

鉄 -334

鉄 -335

鉄 -336

鉄 -337

鉄 -338

鉄 -339

鉄 -340

鉄 -341

銅 -342(1/2)

報告書抄録

フリガナ	モトソウジャオウミイセキグン（127）
書名	元総社蒼海遺跡群（127）
副書名	前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名・番号	
編著者名	永井智教・並木史一
編集機関	山下工業株式会社
編集機関所在地	〒371-0244　前橋市鼻毛石町 207-8
発行期間	前橋市教育委員会
発行機関所在地	〒371-0853　群馬県前橋市総社町 3-11-4
発行年月日	2019 年 3 月 22 日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
モトソウジャオウミイセキグン 元総社蒼海遺跡群（127）	マエバシシモトソウジャマチ 前橋市元総社町 2107-6、2107-11、2107-13、2107-15、2108-2、2108-3、2108-4、2108-5	102016	30A235	36° 23′ 11″	139° 2′ 21″	20180808 ～ 20181022	406㎡	前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
元総社蒼海遺跡群（127）	集落 城館跡	古墳時代 奈良時代 平安時代 中世	竪穴建物跡 15 掘立柱建物跡 1 基壇建物跡 1 溝跡 10 土坑 6 井戸跡 5 性格不明遺構 2	須恵器・土師器 灰釉陶器・緑釉陶器 白磁 鉄製品 石製品	古墳時代の集落は 5 世紀半～ 7 世紀中葉までほぼ継続する。6 世紀前半の竪穴建物床面検出の人骨 3 体は廃屋墓の可能性を指摘しうる特筆される事例。 奈良時代初頭には掘立柱建物→座標に斜行する区画溝が開鑿された後、その上に大規模な基壇建物が造営される。基壇の時期は奈良時代後半頃と推定され、郡衙正倉級の規模である。 平安時代後半には多数の東西方向の区画溝が開鑿され、多数の白色土器模倣土器と共に黒色土器や貿易陶磁、碁石や鍛冶関係遺物が出土する。 中世は蒼海城郭内に相当するが井戸以外の明確な遺構は確認されなかった。

元総社蒼海遺跡群（127）

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2019 年 3 月 22 日　印刷・発行

発　行　　前橋市教育委員会　文化財保護課

編　集　　山下工業株式会社

印　刷　　朝日印刷工業株式会社